平成 14･15･16 年度
科学研究費補助金　基盤研究(Ｂ)（２）
「東アジア地域における「早期教育」の現状と
課題に関する国際比較研究」
中間資料集　　(課題番号 14401007)

韓国における早期教育の現状と課題

資 料 と 解 説

平 成 15 年 3 月

研究代表者　一見(鐙屋)真理子
国立教育政策研究所国際研究・協力部
総括研究官

はしがき

本資料集『韓国における早期教育の現状と課題　資料と解説』は、科学研究費補助金[基盤研究(B)(2)]による共同研究「東アジア地域における早期教育の現状と課題に関する国際比較研究」（平成14～16年度）の一環としてまとめられたものである。

20世紀の後半に高度経済成長期を迎えた東アジア地域では、進学競争や国民の教育投資が過熱化し、近年ではその影響が乳幼児期の各種の教育（いわゆる早期教育）にまで広がり、社会問題化する経験を共有している。

日本の場合を振り返るなら、最近では経済の不振や価値観の多様化などに伴い、かつてのような早期教育ブームは相対的におさまっていることも明らかにされる一方、育児不安に端を発する新たな問題や一部でさらに過熱する超早期教育などもあり、この分野でも深層にまで下りた多角的な子育て支援が必要となっている。

さきに文部省（当時）の委嘱をうけて国立教育研究所（当時）が行った「『早期教育』の実態に関する総合的な調査研究」（平成10～12年度、代表・山田兼尚）の最終年度に、私たちが訪れた韓国の状況は、例えるならば、まさに早期教育の火が燃え盛っており、緊急の対応が叫ばれている時期であった。小児精神医学や幼児教育学などさまざまな立場の研究者が、世の父母に乳幼児期の子どもをもつ親のあり方を問いかけ、また、政府に対応策を提言するための実態調査や研究活動に着手しようとしているところだった。

本資料集に収録された申宜真著「賢い親はゆっくり育てる」と李基淑主編「創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育の革新」は、以上のような文脈において韓国における早期教育の現状や問題点を理解し、また改革の方向がどのように模索されているのかを知るのに最適かつ代表的な文献といえる。

また、両文献はともに、韓国と日本とが共通の文化的背景をもつので韓国の側からも日本の現状や施策、蓄積された経験が参考になることをはからずも指摘している点が注目される。この資料が今後、両国の早期教育や子育て支援に関する経験や研究成果の交流ならびに相互理解のために役立つことを願う次第である。

このたび、本資料集に貴重な文献を提供してくださった原著者と多大な労をとられた訳者の各位、韓国から解説を寄せてくださった鄭美羅教授、日本の臨床の立場からの対談を企画された巷野悟郎・植松紀子の両先生をはじめ、校閲その他に協力された科研メンバーの諸氏に心より感謝申し上げたい。なお、力量の不足と時間的な制約から生じた不備の部分については、読者各位にご叱正を請うとともに、他日を期したいと思う。

平成15年3月

研究代表者　　一見真理子

研 究 の 概 要

【研究課題】

平成 14～16 年度科学研究費補助金基盤研究（B）(2)

東アジア地域における「早期教育」の現状と課題に関する国際比較研究

【研究組織】

研究代表者	一見(鏡屋)真理子	（国立教育政策研究所国際研究・協力部総括研究官）
研究分担者	橋本　昭彦	（国立教育政策研究所教育政策・評価研究部総括研究官）
	澤野　由紀子	（国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官）
	鬼頭　尚子	（国立教育政策研究所生徒指導研究センター主任研究官）
	汐見　稔幸	（東京大学大学院教育学研究科教授）
	丹羽　孝	（名古屋市立大学人文社会学部教授）
	山本　登志哉	（共愛学園前橋国際大学国際社会学部助教授）
研究協力者	巷野　悟郎	（子どもの城小児保健部顧問）
	植松　紀子	（子どもの城小児保健部技術主任）
	鄭　廣　姫	（日本学術振興会外国人特別研究員、韓国教育開発院・研究委員）
	金　泰　勲	（国立教育政策研究所国際研究・協力部客員研究員）
	佐藤　由美	（青山学院大学非常勤講師）
	片　成　男	（神戸大学大学院）
	日暮　トモ子	（早稲田大学大学院）

【交付決定額(配分額)】　（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 14 年度	5,100	0	5,100
平成 15 年度	4,500	0	4,500
平成 16 年度	3,800	0	3,800
総　計	13,400	0	13,400

【調査日程】

平成14年度

平成14年10月～11月	中国現地調査
平成15年2月～3月	中国現地調査
平成 15 年 3 月	シンガポール現地調査
平成 15 年 3 月	韓国現地調査

総　目　次

はしがき　i
研究の概要　ii

第１部　臨床の立場からみた韓国の子育て・早期教育論

解説１　韓国からの書評
鄭　美　羅　3
丹羽孝 訳

解説２　この書をどう読んだか　－日本の臨床の立場から－
巷野　悟郎　7
植松　紀子

資料Ⅰ　「賢い親は子どもをゆっくり育てる」　申　宜　真　19
辛椿仙　訳

第２部　韓国における早期教育の研究動向、実態、政策提言

資料Ⅱ　「創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新」（抄訳）
李　基　淑　123
張　英　姫
鄭　美　羅
フンヤンヒ
丹羽孝　訳

参考資料　①　早期教育の産業化　金　明　順　175
丹羽孝　訳

②　早期教育を受けている幼児の生活と問題点の調査（資料Ⅱより）
片成男　訳　178

第　1　部

臨床の立場からみた韓国の子育て・早期教育論

解説１

韓国からの書評

鄭　美　羅
（暻園大学校児童学科教授）
丹羽　孝　訳

シンイジン（申宜真）教授の『賢い親は子どもをゆっくり育てる』は、最近韓国社会で問題となっている、過度の幼児早期教育の危険性に警告を発し、子女をよく育てるための父母の姿勢と態度を提示するために書かれた本である。この本では、小児精神科の医師である著者自身が、表紙でも強調しているように、最近の韓国社会においてその熱風が激しくなっている、過度の幼児早期教育について批判をしている。著者はこの本の中で、小児精神科の専門医としての多くの臨床経験に基づいた専門的、臨床的知識をというよりは、二人の子どもを育てている母親として、その過程での実体験を中心に叙述した本である。

一人の人間が社会の中で生きていきながら、結婚をして、子どもを産んで育てることはとても重要で自然な営みである。それゆえ、子どもの出産と養育には多くの準備と努力が必要である。にもかかわらず大部分の人たちは、親になるための体系的な教育も受けていない状態のまま親となり、その結果、親としての役割や信念と態度を明確に形成できない場合が多い。その上、急激に変化しつつある現代社会は、家庭の生活環境ばかりでなく、家族の人間関係にも大きな変化をもたらしている。家族構造が伝統的な大家族制度から、夫婦と子ども中心で構成されている核家族へと変化するにつれ、それまでは世代間に自然に伝承されてきた子どもの養育の経験まで、断絶されるようになった。その結果、多くの人々が親となっても親としての役割についての準備が絶対的に不足した状態におかれたまま、親としての役割を遂行していくしかなくなっている。

しかしその反面では、最近の国民全体の生活水準の向上と子どもの数の減少によって「少なく生んで、上手に育てる」という考え方が広がり、子どもの養育と教育に対する親たちの期待は、他のどの時期よりも高くなっている。このような社会的雰囲気と同時に、発達心理学、とりわけ脳科学の研究成果が、人間発達における幼児期の経験の重要性に対する認識を、あっという間に広めてしまった。その上、幼児を産業の対象として捉える傾向が、韓国社会において、早期教育に対する親たちの関心を過度に増大させている。その結果、最近国連は、韓国の子どもたちは「遊ぶ権利」（the right of play）を絶対的に保障されていないという指摘までしている。

自分の子どもを誰よりも賢くて有能に育てたいという親たちの熱望が、幼児に母国語である韓国語を習得する前に英語を学ばせている。最近ではたくさんの幼児が、英語学習だけでは競争力がないと考えた親によってさらに中国語の学習まで強要されるという事態まで発生している。幼児を対象とする過度の商業主義に染まった業者たちは、乳幼児の頭脳の発達や言語の発達を、自分たちの立場から宣伝したり利用したりすることによって、幼

児期の子どもたちの親を不安に駆り立てている。その結果、親たちは収入や経済的水準に関わりなく、子どもに対する教育の時期を先取りして、子どもたちにたくさんの課題を科しているのである。

このような時期に出版されたシンイジン教授の『賢い親はゆっくり育てる』は、子どもを養育する親としての基本的な姿勢や態度を理解させてくれるのはもちろん、子どもを養育するための具体的な方法や問題解決まで提示しているため、子どもを養育するための良い指針となるだろう。

1．小児精神科の専門医としてより、二人の子どもを育てている親として執筆

この本は、著者が小児精神科の専門医としてというよりは、二人の子どもを育てている親として、自分が直接体験し、苦労した問題と、病院での実例臨床経験に基づいて書かれたものである。そのため、母親たちはこの本にとても共感したり、慰められたり、支えられたりもするだろう。特に、著者はとても気難しい気質を持った長男の問題に苦労した経験を紹介しながら、段階的に問題を解決する方法を見せてくれている。

このような過程は、この本を読む親たちが、「私の子どもが抱えている問題は、私の子どもだけが持っている特別な、そして治すことが難しいものではなくて、他の子どもたちも持っているような問題なのだ」ということを認識させてくれることで親たちに安堵感を与え、もう一方では親たちが問題を自ら解決していくことができるという自信感も与えてくれる。

特に、著者は本の所々で、子どもを養育するときに重要なことは「子どもをどれだけ愛しているかではなく、どのように愛するかだ」ということを喚起しながら、子どもを育てる際の物質的な保障や無条件的な愛情に固執する韓国の社会的雰囲気に警鐘を鳴らしている。この本では、子どもの人格と可能性をそのまま認めて、受容してやらなければならないということが、一貫して主張されている。

実際、韓国社会において多くの親たちは、子どもの幸福を即親の幸福だと考え、子どもたちが成長した後の社会的地位や位相が高ければ、親の人生もそれと同じだけ成功なのだと考えている。そして、社会的成功を得るためには、学校で勉強をがんばって賢い人間となり、社会で認められる職業に就くということだと考えてもいる。その結果、いま親たちは子どもたちに小学校入学以前から、ピアノや美術、身体運動はもちろん、ハングル、英語、数学等のような認知中心の先行学習までさせるのである。その上、早期の特技教育の開始時期も次第に早くなり、2、3歳、またはそれ以前からというようになってきている。このような社会的雰囲気に対する問題意識を提起するために、著者は子どもをゆっくり育てることを提案している。したがって、本書において「ゆっくり育てる」ということは、子どもたちに関心を持たないで放任するという意味ではなく、子どもの成長に対する過度の性急さと発達の先取りをするという雰囲気に流されずに、子どもの成長発達の速度に合わせて育てるという適期の教育を意味している。

2．成熟主義と精神分析学に基づいた、ゆっくりのすすめ

韓国人の特性の一つである「性急」、「せっかち」は、日常生活の態度や物事を処理する

過程においてだけでなく、子どもの養育においてもそのまま発揮される。小学校入学以前に小学校１、２年の課程を先取りして学ばせている。幼児期からたくさんの特技教育をさせる理由は、結局は大学入試の事前準備のためである。このような社会的雰囲気は、幼児の発達水準に過重な課題を与えることとなり、その結果、たくさんの幼児たちに過度の学業ストレスがかかっている。著者が提案する「ゆっくりとした学習法」というのは、ルソー(J.J. Rousseau)が提案していた消極的教育論と一脈通じるものである。ルソーの消極的教育論は、子どもたちに何も教えないというのではなくて、不必要な成人の教えや干渉を最小限に抑えるという意味であるが、この本で著者は子どもの発達的要求や興味にあわない押しつけや先取りをしない、ゆっくりとした学習法を提案している。そうしながら、著者は親たちの役割は、子どもの「発達的時間表」(Time Table)を信じて、妨害要素だけを取り除きながら待ってやる、「One step ahead, One step behind」の戦略を提案している。結局、正しい子どもの養育のための親の役割というのは、未熟な性急さではなく、待つというすべを知っている知恵なのである。このような知恵について話すことは誰でもできるかもしれないが、実践することは難しい。この本は子どもの養育のために不安になり葛藤している親たちに、勇気と希望を与えてくれる。

３．親になる姿勢を身につけるよう、強調していること

子どもを上手く育てるための内容や方法を叙述した本は、私のまわりにもたくさんある。これらの本は大部分がどうすれば子どもが賢く育ち、社会的に成功できるかについて述べていたり、子どもの成功のためには親がどのような準備と後押しをしていくかについて語っている。しかし、教育は人間を対象にして行われることなので、ある人に効果的な方法でも他の人にも同じように効果があるという保障はない。人々の顔つきがそれぞれ異なっているように、それぞれの持っている内的な可能性や気質、特性がみんな異なっているからである。

これに反して、この本は子どもを育てるときの具体的な方法や戦略を語る以前に、親自身が身につけるべき態度を強調している。著者は母性を水にたとえながら説明している。すなわち、水が大地にあるときにはその姿はないが、そこから穀物が育っていくように、親たちの成功のためにではなく、子どもを育てながら本当の利他心がもたらす幸福を味わうべきだと提案している。この提案は、子どもの養育や家族関係までも自己中心的で利己的な思考を持っている現代人の生活方式と態度に反省をさせるものである。したがって、成熟した親になれば自分の感情や欲求を制限し、子どもを絶対的に愛しながらも、子どもたちに一貫性を持って敏感に反応するよう警告している。子どもは親が遠隔操縦装置で動くおもちゃの自動車ではないことを、親は理性ではなく、心から理解するようにしなければならない。

つまり、子どもに良くして、愛することが一つの観念や自己満足のためではなく、相手の立場を認め、尊重する、という成熟した親の姿勢と態度が必要なのである。自分の子どもはこのように育てて、こんな能力を身につけなければならないと、親が設定した期待や目標にあわせるよう育てるのではなく、子どもの欲求にあわせて反応する親の姿勢がいつでも要求されるのである。著者が強調しているように、「誰でも携帯電話を使わない権利、インターネットを使わない権利」がある。けれども、ある瞬間にはその技術を使わない人

たちは社会で孤立したり、後れをとってしまうように感じることがある。全ての人たちがしていることを自分もしなければならないと考えないこと、つまりその流れに賛同することを拒否するには勇気が必要である。普通の人がそのような勇気を持つことは易しいことではない。その結果、他の人がするように流されることになる。

急変する現代産業社会の中で、人々は自分にそれが本当に必要で、有用なものであるかどうかに対する判断をする前に、無条件に新しいものを受け入れることが重要なことのように感じている。しかし、子どもを育てるということには練習はなく、再び取り返すことのできるようなことでもない。余裕が無くて不安であろうとも、一度時間をかけ、ゆっくりと考えて最善を尽くし、選択して実践しなければならない。本書は、子どもを育てながら、まさにこのような問題に対して苦しみながらも、親が明確な教育観と信念を身につけることができることを示してくれる本なのである。

解説２

この書をどう読んだか　ー日本の臨床の立場からー

対　談　　巷野悟郎（小児科医、こどもの城小児保健部）
植松紀子（臨床心理士、こどもの城小児保健部）

進行　　一見真理子

はじめに

―― 本日はよろしくお願いいたします。はじめに、申宜真先生の『賢い親は子どもをゆっくり育てる』との出会いなのですが、植松紀子先生と橋本昭彦氏、そして私は、2000年の12月に申先生を延世大学校の医科大学まで、韓国の早期教育事情についてインタビューするためにお訪ねしました。そのとき、誤った早期教育が原因といえる深刻なケースをこれまでに数多く診て来られた申先生は、職場の病院のストライキで時間が天から降って湧いたようにできた時に、思い余って一気にこの本を書き下ろしたとおっしゃっていました。ですから、私どもも大変心ひかれて、その帰り道に書店をまわってこの本を探しました。ただ悲しいかな、読むことができない（笑）。このたび、そのとき通訳をしていただいた辛椿仙さん（当時、梨花女子大学校研究員、現在ニュージーランドに滞在中）の大変なご尽力で、日本語訳の作業が完了し、はじめて全文読むことが叶いました。なお、巷野先生も韓国から日本に来られたあるお母さんから、「この本がよかった、感動した」ということを聞いておられたそうですね。

それで本日は、日本で同じく臨床の立場から早期教育の問題に取り組んでこられたおふたりの先生に、この本の感想をご自由にお話しいただきたいと思います。

「賢い親には育児はない」をめぐって

植松　先日、この本の翻訳原稿をもらってから、少しずつ読んでは、巷野先生とふたりでとにかく「すごくいいですね、これ」、「やっぱり感動したね」と語り合っていました。例えば、前書きのところに、申先生が長男のキョンモ君に早期教育をやってみたことが書いてあります。子どもに「わからない」と言われて、先生自身があわてふためいてしまって、こんなことをやっているのは間違えているのではないか、というところから始まります。実際に体験している先生が書かれているから、訴える力がすごく大きいねと話していました。

巷野　そうですね。それから、早期教育批判の本だということでしたから、もう少し過激にずばりと問題点を斬っているのかと思っていたのですが、そうではなくて実にソフトに書いてありましてね。しかも自分の子育ての体験を正直に表面に出して書いて、気持ちの変化などを述べていて、あくまでもそういう波というか調子で進んでいきます。しかし、読んでいるうちにだんだんと、なるほど、子育てとはこういうものなのか、発達を飛び越えて行う早期教育というのは確かによくない、ということがよくわかるようになっている。

そしてこの中に「賢い母親には育児はない」というような言葉が書いてありますけど、

これがまさに植松さんといつも語っている私たちの考え方の基本なのです。育てるのではなくて子どもは育っていくものだということを、こういう非常に短い印象的な言葉で表現してありますね。

植松　そうなんです。「育児はいらない」ということをピシッと書いた箇所があって、「よく書かれたなぁ、私はここまでは言わない」と（笑）。

巷野　でも普通はこの主張が先に出るのですけどね、ソフトに進んで行ってあとになって、大変に厳しい。途中ではそんなにも感じずに共感しながら読み進んで、何十ページか行ったところでこういう問題がでてきますから、実によくまとめてくれていて、作戦がうまいというか…（笑）。

植松　それと、著者の小児精神科の医師としての目が入っていますね。たとえばこの本は、「self-identity（自己同一性）」について、つまり自分というものをしっかり確立していくとはどういうことかについて最初に挙げていますが、これなどもまさしく小児精神医学が専門の著者らしいもっていきかただと思います。

巷野　アメリカへ行って生活をしたとき、小学校１年に入った長男が授業に集中できない、どうしよう、っていうようなエピソードもありますが、それも自分の専門の領域で、それまでの子育てがこれでよかったのかと振り返りながら探究していますね。また、医大の予科の頃に心理学の講義を聞いて、心理学は学問ではないと思った話と、その後精神医学をやろう、これで行こうと選んだ経緯がありますが、そこにもね、この人の考え方の信念というか一本筋の通ったところがあるように思います。親としての悩みが沢山出されているけれど、小児精神医学の視点から非常に論理的に整理されながら進んでいきます。これ読んで、なんだかとてもさわやかな感じがするんですよね。

植松　はい、最後は。

巷野　考えてみると、だれでもこういう考え方を持てるのではないかって受け取ることができますね。そんなに特殊なことは書いてなくて、わかりやすい。専門用語だってそう出て来ないしね。

植松　私、２回くらい読み返したのですけれども、自分の子育ての体験から始まって、専門の立場から子どもはどんな風に育っていくのかっていうことを考えていますね。しかも、底に流れているものは、この先生が二人の子どもを育てていきながら彼女自身がすごく育っていく過程なのですね。そこが入っているのでこの本が訴えるんですね。

巷野　自分の子どもを非常に冷静に見ていますね。

植松　ええ。冷静なのですけど、たぶん大変な苦労をしてらっしゃる。彼女自身が、自分は若い頃は非常に自己中心的で人からどうみられているかまず考えていたとあからさまに言っていますよね。それが子どもを二人もうけることによって変わっていったと。それで、母親になるとはどういうことなのかを結構厳しく、世の中のお母さんたちに問うている。親になることの資格試験をしたらいい、こうまで言っています。この部分は、やっぱりすごい。これが言えるくらい自分は子どもと一緒に成長してきたとちゃんと自覚している。

　で、そのなかで、七田式についての大脳生理学をふまえたコメントも出てきているわけで、そこはやはり普通の子育てをしているお母さんとは明らかに違いますね。さっき巷野先生がおっしゃったように、ある部分もう一人の自分を見ている部分がある。

巷野　そこには職業意識というか、精神科医だという意識が働いていて、ときどき立ち止まっては、自分の子育てを反省し、整理していますね。そしてこの本の中で親の存在をね、

大きく出している。これは、育っていく子どもにとっての基本的なところですけど、その親について語っている部分が、だから一本筋が通っています。また、ふつうの親でしたら七田式はいらないなんていうのも出てこないわけですけれども、その辺も専門的にはっきり書いている。

植松　本当にそうですね。結局、申先生は親になったことをはっきり自覚した人だからここまでいえるのだろうと思います。　子育てがどんなに大変でも利他心を持ちなさい、また、自己犠牲もひきうけていく勇気をもちなさいって、彼女は言っていますね。犠牲になったりすることをいとわなくなることが、子どもを無条件に愛していくことにつながるとも書いてあります。…実は彼女は子どもを一度おろそうとした人ですよね。最初の妊娠で子どもを流産させようかと考えたということまで書いていますね。そこまで突き詰めて考えた人だからこそ、子どもの大事さが言えるわけですし、そうして生まれた長男が大変敏感な子どもになりましたよね。次男とはもう明らかに違う。そういう明らかな違いをもった子どもを育てていくことの大変さ、これを引き受けていったからこそああいう言葉が出てくるのでしょうね。

それと「子どものちょっと後ろから、ちょっと前から」ということがありましたよね。

巷野　One step behind と One step ahead ですね。これ、非常に面白い。これをうまく理解できると早期教育っていうのが整理できるのではないか。すべて早期教育は悪いわけではないですから。その辺はとっても新鮮ですね。

植松　はい、新鮮でした…。ただ、やっぱり早期教育が危険だということも、ひっぱりすぎてはいけないということも書いてあって…。

巷野　だから、中庸なのですよね。ここに私もメモをしてありますけど、One step behind っていうのは、要するに子どもはやりたいようにやっていくんだと。その中で子どもは育っていく、理論は後から付いて来るんだということだし、One step ahead というのは、つまり先に行くということで、子どもが何かできないときに親がちょっと言ってあげるということが、子どもを引き上げるっていうようなことで。

植松　しかしこういう表現、思いもつきませんでしたよねえ、びっくりしましたね。

巷野　しかもこれ、横文字だからこういう風な二つの言葉できれいに整理できたんだろうと思うんですよ。私たちがお母さんがたとしゃべっているときに、そういう意味のことは具体的には言っていますけれどね、こういうふうには整理されていなかった。

植松　ええ。これが先ほどの「賢い母親は育児をしない、いらない」というところに通じるわけで、そうは言うけれど、実は、親は何もしなくてもいいのではないのだよ、と非常に厳しい。こういう子どもへの接し方があるということですね。

――　ありがとうございました。では、さらにご専門の立場からみて、これは共通だな、同じだなと思われた点などおありでしたか？

発達の捉え方は共通、表現がユニーク

巷野　私の専門からみて興味深かったのは、子どもの「階段状の発達」について、この本で繰り返しさまざまな言葉で表現されていることです。私はこの早期教育の国際比較の研究会（科研「東アジア地域における早期教育の現状と課題に関する国際比較研究」）でも以前話しましたが、子どもの発育を0・1・2歳と、3歳以上とで区別して考えています。脳細胞と脳神経、

それから神経繊維の髄鞘化がほぼ完成するのが３歳ごろです。ですから３歳ごろから子どもは自立し、自分というものがわかって来ますが、それよりも前の０・１・２歳はまだそこまで育っていないので、子どもは自己中心的に、すべてが成長・発達していきます。例えば運動機能の発達ですと、首が据わってお坐りをして、ハイハイしてと言うふうに順序があるという話をしました。そして、一つ一つが、まさに階段を登るように発達するといいましたけれど、この本の中にまったく同じ表現があって、「おおっ」と…。

植松　階段状の発達って、ここ（本書36ページ参照）にありますね。

巻野　私は、このことをあちこちでしゃべっていたけれども、これ読んでなんだか自信が出ましたね（笑）。　それともう一つは、先ほどの「育児ではない、子どもは育っていく」っていうこともね。

植松　あと、「発達の臨界期」についても触れられていますね。

巻野　発達には臨界期があります。まさにこの考え方が、私たちが早期教育を考えるときの基本的な考え方なのですね。要するに、階段を一歩一歩登って行く、ということが子育てでは大事だということで。それを、飛び越えてしまうのが「早期教育」なのだ、という非常に簡単な理論であって。

植松　先生、さっきの階段状のところに「タイムテーブル」ということと「水位」というものを彼女は出していますね。

巻野　そうですね。

植松　子どもには発達のタイムテーブルがちゃんとあって、そしてその子にあった水位がある。こう、湖みたいにね。それを飛び越えずにムリのない水位調節をすることが大事だって、水にたとえているのですよね。それともうひとつ、幼少期の兄弟の関係も水にたとえていて、独特でおもしろいですね。兄弟の間に川が流れているという言い方で。

――　母性も水だと。

植松　そうそう、大地に染み込むっていう。

巻野　そうですね。それともう一つ、３歳になって自立してきた段階でどう育てていくかっていう時に、私たちが主張してきたのは「なぜ？」ということを大事にしなさいということなのです。これは、私たちも参画して出したハンドブック『それでいいよ、だいじょうぶ』（発行：厚生省、編集：子育て支援情報提供事業・小冊子編集委員会、委員長：巻野悟郎,1998年）ですが、その中でもそのことは一番強調して書いたんですね。３歳・４歳・５歳という時期は情緒を展開していく時期なので、そのためには、われわれの言葉でいうと「教えちゃだめだよ、なぜ、ということで子どもに考えさせなさい、そういったことが情緒にもつながっていく」と。それがこの『賢い親』を見るとちゃんと「なぜ」って書いてあるのね。これ（ハンドブックを手にしながら）を見たんじゃないか？（笑）

植松　さあ、見たかもしれません（笑）。この方ね、徳川家康とかトットちゃんとか、いろいろ日本のものを読んでいます。よく勉強して吸収していますね。

巻野　ここ（『それでいいよ、だいじょうぶ』のp.46-7）にこう書いてあるんです。「親が解決してあげることは簡単ですが、自分で考え、夢を膨らませることで子どもの情緒や想像力が育っていきます。たくさんの「なぜ」とたくさんの不思議。子どもはその年齢なりに自然と触れ合い、生きた体験を重ねていくことが大切。その点で、早期教育は大切なことを飛び越えてしまいます」と。

植松　そうですね、私たちは書いています。

巷野　これが先ほどの階段状であり、それから３歳からのなぜという。そして情緒を育てようという。まさにそれがずばりと、こちらの申さんの本でもきれいな文章で書いてある。
植松　そう。すごく似ているっていうか、同じ考えっていう…。私、申先生とお会いし、「わあ、ここにも同じことを考えている人がいた」って、抱きついて握手しました。そこがとても共通だったので。早く早くの「早急性」って書いてあるでしょ、早く早くって言いすぎるってありますけれど、私たちも「子どもに早く早くって言ってはいけない」、「待ってあげるのが大事だ」って、もう、いつもいつも言っておりますが、彼女も同じように書いています。
巷野　ね。私も今いったように「待つことの知恵」と書いたんですよね。
植松　そういう意味では、韓国のあり方がちょっと前の日本とよく似ているのですね。
巷野　似ていますねえ。
植松　早く早くって、一番が一番いいことだって、競争に勝つことが何よりも大事っていうことですね。それをやめようじゃないのって、申さんは言っていますよね。すごく似ていると感じました。

夫が父親に育つということ

――お父さんのことも本書ではとりあげていますが、いかがでしょうか。
植松　この方のご主人のことですね。ご主人が父親として変わっていく話も印象的です。そしてその父親としてのありかたが、日本の父親たちと、企業戦士というのか全く同じですよね。日本のお父さんも「子育てっていうのは、母親がやればいい」っていうのは今だって続いていますね。この本のお父さんは、どんなに言っても変わらなかったのが、やはりアメリカに行って変わったのですね。では、何が一番変わったのかというと、彼女が書いているのには、「父親が子どもたちとともに経験することだった」。そしてそれが結局一番必要なことだったわけです。
巷野　韓国の父親は子どもとの接触が非常に短いようですね。
植松　そう、それで父親には「産んだ情より育てた情」っていうふうに言っていますね。「情」という言葉を使っているのが面白いですね。なるほど、だからお父さんも変わりうるのだということを彼女はここで述べているのだなと。これも韓国のお父さんであれ、日本のお父さんであれ、自分は子どもに何もできないって思っている人たちに与えていく一つの考え方、接し方の一つのヒントを、彼女は投げかけているのだと私は思いました。
巷野　私は小児科医の立場で聞きたいけれども、このご主人も小児科医ですよね。だから、小児精神科医である著者の方は自分が勉強したことと子育てというものをうまく連動しながらよくやって、しかもそれをきめ細かくメモしてこういう本ができたわけですけど、小児科医としてのお父さんの方は果たしてどういう考え方、あるいは子育て観を持っているのかということをいつかぜひ聞いてみたいですね。あるいは、ご夫婦で子育てについてどういう会話をしているのかを聞いてみたい。
植松　アメリカに行く前は、子どもを育てることについての会話はほとんどしてなかったみたいですよ。
巷野　あと、ご主人の里によく行く話が書いてありますが、その部分にご主人が出てこない点が妙に思うのですが、どうですか？

植松　でもこのご主人は、今では誰もが認めるすごく優しい父親になったけれど、もともと典型的な家父長的思考の男性だったと書いてありますね。だから韓国の男性はそうあるべきだという文化的、社会的な背景があって、ご主人が里帰りしたときの行動のパターンがあるんじゃないでしょうか。

――　早期教育の調査でソウルに行きましたとき、教育玩具の企業の輸入開発部門に行きましたね。そのときも、私たちがびっくりしたのは、お父さんが家庭で子どもと遊ぶことを想定しておもちゃが供給販売されていなかったことでした。指導員が各家庭をまわってそのおもちゃで遊ぶ、というか教育するのですね。「もしかしたら韓国のお父さんは、家で子どもとあまり遊ばないのか？」と思って通訳の辛さんに聞いても、「はいそうなんです」と。

巷野　それは、戦前の日本みたいなものですね。私なんか兄弟多かったし、戦前はごはんを食べるのも席は父親と違っていましたから。そういうことが今も残っているんでしょうね。

植松　いまも残っているみたいですよ。

――　で、かたやトレンディな育児雑誌の編集部のほうに行くと、少し世の中を変えたいと思っているような女性編集者さんたちが「お父さんにも育児参加を」ということで盛んに記事を載せたりしているっていうところだったと思います。

巷野　やっぱりちょっとジレンマがあるのかしらね。

植松　申さん自身も、父親の育児参加については、すごくイライラしてきたのですよね。彼女は夫に何度も関わってくれと訴えるけど、はねつけられて。アメリカに行くその日だって、男性同士の同僚との送別で酔っ払って飛行機に乗っていたっていうことが書いてありますね。だからやっぱりアメリカに留学したことが、この夫婦と子どもとお父さんとの関係が変わることのできた、一つの転機だったとに思います。このままこの人がアメリカへ行かなかったらどうなっていただろうって思うんですね。申先生は、すごくいらいらしたままだったかも知れない、そして夫を恨み、夫の親族を恨みっていうことになっていたかもしれないですね。それで、申先生は、帰ってきてからも夫の実家との過ごし方にも本当に努力していますね。

――　なるべく一緒にすごすと。

植松　ええ必ず、一週間の休暇は夫の実家で過ごすと決めているようですね。そしてその結果、夫の実家のお姑さんは、夫が結婚するときどんなに寂しい思いをしたかということを彼女は思い及んでいますね。自己犠牲とか利他心というものがやっぱりお姑さんにもあったのではないかと思いやることができるようになりますね。ここのおじいちゃんおばあちゃんとの関係のとり方というのは、本当に賢いですよね。

巷野　アメリカへ行って夫婦で子育てできるようになり、そういうことがずいぶん開けて、感じ方が違ってきたのでしょうね。

植松　そうですね。

おばあちゃんたちに「ゆっくり」を学ぶ

巷野　で、彼女はアメリカで子どもを幼稚園にあずけたのかな、その話も面白いんです。向こうでは保育の経験がある人、子どもを育てたことのあるおばあさんが先生をしている

ということが、彼女の子育ての考え方を変えるのに影響したかもしれない。ややもしますと、若い人が保育をしますが、子育てでは、先ほどの One step ahead のように、先が読める人、これがこうなるっていう流れを十分に理解している人がやはりそばにいて欲しいですよね。ということで、帰ってきてから家族とかおばあちゃんとを信頼する気持ちも強くなったのではないのかしら。それまではできるものなら、何でも自分でやらなくてはという気負いもあったでしょうが、おばあちゃんに任せることができるようになった。賢い親に「育児はない」、なんていう言葉もでてきたひとつの背景ですね。

植松　そうですね。ご自分のお手伝いしてくれる方にもおばあちゃんを雇っていますよね。それで最後の方にそのおばあちゃんが風邪だったとき長男のキョンモ君が、全然人のことなんか思いやれないと思っていたのに、おばあちゃんを助けてあげて、と言ってきたんですよね。あれも、ほろりときますね。今まで、そんなことは全然感じていないような息子だったのに、実はそういうことも全部わかっていたんだということを。

巷野　わかってたんじゃないかと書いてあるよね。

植松　そうなんです。あれも大変感動しました。

巷野　ただ子どもっていうのは、自分でそういうのを表現しないだけでね。

先日、日本の保育園関係の講演に行ったときに、「保育にはおばあちゃんも必要」と、この話をしたんですよ。日本の保育園では学校出たての 20 歳前後の、子どもを知らない保母さんが「先生」と呼ばれてやっていることが多いけれどもね、アメリカでは、すべてではないでしょうけれども、経験者のおばあちゃんが先生になってやっている。これも大事じゃないかって言ったら、「先生そんな、日本のおばあちゃんには子どもを抱っこする力なんか無いですよ。やっぱり若いのが抱き上げなきゃだめですよ」と言われてしまいました。

それもそうだけれども、やっぱり日本の保育もそういった点を見直さなくちゃいけないなと思う。何でも若い、若い、じゃなくてね。公立の保育園は結構 40 代、50 代の保母さんがいますが、民間の保育園では、そういう年配の方がね、入って自由にやったらいいかなって思いましたね。

植松　はい。アメリカの幼稚園の先生は、子どもを育てたことのある人を優先的に採用するって言っていますね。なぜかっていうと、ほら孫まで育てた経験がある、おばあさん（笑）だから。

巷野　本当は植松さんもこれから保母さんやるといいんじゃないの（笑）。『孫との素敵なつきあい方』（共著、赤ちゃんとママ社、2003 年）という本も作ったことだし…？

植松　ほら、孫は無条件にかわいいじゃないですか（笑）。

巷野　無条件の愛、それが大事なんですよ。

愛着の形成から保育をみなおす

巷野　それから、母子の愛着形成のことですが、２歳ころまでの無条件でかわいいということが、私は非常に大事だと思いますね。

植松　そうですよね。

巷野　申さんも書いていますが、この時期には集団保育をできれば避けるということに、私は大賛成なんです、本当は。

――　はあ、そうなんですか。

巷野　いや、ほどほどの集団は必要ですけれどね。アメリカの国立発達研究所のフリードマン女史の研究では、週間30時間以上を長時間保育として検討しています。日本は長時間の保育ですよね。1日10時間で6日間としたって60時間でしょう。アメリカはその半分くらいでも長時間保育と規定しています。まぁその点で、韓国の実情も知りたいですけれども。なるべく家庭中心で、集団保育をほどほどにというバランスをとっていくのが、子どもにとってはいいと思いますよね。それが母子関係をこの時期しっかり作る大きな力になると思います。

植松　そうですよね。「ラダク」というチベットのやりかたを彼女はとりあげていましたけれど。ラダクの人々は、赤ちゃんが生まれたら無条件の愛と信頼を母親はもちろん共同体の全員が注ぐ、とあります。だから子どもたちは愛情をたっぷり向けてもらって5歳にもなるととても情緒が安定していて、自分というものをつかんでいるから、もっと幼い子どもの子守りもできるっていうふうなことが出てきていましたね。

巷野　これが次の時代の子育てに続いていくって書いてあるね。

植松　未来にこれがつながっていくということを書いていらっしゃるのはすごいことです。

巷野　これを日本国内にもっていきますとね、現在厚生労働省の方は、集団保育にずいぶん力を入れていまして。さっき言ったように長時間保育・延長保育に力を入れています。しかし最近ようやくファミリーサポートや保育ママ、そしてベビーシッターの利用などで在宅保育、家庭保育っていう方向に目が向く兆しがあります。そして育児休暇・休業をたくさんとれるような企業に対してはいろいろな、たとえば入札の時の恩恵を与えるとか点数を与えるという優遇措置を実施しているところが出てきていますね。韓国はその点はどうなのでしょうね。

――　韓国における集団（的）保育と家庭（的）保育のあり方、捉え方については、李基淑先生（本書資料Ⅱの主編者）や丹羽先生たちにもお願いしまして、宿題というか別途ご紹介したいと思います。ただ現在の韓国では、女性の社会参画を促進する方向なので、政策的にも職場内に設置される保育所を含めて集団保育そのものは規模も対象年齢もこれから拡大する趨勢と聞いています。その中で、愛着形成にもかかわる保育の質をどう保障するかが問われて来るのだと思います。また、一方、親が先走りする早期教育の問題をどうするのかということも、このところ大きく注目されはじめていて、調査研究が進んでいます（本書第2部参照）。

韓国でのインタビューから

――　ですので、ここでもういちど韓国における早期教育の問題に戻りたいと思います。植松先生、延世大学校医科大学に申先生をお訪ねしたときに、おふたりが交わした臨床的なお話について、お聞かせくださいますか。

植松　あの時、私はまず申先生に、日本でもやはり早期教育による問題の症例が私たちのクリニックでも30例くらいあるという話から始めました。そうしましたら申先生は、自分のところも患者が沢山いるんだとおっしゃいました。でそのとき、申先生の方もやっぱり超早期・右脳開発をうたう七田式などが韓国に入ってきたことによって、韓国でも赤ちゃんの時の教育というものが盛んになり、それが子どもの精神障害みたいなものを起こしてきていること、そしてそれは一見すると自閉的のようだけれど本物の自閉症とも違うとい

うふうにおっしゃいました。発達診断では認知的な部分は結構できているのに、人との関係の部分だけがどうもおぼつかない、不思議な非常に自己中心的な子どもたちであると。それで「それは日本でも同じです」という話になりました。

では、そういう子どもたちにあなたはどうしているのか、と逆に質問され、私などはプレイセラピーをやるけれども、結局は大きくなっていっても、コミュニケーションの部分のところで本当に解決がついたのかって言われるとすごく難しくて、超早期に無理な教育を始めた子どもたちは、つまり早ければ早いほど、年月が長ければ長いほど、そこに人間関係性をとる力のゆがみが修復できないかたちで残っていってしまう、ということもお話しました。

たとえば、ある子どもですが、早期教育を受けて、1歳2ヶ月頃にマッチング（形合わせ）などの問題がすばらしくよくできて、天才かと言われていました。それなのに中学生になってからその子は知恵遅れ、知的障害と言われて、特殊学級の方へ措置されてしまいました。そのほかにも、高校生になっても人間関係が非常に難しくて引きずっている子どもがいて、そういう子どもは少なくない、という話になりました。それで、申先生のところもセラピーをやっているけれども、臨界期を過ぎたケースのむずかしさについてはいろいろ教えていただきました。

そのほかでは、教育部（当時）が早期の誤った教育の影響の大きさに十分気づいていないこと、先生はじめそれに気づいた専門家がマスコミにも訴えているという話をされました。「それでこの本も出しました」と見せてくださったのがこれの原著（2000年10月刊）でした。申先生は早期教育の危険性については、勇気をもって訴えていかなければいけないという話をそのときにされて、私は「ここに、私の仲間がいた！」というような感激を覚えました。

―― 私が覚えていますのは、同じ早期教育をしていても、問題が深刻化する場合とそうでない場合があって、母親の側の不安、あるいは焦燥、とらわれなどの要因がそれを左右するのではないかということでした。

植松　お母さんが走ってしまうとね。で結局、早期に過度の教育をやらせていくお母さんたちというのは、子どもを悪くしようと思っているわけではなくて、本当は他の子どもより遅れてはいけない、他の子どもよりも抜きん出てほしいというところから始まったわけですけれども。長く、非常につめてやっていくお母さんは、視野がすごく狭くなっていくのですよね。8ヶ月の赤ちゃんにフラッシュカードで毎朝トレーニングをやったり、10ヶ月の赤ちゃんにハイって言わせたり、それから、毎日毎日、午前中お勉強するわけですよね。すると1歳くらいになったときには、顔が無表情になっているのですが、そんなことをおかしいとも思えないのね。

今度は、お教室の中で他の子どもがすらすら答えていくと、自分の子どもはまだできないということですごく焦って、もっともっとと教材を与えていく。与える教材は業者によってちゃんと用意されている。というところで、お母さんたちがそこに入り込んでしまう危険性があります。申先生も同意見でしたね。

だんだんお母さんたちが、不安になって、少しでも自分の子どもが早くに知識を身に付ければそれだけ立派な人間になっていくと勘違いしているのではないかとおっしゃっていました。そのことはこの本にも書いてありますね。

巷野　話がかわりますが、この間小児歯科の先生がたと話し合う機会があった時に聞いた

のですが、舌の下にある舌小帯という膜をね、韓国系の子どもたちが結構切りにくるんだそうですよ。英語のRとLの発音をよくするために、韓国で親が子どもの舌の下を手術させるのが流行しているという番組のビデオを先日見ましたね（注：2002年1月、韓国SBSテレビが制作・放映した警告番組「それが知りたい　ー何が母親を不安にするのか：緊急点検、早期教育の実態ー」で取り上げられている。2001年12月、巷野・植松・丹羽が日本での取材を受ける）。日本では母語の韓国語をキレイにしゃべるためにも切ったほうがいいということになっているらしい、と。

植松　そうなんですか？　母国語なのに。で、その先生はそういう要望に応えて切ってしまうのですか？

巷野　いえ、切らないようにしているということですが。でも英語の場合だって、そこまでする必要はないのにね。

――　こちらの鄭美羅（チョン・ミラ）先生の書かれたもうひとつの解説によると、韓国では早期外国語教育がまたいっそう過熱していて、英語だけでは子どもに付加価値がつかないから、さらに中国語まで、とエスカレートしているようですね。

植松　そのようですね。以前なら日本語を2つ目の外国語にしていたかもしれないけれど、最近日本経済が不振で中国が発展しているから幼児にも中国語。結局は大人の都合なのね。

実は高度な「ゆっくり」、ゆっくりは「賢い」

巷野　話はもどりますが、さっき言ったように、これは単なる早期教育告発・批判本ではないですね。だけど内容をよくみるとすごく厳しいね。

植松　ええ、厳しくてハイレベルですよ、これ。

――　ゆっくりは賢さを必要とする、と。

植松　そう。で、お母さんたちは自己犠牲をしなければいけない、「自分が、自分が」って言っていたら子どもは育たない、と言っているのです。お母さんというのは、自分をある意味自分を犠牲にして行きながら、子どもの後ろに立ってみつめていくことが大事であると。「ゆっくりしなさい」というのはそういうことなんだと思います。

巷野　厳しいことばだよね。私たちは、日本のいまの社会でその言葉（「自己犠牲」）をちょっと使えないところがあるね。地域社会や家族の力をまず回復しないと、孤立しがちなお母さんをますます追い込むとになるからね。しかし、それにしてもその言葉は真理ですよ。親になるということは本来そういうことだから。

植松　それから「世界への信頼感を持てるような子どもにしなさい、育てなさい」、ということもなかなか言えないですよね。彼女は、結構子どもの年齢がずいぶん早い時期にこう言っているんですよ。幼い時代に最も大事なのは、世界への信頼感を形成することである。だから幼いときに、基本的な要求が充足されて初めてそれができることなのだって。

で基本的な充足というのは、母子関係の部分がすごく大事ですよと彼女は言っています。これも、よく読むと厳しい。それを「賢い子育て」っていう風に言っている彼女の賢さ、びっくりしますよね。

だいだい、私たち「賢い」って言う風に使わないじゃないですか。ステキなお母さんとか優しいお母さんというふうにはいいますけど。

巷野　確かに、「賢い」っていうことばを育児中のお母さんに向けてほとんど使わないね。

植松　私たち臨床心理の方でも小児科でも「賢い」って、今、日本では使わなくなりましたね。「賢い」って日本語で言った場合には、ちょっと誤解される可能性があるでしょう？
巷野　IQ が高いとか、テストの点数はいいけれども人間味に欠けるとか、必ずしもいい語感ではないところもある。これはもともとそういう題名ですね、原語で？
――　はい、「賢明な」とか「賢い」と。「賢明な親たちは子どもをゆっくり、あるいはじっくり育てる」ということだそうです。
植松　少なくとも「ステキ」とは違うんですね。……でも案外、「賢い親」っていうのもいいかもしれないですよ、日本でこの本を読んでもらうのに。だって早期教育にがんばる親御さんたちは、子どもを賢く、賢く、勉強でも何でもできるようにしたいんだもの、自分だって賢くなりたいんだもの（笑）。
――　そういうお母さんにこそ読んでもらいたいと。
植松　それで読んでみると、子どもに点数をとらせて満足するような賢さではなくって、実は「親としての本当の賢さってこういうことなんだ」って、ね。
――　それにしても、韓国も、そしてシンガポールでもそうだと思いましたが、知的そして道徳的にも「賢い」というのは、本当に大切な、社会的に求められる価値であり、またプレシャーなのですね。
植松　そうですね。
――　余談になりますが、中国ではこの本の翻訳が最近出ています。タイトルは「ハオ・マーマ・マンマン・ライ」（張春海訳,中国社会科学出版社，2003 年 1 月）、つまり「いいお母さんはゆっくりいきますよ」という意味ですね。やはりわが子に少しでも賢くなってほしいと焦ったり悩んだりの中国のお母さんたちにこの本は、参考になると判断されたのでしょう。また共感をもって受け入れられそうな序文もついています。

韓国からのメッセージは、日本のお母さんに伝わるか

――　では最後に、本書の内容は、いまどきの日本のお母さんたちの参考になるかどうかなのですが。日本では子育ての危機が叫ばれて久しいので、育児の指南書やヒント集がいろいろ出ていて、もしかしたらこの内容とも大同小異ともいえるかもしれませんが。そのあたり、いかがでしょうか？
植松　大変参考になると思います。
巷野　参考になると思うねぇ。
植松　本当に面白かったですもの、これ。始めにも申しましたけど、巷野先生と二人で少しずつ読んで、面白いねえって話していたんです。表現は平易だけれど、深いし、ちゃんと厳しいことも言っている。専門家の私たちが、一節、一節、噛みしめましたからね。
　後半にゆっくり育てるための Q&A みたいのが入っていますでしょ。これだって非常に味がありますよ。私たちもいろいろ子育てのアドバイスをしていますが、本当に切り口が違う、新鮮だって。
巷野　新鮮でしたよ。読んでいて、なるほどこういう表現の仕方、問題の出し方もあるんだと思いましたよね。「感情の調節は下着の（交換の）ように」とか、「子どもを交渉のテーブルに招く」、「平行線の美徳」とか、いやいや沢山あります。
植松　たとえば、「質問の 21、おもらしをします」をみると、発達的なこととか、肛門の括

約筋、退行現象が起きるというようなことがある…ということが書いてありますね。そこに「アルコール中毒の父親のために」っていうのも、さりげなく入れてあるでしょう？　飲酒の問題、日々夫婦喧嘩が絶えない、母親が一時家出して…と言う風なとても深刻な事例みたいなもの、普通、書物に私たち出さないのですけれど、それが申先生は、ぱっと出して「自分のような専門医のところに来なさい」みたいなこともきっちり言っています。ほかでもどんなときに病院に行かなければならないのかということも、書いてあって大変、参考になりますよ。

―― 小児精神医学に対する偏見をなくしたいという使命感もあるのですね。

巷野　それから、以前から「早期教育の定義」をこの研究会で問題にしておりますが、最後にもういちど私たちの考えを言っておきたいですね。でないと、誤解を受けると思うので。

「早期教育」というときには二つありましてね、ひとつは、もともと人間というのは早期に教育される動物だということです。他の動物は生まれて数時間たつと歩くし、自分から母乳を飲むし、敵がくればお母さんに身を寄せるということで、自立しているわけです。人間の赤ちゃんは本来ならば他の動物でいう３歳ころ生まれてくるはずなんです。３歳くらいになると言葉が出てくるし、歩けるし、自分で食べることもできる。ですからその前の０・１・２歳は、本来はお腹の中で育っているべき段階なのが外で育っているわけです。アドルフ・ポルトマンという動物学者の「人間は未熟児で生まれる生理的早産児である」という言葉がありますね。未熟児で外に出てしまっているからこそ、お母さんがだっこしたり、授乳したりして、より心が育つ。人間は早期に育てられる動物といいましょうか、略せば「人間は元来、早期教育をされる動物だ」というわけです。

私たちが臨床の立場から問題視する「早期教育」とは、早産で生まれた期間はゆっくりと階段をのぼっていくべき発育なのに、それを飛び越えていく、あるいは無理に上から引き上げる教育のことですから、だいたい３歳以前の場合をとり上げています。３歳になると「いや」と言える自分の考えもでてくるし、自分でしたいという努力もあります。実際に３歳以前の誤った早期教育が、あとでいろいろ取り返しのきかない結果を招いてしまうのですね。

植松　本当にそうですね。

巷野　それで話はもどって、現在の日本の若いお母さんの問題ですが、一時期に比べますと育児雑誌などの超・早期教育の宣伝広告もだいぶ下火になったように思います。しかしこれは早期教育熱が冷めてしまったのではなくって、おそらく１ページ百万円単位の広告を載せていられない最近の経済の事情もありますね。実際には、早期教育ブームは地下に潜行して見えなくなっただけなのではないか。私たちが知る限りでも、ずいぶん若いお母さんたちがうちの子はどうしようかと迷ったり、業者の誘う超早期教育にはまったりしている感じがいたします。

その意味でも、３歳までに本当は何を育てなければならないのか。「ゆっくり」がいかに大切かについて、おとなりの韓国から説得力をもってつつみ隠さず述べてくれたこの本は、実に貴重だと思います。

―― 本日は、どうもありがとうございました。

（2003年３月　こどもの城にて　記録・橋本昭彦、波多野愛　編集・一見真理子）

資　料　I

賢い親は子どもをゆっくり育てる

申宜真　著

辛椿仙　訳

資料Ｉの書誌情報

題目：賢い親は子どもをゆっくり育てる

2000年10月9日 第1刷発行
2000年12月15日 第8刷発行
著者： 申宜真
発行人：劉承三
出版社：中央M&B
住所：大韓民国 ソウル市 中区 順和洞 2-6
電話 出版部：2000－6440
　　販売部：2000－6207
ホームページ：www.jbookmarket.co.kr
印刷：東洋印刷
登録：1997年4月28日 第13-499号

著者の略歴：
・1964年、大韓民国釜山市生まれ
・韓国ソウル延世大学校 医科大学卒業
・同大学大学院修士課程修了、同大学大学院にて博士学位取得
・1996年アメリカコロラド大学に留学
・現在 延世大学校 医科大学小児精神科教授、新村セブランス病院小児精神科専門医

ま え が き

ー私が叩かれる覚悟でこの本を書いた理由ー

経済的に裕福な家庭で育った一人の子どもがいた。その子の母親と父親はいわゆる一流大学出身で、一人しかいない子どもへの教育熱は非常に高かった。母親の強い要望によって４歳になった年からその子どもは英語の幼稚園に通いはじめた。

母親に連れられ英語を教わるようになったその子は、わずかの間に問題を起こしはじめた。一緒に勉強する友達を何の理由もなく叩いたり、あげくには幼稚園の門の前で駄々をこねはじめた。

気になった母親は、近所の児童相談所で子どもの知能指数を検査してもらった。結果は80。驚いて私を訪ねてきた時は、同年の子ども達に比べ言葉も遅れていたが、母親はその事実にすら気づいていなかった。

正確を期すため、再びその子の IQ を測定した。最初の結果とそんなに変わらなかった。しかし、その子を注意して観ていた結果、実際の知能はそんなに低くないことがわかった。それは、結局その子がテストの問題がわからなかったから低かったのではなく、テストへのプレシャーで拒否したため、知能点数が過少に評価されたことを意味していた。歌唱

何がその子をそうさせたのか。

その子は英語の幼稚園に通うのが嫌だった。母親や先生がさせるままに英語を覚えたが、勉強すること自体が好きではなかった。その子は結局、英語の勉強に対するストレスのために生活全般に自信を失い、その気持ちを、友達を叩く行為や幼稚園へ行くことを拒否することで表現したのである。また、一度学習に対する拒否感が生ずると、IQ 検査のような簡単なテストでさえ無意識のうちに拒否反応を起こし、試験自体を無視するようになったのである。

私はその子を治療しながら非常に心を痛めた。何の問題もなかった子どもが母親の無理な欲望と強要のせいで、心の病にかかったからである。身体の傷は時間が経てば治るが、心の傷は容易にはよくならない。さらに耐えがたい事実は、早期教育の熱風が韓国を吹き荒らし、そのような子どもが日に日に増えている点である。ところがこうした現実を知ってか知らずか、早期教育に続いて早期留学のブームまで起こっているありさまである。

もちろん、早期教育をさせる母親の心情をわからないわけではない。皆が早期教育をさせているのに我が子だけが遅れたらどうしようと心配する気持ちは私も十分理解している。何故なら私も小児精神科の医師である前に、二人の息子を育てている母親なのだから…。

上の子が幼稚園に通う前に、私もやはりほかの母親たちのように知能開発に良いといういろいろな早期教育法を試してみた。勉強したがらない子どもに「キョンモくん、これ何？」と聞くと、子どもは顔をしかめて「わからない」という。すると私はまた「そんなこと言わないでよく見て」と子どもを誘い、何とかして教えようとした。「これは間違っているのではないか」と思いながらも、そうしないとダメなのではないかという不安感…。

それに近所の母親が、得意げに息子がハングルをマスターした、英語のアルファベットをすらすら覚えられるなどと自慢すると、「うちの子に問題があるのではないか」と私の不安感はもっと大きくなっていった。

誰にも携帯電話を使わない権利、インターネットを使わない権利がある。しかし、ある瞬間、その技術は使わない人達に孤立感を抱かせる。したがって、新しい技術を拒否するためには孤立感を乗り越える勇気を出さねばならない。しかし、普通の人達がそうした勇気を出すことは難しい。したがって、ほかの人達に振り回されることになる。早期教育の流行もそういうことではないだろうか。選択の問題であるにもかかわらず、あなたも私も、と皆がやっているから追いかけていくようになるのである。

この本には、私がなぜ子どもをゆっくり育てなければならないと確信するようになったのか、そして子どもをゆっくり育てるためには具体的にどうすれば良いかについての話が書かれている。長い間、小児精神科の医師として働きながら、また二人の息子を育てながら、無数の試行錯誤の中で得たものを、そのままありのままに書いておいた。

今、私は叩かれる覚悟を決めてこの本を世に出す。無条件に早期教育をさせる母親たちとこれを煽るさまざまな理論や教育機関との戦いを宣布したのである。しかし、私は恐くない。誰かがしなければならないことを私が今やっているだけだと思っているからである。

すべての親たちが願っていること、それは自分の子どもが幸せに育って、人生に成功することであろう。私も私の愛する子どもたちがそうなることを望んでいる。こうした心情がこれを書かせたので、したがって後悔はない。

最後に、私は、この本が子どもをどうすれば正しく育てられるか悩んでいる多くの親たちへのへの道しるべになることを願っている。

2000年10月

申宜真

目　次

1．賢い親は子どもをゆっくり育てる 25

これからはこんな子どもが成功する 25
親になる資格があるか、自診断してみよう 27
1．結婚生活にきちんと適応しているかどうか 28
2. 子どもについての基本的な理解があるだろうか 29
3.「利他の心」があるか点検しよう 30
韓国で「シチダ」が消えなければならない理由 31
子どもをゆっくり育てることは選択ではなく必須である 35
「ラダク」の育児法から学ぶこと 37
「ゆっくり育てる」ことに対する誤解 39
ゆっくり育てることの真の意味　— ONE STEP BEHIND, ONE STEP AHEAD. 41
賢い親たちに「育児」はない 44

2．私が二人の子どもを育てながら学んだこと 47

決して不可能な夢はない 47
私が小児精神科を選んだ理由 50
無難な熊より憎らしい狐になれ 52
夫の親としての役割の学習 54
たまには捨てる知恵も必要である 57
ともにすることの偉大さ 59
兄弟の間にも川は流れる 60
親になることの意味　その１ 62
親になることの意味　その２ 65

3．子どもをゆっくり育てるための７つの提案 68

子どもをゆっくり育てる親の基本的心構え４つ 68
1）絶対的な愛 69
2）敏感性 70
3）　反応性 71
4）一貫性 73
感情の調節は下着のように考えて、チェックしよう 74
子どもから「なぜ」という疑問を引き出させよう 77
子どもをユーモアの海へ入れよう 80
子どもにとって理由がわからない時期には、親が「我慢」しよう 83
「見せてやる」ことの威力は思いのほか強い 85
平行線の美徳を学ぼう 87

4．こんな時はこんなふうに　—　子どもをゆっくり育てるための申宜真式処方箋 91

1)　子どもに落ち着きがありません 91

2) 保育所（ノリバン）へ行かせる時は、どのようなことに注意したらよいですか？ 92
3) 言葉が遅れているようです 93
4) 食事の習慣づけがうまくいきません 95
5) 子どもがひどく人見知りします 96
6) 子どもが我を張ります 96
7) 子どもが乱暴です 98
8) 子どもがあまりにも気弱です 99
9) 発達が遅れているようです 100
10) とくに性に関心が高く、自慰行為をします 101
11) 兄弟げんかがひどいです 102
12) 社会性が足りないのか、友達を作れません 104
13) 子どもがよく嘘をつきます 105
14) 子どもを叩くことはどのような影響を及ぼしますか？ 106
15) 行儀の悪い子に育つのではないかと心配です 106
16) 親の権威を保つことは必要ですか？ 107
17) 迷子になるほど誰にでもついて行きます 107
18) 子どもが依存的で気になります 108
19) ハングルはいつから教えたらいいですか？ 109
20) 子どもが突然、幼稚園へ行くのを嫌がりはじめました 110
21) 子どもがお漏らしをします 111
22) 子どもが長い間入院していますが、情緒上の問題はありませんか？ 111
23) 夫が酒を飲むと、子どもをひどく痛めつけます 112
24) 子どもが夜泣きをします 113
25) 父親と母親の育児方式が違って、夫婦げんかをよくします 114
26) 子どもに精神的な問題が起きた時、どうすればいいですか？ 116
27) 子どもがテレビ、ビデオに没頭しすぎです 117

1．賢い親は子どもをゆっくり育てる

これからはこんな子どもが成功する

職業上、私はふつう一日に、20 名以上の子どもとその母親に会う。精神的な疲労と痛みを訴える彼らを、一日中相手にするのはそんなに容易いことではない。心に傷を受けた彼らの支えとなってやり、彼らが健康を取り戻していく様子を見ているのは嬉しくやりがいも感じるのだが、正直言ってたまには私の手に余る時もある。いっそのこと、私が他の精神科専門医に定期的に相談を受けようかと思うこともある。

しかし、そんな疲れた心は二人の息子の笑顔をみる瞬間、不思議となくなる。息子たちと関わっていると、いつしか疲れていたことも忘れてすぐに笑顔を取り戻す。そんな時、私は子どもたちに感謝する。母親ならば誰でも同じ心情だろう。

それで、たまに会合があって遅く家に帰るような日にも、私は靴を脱ぐやいなやまず子どもたちを見に行く。しばらくの間、眠っている子どもたちを眺めていると、ふとこれからこの子たちが大きくなってどのような人間になるのだろうかと心配になる。そして一方では、どのように育てればうまく育てることができるのだろうかと悩む。

このことと関連して、延世大学校社会学科のチョヘチョン教授は、これからの社会は複雑で不確実な危険性のある社会へ移行すると予測した。そのため、「勉強がこの程度できれば、良い大学に入って社会的にも認められる立派な人になれる」という近代的発想のルールは完全になくなるという。

この変化は今私たちの周辺でも起きている。Web Master、Pro Gamer など、何年か前には聞いたこともなかった職種が毎日新しく出てきているし、ここに果敢に携わる人々も増えている。

チョ教授のいう、未来社会が段々複合的で不確実な社会へ移行するということを、私はむしろ肯定的に考える。血縁、地縁（出身地）、学縁（学閥）に疲れ果てた既成世代に比べると、私たちの子どもが育つ社会は本当に良い世の中になりそうだ。決まったエリートコースのない、成功の尺度が個人の努力と意志によって左右される世の中、考えてみるだけでも本当に素晴らしいことではないだろうか。

しかし、私は個人の自由意志が作用する範囲が広くなればなるほど、「存在の不安」がどれほど大きくなるかということを憂慮せずにはいられない。宗教や結婚、家族制度が人類にあるのは、どこかに頼るところを探す存在の不安のためである。自分の存在価値を自己の内部に探すということがあまりにも難しいため、それを外部に求めようとするのである。

ある人はそれが人間の自由意志を抹殺させ、生を拘束する足かせだというが、どうあろうとも人間には存在の不安のため自ら拘束されることを願う本性がある。

ところで、人間が思い通りにできる能力が大きくなればなるほど、不安は加速化するしかない。何事でもすべてに責任をもたなければならない負担感はもちろん、手に負えない自由に直面したときに感じる不安は言葉では表現できないだろう。あらゆることを自律的に一人で解決しなければならないためである。

それでは、このような社会の変化の中で、我々の子どもたちに一番必要なのは果たして

何だろうか。社会が不確実であればあるほど、人間に自由意志を発現する機会が多く与えられれば与えられるほど、そして個人の選択の幅が多角化すればするほど、もっとも必要なのは「自己同一性(Self-identity)」である。

自己同一性とは自分自身に対する内的な感じ、自我像、外部の評価などが統合され、私が誰であるかを自覚することである。自己同一性は、外部の環境や周りの人と触れ合う中でも自我が分裂されず、揺れ動かないことを可能にする。これを備えている人は独りでも寂しさに耐えられ、他人と関係を結ぶ時には相手のプライバシーを侵犯することなく、精神的な絆を強固に維持していく。

また、自己同一性のしっかりした人は自らを客観的な目でみることができる。これは即ち、自分がしたいことを早く見つける能力が大きいことを意味する。もちろん、これが未来社会での成功の近道であることは言うまでもない。

したがって、私は二人の息子が確実に自己同一性を備えた人間に育つことを願っている。しかし、この自己同一性というのは、その特性上、ある瞬間に急がせて得られるものではない。まして、強制的に教えようとして注入できるものでもない。生まれる瞬間から始まり、母親を知り、母親を通して世界を知り、ひいては世界とぶつかりあいながら、無数の失敗と挫折を乗り越える過程を通して、困難の末にようやく得られるものである。

子どもの自己同一性は、世界に向けての失敗の記憶とそのフィードバック（Feedback）で得られる。「ああ、これはダメだな。これは私には向かないな。」と気づくことを通して、自らを振り返り自我観を形成していくのである。簡単に言うと、たくさん転んだ子どもがそれだけ自己同一性が強いということになる。

しかし、多くの母親は、子どもが思う存分に経験し、かつ失敗してみる機会をまったく与えていない。大勢の人が行く安全な道についていくように促すだけである。

そうしたあげくの結果はどうであろう。母親と学校の言うなりに勉強だけを死ぬほどしたものの、大学に入る頃になって自己の存在の意味、自己同一性について多くの青年が悩んでいる。これまで自分のすべてを取り上げられたまま受動的に生きてきたのだから、いきなり自分自身を探そうとしても迷うのは当然である。これから本格的に人生の意味や進路について、真摯に悩まなければならない時期になって、遅ればせながら自己同一性の確立という問題にぶつかって迷うのである。

「一人ぼっちの愛」、「あざ」などの歌で人気の歌手、キムヒョンチョン氏があるインタビューでこんなことを言った。

「学校という制度自体も、自分はとても鬱陶しく感じていました。学校教育は、個々人の長所を伸ばすべきだと思うけれど、実際には、そういう長所をなくし、面白味のない人間に作り変えてしまうのです。私の友達の中に学校生活を真面目に送った子がいました。勉強がよくできるのではなくて、先生のいうことをよく聞いていた友達です。その友達をみると、自分で決めるのがとても遅く、社会に対する抵抗力もとても弱いのです。私と同じ問題にぶつかった時、すぐ怖がり、尻込みする場合が多かったです。」

キムヒョンチョン氏はこのような理由を挙げながら、常に叩かれながらも自分のスタイルにこだわり、親が反対する音楽をするにはどうしたらいいかと一人であれこれ思い巡らしていた経験が、自分に責任をもたせ、自分を自分らしく形成していくのに大いに役に立ったという。

好きなことを見つけるだけでも、子どもは成功の半分は成し遂げたことになる。しかし、これを満足いくように見つけるためには、多くの試行錯誤と長い時間が必要である。親が代わりに見つけてやることもできない。絶対に早急に考えても、むりやり強要しようとしてもならない。

逆に、親の言う通りに従う子どもがあれば疑ってみよう。言われる通りにする子どもは、キムヒョンチョン氏の言うように、自己決定能力が不足して、社会への適応力が劣っていることもある。これはその子どもの自己同一性が不足していることを意味している。

これからの時代は、必ず自己同一性の優れた人が成功する。したがって、これから親がすることは、我が子の自己同一性の確立が何らかの理由で遅れているのではないか、そして子どもが本当に願っていることは何か、絶えず時間をかけて粘り強く観察することである。

親になる資格があるか、自診断してみよう

「人間は誰でも自分の茶碗（食べる分）をもって生まれる」という言葉がある。多様な意味に解釈できるが、小児精神科医として、そして二人の息子を育てている母親としては、本当に気に入らない言葉である。いったん生まれさえすればどうにでも大きくなると、親になる人の心を安易にさせるためである。

しかし、実際これほど危険な発想はない。肉体的には、女性は初潮を経験し、男性は夢精をすれば、子どもを持つことのできる条件になるが、子どもの立場から見た時にはいくつかの必須条件がある。それが準備できていない状態で子どもを持つようになると、親も苦しく子どもも苦しい、不幸な状況が必ずやってくる。

いつだったか、初めての子どもを育てている娘と彼女の実家の母親が、一緒に診療室を訪ねてきたことがあった。20 代そこそこの幼い顔をした赤ちゃんの母親は、見た目でもどこか不安そうであった。診療にきた理由というのは、生まれて 1 年になったばかりの赤ちゃんが気難しく神経質なので母親を大変苦労させているということであった。

しかし、このすべての状況を実家の母親が説明し、実際に子どもを産み育てている娘は、横で夢でも見ているかのように何も言わず坐ったままであった。「私は、何にも知りません」という純真な表情で。私がみたところ、子どもを育てるのに苦労しているのは実家の母親で、娘ではなさそうだった。いくつかの質問を通して調べた結果、彼女は妊娠し子どもを産んだものの、精神的成熟度はまだ思春期の情緒に止まっていた。子どもの母親と向かい合っているのでなく、感性の豊富な女子高校生と対話をしているような気までした。実家の母親の保護で何とか生活していたのだが、子どもの母親としての自覚どころか、結婚生活にさえ適応できていない状態であった。

「こんな母親の子どもなのだから問題が起こるのも当然だ」と言えば、あまりにむごい言葉だろうか。しかし、これが現実である。母親が親として最低限の準備ができなかった結果、子どもが犠牲になるのである。

本人自らは気づいてないようであるが、このように精神的には未婚と変わらない親たちに、私は診療室であまりにも多く出会う。一人の人間としてはどうということはないが、子ど

もを育てることにおいては、どこか不安定な場合が大部分である。

彼らに向かい合うたびに、私は親の資格試験でもあったらどうかという思いが切実になる。子どもを生む前に、一度でも自ら親になる資格があるかを考えてみる機会があったならば、少なくとも子どもを産んだ後、子どもを産んだのがあまりにも早かったと後悔したり、育児過程で葛藤を起こしたりすることはないだろう。

親としての尺度は自分に与えられた状況によって、そして個人の価値観によって基準が違うはずである。しかし共通の「これだけはかならず備えるべきこと」というのがある。

1．結婚生活にきちんと適応しているかどうか

20 年以上異なる生活をしてきた二人が一緒に生きていくことは、私の経験に照らしてみてもそう容易いことではない。さらに妻の立場からは、夫の実家という新しい集団が何らかの形で結婚生活の一つの軸になる。状況がこうであるから、ささやかな家事からはじまり、経済的な問題はもちろん、家の大小のことがらまで新しく適応していかなければならない部分が一つや二つではない。夫が家庭的で手伝ってくれれば幸いだが、そうでない場合は子どもを育てる問題に先立って、母親自身はもちろん、子どもにも安心できる環境になるよう、周りの状況から安定させなければならない。

最初の子どもを育てるのが難しいというのはこのためである。多くの場合、結婚生活に適応する前に子どもを育てることになるので、育児は母親にとって負担にしかならない。極端な例を挙げれば、台所に入ることに慣れていない母親にどうして子どもの離乳食の準備ができるだろう。

まず夫との関係が円満であるかを考えてみよう。二人の夫婦生活の細かなことろから一つ一つ詰めて考えてみると、夫との共同生活への適応度がどの程度かがわかる。

夫が家事にどれくらい協力的であるかも必ず推察してみたい問題である。これは、専業主婦の場合でも同じである。仕事をしていない女性は家事と育児をきちんと両立できるという月並みな考えは捨てるべきである。専業主婦で家事と育児の両立を経験した人は、これが思い通りにならないことをよく知っているはずである。

経済的な条件も重要である。「粉ミルク代、おむつ代」というのはいつでも出てくる言葉ではない。このような基本的でないものでも、いったん子どもが生まれれば、あれこれとしてやりたいことが生じる。この時、母親としての自然な心が、経済的な条件のためあまりにも抑圧されると、これもまた母親のストレスとして作用することになる。

夫の実家との関係も無視することはできない。

相談をしてきた人の中に、結婚してすぐ妊娠した女性がいた。計画外の妊娠のため慌てている最中に、姑が寝たきりになる状況が発生した。姑の介護をしながら、家事はもちろん、お腹の子どもにまで気遣わねばならなかった女性は、精神的にも身体的にも疲れ果ててしまった。

たしかにその女性がすべてのことをするしかない状況であったかも知れないが、すでにお腹の中で大きくなっている子どものことを考えたならば、最低限ほかの方法を模索すべきであった。夫の実家との関係が初めからこうだと、子どもが生まれた後にもさまざまな苦労がついてまわるはずである。

2. 子どもについての基本的な理解があるだろうか

長い期間、治療を受けた子どもがいた。英語の神童といわれテレビにも出演したことがあったが、あるとき放送局の依頼で知能検査を受けることになった。しかし、テストに臨むその子の目は怯えていた。テストの結果に執着し、不安がっていた。本来３～４歳の子どもの大部分は、正答であるかないかなど全然気にしていないものだが、この子はかわいそうなほど結果に執着していた。

母親はその理由がわからないと泣いてしまったが、後でわかったことは、その母親はその子がとても幼い時から時間を決めて無理矢理に英語の勉強をさせていたのだった。そして子どもがきちんとできない場合はひどく叱ったという。母親の愛を感じこれに基づいて世界への信頼を積んでいく時期に、思考力（参考として思考力は３～４歳頃形成される）を要求する学習を無理強いされてしまい、この子は心の病にかかったのである。

もちろん、その母親の気持ちが理解できないわけではない。その母親は誰より自分の子どもを愛し、その成長を願っていた。しかし、その母親には情熱だけがあって、子どもへの理解が足りなかった。愛や情熱だけで子どもをきちんと育てられるならば、親の役割というのがこんなに大変なはずがない。

母親たちに常に強調することだが、子どものすべての行動にはそれなりの理由がある。それが本能的なものであるか、または意図されたものであるかにかかわらず、その行動にはそれなりの理由がある。それは、子どもとしての生存欲の表現であり、同じ行動であってもその理由はそれぞれである。

一つの例で、子どもの一番よくある癖のなかに指しゃぶりがある。雑誌や育児書でよく扱うものの一つだが、その答えが一律的である。指を吸うと歯並びが悪くなるなどの問題が起こるので小さい時からこれを直すべきだという。もちろん、指をしゃぶる行為が歯の形成によくないというのは正しい。また、子どもの悪い癖を矯正する必要があるということも間違いではない。しかし、その公式がすべての子どもに適用されるものではない。

指を吸う行為は、子どもが何かの内的な調節ができなかった時、それなりの解消策として現れる場合が多い。しかし、親たちは絶対それを受け入れられない。それが気になるならば、子どもに不足していることは何かを考え、子どもを慰める方法を模索すべきだが、ただ歯並びが悪くなることだけにこだわり、子どもの指ばかり見つめたりする。

一方、ごはんを食べさせるのが難しい子どもがいる。私の長男も例外ではなく、ごはんを食べさせるのが本当に大変だった。

最初は押しつけて食べさせようともしたし、脅迫をしたりもした。でも状況が変わることはなかった。子どもは変わらず食べず、私は段々心配が大きくなるばかりであった。

それで、子どもを叱る代わりに子どもが好きなのは何か、どうした時に食べるのを拒否するか、さまざまな食べ物を試しながら子どもの意に合わせはじめた。

このように繰り返すことを通してその理由を知ったのだが、我が子の場合、並外れて触覚が鋭敏であった。舌に感じられるおかずの感じやごはん特有のねばねばした感触が嫌だったのである。

この場合、母親が受け入れるか入れないかの問題ではない。子どももどうしようもないものなので、母親が粘り強く子どもに合わせながら解決点を探さなければならない。子どもの行動を何でも止めさせ、本に書かれている方法だけに従うと、子どもの性格を悪くさ

せるばかりである。

子どもをあやしながらあれこれ試した後、私は子どもがごま油だけはよく食べることがわかった。それでキムチ一切れにもごま油を付けて食べさせた。この方法を知った後、私の「ごはんを食べさせるための戦争」は幾分楽になった。

そしてこれによって、我が子の持っている問題の多くの部分が子どもの鋭敏な感覚から発していることもわかるようになった。慣れない感触については相当の拒否感を見せた長男は、とくに新しいものを嫌っていた。おもちゃは言うまでもなく、服から靴まで新しいものを買ってあげると投げ出すことが多かった。祖父が買ってくれた外国製の人形を見てワンワン泣き出し困ったこともあった。

初めは食べさせることが悩みだったが、それがこの子の鋭敏さからくることがわかった後、私は新しい服を着せたり、おもちゃを与えたりするより、それに慣れる時間を配慮する方法を選んだ。新しい服を買ってくると、おもちゃのなかに 1 週間おいておくとか、新しい靴を目立つところにおいて子どもが関心を持つまで待つというやり方であった。もちろん、この方法は効果があった。

心だけで子どもを理解しようとしてはならない。理性的に子どもの成長過程について深い理解がなければならなく、絶えず子どもを観察してその特性を把握しなければならない。

子どもの立場からみた時、幼い時代にもっとも大事なのは世界への信頼感を形成することである。これは基本的な要求が充足される時、初めてできることである。簡単に言って、お腹が空いた時、乳を飲み、消化をよくさせ、排泄がきちんとできるなどの生物学的な要求がうまく調節されると、子どもは、「私は愛されている」、「この世はとてもよいところだ」と感じるようになり、これが蓄積され、世界への信頼感を形成するのである。

落ち着いて、自分が子どもとどう向かい合っているのか考えてみよう。心の情熱だけで子どもをせき立て、無理強いしていたならば、これから子どもというものについて学習し、理解しよう。これが子どものための、真の母親の態度である。

3.「利他の心」があるか点検しよう

結婚生活への適応の可否、子どもへの理解度とともに考えてみたいのは、精神的成熟度、すなわち、親としての利他心である。「私を捨てて子どもの犠牲になれるか」という点は、非常に重要である。時代遅れの発想だと非難されるかも知れないが、子どもを育てることは、かなりの献身を要することである。子どもを上手に育てたいならば、子どもの世話をすることが本当に好きでなければならない。しかし、この利他の心をしっかりと持っていない人もかなり多い。

とくに、最近は母親自ら「おばさん」をさげすむ態度も目立っている。子どもを産んだためスタイルを悪くし、女性としての魅力が衰えることに母親たちは非常に敏感に反応する。しかし、ふりかえって考えてみると、「おばさんになる」ことは一人の命を育てるための人間的な成熟の尺度である。自然の変化の前で葛藤せず、子どもへの愛で自分を受け入れる知恵も時には必要である。

自己成就的な性向が強かった独身時代、私も外的な飾りにかなり神経を使った時期があった。上の子を産んでからも捨てられなかったこの性向が完全になくなったのは、下の子を産んでからである。強制的にこうなったというより、子どもへの愛が大きくなるにつれ、

自然に変化させられたようである。不必要な自己愛的な性向がなくなった今、かえって私自身への執着から抜け出たという妙な解放を感じる。またその分、子どもへの関心がもっと高くなったのも事実である。

子どもへの利他心は絶対、一瞬時に生まれるものではない。子どものために献身できる心を持つためには、親自ら子どものことを切実に願わなければならない。感情は自然にできると言われるが、努力によって大きくなることも小さくなることもある。周りで子どもを上手に育てている母親をみながら、そして自分の子どもをみながら、子どもに向けての愛は絶えず悟りながら作っていかなければならないと感じる。

育児において練習というのはない。我が子に対して何か間違っていたと悟った時も、それをもとに戻すことはできない。ただ間違った状況を最善を尽くして改め、子どもの受けた傷を癒してやるだけである。もっともよいのは、間違った状況を初めから作らないことである。そのため、自分が親になる資格と条件を整えているかどうかを検討してみることは何よりも大事である。

子どものため気が病むと言う前に、そしてうまく育てようと肝に銘じる前に、まず親として私はどれほど準備をしてきたのか、またどれくらい子どものための環境を作っているのかを自ら診断してみよう。

韓国で「シチダ」が消えなければならない理由

数日前、某日刊紙の社会面で「幼児精神疾患急増」という題の記事をみた。新世代の親たちの極端な育児形態が乳幼児の精神疾患障害を増長していて、特に過度の早期教育熱はビデオ症候群、「学習紙」症候群（編者注：学習紙は家庭に配達される学習用教材のこと）など医学教科書にもない各種新種の疾患を生んでいるという記事であった。

私の勤める新村セブランス病院の場合、このような極端な養育のために深刻な精神的障害で診断を受けた患者数は約700名で、去る3～7月の小児精神科全体の患者、2,038名のうち、3分の1を占めた。三星（サムソン）ソウル病院の場合も小児精神科を訪ねてくる満4歳以下の乳幼児数は、1997年に285名であったのが、昨年567名に増加した。

知らず知らずのうちに始まった早期教育熱は深刻な社会問題にまでなっている。我が国に早期教育の理論を初めて紹介した元老教授の一人は「私が言った早期教育は、このようなものではなかった」と、早期教育を口にしたこと自体を後悔しているとさえ言ったほどである。

私は、我が韓国の母親たちが世界のどの母親たちにも劣らない母性愛を持っていると思う。子どもを大事にして愛する心だけはどこへ出しても一級品であろう。

問題はこのような母親たちの心を利用する資本主義的商法にある。科学的に検証もされていない多くの育児情報が母親たちの心をそそのかしているのである。

代表的な例は、「右脳学習」の重要性を強調している「シチダ式教育法」である。事実、シチダ式教育法はその発祥地である日本でも100%検証されていない理論である。いつか、

学会で会った日本の小児精神科医にシチダ式教育法に関して聞いたことがある。日本ではどれくらいのブームになっているか知りたくて聞いたのだが、逆にその医師は「シチダとは一体何か？」と私に聞き返したのである。

シチダ式で言う左脳、右脳教育というのは一体何か。簡単に言って、知識は左脳、知恵は右脳に属するというのがその理論的背景である。今までの教育は左脳教育に偏っていたが、写真に写るようイメージを残す右脳の直感像能力を伸ばしてやると、創造的才能が極大化され、平凡な人間でも他の追随を許さない天才になれるという。

どういう根拠からこのような主張が出てきたのかは知らないが、私にはその根本からが疑わしい。今まで科学的に検証された神経認知学理論によると、左脳と右脳の機能はそんなに別れていない。

脳梁、すなわち左脳と右脳の間の橋を通して常に情報が流れ、こうした過程の下で脳機能が出てくるため、一つの部位だけがこの役割を担当しているとは言えない。左脳に損傷があれば、右脳がさらに活性化され、その機能の代わりの役割を果たすという理論も出てきているのに、脳の機能を分けて考えることは憶測である。結局、右脳と左脳は互いに有機的に連関されていて人間が生きていく上で必要なすべての情報を解釈し、その機能をともに遂行するというのが正しい。

またもう一つ、シチダでは「脳障害児は普通、左脳の能力が損傷されていて、右脳の能力が強く残っているので、自閉児がカレンダーの曜日をすぐ当てるとか、文字をすらすらと読み覚えるなどの能力をみせる」という。この能力が右脳の写真機能で、これを教育的に開発し一般の子どもにも表現させるのだという。

自閉児が曜日や文字を覚えるのは、その子が一般人のように言語的論理性で思考をするのでなく、写真のように撮るためである。しかし、これが右脳的機能であることは明らかではない。脳のある領域が特別に強化されたとは言えるが、それが右脳だとは断定できない。そしてイメージ力と正確に言い得る根拠もないし、これらの能力が人為的に開発されるというのもやはり科学的背景が疑わしい。

もし、その写真能力を開発させたとしよう。それが子どもに本当に良いことであろうか。それが子どもの学習に究極的にどういう役に立つのか、実例が出ているわけでもない。

もちろん、自閉児の中にはイメージを撮るように記憶力が優れている場合もある。しかし、この子どもたちには社会性と言語発達に深刻な欠陥があることを看過してはならない。

ある子どもは、問題を論理的に解決する「系列的情報処理能力（編者注：原文では“順時的情報処理能力”）」より、問題をみるとすぐ答えを提示する「並列的情報処理能力（編者注：原文は“同時的情報処理能力”）」が優れた場合がある。特に、頭はよいが、集中力が足りない子どもたちがこのような性向を持っている場合が多い。

しかし、小児精神科ではこのような子どもたちにむしろ問題を出し、わざと中間過程を書かせる学習治療を受けさせる。なぜかというと、高学年になればなるほど並列に思考する能力より、問題を系列的に類推できる能力がさらに必要だからである。それ故、右脳開発を通して写真を撮るように認知する並列的情報処理能力を強化することには、何か特別の利点でもあるのかどうかが問題となる。

これを逆に考えてみると、イメージ力を人為的に伸長させることは学習に役に立つことではなく、むしろ副作用を誘発することになるという推論が可能である。

そして数字と文字をきちんと読もうとすれば、まず形態と空間を認識し、その意味を把握してこれを事前の情報と接合させるなど、一連の多くの過程が必要である。文字を読む行為一つをみても、その中には左脳と右脳のこれまで明らかになっていないさまざまな作用がともに一団となって出てくるということである。このような状況であるというのに、左脳と右脳を単純に分けて考えられるものだろうか。

同じ文脈で、これまでの教育法が左脳式教育であったというのも語弊がある。彼らは、これまでの「知識詰め込み教育」が全部左脳中心の教育であって、これからは右脳教育にも力を入れ、左脳と右脳をともに発達させ、バランスの取れた教育を実現しようと言う。

もちろん、これまでの教育が知識詰め込み中心教育であったのは事実である。それにしてもそれが左脳式教育であろうか。数学の勉強を例にして考えてみよう。もちろん、数学的演算などは左脳式思考になる。しかし、授業時間に数学を学ぶ時、左脳式思考だけでできるものではない。説明をしっかり把握するため、先生の顔を見るし、質問もするし、解けない問題は粘り強く工夫し友達と相談する。そして一つの問題が解けると笑って喜ぶが、こういう時に右脳によく現れるという情緒的なものが機能する。勉強をするにしても左脳だけを使うことではないという話だ。事実がこうだというのに、学習自体を左脳でするという発想はどこから出てきたものなのか聞いてみたい。断言するが、我々が過去に勉強してきた形態も左脳式教育法とは言えないのである。

左脳と右脳をともに発達させるという主張も妥当ではない。全世界的に左利きより右利きの方が多い。しかし、この右利きの場合、外部から情報が入ってくる時、瞬間的に左脳にそれがまず伝達される。そしてとても短い時間左脳に行った情報が左脳と右脳の間の橋を通して右脳と交わりながらそれなりに解釈、処理される。このような右利きの特性を「左脳偏側化」だという。

このように情報が瞬間的に一方の脳に先に伝達され処理されるという事実を考えれば、むしろ一方の脳が早く情報を入手するようにするのがさらに効果的なのではないか。

これを反証する例として、両手利きの場合、このような「偏側化」現象ははっきりと現れないが、実際、彼らには認知的にもっと多くの問題がみられる。自閉症や学習障害を見せる子どもの中にも両手利きの子がもっとも多い。換言すれば、大脳が一方に偏側化されていない人にさまざまな神経認知的欠陥が多くみられるということである。私が左脳、右脳を同時に発達させるということを聞いて、最初とても驚いたのもこのためである。私はむしろ左脳か右脳か偏側化されたからこそ、脳が効率的に正しい機能を遂行すると考える。

よく芸術家に左利きが多いという。実際、それを研究発表した論文もある。しかし、だからといって左利きの人に芸術家的気質が多いとは言えない。本当に左利きだから芸術家として成功したのか、右利きで生まれたらもっとよくできたのかは誰もわからない。

それなのに、左脳と右脳を同時にバランスをとって教育するというのは、どういう根拠を持っているのか非常に気になる。

シチダ式をはじめ、多くの早期教育法が主張するのは、「子どもの頭脳には大人は考えられないもの凄い潜在能力が隠れており、これを開発させないとその能力はなくなってしまう」ということである。

人間の脳は、大きなビルに順番に電気がつけられるように、順次的にある一定時期にな

ってからその能力が開発される。明かりもついていない事務室で何ができるだろう。脳の準備ができていないと刺激をしても何にもならない。

０～３歳の時、子どもの脳が非常に発達することは正しいが、それを人為的に開発させるべきであるというのはとても危険な発想である。精神科では薬一つ使う時も、その効果より優先的に考えるのが「副作用」である。いくら素晴らしい薬でもそれが副作用を起こすなら、絶対に実用化させない。脳開発も同じである。その副作用や逆効果について検証もできない状態で無理に脳を開発させることは危険である。

それでは考えてみよう。日本の小児精神科医さえもよく知らないシチダ式教育法がなぜ我が国でブームになっているのかを。

子どもに何かしてやりたいが、適切な代案がないというのが一番大きな問題である。正しい方法へのモデルがないため、科学的に検証されていないことに心が引かれるのである。不安な時、占い師を訪ねていくように。

また、他の子よりもっと賢く育てたいという一等至上主義もそれを煽っている。

最近開かれたシドニーオリンピックに関する韓国の新聞記事や放送を見ると、最も多く登場する言葉が「惜しい銀」、「メダル圏から遠ざかる」などなどである。皆、金メダルを獲得することだけに目的をおいて、それが達成されたかされなかったかに関心をもつ。ひどい場合は、銀メダルを獲得した選手達は金メダルを獲得できなかったことが心残りで涙を流す。銅メダルを受賞したほかの国の選手達はとなりで嬉しくて笑っているのに。

何が何でも一等でなければならないという文化は、大きくなる我が国の子どもたちに他人より目立つように、賢くなるようにと強要する。そしてそのような文化に母親たちは敏感に反応する。

しかし、それよりもっと大事なのは我が子の幸福である。金か銀かにこだわるより、自分との戦いで勝ったということに感激できる人に育てることが、真に子どものための道ではなかろうか。

全世界共通の、幼児たちが好きな伝統的遊びがある。それは、「いない、いない、バア」である。アフリカであれ、アメリカであれ、世界どこの国に行っても「いない、いない、バア」がないところはない。

全人類共通のこのような遊びがなぜできたのであろう。理由は単純である。子どもたちが喜ぶからである。この時期の子どもは対象の永続性（原著編集者注：「物が目の前でなくなっても永遠になくなるのではない」という事実を知る認知機能）の概念を習得するため、目の前で何かがなくなってまた現れること自体にとても集中し、面白がるのである。経験した母親はわかるだろうが、子どもが喜ぶ遊びは繰り返ししてあげるようになる。それほど反応が多く出てくるためである。そして子どもが面白がることそれ自体がもっとも優れた脳の開発法である。

したがって、これから母親が考えるべきことは、早期教育法が子どもに面白さを与えているのかという事実である。むしろ早期教育が子どもたちから面白さを通して自ら脳を発達させる機会を奪っていないかどうかと、一度考えてみるべきである。

子どもをゆっくり育てることは選択ではなく必須である

おとなしい子がいきなり下の子をひどく叩く。夜、眠れずむずかり、日々程度がひどくなる。理由もなく持って遊んでいたおもちゃをかみちぎる。こうなると、あなたはこの子のことをどう思うだろうか。この子の母親であれば、10 名のうち９名は「もしかしたら私の子どもに問題があるのではないか」と心配するはずである。子どもの異常行動に敏感でない親がどこにいるだろうか。

私は子どもを心配する母親に、常に最初に強調しながら言っておくことがある。

「子どもはそれぞれ発達の程度が違う。したがって、すべての子どもに通用する画一的な年齢別指針というのはあり得ない。それ故、杓子定規に正常か問題があるかという尺度で考えてはならない。」

もちろん一般の子どもより育てにくい子どもたちがいる。本当に精神的な問題をもつ子どももいる。しかし、私は確信する。先天的に少し難しい子どもであっても母親や父親の性格、家の雰囲気、経済的な条件など成長環境がよければ、それが病気にまで至らないという事実を。言い換えるなら、先天的によい素質を持って生まれた子どもであっても環境が悪ければ、問題行動を起こすことがあるということである。これは、子どもの行動や発達を理解する時、とても重要な問題である。

私の患者の中に「注意欠陥/多動性障害（ADHD)」といい、集中力に障害を見せる子どもたちがいる。しかし、この子どもたちのうちで、非常に大らかで子どもに上手に接する母親の家の子どもは学校に入るまで異常なしで育つ。異常を現してもよく育てたために、かえって学校で先生が驚く場合が多い。しかし、神経質で焦りがちでよく怒る母親だと、その子どもの病は小さい時から深刻になる。

一つの例で、言葉が少し遅れている子がいたとしよう。以前であれば、それが病気にまで発展はしなかった。しかし、最近は幼稚園に早く行かせるため、子どもがよく話すことができないと、友達にいじめられ、それが深刻な病気にまで発展する事例がかなり増えている。

私は家庭の雰囲気がおだやかで、母親が子どもの教育をきちんとしている場合には、急いで専門的治療を受けさせることはしない。これに比べ、子どもの言葉が少し遅れていて、親も口数が少なく、刺激も与えず、言葉を言えないと怒る雰囲気であれば、積極的に治療を勧める。

このように我が子がきちんと育っているのか、問題があるのかを判断する時には、子ども自体だけで判断せず、子どもを囲んださまざまな条件をともに考慮しなければならない。そしてもう一つ、子どもごとに発達の速度が違うという事実を認識する必要がある。いつも「隣の子は言葉を話しているのに、この子は何で言葉が遅いのだろう」と心配し、「隣の子はハングルもできるのに、何でこの子はハングルには関心もなくおもちゃばかり触っているのかしら」と悩むことはないということである。

それならば、我が子に問題があるかないかを母親は実際にどのように知ることができるのだろうか。私は母親たちに“Smiling on happy face”という表現をよく使ったりする。その子どもが幸せそうな表情、笑う顔を全般的に維持していれば、問題がないという意味

である。

したがって、子どもをみて発達のある部分にあまり執着しないでほしい。度の過ぎた心配が正常な子どもをかえって悪化させる事実を知っておくべきである。

しかし、自分の子どもが他の子より遅れていたり、時期を逃していたらどうすればいいのかと問い返す母親たちもいる。結論から言えば、それは子どもの成長の秘密を知らないためである。

大体の母親たちは、子どもの成長が努力しただけ継続して発展する右上がりの斜線の形であると考える。しかし、実際にはそうではない。子どもは継続的な待ちと刺激の中で、ある瞬間に急に変わる「階段状の発達」を見せる。いくら努力しても一定の期間は同じに見えて、ある瞬間に発展するのである。

もう一つ付け加えると、母親たちが一般的に知っていることとは異なり、人間の脳は思春期まで絶えず変化し発達する。脳の発達が極大化されるまでその過程で無数の変数が作用する。親が焦って学校の勉強についていくことをせかすと、ある瞬間、階段式の発達を見せる子どもの本質を見逃してしまう恐れもある。

したがって、私が常に強調するのは、「子育ての結果は最後の最後になるまでわからない」ということである。種の状態ではその花がどういう形をしているか誰もわからない。根をおろし、茎と葉が大きくなり、つぼみができた後、花が咲いてからそれがどういう名と香りと形をしているかを知ることになる。

このような理由で私が潜在能力と関連して、よくいう言葉が「タイムテーブル（Time Table)」である。「小さい時には賢かったのに大きくなったらそうでなかった」、または「小さい時には言葉もきちんと言えなかったのに今は何でもほかの人達より早い」という話をよく聞く。このように子どもが親の期待や予想通りになる例はほとんどない。脳の成長や子どもを囲む条件、もって生まれた子どもの気質によって、その潜在能力は誰も予測できない間にいつかは発現されるということである。

したがって、親ができることは我が子の“Time Table”を信じて、ただ妨害要素を除去してやることである。すなわち子どもの肯定的な自我が侵害されないよう、自信感がなくならないよう、世界に対する信頼感を失わないように見守るだけである。

長男が幼稚園に通っていた時のことである。当時、長男は冬に着ていた下着を夏になるまで着ていたくらい極端に変化を嫌った。ほかの子どもたちは半ズボンでいたので、これ以上は長ズボンをはかせられないと脱がせようとしたものの、長男は泣き叫んで抵抗した。結局、半ズボンの中に下着をはくことで妥協した長男は一日をその格好で過ごしたところ、友達にからかわれてやっと下着を脱いだのである。

今も長男を見つめていると、変化に対する抵抗が非常に激しい方である。しかし、私は心配していない。子どもが肯定的な自己像をもってこれに基づいて自分の潜在能力を見つけるまで待ち続けるつもりである。もちろん、それは子どもに問題があることを否定するのでもなく、単純な傍観でもない。絶えず見守りながら、その都度その都度刺激を与え、それがうまくいかなければ、子どもと通じることができる他のコードを探すけれども、焦って急がないという意味である。

私が長男を私立学校へ行かせようとして止めたのも、そうした理由のためである。いわゆる優秀な子たちの中で、勉強ばかりさせられて育つとすれば、環境に素早く適応できな

い子どもがどれほど傷つけられるだろう。

もちろん次男は違う。次男は兄と違って主体性が強く、他人の考えを受容し自分のものに消化する能力にも優れている。それに何でも好奇心をもって学ぼうとする気質が卓越している。ある日、小学生の兄に英語の本を読んであげる私をみて、次男は自分にも読んでほしいとせがみ、その英語の文章をそのまま覚えてしまった。このような積極的な気質はもって生まれたものである。この場合は、それに合わせて子どもの知的好奇心と達成欲が満たされるように絶えず励ます作業が必要である。重要なのは、子どもに無理のないよう水位を調節することである。

ふとみると、二人の子どもの育て方が相反するように見えるが、子どもに合わせて水が流れる通りに行くという点では通じている。子どもの成長の流れに逆らわないことである。今は次男が長男より優れているが、将来、どちらが優れるかは誰にもわからない。彼らの成長の流れが違うためである。長男の潜在能力が近いうちにその姿を現し、次男を追い越すかどうかなんて誰がわかるだろう。

したがって子どもをきちんと育てたい親たちが備えるべき徳目は、「急がず待つ知恵」である。

日本の徳川家康は言った。

「人間の人生は重い荷物を背負って遠い道を歩んで行くことと同じなので、絶対急いではならない」と。

「ラダク」の育児法から学ぶこと

アメリカの幼稚園の先生はほとんどがおばあさん先生である。韓国の幼稚園のように生気あふれる若い先生は見つけ難いほどである。アメリカでは幼稚園の先生を採用する時、子どもを育てたことのある先生を優先的に採用する。子どもを育てた経験のある先生が、子どもについてよくわかり、またどう子どもを取り扱うかがよくわかるためである。自分の子どもはもちろん、孫まで育てた経験のあるおばあさんたちは子どもと接する時、孫に対するような愛で接するが、子どもたちもこのような先生によくなつく。

正規の学校教育の初めての関門である幼稚園生活が、おもしろくて成功するためには、誰よりも子どもをよくわかる母親のような先生、おばあさんのような先生が必要である。すべてが合理的な国、アメリカならではの思考と言える。

しかし、我が国はどうだろう？　どの家庭でもよく見られるおばあちゃんと母親の会話はこうである。「子どもをせかさずにちょっと放っておきなさい」。「お義母さん、皆このくらいできますよ。うちの子だけ遅れたらどうするんですか」。

我々は昔のものを、捨てなければならないものと大事に継承していくべきものを区分できなかったりする。すなわち、昔のものは無条件に捨てるべきもの、古くて使いようのない非科学的なものとして取り扱うのである。そして新しいものを一日でも早く吸収せねばならないような強迫感に包まれている。速度至上主義から自由である現代人はほとんどない。このような現代人にとって「怠惰」はまさに致命傷である。「私は忙しい。だから存在する」というのが現代人の命題だからである。

無論、技術はある日いきなり登場し、人々に使用を強要し、使用していない人達を困惑させる。誰もが携帯電話を使わない権利、車に乗らない権利、インターネットをしない権利を持っている。しかし、その場合、彼は社会の中で孤立してもよいという「勇気」をもっていなければならない。結局良くも悪くも反社会的な人間にならないためには、新しく出てくる技術を習得しなければならない。それに韓国人の「早く早く」という早急症は、「それが本当に必要であるか」という質問を投げる前に無条件に新しいものを受け入れることを強要する。

育児も同じである。最近、病院を訪ねてくる子どもと母親たちに会うと、子どもに早く一人立ちすることを無理強いする場合が増えている。ひいては何でも「早く」を強要する。しかし、私はその中で、本当に子どもに必要なものを見つけてあげたいという心より、ただ皆ができるのに遅れてはならないという強迫観念がもっと大きいのではないかと気になる。

我々が悩むべきほんとうの問題は、「子どもたちに必要なのは果たして何か」ということである。このような意味で私はむしろ、いまの母親たちが古臭いと思っている伝統的な育児法のなかで子どもたちに必要なものを発見したりする。

幼い時期に何よりも優先すべきことは情緒的な安定である。とくに、３～４歳以下の幼児たちにとっては親との情緒的接触が人格形成に絶対的な影響を及ぼす。あまりに早く親から離れた時、子どもが感じる喪失感と不満は何があって充足されない。アメリカのカリフォルニア大学の教育学の教授であるレオ・ブスカクリアも、成長期の子どもたちに必要なのは知的教育ではなく感性的教育であると強調しながら、「家族と友達と仲間たちと毎日抱擁しあうのがよい」と言った。

昔、私たちのおばあさんが子どもを育てた頃のことを思い浮かべてみよう。おばあさんたちの口からよく出た言葉は、「金塊（宝物）のように大切な我が子」であった。子どもが自分で食べられるほど大きくなっても、おばあさん達は歯でよく噛んでそれを子どもに食べさせた。

それだけではない。大小便の調節ができないからといって叱ることもなかった。子どもが遊んでいる最中に、そのまま大小便を漏らしてしまっても庭にある井戸へ連れて行って洗ってやってから、お尻をトントンと叩いてやるだけであった。

夜、寝る時もそうである。布団の中で腕枕をしてやりながら一緒に横になっていて、子どもが寝るまで静かな声で子守歌を聞かせてやる。大きな子が恐いからと言って、お婆さんの部屋に来るようなことがあっても絶対追い出すことなく抱いてやる。

そして何よりも強調したいのは、子どもがほかの子どもたちより少し遅れているとか、よくない癖があっても絶対あわてることがなかったということである。もし、こうした子どもを誰かがせかして子どもの気がくじけると、おばあさんは盾になってあげた。すべてを子どもに合わせながら、ただゆったりした心であふれる愛を伝えたのである。

伝統的な生活様式をそのまま固守してきた「ラダク」（原著編集者注：「小さなチベット」と呼ばれる西部ヒマラヤ高原に位置した美しいところ）では誰も子どもを怒らない。ヘレナ・ノルベリーホジは『古い未来―ラダクから学ぶ』で、子どもが本を破ったり、絶えず「これなあに？」としつこく質問したりしても怒らないのがラダクの人だと言った。それほどラダクの子どもたちは周囲の人達から無制限の条件なしの愛を受けている。それを見て、子どもをだめ

にすると言う人もいるが、実際にはとても早く、すなわち、5歳くらいになると、子どもたちは他人に責任をもつようになる。子どもたちは丈夫に育つと、背中にもっと小さな赤ちゃんを背負っている。これは十分な愛を受けた子どもたちが、より早く自由で独立的に成長することを示している。

ヘレナ・ノルベリーホジは言う。

「私は大家族と親密な小さな共同体こそ、成熟してバランスの取れた個人を形成するよりよい基礎になると信じる。健康な社会とは、各個人に無条件の情緒的支持の網を提供しながら、緊密な社会的絆と相互依存を勧める社会である。このような枠の中で個人はとても自由で、独立できる十分な安定感をもつことができる。」

過去の私たちの先祖とラダクの例から見える共通の育児の原則は、子どもに何かを強要して教えるより、思う存分自分の欲求を広げられるように放っておいてあげることである。その中に早急性は一つも見られない。ただ子どもへの絶対的愛と信頼があるだけである。

私は伝統というのは長い歳月の間、検証されてきたものであると考える。それは、今さっき新しく証明されて現れた科学的学説よりも信じられるものであることを意味する。このように考えた時、すでに述べたように親に必要なのは「待つことの知恵」であるが、それは子どもへの絶対的愛と信頼を必要としていることであることがわかる。

今、あなたがもし子どもに何かを教えようとするなら、しばらく止まって考えてほしい。もしかしたら私は子どもへの愛と信頼が不足しているのではないだろうか。それで待てずに急いでいるのではないだろうか。そして子どもを健全な成長から外れさせているのではないだろうかと。

「ゆっくり育てる」ことに対する誤解

一人っ子を育てているある若い母親が、子どもが急におかしくなったと私を訪ねて来た。

「先生、子どもが突然バカになることがありますか。」

あまりにも唐突な質問に私は笑ってしまった。しかし母親の表情を見ると、本当に深刻のようであった。

話を聞いてみると、ふだんはどうもなかった子がいきなりウンチをもらし、オシッコもちびるということであった。初めの1回2回は失敗だと思っていたが、その程度が日々ひどくなったという。

他の子よりいつも一歩早い発達を見せてきたその子は、外から見たところ大きな異常はなかった。よく遊び、聞かれることによく答えた。

理由は何だろう。母親の話を聞いてみると、アメリカに住んでいる義理の姉が 1 週間ほど家に来た後から、子どもの様子がおかしくなったとのことだった。

「もしかしたら、お義姉さんは子どもを連れて来ていたのでは？」

予想通り、義姉には同じ年頃の子どもがいた。

私はその母親に1週間ほど子どもと思う存分遊んで来るように言った。ふだんのように遊んでやるだけでなく、遊園地へ連れて行ったり、子どもが好きなおもちゃを買ってやっ

たりなどして、子どもにふだんとは違う愛情を見せてあげるようにする、というのが私の処方であった。そして子どもが退行現象を起こしても無条件に受け入れるようにと言った。

それから１週間も経たないうちに、母親から電話が来た。

「先生の言う通りにしたら、子どもがとてもよくなりました。それだけでなく以前持っていた悪い癖もなくなってしまいました。」

成長期の子どもは、親も知らないうちに一時的にストレスを受けることがある。母親が病気で、または家に何かがあって母親が一時的に子どもの世話ができない時そうなることがある。

この子の場合もそうであった。久しぶりに会った甥に気を遣う母親を見て、子どもは母親の愛情をほかの人に奪われたと感じた。それが結局、大小便をもらす退行現象として現れたのである。

すなわち、子どもの立場から愛をほしがる表現の唯一の方法は、退行現象を示すか、または癇癪を起こすか、時には散漫になり乱暴になるなどふだんとは違う異常行動を見せることである。したがって、子どもが異常だと感じた時には、自分は最近子どもをなおざりにしてはいなかったか、もしかしたら子どもがストレスを受けるほど環境が変わってはいないだろうかなど、家庭の中から一つ一つ原因を考えてみる必要がある。

また、子どもの問題行動があまり長くなる場合には、もう一度考えなければならない。少し攻撃的であるとか少し散漫である場合は大きな問題にならないが、それが２～３ヶ月ほど続くなら母親の努力だけでは解決できない状態である。この場合、大部分の母親は自分の子どものおかしさに気づく。「以前と何かが違うのだが、異常に長い」というのを母親が先ず気づくということである。

しかしこの場合、多くは専門家を訪ねることは考えない。「まさか私の子どもが…」という安易な考えもあるし、精神科を精神的に深刻な問題をもつ人達だけが行くところと考えているためである。このような母親たちを理解できないことはない。母親が無知であるより精神科に偏見をもたせた社会的雰囲気が問題である。しかし、小児精神科に来る子どもたちをみると、勉強ができなくて言葉が遅い、散漫に行動するなど、普通の母親たちも１回、２回位は悩む範疇の子どもたちが大部分である。

しかし、これをきちんと知らない母親たちは、専門家を訪ねるのは面倒だし、じっとしているのも不安で、周囲の人達に聞いてみる。でも明快な答えを聞くこともない。大体の話が「放っておけばそのうちよくなるよ」、の程度である。

個人的に私が一番嫌いなのは、「子どもたちはそういうものなのよ。もともと遅い子だっているんだから」という言葉である。

初めは、その言葉が当てはまるかもしれない。しかし、それが１～２ヶ月続くと子ども自身の傷が大きくなってしまう。その時期にあるべき発達が正常に遂げられず、停滞してしまう新たな問題が起きるためである。

代表的な場合が言語の発達である。言語の発達は、子どもの成長過程において満３歳前後が非常に大事である。この時期にきちんと発達できないと、言葉を言えない程度に止まるのではなく、社会性、対人関係などあらゆる問題がドミノのように連続的に起きる。

すでに述べたように「発達には時期（臨界期）がある」。その時期よりあまり先走って子どもを教えようとしてもだめだが、その時期を逃して後から慌てて刺激を降り注いでもだ

めである。時期を逃せば、永遠にできないこともあるのだ。

いつだったか、言葉が遅いと言って６歳の子どもを連れてきた母親があった。幼稚園へ行かせようとしたが、言葉を話せないので止めたという。

このような母親に会うと正直なところ、「いったい私にどうしてほしいの？」という思いが込み上げてくる。言葉が遅れた子どもを連れて来る場合、十中八九はこのように学齢期に近い時に来る。学校へ行く時になったのに子どもが話せないので直してほしいとのことである。

もうちょっと早く問題が見えた初期に手助けしてあげたとしたら、その年齢になるまで一言も発せないことはなかっただろう。こうした時には、仕方なく入学を１年２年遅らせるしかない。そのまま学校へ行かせた場合、言葉が言えないだけでなく、友達や先生との関係がうまくいかないので情緒的な障害まで起こす可能性が高いためである。

もっとも気がかりなのは、これらの子どものIQを検査してみると、言語発達を除いてほかは大体正常であるという点である。社会性発達のように言語力と関連した部分を除外すれば少なくとも平均値の程度にはなる。数値的にみると、全体的に 110 程度の知能を見せるが、言語理解程度や語彙力だけは80にもならない。

私は発達面において「バスは行ってしまえば終わり」、という冗談をよく言う。どんな発達であっても時期がある。その時期に合わせて適切な刺激を与えた時、120パーセントの適応力を見せながら発達が行われる。一回時期を逃すと、脳がすでに成熟してしまうため、同じ刺激をいくら与えても適切な時期に合わせた時のような発達は期待できない。

私が本当に言いたいのは、子どもの発達過程より先走って、認知的側面だけを強調する今の早期教育にも問題はあるが、それでも怠けて安易に子どもを放っておいてしまってはならないということである。したがって、ゆっくり育てることは、決して思いやりのない親たちがする育児法ではない。むしろ子どもをよく理解している賢い親たちができる大変難しい育児法である。

ゆっくり育てることの真の意味 — One step behind, One step ahead.

私は個人的に早期教育を無条件に悪いと主張したくはない。子どもは小さければ小さいほど、大人に比べさまざまな学習経験を受け入れることがたやすく、それが時期に合わせ適切に行われる時、大きな効果があることを否定したくはない。

問題は早期教育自体ではなく、早期に教育するが「どのように」すべきかに関する方法論である。

よく耳にする早期教育とは、乳幼児用教材や学習紙、ないしは英才教育機関が思い浮かぶ。小学校や幼稚園で始めるべき学習を幼い年齢から早く始め、他人より早い発達を遂げることばかり考えるのである。私が出会った大体の母親たちは早期教育に対してこのような考えをもっており、実際に子どもがとても小さい時から英語やハングルを教えようとする。

しかし、無条件に早くさせてもできるものではない。何かを学習する際に乳幼児にはほかの年齢と判然と区別される、彼らだけの特徴があるため、これをうまく活用しなければ

ならない。

乳幼児期のもっとも目立つ特徴は、本能的に何かを探索しようとする点である。すなわち、子どもたちには好奇心自体が本能であり、そうであるため何か新しくて面白いものを見るととても喜ぶ。そして探索することそれだけでも彼らには大変な学習になる。周囲の新しいものを見て触る、それが学習なのである。

たとえば、子どもの目の前に鍋のふたが一つあるとしよう。それを見て子どもは「まんまるの不思議な形をしている。お母さんがそれで何かをかぶせてる。なぜかぶせるのかな。」という好奇心を基盤にして大人には想像もできない情報と知識を獲得していく。

このような乳幼児期の特徴に基づいて提示された早期教育理論をみると、大きく二つに分けられる。“One step behind”（一歩あとから）と“One step ahead”（一歩先に）、がそれである。

“One step behind”理論は言葉通り、一拍子遅く対応することをいう。すなわち、子どものなすがまま見守り、何か好奇心を示したらそこで時母親がそっと後押してあげるだけでよいということである。相づちを打つ程度と理解すればよい。

これに反して“One step ahead”理論は、子どもより一拍子先回りすることをいう。易しい例で言えば、子どもがごはんを前にしてはっきり発音できない時、母親が「ごはん」と確実に言ってあげることである。私はこの二つの方法が適切に並行される時、最高の早期教育が行われると考える。

ただ、ある瞬間に One step behind にするか、 One step ahead にするか、きちんと判断することが問題である。子どもが最適の学習状態におかれた瞬間を見逃す母親がいる反面、子どもは全然関心を見せないのに急いで先回りする母親もいる。

この問題の解答は、子どもに対する母親の関心度がどの程度かによる。ふだん子どもに対して真心を込めて世話した母親であれば、その「瞬間」を見逃すとか、先走ってしまう愚をおかすことはないだろう。

それではこのような事実を基本にして、母親たちが最も関心をもつ、「ハングル、英語などの学習はいつ、どういう方法でやらせるべきか」について考えてみよう。

もちろん、子どもによって差はあるが、思考力を要する学習は、４～５歳になってから効果がある。少なくともその年齢になってこそ、そのような学習を消化できる脳の大脳皮質部分が発達するためである。

１歳になったら子どもに文字を教えようとする母親たちがいるが、子どもには文字がだた単純な丸や棒の程度で認識されるだけである。もちろん母親の強要によって、文字を覚え読むことはできる。でもそれは、オウムが人間の言葉の真似をするのとさほど変わらない。

しかし、たまに認知的側面に早い発達を見せる子もいる。そしてとくに新たなものに好奇心が強く、探究欲が高い子どもの場合、押しつけなくても文字の読みなどの学習に関心を見せたりする。もし子どもが関心と興味を見せれば、あえて止めさせる必要はない。子どもの学習に対する関心とその可能性がよくわからないなら子どもの反応をみればよい。子どもが嫌がったらすぐ中断すればよいのである。

ある日、妹が興奮した声で「娘が文字を読める！」と私に電話をかけてきた。子どもがよく行く地下鉄の駅名表示を見て読めたとのことである。初めは偶然と思ったが、ほかの

ところへ行ってもその文字があれば、正確に読めるとのことであった。一体どうして 2 歳になったばかりの子どもが文字を読めたのだろうか。

子どもが表示を読んだ地下鉄の駅は、祖母の家があるところだった。子どもは祖母のところへ行くことがとても好きで、何回か行くうちに、その地下鉄の駅の名前を聞いて記憶するようになり、結局表示された文字をその名前と連関させて覚えたのである。すなわち、子どもが文字を読んだのは純粋な関心からであった。

しかし、興奮して騒いだ妹は、「これから本格的にハングルを教える」と宣言した。子どもが文字を読んだ過程について詳細に説明した後、押しつけてやらせる教育は全然効果がないだろうと告げたが、妹は母親の欲で、結局言葉もきちんとできない娘にハングルを教えはじめた。

しかし、しばらくしないうちに妹からまた連絡が来た。文字カードを手に持たせると子どもが投げ飛ばすので文字の勉強をやめたという。

私の考えの通りであったが、もしその過程で子どもが文字の学習に関心があったならば、一度やらせてみるように言ったかも知れない。子どもが興味をもって楽しめば、それは一般の遊びと変わらないためである。

友達の子どもの中でバスキン・ロビンス（Baskin-Robbins　編者注：サーティーワン・アイスクリームのこと）のアイスクリームがとても好きな子がいた。子どもといっしょにそのアイスクリーム屋へ行った母親は無心にバスキン・ロビンスの最初の文字を指しながら「これはＢよ」と言ってあげたという。子どもは母親からそのことを聞くとＢを覚え、どこでもＢをみると、大きな声で読んだりした。

好きなものとつながった学習はこのように確実な意欲を提供するようになり、このように学んだのは結局子どもの脳に確実に刻印される。

しかし強要された早期教育は、学習効果を落とすだけでなく失うものも多い。自信感を落とすのは言うまでもなく、学習態度においても常に理解を通して思考するのでなく、無条件に覚えようとする習慣をもたせる。結局、押しつけてやらせる早期教育とは思考のない子どもに育てる近道である。

経済的に裕福な環境で育った子があった。両親はいわゆる一流大出身で、とくに子どもへの教育熱が高かった。母親の強要によって４歳になった年から英語の幼稚園に通い始めた子。

母親のために通い始めた子はあまり経たないうちに、いっしょに勉強する子どもを叩きはじめ、あげくには幼稚園の門の前で大暴れするなどの異常な行動まで見せ始めた。

気になった母親は児童相談所で子どもの知能を検査した。結果は IQ が 80、驚いて私を訪ねてきた時には、同年の子どもに比べ、言葉も遅れていたが、母親はその事実さえ気づいていなかった。私が測定した検査結果もそんなに変わらなかった。しかし、その子を注意深く観察した結果、実際の知能と測定された結果が違っていることがわかった。子どもは知らなくて間違ったのではなく、テストに対する負担感で拒否反応を起こし、知能指数が過少評価されたのである。

何がそのような検査結果をもたらしたのだろうか。子どもは英語の幼稚園に通う時からとてもその勉強が嫌だった。母親や先生がさせるまま英語を覚えたが、嫌いな勉強に努力したからといって瞬時によくなることはなかった。子どもは結局、英語の勉強のため生活

全般に対する自信を失い、その気持を、友達を激しく叩いたり、幼稚園へ行くことを拒否したりする行為として表出した。また自信をなくしてIQ検査のような異例のテストに対してさえも無意識に拒否反応を起こすようになったのである。

親たちはよく文字を覚え書く暗記力自体をIQのように考えるが、決してそうではない。むしろ文字一つわからなくても、その年齢段階では世界に対して思考できる能力を育てるのがよい。新しい問題にぶつかった時、自分なりに思考し方法を模索するとか、よくわからないことに関しては、自ら「なぜ」という質問を発する能力が重要である。このような基本もなしに、文字ばかり覚えさせ、１・２・３・４を教えると、子どもはただの「暗記の名人」に育つ。思考力のない、「暗記バカ」になっていくのである。

私の長男のキョンモがハングルを教わったのは、学校に入学する２ヶ月前であった。最近の風潮だと子どもが７歳になるまで文字も書けないのは、とんでもないことかも知れない。しかし、ちょうど２ヶ月でキョンモはハングルをマスターした。

「すごく簡単。これを何で教えるの、アルファベットよりやさしいじゃない！」

キョンモがこのように文字を学べたのは天才だからではない。ただ発達の法則に従っただけである。もし、我が強い我が子にハングルを小さい時から教えようとしたならば、逆に情緒的な問題だけを起こしたかもしれない。

早期教育の本家本元のアメリカである幼稚園を訪問した時のことである。

アメリカのデンバー（Denver）で最良とされるある幼稚園では、幼児用教材や教具などは探しても全然見つからなかった。ありふれたおもちゃの汽車さえも目につかなかった。ただあるのは広い芝生と泥、綱、タイヤなどであった。先生の言葉によると、子どもたちはほしいものがあれば、自ら研究して作る。すでに作られたおもちゃは子どもの創造性を伸ばさないので絶対使用しないとのことであった。

今この瞬間にも、何を教えようかと悩んでいる母親たちに、その幼稚園を一度見せてあげたい。そこに行くと母親たちが子どもをなぜゆっくり育てなければならないのか、あえて説明しなくてもわかるからである。

子どもをゆっくり育てること、それは真に子どもの立場に立って、子どもに今一番必要なのは何かをきちんと知っているからこそ実践できることである。もちろんそうなるまでには無数の試行錯誤をくり返すしかない。しかし、試行錯誤を恐れたり、面倒がってはならない。なぜならば、その心が子どもをゆっくり育てようとする親たちの基本姿勢であるからである。

賢い親たちに「育児」はない

アメリカで勉強していた時のことである。二人の子どもを育てながら、初めての土地で勉強をすることは、たやすいことではなかった。しかし、実は私を最も苦しませたのは、勉学よりも長男のキョンモを育てることであった。もともと消極的で、自己の世界にはまって生きることを楽しむ子どもが、果たして環境の180度変わったアメリカでの生活にどう適応していくかは母親としては少なからぬ悩みであった。

考えた末私は、アメリカに渡った翌年にキョンモをアメリカの小学校１年生課程に入学

させた。予想通り、キョンモの学校生活は平坦でなかった。入学後、何日も経たないうち、キョンモの担任の先生から電話がかかってきた。キョンモが授業に集中せず、教室の中をあちこち歩き回っているとのことであった。一度はキョンモがいなくなり、探しに行ったら、運動場で愛国歌を歌っていたという。

しかし、先生が何よりも問題にしたのは、キョンモが自分と目も合わせようとしないということであった。“Look at me,”、“Look at my eyes,” といくら話しかけても、キョンモは答えるどころか、顔もあげないという。先生は子どもの耳に異常があるのかと思い、耳の検査までしたほどであった。

当時キョンモは、同年の子どもたちのように上手に英語で対話はできなかったが、先生の言葉がわからない程度ではなかった。それにもかかわらず、キョンモは誰かの言葉に反応を見せることも、そして話しかけることもなかった。学校へ行くと口のきけない人になった。何が問題なのか我が胸も焦燥にかられた。そしてそれが６ヶ月も続いたのである。しかしある日、ついにキョンモは学校で初めて話した。

“I hate blue eyes.　I like brown eyes.”

担任の先生の目をまっすぐ見つめながら発した、キョンモの初めての言葉であった。その言葉にはこれまでの 200 日あまりの彼の心がすべて入っていた。私はその時、キョンモがこれまでなぜ先生を避けようとしたのか理解できた。キョンモにはすべてのものが恐かった。その中でもキョンモを一番怖がらせたのは、貫くように凝視する担任の先生の青い目であったのである。それは、親の私も予想できなかったことであった。新しい環境に適応するのに苦労はあると思ったが、これほど子どもにとって大変なことだとは思わなかった。過去６ヶ月の間、そのストレスをどう忍んだのか。心が痛み、私はその日の夜、子どもと抱き合って泣いた。

近頃、人々は「ストレスを受ける」という言葉を口癖のように繰り返す。しかし、ストレスは大人だけのものではない。最近は子どもたちもストレスを受ける。常に快活で楽しそうに見える子どもに何のストレスがあるかと思うが、子どもたちも確実にストレスを受けている。問題は、子どもたちは自分の苦痛を正確な言語でほかの人に伝達できないことである。

だから何の問題もなかった子どもが学校へ行かないと言い張り、勉強に集中できず、物を盗むなどの異常行動を見せても、それがストレスのためとあらかじめ把握できないことが多い。さらに、親は、それが自分がこだわりすぎる育児スタイルのためだということに気づかず、常にどうしたら直せるか、それだけに悩む。結局、育児自体が子どもを壊している状況といえようか。

それでは、果たして私の子どもはどこでどれくらいのストレスを受けていて、その理由と対処方法は何であろうというところまできたので、これから子どもたちによくあるストレスと対処法を就学前の「学齢前」と就学後の「学齢期」に分けて探ってみよう。

＜学齢前の子どものストレス＞

まず、学齢前のストレスの中で一番ひどいものは、母親との関係がよくない時に現れる。母親が赤ちゃんを産んだ後、憂鬱症（マタニティ・ブルー）にかかったとか、体の調子が非常に悪いと考えてみよう。この時、母親は赤ちゃんのすべてのサインにきちんと反応で

きなくなる。果たして子どもはどうなるだろう。

睡眠中に何度も眼を醒したり、しっかり食べられないのは、小さなストレスにすぎない。しかし、これが続くと、生理調節能力が落ちるのは言うまでもなく、目を合わせるのを避けるとか、よく驚くなどの感情調節と社会性の発達まで問題が起きる。したがって、幼児にこうしたストレスを与えないためには母親が赤ちゃんの世話をきちんとできるように周囲の積極的な手助けが必要である。

赤ちゃんは1年過ぎると、ことばが急速に発達すると同時に、社会的判断力が生まれる。これは、すぐ自我概念とつながり、自己の主張が強くなる。以前までは母親に一方的に依存する受動的存在であったが、この時期からはいきなり何でも自分が直接しようとする意地っ張りに変わって行く。

しかし、この時期の子どもは、まだ自らの判断では世の中を生きていく能力がないため、一人で勝手にしながらもそれが思うようにできないと母親に依存して解決するしかない。しかし、子どもが母親の助けを必要とする時、手助けを得られない状況がしばしば発生すると子どもは大変不安を感じ、自分一人の力で世の中を生きて行こうとする最初の試みを放棄することになる。

この時期の子どもにもう一つ、看過できないストレスは兄弟間の葛藤である。よく兄弟や姉妹は自然と互いを好きになると思われているが、親の愛のために戦う関係という点では、必然的に競争相手になるしかない。とくに、兄弟の年齢差があまりないとか、一人の子どもが病気になってほかの子どもの面倒をみてあげられない場合には問題が深刻になる。

私の外来部屋には小さな赤ちゃんの人形がたくさん置いてある。ある日、一つ年下の幼い弟がよく病気をして相対的に関心を向けられなかった兄が診察を受けに来た。その子は私の前で人形を投げ出し、髪の毛を噛むなどの神経質な反応を見せた。私がこの理由を説明すると、母親は目に涙を浮かべて、「そんなに心に傷があることも知らずよく叱った」と心を痛めた。

このように、子どもたちは自分の不満を言葉で表現できず、異なる行為で表出する。そのため、親のこまやかな関心と知恵のある判断だけがこうした問題を防ぐことができる。したがって、できるだけ兄弟の年の差を2～3年以上おくことと、二番目の子を産んでから約6ヶ月までは赤ちゃんより上の子を中心に育てることが、上の子が下の子によく適応できる秘訣であることを知っておくとよい。

＜学齢期の子どものストレス＞

子どもが学校に入学すると、以前とは違う多くの責任が生じ、周囲からの期待を集めるようになる。しかし、朝早く起きて登校時間を守り、少なくとも40分以上坐って授業に集中せねばならず、友達とも譲り合いながら仲良く過ごし、準備物も用意しなければならないなどのことは、大人が思うほど容易なことではない。

とくに、学習能力は親たちに一番大きい関心事なのだが、子どもたちは自分が学習から遅れると、自信がなくなり、「私はできない子なんだ」といった否定的自己像をもつようになる。

したがって、子どもが学習能力をしっかり発揮するためには、まずよい学習習慣をつける必要がある。1年生の時には母親が手助けして、徐々に自分でできるように励ましてあ

げよう。最初から一人でできる子は少ない。とくに、注意散漫な男の子たちにはさらに多くの努力と時間をかけてあげないと自立的な学習習慣はなかなか育たない。

学習能力以外にも性格や親との関係に問題がある子どもは、社会性発達にも問題をみせることがある。このような子どもは結局友達と付き合うことができなくて憂鬱になったり、すっかりコンピューターゲームのとりこになって一日中、一人でゲームばかりしたりする。このような子どもは、いくら頭がよくても、周りの小さな葛藤も解決できないことは言うまでもなく、自己の有能性をしっかり発揮できないこともある。

どうであれ、子どもは幼児期から結ばれた親との関係を基本にして他人や同年の友達と付き合う。したがって、子どもたちが親と肯定的な関係をもつことが、何よりも大事である。子どもたちの社会性を発達させるためには、家族の行事にも連れて行き、親戚とよく接するようにし、皆と付き合える機会を作ってやらなければならない。そして友達関係に問題がある時には、事細かに聞いてやり、必要であればその友達を招待したり、友達の親に話して誤解のないようにした方がよい。

このためには、母親も開放的な姿勢で周囲の人達とよく付き合う必要がある。私は、私を訪ねてくる母親たちに、学校へ行ってクラスの他の母親たちともよく付き合うようにすすめている。

子どもが幸せになることは、すべての母親たちの願いである。しかし、その度が過ぎると「育児」という固定観念、すなわち、「子どもはこう育てるべし」という原則を作ってその枠に子どもをはめ込もうとする。そして、大人の尺度によってあれこれ振り回される子どもは、段々自信を失うようになる。ただ親の言う通りに動くロボットになるだけだ。

これから私たちがすることは、子どもにストレスを与える母親から抜け出ることはもちろん、母親自身も拘束してしまう「育児」からも抜け出すことである。「賢い親に“育児”なんていらない」という逆説的な事実を常に覚えておこう。

2．私が二人の子どもを育てながら学んだこと

決して不可能な夢はない

ジョン F. ケネディ大統領は子どもたちをとても愛した。閣僚室には一時期、揺り木馬が置かれていることさえあった。彼は閣僚たちにこのように言った。

「あの揺り木馬をここに置いているのは、常に小さな世代を考え、彼らに責任を持たねばならないことを思い出すためなのだ。」

ケネディの言葉が私の胸を打った理由は、私が小児精神科医であるためでもあるが、私が二人の子どもを育てている母親だからである。より正確に言えば、愛する子どもたちが幸せに生きることを願い、そのような環境を作ってやりたい気持ちが切実だからである。どの親が我が子の不幸を願うだろう。

1994年、アメリカのサンフランシスコで開かれた世界小児精神科学会に参加した時のことである。その学会での大きな議題は女性のマタニティ・ブルーに関してであった。このときの研究成果によれば、アメリカでは産婦の10%以上がマタニティ・ブルーに苦しめられていた。しかし、アフリカのある部族の女性たちにはそのような症状はまったくみられなかった。福祉水準でも進んでいるアメリカなのになぜこのような結果が出たのか、私はにわかに知りたくなった。

事情はこうであった。そのアフリカの部族が住んでいるところは土地が荒れているため、女性も男性も過酷な労働を強いられている。しかし、女性が妊娠すると、状況は180度変わる。女性たちは妊娠から出産後1年まで、労働から解放されることはもちろん、家でよく食べて、よく遊んで、よく寝ながら、ただ村のお婆さんたちとともに幼い子どもの世話をするだけで良い。育児経験が豊富なお婆さんたちから子育ての方法を伝授してもらうのである。

生まれた赤ちゃんが母乳を絶たれる頃まで続くこの生活は、女性たちにとって一生涯の最高の幸福である。妊娠以前は寝る時間を省いて一日中、焼けつくような日差しの下で労働に従事していたが、大勢の人々の配慮の中で、家で楽に休みながら子どもたちの面倒をみるだけの彼女らが憂鬱になるはずがない。予測であるが、アフリカの部族社会ではマタニティ・ブルーはもちろん、子どもの問題もやはり見られないだろう。子どもを産むことを個人の問題でなく、共同の問題として認識し、配慮する社会の雰囲気であれば、育児環境がどうであるかは想像に難くないからである。

すると突然、アフリカ部族の女性たちの幸せな表情とともに、過ぎ去った日の私の姿が同時に現れ、心が錯綜した。医師という職業を持っている私は、同僚たちに比べると結婚も早く、子どもも早く産んだ方である。長男のキョンモを妊娠したのが27歳、レジデント1年次の時であった。

しかし、私はその時、決して幸福でなかった。当時、私は非常に忙しかった。診療と研究はなぜこんなにも多いのか、1日に僅かな時間かしか寝ていないのに常に時間は不足し、患者を診療しながら、毎週何回かは徹夜で病院の当直をせねばならなかった。

したがって妊娠したということは、私にとって青天の霹靂のような絶望を意味した。

「勉強も、稼ぐお金も、苦労も同じなのに、なぜ女性は妊娠のためにこんなに苦しまなければならないのか。」

私はその時、女性に生まれたことを初めて後悔した。大きなお腹であっても他の人と同じように当直をし、勉強も一生懸命にしたが、周囲の視線は厳しかった。少しでも辛い表情になると、「何で妊娠なんかしているんだろう」という周囲の雰囲気が伝わった。今だから告白すると、私は子どもを流産させることも考えた（今もこのことは長男にすまないと思っている）。

そのように周囲から嫌がられている気配を感じながら過ごし、妊娠7－8ヶ月頃には大きなお腹で京畿道の龍仁まで出張に出かけることになった。しかし、降り止まぬ雨のうえ、早産の心配まであったので、到底出かけるのは無理だった。考えた末、スケジュールを調整できないかと先輩に聞いてみた。しかし、戻ってきた答えは、「君だけに配慮することはできない」というものであった。当時、これを私に伝えた人は二人の子どもを育てていた父親であった。子どもを育てている人にさえ、配慮してもらえない現実。その件があって

私は初めて私が生きている社会に対して怒りを感じた。未来の主役を生み育てる女性たちを保護し、大事にするどころか無視する韓国社会は、何と過酷なのだろうと。

しかし、子どもを生んでからはさらに大変でだった。「子どもを誰に預けるか」からはじめ、これから繰り広げられる生活を考えると私は暗澹たる思いであった。小児科医であるわが夫は、私のことを心配したが積極的に問題を解決する意思は見せなかった。

医者としての生活と子育ての並行、それは決してたやすくなかった。いつだったか子どもの哺乳瓶を消毒しながら、火事を起こしかけたこともあった。子どもの面倒をみることや勉強で疲れていた私は、片側の壁が黒く焼け焦げていくことも知らず、深い眠りに入っていたのである。幸い隣家の主婦が気づき大きな火災は防いだが、もしそうでなかったらどうなっただろうか、考えるだけでもぞっとする。

私の会社にアメリカで資格証を取った若い弁護士が新しく入ってきた。韓国人だが、アメリカの市民権をもち、韓国語はほとんどできない人であった。彼の妻は韓国で高等学校を卒業し、アメリカに渡った女性であった。しかし、この友人はいつも単身生活をしていた。冗談で「奥さんはどうしたの」と聞いてみたら、「また、逃げ帰ったんだ」と答える。二人の関係には何の問題もないが、アメリカ生活に慣れた妻がなかなか韓国生活に適応できず、来てからもすぐアメリカに「逃亡」してしまうという。

私は彼の話を聞きながら私なりに想像した。韓国は男たちには住み心地のよいところかも知れないが、女たちには本当に息苦しく不便な国である。とくに、女性は結婚すると夫と子どもの面倒をみることや夫の実家の各種の行事まで一つ一つ取りまとめなければならない。それに仕事まですることは、かなりの勇気と覚悟がなければ大変なことである。

この話は駐韓商工会議所会長、ジェフリー・ジョーンス氏が書いた『私は韓国が恐い』という本の内容だが、私はこの本を読みながら、にわかに自分が偉くなったように感じた。その女性が夫をおいてアメリカに逃げる程、子どもを産み育てるのに最悪な韓国社会で、私は子どもを二人も産み育てながら、仕事もしているではないか。

私の自慢をするつもりはない。韓国ではそうした女性たちは、あまりにも多い。その女性たちはすべて偉大であると言いたい。専業主婦も同じである。育児の責任が母親だけにまかされる現実のなかで、専業主婦も苦しんでいることは同じだからである。

子どもよりも辛い母親たち、私のところに来てためいきをつき、あれこれ相談する母親たちをみるたびこのような思いがする。子どもは、食べて寝るだけで育つ存在ではない。とくに、小さい子どもであればあるほど、母親だけでなく家族皆がその子どもの行動に関心をもち、物質的・精神的エネルギーのすべてを注がなければならない。しかし、現実はただ女性であるという理由で、母親であるという理由で、すべての責任を転嫁される。それなのに辛くないはずがない。主婦の憂鬱症が深刻になることも、考えてみれば当たり前の結果である。

でも、そうであるとしてもくずおれてはならない。ある日、あまりにも辛く、仕事をとるか子どもをとるかと悩んでいる時、偶然アメリカの雑誌を読んだが、その中のある一行が私の心を捕えた。

「呪い（Curse）か、祝福（Blessing）か」

それは子どもをもつことが、仕事をしている若い女性にとって呪いになるか、祝福になるかに関する内容だった。

「子どもがこの世に生まれたのは祝福であり、決して呪われることではない。もし呪いで終われば、我が子があまりにもかわいそう。子どもに何の罪があるだろう。一番愛してもらえるはずの母親から‘私の人生を壊したのはあなただ’という恨みを聞かねばならないとは。」

ここまで考えると、私は私のためにも子どものためにも、このまま崩れるわけにはいかないという決心ができた。

私はその後、「スーパーウーマン」になった。片手で子どもを寝かしながら、もう一方の手で本に下線をひきながら勉強し、２時間に一回は起きる子どものため夜明かしで出勤した後、こっそり居眠りをし、週末には子どもを抱いて勉強した。もちろん月給はすべて昼の間、子どもの面倒をみてくれる人に渡した。

たまに、講義を聞いた女学生たちが私の存在自体が力になると電子メールを送ってくれたりする。その内容の多くは、「どうすれば最後まで仕事を諦められずに生きられるか」ということであった。

私は彼女らに、私のようなスーパーウーマンになれとは言いたくない。それは、決して手伝ってはくれない周囲の環境のもとで、仕事と愛する子ども、二つを諦めたくないから仕方なくした選択だから。私は、ただ彼女らに次のような話をしてやる。

「決して不可能な夢はない。」

どんなに難しい状況でも、諦めなければ道が見えるはずである。ニューヨーク大学の宗教学の教授ジェームズ・カースは家族を「無限ゲーム」と言った。サッカー、選挙、数多くの事業など一方が勝つことを目的にする「有限ゲーム」とは異なり、無限ゲームはゲームを持続させるのが目的である。したがって、無限ゲームでは参加者すべてが勝利を幅広く分けることができなければならない。

したがって、女性の無言の犠牲による勝利ではなく、家族みんなが味わえる勝利、このために悩みながらも戦う。戦ってみることもせずに諦めては絶対にならない。かならず後悔するからである。そして私は信じる。他人が不可能だという夢でも、見つづけた人は結局勝利すると。

最後に私は願う。私のように愚かなスーパーウーマンになるやり方ではなく、もっと賢くて賢明な方法で勝利する人が増えることを。そしてこれ以上、家族というゲームで一方的に犠牲になる女性たちがなくなることを。

私が小児精神科を選んだ理由

ある日、１歳になったばかりの子どもを抱いて若い母親が私を訪ねてきた。やっとよちよちと歩きはじめた小さな赤ちゃんに、どんな心の病があってここまで来たのだろうか。そうした疑問がまだなくなる前に、私の目の前で子どもは壁に頭を打ちつけ始めた。びっくりして子どもをあやす母親の腕は、子どもに噛まれた傷だらけだった。

これまでいったい何があって子どもの病気がこんなにひどくなったのだろうか。私はまず、診療所の隣に作られたプレイルームで子どもと母親をいっしょに遊ばせた。思った通り、子どもに接する母親が何となく不自然である。母親の間違った養育態度によって、子どもが情緒障害を起こしているケースだ。しばらくの間それをみた後、母親を呼んで子どもと母親がともに治療を受けねばならないと説明した。すると母親が信じられないという目で聞く。

「先生は、子どもが遊ぶのを見て何がわかるのですか？」

こうした時は非常に困る。基本的に患者と医師の間に信頼がなければ、診断も、治療も何一つできない。特に心を開き、話をするのが必須の精神科で、こうした態度では到底解決点を見出すことはできない。

しかし、このように聞く母親の気持ちを理解できなくはない。人の心というのは目で確認できないだけでなく、そのうえ見えもしない心を体のように診断して処方するということは詐欺だ、と思われるかも知れない。

告白すると実際、医学部予科の頃の私がそうであった。一度聞いた心理学の講義では、赤ちゃんが母親をもっとも身近に感じ愛するようになるのは、乳をあげる乳房のためだということだった。赤ん坊は母親という存在より、部分的に乳房だけを認識するというのである。フロイトが主張したというその学説を聞いて、最初は驚愕を禁じ得なかった。果たして愛という人間の高貴な精神をそのようにめった切るように分析することが可能なものだろうか、と。

しかし、人のことは近未来も予見できないというのが正しい。大学３年生の時、いつからかある男子学生が私をつけまわしはじめた。最初はあまり気にしなかったが、彼の行動は度を越えるまでに至った。彼は私と同じ医大生でもないのに、私の周りを一日中つきまとい、とうとう授業時間までついてきた。

そうしたある日の夜中、勉強をしていて何気なく窓を開けたところ、彼が電信柱の下で私の部屋を見つめてじっと立っていた。その前日、家に電話がかかってきて、今出られないから帰るように言ったが、その男は出てくるまで待つと言った。本当に、彼は帰らずそのままずっと私を待っていたのである。鳥肌が立つとは、こういう時に使う言葉だった。

段々その程度がひどくなり、家でも大騒ぎとなった。しかし、彼はさらに執拗に私につきまとった。派出所事件…。未だに私はそのことを忘れることができない。ある深夜、派出所から電話がかかってきた。一人の男性が派出所に入ってきて、私が彼の金 20 万ウォンを盗んだので返してもらいたいと、身じろぎもせず坐っているとのことであった。驚いて母親と行ってみたら、彼であった。私の顔を見るためにありもしない事件を捏造したのである。

その後、私はよくわからない神経衰弱症状に苦しめられはじめた。見るに見かねて私の母親は、彼の家に行って切実に訴えたりもした。それでもよくならなかったので、私が結婚すればその人もどうしようもないだろうと母は思って急いで結婚させたのである。私は、私の意思とは関係なしに現れる一連のストーキングの恐怖を経験しながら、深く悩んだ。

「果たして何が、彼にそんな行動をとらせたのか？ 」

なんでもない一人の人間をストーカーに変身させる精神世界とは、いったいどんなものか、何なのか私は知りたかった。心理学を学問扱いしていなかった私が、精神科を志望するよ

うになったのである。そして本格的に人間の心について研究をしながら、どの人間も精神的に完璧ではないという事実を知り、精神分析学が他の学問に劣らない科学的な根拠を基盤にしていることを知るようになった。そうなるにつれ、私は自分の自己同一性と私自身さえも認識できていなかった精神的な問題を一つ一つ振り返ってみるようになった。結局私は、精神科の勉強を通してストーキングの後遺症から抜け出すことができたのだった。

人間の精神について詳細な勉強を続けながら、私は私なりに人間についての理解の幅が広くなったと思った。しかし、結婚して子どもを産んでみたら、それがまた違った。言葉もできず、行動もはっきりしない子どもを理解するということは、宇宙人を理解するほど難しかった。

いつだったか、家に帰ってみたら、子どもの面倒を見てくれるお婆さんの手に切り刻まれた花模様のワンピースがあった。長男のキョンモが花模様をみたら、いきなりワンピースを切ってしまったという。なぜそうしたのだろうか。子どもに言葉ができれば聞いてみるのにとつくづく思った。

それだけではなかい。子どもは、癇癪を起こして物を投げたりした。我慢するのも限界になり、私は怒って子どもが物を投げると私も投げ、大声を出すと私もともに大声を出した。

最初は子どもが私の言うことを聞いているように見えた。ふだん、いつも暖かく接してくれる母親が爆発することが衝撃的であったようだ。しかし、それも束の間だった。それに慣れた子どもは、よくなる気配を見せるどころか、むしろ前よりもひどく駄々をこね我を張った。

このままではダメだと思った私は、小児精神医学の分野の本を片っぱしからひっくりかえしはじめた。私が知らない子どもの世界に関して、わからないといけないという思いが生まれたのである。そうでもしなければ、私も子どももだんだん不幸になっていきそうだった。勉強をしてみたら、キョンモがなぜその時大声を出し、物を投げたのか徐々に理解できた。結局、私は精神科のあらゆる分野の中、あえて小児精神科を選ぶようになり、それ以降、キョンモはすごくよくなった。ごはんを食べるのも大変だった子が、今はおかずに文句も言わず、おとなしくごはんを食べる。それだけではない。自分以外の他人をまったく配慮できなかった子が、今は困っている人をみると先に行って関心をもって手伝おうとする。そのようなキョンモをみていると、私は小児精神科を選んで本当に良かったと思う。

小さい時代の経験は未来のその人の人生を決定し、その人の子どもにまで影響を及ぼす。私は最近、相談にくる子どもと母親に会いながら思う。韓国のすべての母親がもっと子どもを理解しようとし、親としての自分について振り返ってみる時間を持てば、心を病む子どもと母親がずっと減るのではなかろうかと。

無難な熊より憎らしい狐になれ

最近、ゲイル・エバンスが書いた『男のように働き、女のように勝利せよ』という本をおもしろく読んだが、次の文章はその中の一節である。

私は「罪責感」を「自分が悪かったと信じるためにもつ苦痛の罪責感」と定義する。これを絵で表現するのは難しいが、 もっともふさわしい絵は「絞首台」という言葉と隣合わせにあるように思う。 もしそうした絵があれば、女性が主人公の場面になる可能性が多い。

我々女性は常に罪責感に苦しまされる。良い少女になるように育てられ、後には自らの素直な心の犠牲者となる。私たちはスーパーウーマンになり、すべてのことをやり遂げることを願う。自ら絞首台に上がることになるのだ。

罪責感は残酷な気分に陥らせるだけでなく、仕事をきちんと遂行できる能力を低下させる。あまり重要でもない小さなことがしっかりできなかったと自分を責めているようでは、どうして続けて目標を凝視できるだろうか？

私は上の文章を読みながら、長男を産んで大変だった時のことが浮かんできた。育児経験がまったくない新米の母親であった私に、並外れて気難しい長男は大変だった。それに病院の仕事に追われていると、私も無意識のうちに子どもをなおざりにしてしまうこともあった。

「母親の私がこんなことではだめだ。」

このような罪責感は、子どもが病気になるとさらに深まった。子どもを家に残して出かける時には、果たして私の行く道が正しいのだろうかという懐疑感まで持ったものであった。

しかし、ある日ふと、こうした考えをするようになった。

「私がこのように苦しむことが、子どもにとって果たしてどんな役に立つのだろうか。」

結論は 100%、No であった。子どもを育てるには一つの村が必要だという言葉もあるではないか。子どもを育てるのは、私一人で解決する性質のものではない。育児の中心に立っているのは母親の私だが、それが十分ではない場合、周りのすべての環境を子どもを育てる助力者に仕立てる知恵を備えなければならない。

それから私は、苦しみや罪責感にやつれることがなくなった。それが子どもにも私にもまったく役に立たないことがわかった以上、それに苦しまされる必要が何であるだろう。それこそ時間の浪費、精神の浪費だ。

こうして心の荷物を降ろした私は、自分がまず最善を尽くす一方、一番身近にいる夫と夫の実家を育児に参加させる方法を模索しはじめた。それは、我が子たちが夫と夫の実家の祖父母とともに過す時間を多く作ることだった。もし、母親の私ができないことがあっても、彼らから受ける無限の愛情によって、私の不在の間、子どもたちの心が満たされるためであった。

もちろん、子どもより自分のことに夢中の無関心な夫と、働く嫁だからといって例外ではないと思っている舅姑を育児に参加させることは決して容易なことではなかった。しかし、私と子どものために我慢して努力した。

結局、我が子たちは他の子どもたちより祖父母から多くの愛を受けている。子どもたちも同年齢の子どもと比べて祖父母への愛情が格別強い。たまに、祖父母から電話でもかかってきたら、「おじいさん、いつソウルに来るの。僕に会いたくないの？」と言う。その様子は母親の私が見ても幸せそうだ。

それだけではない。おばさんやおじさんたちのこともまるでいっしょに住む家族のように好きである。週末になると、まるで友達の家に遊びに行くように親戚とともに楽しい一時

を過ごして来る。私よりおばさんやおじさんにすがりついている子どもを見てたまには嫉妬を感じるほどである。しかし、私がいなくても以前のようにむずからない子どもたちを見ながら、私はよくやったと思う。

この世に完璧な母親はいない。また、子どもが大きくなり母親を思い出す時、100%良い感情だけを思い浮かべることはできない。母親も人間である以上、失敗もあるからだ。私は、母親たちが 80%程度だけ良い母親であれば、それで十分であると思う。そして、残りの足りない 20%を満たしてくれる人たちを積極的に活用する母親が、賢明であると思う。

ある日、一人っ子の娘を育てている妹から電話がかかってきた。男の子が二人いる隣の家に、子どもが隙をねらっては行こうとするということだった。兄弟なしに育てられたので隣の子どもたちと遊ぶのが楽しくてしかたがないのである。

しかし問題は、子どもが寝る時間を除いて、ずっとその家にいるということである。二人の息子の世話で疲れている隣の母親からそれがよく思われないことは確かだった。

これに気づいた妹は、子どもに行かないようにとなだめたが、聞かないので叩くまでになったと言った。我が子が他人に嫌がられることに心を痛めない親がいるだろうか。結局子どもを監禁するようにして数日、それでも状況がよくなる気配がないと私に電話してきたのである。

話を聞き私は妹に、子どもを叱るより、まず隣の母親に会ってみるように言った。果物でも一籠もって訪ねて、「うちの子がお宅のお子さんたちがとても好きなので、大目に見てやってほしい」と了解を得ておくのだ。子どもに友達ができることは良いことである。仲間の文化を学び、対人関係を広めて行く近道だから。また、それは母親が決してしてあげることのできない部分ではないだろうか。

その後、私の妹はその家の母親とうまく関係を築くよう努力し、その結果、子どもは何の問題もなしに思う存分、隣の家で遊ぶことができた。

私は母親たちにこう話している。

「子どもを育てるには、無難な熊より憎らしい狐になる方があなたのためにも、子どものためにも良い。」

そうするためには罪の意識を捨てなければならない。子どもが少しでも悪くなれば、「すべてが私のせいだ」と考える母親たち、そうする必要はない。むしろ私は不必要な罪の意識から解放された母親たちの方が子どもを上手に育てる場面を多くみて来た。今日から 80%だけよい母親になろうと思って実践してごらんなさい。知恵のある憎らしい狐になるとき、私は少なくとも今よりあなたとあなたの子どもたちがずっと幸せになることを確信する。私もまたそうだったから。

夫の親としての役割の学習

「もう起きなさい。子どもたちと公園へ行く約束したでしょう。」

日曜日の午前 10 時。いくら起こしてもベッドでうつぶせになったまま起きる気配も見せない夫にひとこと言う。

「公園へ行かなきゃダメ？ 家で遊んだらどうかなぁ。」

哀願調で言う夫。夜中に家へ帰って来たから疲れているのも当然。それでも子どもたちとした約束だから守らないわけにはいかない。再び夫を起こそうとしたら、いつの間にか下の子が入って来てベッドに飛び上がる。

「パパ〜…」

鼻声を出しながら、父親の腕に抱かれてほんの数秒。あんなに起こしてもびくともしなかった夫が、「チョンモ、どこへ行きたい？」とぱっと起きる。下の子が勝利者の顔で私に目で合図をする。「お父さんはお母さんより僕の言うことをよく聞く！」という表情である。

夫に裏切られたような気もするが、子どもの判断が正しい。夫は、今流行のことばのように、子どものことならば“目がパッと開く”人なのである。大学病院の小児科専門医として忙しいことは私の比ではないが、その最中にも一日に何回も子どもに安否の電話をすることを忘れない。宿題はきちんとしたのか。ごはんはしっかり食べたのか。どこか痛いところはないかなど、よその人が見れば、男やもめではないかと錯覚するほどである。

このように今では誰もが認める優しい父親になった夫だが、今から３年前には、典型的な家父長的思考の男性であった。今の様子だけを知る人に、当時私の夫がどうだったのかと話しても誰も信じないだろう。

「子どもは母親が育てるもの。なぜかというと、女性が子どもを育てるのに有利に生まれついているから。」

平日には、病院の仕事で忙しく、土曜日には同僚の医師たちとテニスをしに行って、まれに時間ができても、研究があると病院へ高飛びをすることが常だった。たまにでも子どもに優しい父親の役割を果たしたかと言えばそれもない。たまに子どもを預けると、２時間も経たない内に子どもとけんかをしたりした。息子が同じ童話の本をずっと読んでもらおうとするから腹が立つという。小さい子どもは反復的な遊びが好きで楽しむというのは、実に基本的な事実である。しかし「さっき読んで上げたのにもう忘れたの？」と子どもをとがめる夫を見ると、時にそれでも小児科の医師かと疑いたくなるほどだった。

それだけではない。子どもが夜中に泣いても絶対起きることはなかった。一晩中病気の子どもの世話をして充血した私の目をみては「何かあったの？」と聞くほどだったから、その無関心の程度がわかるだろう。あきれて私は夫に「昼間離れている時、子どもと会いたくないの？」と聞いたら、病院で患者を診ているとまったく子どものことは思い浮かばないという。

そうした夫を見て、当時の私の気分はどうだったであろう。とくに、男の子は小さい時、父親の姿をみてこれを生き方のモデルにする。すなわち、小さい時、見てきた父親の姿がそのまま残像として残り、将来、大人になった時、見本として作用するということだ。

しかし、父親の姿をみて学ぶどころか会う時間さえないので、息子二人を育てている私としては、胸が詰まるようだった。おそらくこれまで私たちの夫婦げんかの半分以上は、このような夫の誠意のない育児態度のためだったと思う。

このような生活が５年。その後、夫のこうした様子に決定的な変化を与える契機になったのが、１年半のアメリカ留学生活であった。

夫が大学で留学の機会を得、私も小児精神についてより専門的な勉強をする必要性を感

じ、ともにアメリカに留学した。長男が６歳、次男がまだ２歳にもなってない時のことであった。

状況が手伝ってくれる、という言葉がある。アメリカでの夫との生活がまったくそうであった。

参考までに話すと、韓国の男たちの同僚愛は本当に風変わりである。留学に行く直前、週末ごとにテニスをしたのも足りなくて、飛行機に乗る12時間前までも友達と酒を飲んでいたのが私の夫である。ふらつきながら飛行機に乗って何時間も飛行した後、正気になる夫を見て「果たしてアメリカではどうやって生活するんだろう」と思った。

しかし韓国とは違って、毎週土曜日ごとが休みで、それに他国では会う友達もほとんどなかった夫は、自然に家にいる時間が多くなった。本人がいやと思っても子どもとともにする時間が多くなったのである。子どもの勉強を教えることからはじめ、ごはんを食べさせること、遊んでやること、お風呂に入れることなどなど、ともにすることが始まった。

その時のことを考えると、私は笑ってしまう。まったく「新米の父親」と腕白な子どもたちとの戦争といったら…。子どもに追いつきながら大声を出す父親と腹を立たせるように逃げ回る息子たち。このような生活をして６ヶ月。夫が初めて子どもについて真剣な話をした。

「子どもに、こんな問題があったなんて、本当に知らなかった。」

生まれた時から鋭敏で扱いにくい気質の長男のことについてであった。そして続けて言った。「これまで君はどうやって子どもを育ててきたの？」

それは夫の本心からの問いだった。韓国では子どもといっしょに食事をとる時間さえなかった人が、１時間もかかる子どもの食事時間に同席したからこそ悟ったことは言うまでもない。それだけではない。寝るときの癖、遊びの習慣、何が好きか嫌いかなど、夫が子どもについてのすべてのことを知るようになったのもアメリカでだった。

それ以降、確実に夫は変わった。本人自ら父親としての義務感を悟ったこともあったが、その変化の原動力はまさに子どもたちであった。以前だったら父親にどなりつけられ、母親のスカートに顔をうずめた子どもたちが、父親とともにする時間が増えるにつれ、父親を探すことが頻繁になった。いくら叱られてもすぐ忘れ、父親の懐に抱かれたりしたら、どんな父親でもうれしくないはずはないだろう。

以降はまるで私が夫と子どもたちの間の邪魔物になったような気がするほどだった。

以前にはこちらがいくら頑張っても子どもに目もくれなかった夫だった。そのため、私と夫との間に葛藤も多く、子どもたちが父親を無視することも多かった。しかし、そんなに努力をしても変わらなかった夫が、アメリカでの１年半の間に完全に変わったのである。

「ああ、結局必要だったのは、子どもたちとともに経験することだったのだ。」

韓国へ帰って来た夫は、再び忙しい生活に戻った。しかし、以前のように子どもたちを無視したりはしない。あんなに好きだった週末のテニスも止めたほどである。テニスに行くと子どもたちが目に浮かんでくるという。

こうなった夫をみて同僚が「いったいどうしたの？」と一言二言言ったようである。それでも夫は変わらない。そして子どもが可愛くてたまらない様子の夫をみて、友達も何かを悟ったのか、夫のように週末を子どもとともに過ごすようになったりしている。

先日、キョンモが急性盲腸炎にかかった。私は手術を私の病院で受けさせようとした。すると夫は私に、女医が自分の子どもの病気で頻繁に出入りすると、よくない目で見られるから、夫の病院へ入院させた方がよいと言った。父親の子ども愛は、人々が寛大に見てくれるとのことだった。そして子どもが気になるので自分のそばにおいた方がいい、そうでなければ仕事に手がつかないとまで言った。

父親には「生んだ情より育てた情」という言葉がぴったりのようである。夫の言葉によると、その時でなかったら、子どもにそんなに細やかな心配りはできなかっただろうし、私が子どもを育てるのにどれほど苦労したのかもわからなかっただろう、というのだ。

今週末には、夫、子どもとともに温泉へ行こうかと思っている。週末ごとに子どもたちのために奉仕する夫にも、どうやら休憩が必要のようだから。

たまには捨てる知恵も必要である

「私はお母さんみたいに生きたくない。」

私の母は、小さい時から勉強がよくできて将来が嘱望される才媛だった。しかし、母はただ女だという理由で、将来への夢を諦めるしかなかった。そして私にも、女が目立ったり、自己主張があまり強いのはとよくないと釘をさした。女の人は自分が好きなことを見つけるより、良い男の人に恵まれるのがもっと大事であると…。もちろん、母の献身的な世話があったから現在の私があるのだが、思春期に私は到底そんな母を理解することができなかった。

男の人に依存せず、自分の役割をしっかり見つめて生きていくためには、どのような道を選ばなければならないだろうか。医師という職業を選んだのは、私のこのような潜在意識からである。そして、私は自分のその選択に満足している。

しかし、一度だけ動揺したことがあった。最初の子を産んでからであった。普通の女性であれば誰もが経験するのが、子どもを産んで育てることである。しかし、それは厳密に考えてみれば、女性が自己実現することとは正反対のことである。いつも犠牲になり、いつも我慢し、徹底的に利他的な心でいなければならない。

病院では教授として、専門医として、堂々とした立場に立っている者が、家に帰ればすぐ「お母さん、本読んでちょうだい」という子どもを暖かく世話する母親に変身すること、それは言葉でいうほどそんなに易しいことではない。二つの役割の絶え間ない葛藤で、「いったいどっちが私の本当の姿なのだろう」という疑問さえ生じたものだ。

必要なのは、この状況からの脱出口であった。その時、私はこのように考えた。私にとって一番大事で重要なことは何だろう？

私には子どもたちであった。これは、正しいとか間違ったという問題ではない、どこまでも個人的な主観によるものである。したがって、私はこのような考えを他の人に強要するとかそれが正しいと主張するつもりはない。ただ、私は「意味のある私を犠牲にし、他人を助けることほど価値があり、賢明なことはない」という悟りを得られたということだ

けである。

私が定義する母性は「水」である。土へ入り込んで自分の形態はなくなるが、その土で穀物を育てること。このような母性の意味を頭ではなく、心で体験したのである。

「自己実現、成功志向的なもの以上の価値が、必ずある」ということを。

そして私は決心した。どんなことでも、その中心に子どもをおいて、できないことに関しては未練を持たないことにしよう。

いったん、そのように心の整理がつくと、私の気持ちはだいぶ軽くなった。そのおかげで疲れ果てることの多かった職場生活が、かなり楽になった。瞬間、瞬間が、競争の連続のような職場生活のなかで、以前は何に対しても鋭く神経を尖らせていたとすれば、それ以降は、自ら余裕をもって考えられるようになったのである。

ただ、それは決して自分の中で安住するという意味ではない。反って、そのように思いを整理した瞬間、それが私の自己開発にもさらに大きく役立ったことがわかる。偏狭な視角で前だけを見つめていた私が、隣と後ろもみながら少しは余裕をもち、観照的な姿勢で生き方を眺めながら、その中の幸福を探すことになったのである。

私は、多くの母親と会いながら、彼女らの内面に、あらゆる悩みと葛藤が隠れていることを感じる。私は彼女らに勧めている。私が私の人生の一番大事な宝物を「子ども」と考えるように、山積した問題の優先順位を決めるように。そして一番大事なことからするように、と。そのためにはまず、自分の葛藤がどこから生じるかを、しっかり把握していなければならないのだと。

偏狭な視角から社会的固定観念にとらわれないで、本当に自らの主観と心によって、自分自身の中の葛藤について考えてみよう。そして一番大事なことは何か、考えてみよう。これと関連してスティーブン・コヴィーは『成功する人々の７つの習慣』で「大事なことを先にせよ」という言葉を用い、その優先順位を次のような４つの項目に整理した。

１）　重要で緊急なこと
２）　重要だが、緊急ではないこと
３）　重要ではないが、緊急なこと
４）　重要でも緊急でもないこと

大事なことを選び出し、まずそれができる人は、第２位、第３位のことも他の人達よりもっと早い時間内で円満に解決して行く。なぜかというと、何もかも捨てられず心配ばかりしながら悩んでいる時間を短縮できるためである。自分がやりこなせないのに、すべてを抱えていることは決して望ましいことではない。したがって、たまには捨てる知恵も必要である。

子育てを辛くするよりも、楽しくすることを願うならば、子どもが健康に育つことを願うならば、今日直ちに自分の人生を振り返ってみながら、大事なことを選び出してみてほしい。

ともにすることの偉大さ

兄弟がいる家はたいていそうだと思うが、我が家のふたりの息子は、日がな何だかんだとけんかをする。寝る直前までけんかをしているふたりの子どもを仲裁するため、かなりの時間を費やすこともある。

しかし、たまに下の子を見つめていると胸がじんとする。兄があまりにも強いために、母親の愛を感じる機会を源から封鎖されてしまうことが多いからである。母親が弟に関心を持とうとすると、上の子は問題を起こしてまでも自分の方へ関心を引く。そして、正直言って、下の子はあまり手がかからない方で、兄に比べれば母親の努力も少なかったのが事実である。

何日か前、下の子がいよいよ母親の愛を思う存分受けられる機会ができた。休みを迎えた兄が、何日間か祖父のところへ行ってくる、と宣言したのである。上の子が出かけた次の日、私は下の子と一日をいっしょに過ごすことにした。遊園地へ行って、映画をみて、ふだんから好きなおじさんの家を訪ねて楽しく遊び、よその人がみれば行儀が悪いと言われるほど思う存分に楽しい時間を過ごした。

その日の夜、床に入る時間になる頃、下の子が部屋の扉を開けて「僕、お母さんと寝る。」と言った。大きくなってからは、一度も母親といっしょに寝ることを求めなかった子であった。

そして次の日には、起きるやいなやこう言った。

「僕、今日はお兄さんのおもちゃに触らないで、おとなしく遊ぶよ。」

ふだんいくらなだめても言い聞かせても直らなかった癖の一つが、兄の物を触ることだったので、子どもが自らそう言うのに感心した。しかし、一方で私は胸が痛んだ。私は下の子にしてあげられることはしているつもりだったが、これまで子どもにとっての母親の愛が不足していたことを感じたからである。ともかく、何日間か下の子はふだん兄と分け合っていた母の愛を溢れるほど受けてとても幸せであった。

それだけではない。母親を一人占めする間、子どもの悪い癖が目を見張るほどよくなった。ふだんは脱いだまま投げ出していた服を自分でたたみ、ごはんを食べた後、自らお茶碗を片づけ、母親の服まで片づけてあげると大騒ぎした。

私はたびたびお母さんたちに、子どもに「時間」を割いて「関心」を見せるように言っている。そう言うと、この世に自分の子どもに関心を持たず、時間の投資をしない母親なんているかと反問される。正しい言葉である。問題は、その「時間」と「関心」を間違って理解していることである。

最近の母親たちは、時間と関心というと、もっぱら何かを教える方だけを受け入れる。子どもの行動に何か変化はないか、心に傷を負ったことはないか、情緒的に正しい成長をみせているかに関心をもつのではなく、どうすれば賢く育てられるかにばかり熱意をみせる。

しかし、一つ確かなことは、その時間と関心の中には母親の犠牲がなければならなく、またその中に子どもをどのように育てたいかという欲求があってはならないということである。すべてが子ども中心になってこそ、その時間と関心が効果を得る。私がこのような話をすると、仕事をしている母親たちがまた質問してくる。

「子どもには、時間の長さではなくて、短い時間でもどのように遊んでやるかというのがずっと大事だと聞きましたが。」

もちろん、間違った言葉ではない。一日子どもといっしょにいながら自分のことばかりする母親と、1時間でも誠意を尽くして過ごす母親がいれば、どちらの方が子どもに良いかは、あえて説明しなくてもわかるだろう。

しかしそれにもかかわらず、子どもは母親といっしょにいる時間を必要とする。時間の量と質を問う前に、「母親と子どもがともに過ごす時間」が必要なのである。

上の子が生後18ヶ月になった頃である。子どもがいきなり泣きながら何事にも腹を立てるようになった。そのうちよくなるだろうと思ったが、一日、二日経つと、自分の世話をしてくれるお婆さんを叩いて足で蹴ったりまでもした。

しかし、いくら考えても子どもが精神的に傷ついているようなことはなかった。病院の仕事で忙しかったが、退勤後はいつも最善を尽くして子どもの面倒をみたし、病院では随時、家に連絡して子どもがどうもないかと確認したりした。

確実な代案が見つからなかった私は、ちょうど休暇を得て1週間ほど、子どもの世話に専念した。特にしてあげたことはなかったが、子どもと一時も離れず、最善を尽くし子どもの面倒をみてやった。すると、どうしてもよくならなかった子どもの症状がたった2日でよくなりはじめた。

優しいお婆さんが誠意を尽くして子どもの世話をしてくれたことは疑う余地もないが、子どもにとってお婆さんと母親は、確かに全く異なる存在である。夜、自分と楽しく遊んでくれた母親が朝になるといなくなってしまうので、子どもの立場からは、満たされないものがあったのだ。

私が看過していたのは、子どもに必要な「一定時間」であった。何かを教えるより無心で子どもと遊んであげて、子どもに無条件な愛で接してやる。そういう時間のことだ。

上の子と下の子のことを順番に経験しながら私は感じる。ただ母子がいっしょにいるだけでも、子どもにはどれほどよい教育であるかを…。ともにするということの偉大さは、経験していない人には決してわからないだろう。

私がこのような話をすると、特に仕事をしている母親たちはひどい罪の意識に捕らわれる。しかし、先に述べたように常に頭の中で子どもを忘れないでいることだけでもすでに半分は成し遂げたことになる。そうした関心があれば、時間を作ることはそんなに難しくないということを、私はもうすでに経験で体得したからである。

兄弟の間にも川は流れる

たまに家で二人の子どもが遊ぶ様子をみると、子どもたちが私たちの血を引いていることを実感することがある。外見もそうだが、遊ぶ様子や趣向までも上の子は父親に、下の子は母親の私に似ている。

上の子は、一人で何かを作ることが好き。小さい時からレゴなどを与えると、坐ったままで1時間でも2時間でも夢中になっていることが多い。そのようにいったん何かを始めると最後までけりをつける性格が、父親に似ている。

そして自分がやりたくないことは死んでもやらない。作ること以外にはとくに好きなことがないので、たまには心配になるが、一筋に打ち込む長男のひたむきさも父親と似ている。年齢が40を過ぎても診療と研究しか知らない夫を見るとき、上の子もそのように生きていくのではないかと思ったりもする。

下の子は、兄とは正反対である。兄が消極的で自分の世界にこもるのを好むのに対して、下の子は何事にも積極的で、何でも新しく学ぶことが好きである。そして、何でも熱心に取り組み、よくできる。下の子を見ていると、上の子を育てながら苦労した時間を償ってもらっているような気までする。

しかし、私は賢い下の子を見ながら、逆に上の子よりもっと気がかりになる時がある。下の子は兄の知的な能力を凄いと思い、それに嫉妬を感じている。そして何とかそれに追いつこうとする。何でも学びたがる下の子の内面には、このような潜在心理が隠れている。

いつだったか、上の子にお絵描きを教えようとしたことがある。内面の欲求を絵を通して外へ表出させると、子どもの難しい性格が少しはよくなるのではないかと思ったからである。しかし、予想外に下の子が言った。

「何でお兄ちゃんにだけさせて、僕にはさせてくれないの。僕もやりたい。」

もちろんそれが悪いというのではない。上の子どもの学習経験、つまり何回もの試行錯誤を通して良いことだけを残していくその姿などは、下の子どもに一種のシミュレーションの役割をしてくれる。あえてさせなくても兄の隣にいるだけで、多くのことを得たり学んだりするという意味である。したがって、どの家でも下の子はあらゆる面で兄に比べ天恵の環境におかれる。兄によって残されたよいものをそのまま持っていけるからである。

とくに、生まれつきの性質がさとく兄に勝ちたい執念が強いだけに、あえて私がさせなくても下の子は何でも自ら学んで行く。しかし、裏返して考えてみると、これは下の子としての辛さである。兄のために母親の愛を取られているという悔しさと悲しみがそのように表出されるのである。それで一種の報償心理であるのか、下の子は小さい時から兄の告げ口をよくする。兄が何かちょっと間違っても走ってきて、「お兄ちゃんがこうしたよ」とあれこれ告げ口をする。

その時には私はいったん子どもが言うことを最後まで聞いてやる。そして最後に「そうだったの、チョンモくん。でも君が言わなくてもお母さんは全部知っているよ」と言う。絶対叱ることはしない。そう言う子どもの心を知るためである。

そのため、下の子が兄と比較して我を張っても、これを無理に防ごうとはしない。そうした欲求を充足させてやることを通して「私も母親から愛されている」という感じを失わないでほしいからである。兄の知らないところで、「君も立派だよ、お兄ちゃんは君の年の頃、君よりできなかったよ。」などと言ってやるのも、そうした理由のためである。

ただ、子どもを見守りながら、子どもが自分の欲求で自らを疲れさせるような時には、婉曲な表現で子どもをたしなめる。

「大変じゃないの。これはやらなくてもいいのよ。これが全てではないんだから。」

しかし、これがすべての場合に受け入れられるわけではなかった。兄が自分よりすぐれていると思うと、下の子は絶対に諦めることがなかった。

そして思いついたのが、最初に兄と比較できない、異なった領域に弟を誘導することである。最初から競争の余地が生じないようにしてしまうのである。

ゲームソフトを買ってやることでもそうである。絶対同じ内容のものを二人の子に買ってやらない。上の子は上の子の性格に合うものを、下の子には下の子の性格に合うものを別々に買ってやる。二人の子が過度に互いを意識することを防ぐため、コンピュータも別々に用意してやったほどである。

ところで、一部の母親たちは、逆に兄弟間の競争意識をあおる。

「お兄ちゃんはよくできるのにあんたは何でできないの？」、「あんたはお兄ちゃんのくせになぜできないの？」というふうに。しかし、覚えておこう。あえてあおらなくても十分に兄弟は競争意識をもつものなのだ。今まで私は何度、弟ができたときの兄の心境を「妾にあった本妻」の気持ちにたとえたことだろう。

それだけではない。小学校に入ってからは、子どもは他者との競争による圧迫感を十分に味わうようになる。あえて母親が立ち入らなくても子どもは競争的な環境の中に置かれるようになるということである。あらかじめ競争を煽って情緒的な圧迫感を味わわせる必要が何であるだろう。

母親たちは、自分の子が賢くよその子よりすぐれていると、前後の事情を推察する前に無条件に嬉しがる。しかし、私はその時、むしろ母親自身をはじめ、周囲の環境を見渡してみるように言いたい。我が家の次男のように、兄がいる場合でなくても、何か目にみえない環境的な強要によって、子どもの能力が必要以上に現れているのではないかと。

「この子はやらせてもないのに文字が読めます」と自慢する母親がいる。子どもが文字を読めるという事実だけで、母親はひどく喜んでいるが、無意識のうちに自分が子どもにそうするように強要してはいないかについては疑ってみもしない。ほかのおもしろいことがいっぱいあるのに、なぜ子どもがそんなに難しい文字を読むのだろう。

言葉だけが子どもに何かを強制させるのではない。母親の表情や家の雰囲気を通していくらでも子どもが強要させられる条件は醸成される。我が家の下の子も、やはり文字が読める。兄が文字を読むのを見ながら、無形の圧迫感を受けたからである。

こうした時は母親が立ち入って止めさせるべきである。そうすることで、子どもが本当に自分が願うことを求めて行くことができるからである。とくに、兄弟をもった母親たちは留意する必要がある。兄弟の間でも川は流れていて、その川が兄弟をダメにすることも、よくすることもあるという事実を…。

親になることの意味　その１

私は毎年、夏休みに、家族といっしょに釜山の夫の実家へ行って来る。それも１日、２日過ごして来るのではなく、休暇のまるまる１週間を過ごして最後の日の夜に家へ帰ったりする。上の子が小学校３年生の時からだからすでに10年以上、夏の休暇をそのように過ごしてきたことになる。

国民の祝祭日はそうだとしても、１年にただ１回、ゆっくり休める休暇をそのように過ごすことはもったいないのではないかともよく言われる。しかし、誰かに押しつけられてそうするのではなく、私が自ら望んでそうしている。

とはいえ、いくら好きと言っても夫の実家であるため、私も最初から気が楽ではなかった。結婚生活を維持するためだけに私のほうがすべての不平等に堪えねばならないことが本当に悔しいこともあった。

「同じように勉強したのに、なぜ女である私だけがこんなにやらなくてはいけないことが多いのか。なぜ私だけが自由ではなく拘束を受けるのか。」

こうした考えから解放されたのは、私が二人の子どもを産んで育てるようになってからである。子どもを産む前までは漠然とした不快感に引っ張られながら、なぜこうしなければならないのかと苦しむばかりであった。

しかし、子どもを産んでから、ふと「かけがえのない私の子どもの半分がここから来た」という思いを持てるようになった。陳腐かも知れないが、この悟りは本当に胸を打たれる経験であった。そして母親の私よりもっと子どもらに愛情を注ぐ舅と姑をみながら、以前まで悟らなかった同質性、それ以上の家族愛を感じることができるようになった。

孫を抱き上げて一時も床に降ろさない舅と、風邪でも引くのではないかと厚い布団をかけてやる姑の姿を見ながら、私の子どもたちがそのような暖かい空間に泊っていること自体がどれほどありがたかったかわからない。

子どもという共通の関心事ができたこと、それは夫の実家と私の距離感を狭めるのに十分であった。そして子どもを育てながら、以前には絶対目に入らなかった姑の心がある程度理解できるようになった。

「息子を送り出してどれほど心細いだろう。」

それは、新婚の時、漠然ともった思いとは本当に次元が違った。恐いほど共感ができたと言えば、説明になるだろうか。

そうなるにつれて、私は不当だと思っていたすべての状況を、徐々に違う視覚で見つめることができるようになった。たとえば、以前はただ一人の成人として判断したすべてのことが、今は子どもを育てる親の眼で見つめることができるようになった。そうなる以前には決して受け入れられなかったことひとつひとつに、うなずくことができるようになったのである。

だからといって私が以前に比べ、舅と姑に何かを特別によくしてあげているのではない。以前と今と同じである。しかし、私が心から抵抗を解くことによって、舅と姑の方でもやはり私への違和感が大分なくなったことを感じる。

確かなことは、すべての変化が子どもたちに起因していることである。私が子どもを産まなかったなら、親の立場に立っていなかったら、夫の実家からの束縛は一生続いたのではないだろうか。

今では夫の実家の家族と一緒にたまには旅行にも行く。小さい時から、おじいさん、おばあさん、そして多くの親戚から愛を受けて育った私の子どもたちはその時、飛び上がるほど喜ぶ。そうした子どもたちを見ながら、私は何らかの代価をはらうことがあっても、子どもたちからその幸せを奪ってはならないと肝に銘じたりする。

子どもができてから私が悟ったことを端的に表現すれば、自己犠牲、すなわち真の利他の心が与えてくれる幸福であった。もっぱら自分だけの成功に集中していた私は、子どもを産むことによって真の自己犠牲がもたらす幸福を味わうことができた。私の子どもが幸

せそうにしている様子を通して、以前では感じられなかった心の深いところからの充実感を感じることができたのである。その充実感は、私が子どものために他人に喜んで頭を下げられるようにしてくれた。以前では絶対できなかったこと、いやそうするなんて思いもしなかったことを、今は平気でしている自分に自分で驚いたりもする。

とくに上の子を育てている時に、本当に多くの変化があった。何事にも気難しく世話が大変な上の子が他の人から傷つけられないようにするためには、母親の私が立ち入って子どもを保護しなければならなかったからだ。

保育室（編者注：ノリバンという小規模な民間乳幼児保育施設。正規の保育園はオリニジップという）の先生はもちろん、家で子どもを世話してくれるお婆さんにまで私は真心で子どもをお願いした。プライドなどはもう私の頭に残っていなかった。それどころか子どもの問題で自尊心を云々すること自体がつまらなく感じられた。

子どもが学校へ入ってからは、さらにそうだった。集中力に欠ける子どもが先生ににらまれたらどうしよう、傷つけられることはないだろうか、と私ができることは何でもした。

正直にいうと、子どもを産むまでの私は、自尊心が強く負けず嫌いの女性であった。女性として医師の道をきわめたいと願い、それも大学病院に残るため本当に頑張った。それは私に「不屈」という評価の言葉で戻って来た。もちろん、そこからくる成就感もまた無視できるものではなかった。熱心に努力して得られた結果は、私を幸せにしてくれた。

でも今になって、人生の社会的な成功と子どもから得られる幸福のうち一つを選択せよと言われたら、私は躊躇せず後者を選ぶだろうと思う。それは子どもだけではなく私のためでもある。強制的にさせられる犠牲ではなく、本当に嬉しくてする犠牲は、母親だけに与えられる素晴らしい経験である。

しかし面白いのは、そうした悟りによって、以前までは無理することが多く殺伐としていた私の社会的生活に、著しく余裕がもたらされたことである。子どものために多くの部分を犠牲にして甘受しなければならないにもかかわらず、むしろ荷物が減ったような気分になれたのである。

これだけはしなくてはならないと徹夜しながらしてきたことも一歩離れてみると、「あえてそうする必要があるだろうか」という思いがしてきたのである。もちろん、だからといって私の生活を粗末にしているというわけではない。ただ、心の持ち様が変わったため、以前よりもっと、楽に、幸せを感じながらできるようになったのである。私のこのような変化を見て、周りの人たちは何かが変わったねと言う。そして「以前よりもっと良い感じになったね」という言葉をもらえたことも忘れられない。

しかし、病院で母親たちに会っていると、多くの女性たちが子どもを産んでからもそのような感情をもてないでいることがわかる。なぜそうしなきゃいけないのかと反発されるかもしれないが、私はそのような母親たちをみるたびに、歯がゆくもどかしい思いをする。

独身女性たちは結婚前に、将来の夫の実家によくしなければならないこと、子どものためには自分を犠牲にすべきだということをただ徳目として知っている。それは現実としてではなく、ただ観念として感じているだけである。そのため、その裏面に隠れている事実を見逃しやすい。それは徳目や観念として止まる性質のものではない。そして感情的にだけ接近できるような問題でもない。

もちろん、私も最初から容易にそうできたのではない。違和感や懐疑の気持ちにとらわれる時もあった。しかし、最初は子どものために始めたそうしたことが、今は私にも嬉しいことになっている。結局、母親というのは子どもと幸福を分け合う存在ではないのだろうか。

今では、夫の実家の甥や姪さえもとてもいとおしい。同じ家族として受け入れてからは、私の子どものように気遣っている。そしてそうした感情が人為的ではなくとても自然なものなので、一方では胸が一杯になる。与えることの嬉しさ、分かち合う嬉しさを知ったからと言えるだろう。

このように親になるということは、この世の他のどんなことよりも立派なことである。その悟りを得てそれによって幸せを感じるためには、母親自ら積極的な姿勢にならなければならない。

それはそんなに難しいことではない。母性というのはすべての人たちに公平に提供される本能であるからだ。ただ、その原初的な本能に注目し、それにすべてのことを合わせると、夫の実家をはじめ、自分を囲んでいるすべての環境に対して開かれた眼がもてるようになる。

私がこの世に生まれて最もよくできたことがあるとすれば、それは子どもを産んだことであろう。殻を砕いて出てきたようなこの悟りは、親にならなくては絶対味わえないよろこびである。

親になることの意味　その２

ある日、テレビドラマをみていた上の子が次のように言った。

「このまえ、お父さんとお母さんとけんかしたでしょ。僕、その時本当に恐かった。」

何を言っているのかと思って画面をみると、ある若い夫婦がけんかをしているシーンだった。最近、夫とけんかした覚えがなかったので変に思い、子どもにたずねた。

「キョンモくん、夢でもみたんじゃないの。お母さんとお父さんはけんかしてないよ。」

上の子は顔をしかめて、しばらくの間考えてからこう言った。

「お母さんは大きな眼鏡をかけていたよ。青い上着を着ていて、真っ暗の夜だったの。」

子どもの説明を受けて私は非常に驚いた。上の子が思い出した記憶は、今から７～８年も前のことだった。夫とけんかした当の私も記憶が途切れ途切れだというのに、どうして子どもがそれを記憶しているのか。当時、キョンモは話もできない小さな子どもだった。私には何でもなかったことが、子どもには数年を経た今でも、その記憶が鮮明で衝撃的なことだったのである。

正直いって、その当時には母親としてのアイデンティティを持っていなかった私は、夫とよくけんかをした。私を取り囲んでいる問題にすべての気をとられ、その間、子どもは少なからず傷つけられたのである。その後、私たち夫婦は、親によって子どもが傷つけられることがないように特に注意を払っているが、当時、受けた傷が何らかの形で子どもの心に残っているので、本当に心が痛む。

その傷はキョンモが大きくなり、親になって子どもを育てる時、否定的な影響を与える

こともあるだろう。誰でも自分が生きてきた成長環境の影から抜け出すことが難しいからである。親が兄弟の一人だけを格別に可愛がったために疎外感を感じたとか、兄弟の葛藤が著しかったとかという経験は、親になってからも思わず我が子に投影されることがある。親が可愛がった兄弟に似た我が子を憎んだり、関係が悪かった兄弟に似ている我が子を遠ざけたりすることなどである。

大人が結婚相手を決める時、「家庭環境が重要である」と念を押す理由は、家庭環境がその人を読む基本枠になるほど、重要だからである。「家の問題は三代に続く」とは、よく言ったものだ。

学歴も高く賢明で成功の道をひた走っているような働く女性の中には、特に子育てに不慣れな人たちがいる。性格も円満で対人関係にも何の問題がないのに、子どもといっしょにいるとその人が凍ったように固まってしまう。

そういう女性たちを見ると、十中八九は幼い時の親との関係に問題がある。幼い頃に親から関心を向けられなかったとか、反対にひどい抑圧を受けてきた場合、その経験は忘れられても無意識のレベルに残っていて、子育てに影響を及ぼすのである。

この前、私を訪ねてきた母親もそうであった。一目見ただけで疲れた様子が明らかな彼女の最初の言葉は、「一体、子どもにどのように接してあげればよいのかわかりません」、だった。コンピュータ・プログラマーとして最高の実力を認められていた彼女は、性格もよく、会社では中間管理職として卓越した能力を発揮していた。しかし、子どもを産んでから何もかもが、めちゃくちゃになってしまった。妊娠10ヶ月の間、自分なりに育児書を読み、周囲から助言も得たが、子どもが生まれると、何をどうすればよいかわからないほど呆然としてしまったのである。

何事にも完璧主義の彼女にとって、子どもの世話をすることは大変なストレスとして作用し、最終的には神経衰弱になってしまった。はためには何の問題もなかった彼女だが、何回かのカウンセリングの末、私は彼女の母親がずっと小学校の教師をしていたことを知るようになった。それで彼女は、赤ちゃんの時から親戚の家をあちこち移されながら育ち、ある程度大きくなった頃からは、仕事をする母親の代わりに家事を引き受けてきたのである。

結局、彼女が自分の子どもをしっかり世話できなかったのは、小さい頃、母親から世話をしてもらっていなかったからであった。受け継いだ愛がないのに、自分の子どもに分け与えられる愛があるはずがない。結局、彼女の子どもは愛情欠乏のためさまざまな障害を見せ、その子をしっかりと治療するため、彼女の母親まで含めた三世代を呼んで方法を模索しなければならなかった。

私の周りの母親たちは、子どもの世話をするのにそれぞれの特色がある。清潔に神経を使う母親がいるかと思えば、子どもの食べ物に関心の高い親もいる。おもしろいことは、それらのすべての行動が大部分、自己の無意識に残っている親のイメージに起因するのである。小さい時、親からたっぷり世話を受けた母親は、誰が教えなくても子どもの世話がよくできる。

私の妹をみてもそうである。楽天的な性格の妹は、子育てだけは非常にせっかちで鋭敏

な方である。一日と置かず私に電話をし、今日は子どもがどうだった、こうだったと言ってくる。そうするたびに私は、小さい頃親から受けた経験が非常に恐いという思いがする。妹から私たちの母親の姿をそのまま描くことができるためである。私もやはり例外ではなく、家で子どもたちと遊んでいるとわが母親の姿が頭にふと浮かび上がるときがある。

私の母は子どもへの愛情に溢れる人であった。ただ、たまにその愛情の度が過ぎ、執着のように感じられる時もあった。

いつだったか、近所で子どもの誘拐事件が起きたことがあった。その日の夜、母はどこかから古着をもってきて、明日からはこの服以外着てはダメだと言った。当時、我が家はある程度裕福だったので、もしもそのことがよその人に知れたら、私が誘拐されるかも知れないというのである。幼な心に汚れた古着を着るのがどんなにいやだったことか…。しかし、母の意思に逆らうことができず、しばらく古着を着て過ごした。ある冬の日には寒いからと、どこかから毛布をもってきてコートを作って着せたこともあった。見た目にも重たい毛布を冬の間ずっと着ている私を見て、友達がひやかしたことを今でもよく覚えている。今になって母に聞いてみると「私がそんなことした？」と驚くような表情をする。母としては子どもを大事にしたい一心でそうしたのであろうが、幼な心にもそのような配慮が煩わしく、鬱陶しく感じられたのは１度や２度ではなかった。

しかし本当にわからないのは、煩わしく鬱陶しく感じられた母親のそのような姿を今の私が踏襲していることである。もちろん、冬に服を何枚も着せるとか、誘拐犯のことで門を閉めるなどのことはしないが、私も同年輩の母親に比べ、子どもを過度に保護する傾向があるからだ。

子どもが友達に傷つけられていないか、学校生活によく適応できているか、知らず知らずのうちに両親から圧迫感を感じているのではないか、などど気遣う部分が一つや二つではない。職業がら、主に精神的な問題に対してそのような傾向をみせている面もあるが、とにかく私もやはり幼い時の母親の姿を、無意識の内に私の子どもにそのまま投影しているのである。

結局、私にとって親になるということのもうひとつの意味は、幼い時代を振り返ってみることを通して、私を産んでくれた親を心底理解し、受け入れる過程のことだった。「子どもを産んで親の心情を知る」という言葉は、私には本当に当てはまる話であった。そしてたまには恐ろしくなる。私が間違うと、我が子を通してその孫にまで影響を及ぼすという事実が…。それでまた子どもと接することにさらに用心深くなるのかも知れない。

３．子どもをゆっくり育てるための７つの提案

子どもをゆっくり育てる親の基本的心構え４つ

私は子どもを二人も育てている母親なので、とくに子どもの世界と関連した本を読む機会が多くある。何も知らなかった新米の母親時代には育児書に目がいったが、最近は清らかな水彩画のような童話を楽しんで読んでいる。常にまず子どもの心を理解しようとする自覚があるからでもあるが、何よりもつい微笑んでしまう純粋さそれ自体を好むからだ。

最近、読んだ本の中に『窓際のトットちゃん』という本がある。子どもの視点で彼らの成長過程を描き出したものだが、読んだ後、暖かさが感じられる本であった。その中にこのようなくだりがある。

お昼の時間、最近面白いことがもう一つ増えた。皆がごはんを食べる間、毎日誰かが一人ずつ出て話をする「誰かの話」の順番ができたのだ。大部分の子どもたちが校長先生の意見に賛成し、自然に順番も決められたが、全校生の前で話をすることは、勇気も必要でそんなにかんたんではなかった。しかし、最初は恥ずかしくて笑ってばかりだった子どもたちも、皆の前に出て話をすることに少しずつ面白味を感じはじめた。

しかしある日、順番になったのに絶対やらないと踏ん張る男の子がいた。

「できる話なんて全然ないよ。」

校長先生はその子に言った。

「じゃ、君が今朝、学校に来るまでにあったことを振り返ってみてごらん。一番初めに何をしたか。」

「だから…。」

「そうそう、今、君は『だから』と言ったでしょう。言うことがあったでしょう。じゃ、『だから』の次にどうなったか。」

「だから…朝起きました。それで。」

「そう言ったらいい。こうして君が朝起きたことを皆が知るようになったからな。必ずおもしろいとか、笑い話をしなきゃいけないことはない。『話すことがない』と言った君が話を見つけ出したのが大事なんだ。」

そうすると、突然、その子はとても大きな声でこう叫んだ。

「それから！それから…。お母さんがね、歯を磨くようにって言ったから歯を磨きました。それから学校に来ました。」

校長先生は拍手をした。トットちゃんと子どもたちも精一杯の拍手を送った。講堂の中は拍手の音でいっぱいになった。

その男の子はこの日の拍手の音を…たぶん大人になってからも決して忘れることができなかっただろう。

私はこの文を読みながら、ふと自分を振り返ってみた。出会う母親たちには「子どもをゆ

っくり育てなさい」と強調しながら、私も彼女らのようにせっかちに子どもを押さえつけているのではないのか。それで子どもが自分の才能を思う存分発揮できる通路を塞いでしまっているのではないか…と。

いつだったか、子どもをゆっくり育てるために親として持つべき基本的心構え（条件）を整理してみたことがある。それは次のとおりである。

1）絶対的な愛

子どもをきちんと育てるためには、母親として基本的な条件である「愛」自体を常にもっていなければならない。自分の子どもを可愛がり、愛していなければならない。

私がこう言うと多くの母親たちは反問する。

「この世で自分の子どもを憎む親なんていますか？」

しかし、私は憎むまではいかなくても、絶対に愛情が不足している母親たちを意外に多くみる。本人は当然子どもを愛していると考えているが、それはどこまでも母親自身の錯覚に過ぎなく、子どもは母親の愛に飢えている。

夫の実家から非常に疎まれている女性がいた。とくに小姑は何か気に入らないと物を投げたりするなどの乱暴を働いた。

その女性が最初の子を産んだら、何と子どもの顔が小姑とそっくりだった。最初は、「違う、違う」と考え直したが、一度似ていると感じると思いがその方へ走り、後には子どもをみるたびに小姑の顔が浮かび上がった。その渦中、小姑との葛藤は深まり、結局とんでもないことに、小姑に対してできなかった当たり散らしが、その子どもに向けられた。

この母親は果たして「私はこの子を愛している」と言えるだろうか。本当のところはどうだったかわからないが、子どもの立場からみれば、母親から当然受けるべき基本的な愛情が不足していたことは間違いない。

母性は先天的なものと言われる。しかし私は、母性は絶対育てられるものだと言いたい。真の母性は母親の努力なしに、そして子どもと接しながらあらゆる葛藤を克服していく経験なしには生じない。

仕事のため、上の子を３年間、人に預けて育てた母親がいた。仕事をやめる状況でなかったので子どもを預けるしかなかったこの母親は、２番目の子を妊娠してから仕事を辞めて子どものところに戻ってきた。これまで放っていた上の子を思う存分愛してあげようと考えた彼女。しかし、下の子が生まれた後、自分の考えが間違っていたことをやっと悟った。

生まれた時から自分が世話をした下の子は可愛いけれど、上の子にはおかしなことにそんな思いがしなかった。何かが間違ってしまったと思い、自分の心を直そうと努力したけれども容易ではなかった。彼女は子どもへの罪の意識を消すことができなかった。彼女の現在の一番大きな悩みは、母親のこうした心を上の子が気づいたらどうしようというものであった。

２番目の子を産んでから仕事を辞めた母親たちが、実際にこうした本音を打ち明ける。自分の手で育てた２番目の子の方に情が移るという。産んだ情、育てた情を比較するが、私は絶対的に育てた情の方に手を挙げたい。

もう一つの話をすれば、母親と子どもの結合性（Bonding)、すなわち互いの愛着は相互交換的だということである。母親が子どもをいくら愛そうとしても、子どもといっしょに分け合う二人だけの共感帯が形成されないとその愛は成熟せず、足踏みをするばかりである。仕事をやめた多くの母親たちが子どもといっしょに時間を過ごしながら、何か「馴染まない感じ」を訴えるのもこのためである。

子どもは母親のこのような感情によく気づく。子どもの感覚はときには大人の想像を絶するほど敏感で、雰囲気だけでも母親が何を考えているか、自分にどのような感情をもっているのか、正確に把握する。子どもが大きくなってから、「お母さんは恐くて嫌い」と訴える場面を、実際に見たこともある。

結局、子どもを愛するにも努力と時間が必要である。母親の汗と誠意が持続的に続く時、やっと母親はより成熟した愛を育てることができる。そして、このような絶対的な愛が、賢明な母親のもっとも基本的な土台となるのである。

2）敏感性

愛が充ち足りたら、次の条件は母親の「敏感性」である。これは子どもが送るサインの一つ一つに早く、正確に気づく能力をいう。簡単に言うと、子どもの気分をどれほどきちんと把握できるかが鍵である。

子どもが泣いているとしよう。敏感な母親なら子どもがお腹が空いて泣いているのか、またどこか心地よくないから泣いているのかすぐ気づく。一方、そうでない母親は子どもが泣き疲れて寝入り、静かになるまで理由がわからず、あわてふためく。大人でも一拍子遅い人があるではないか。皆が笑った後、しばらくしてから一人で笑うとか、最後まで何故笑っていたのかわからない人である。

敏感でない母親の特徴は、一方的に指示をするとか、何かを子どもに強要する点である。診療のため用意されたプレイルームでさまざまなおもちゃをおいて子どもと母親が遊べるようにすると、一気にこの事実があらわになる。敏感性に問題のあったある母親の例をあげてみよう。

母親に背を向けて遊んでいる子ども。私がみるに、子どもは母親との感情交流に興味を失ってすでに久しい。そうした様子に恥ずかしくなった母親が、子どもを自分の方へ向けて坐らせる。子どもの手には長い金棒が握られている。母親は隣にあった人形を子どもに与えて言う。

「それは何に使うつもりなの。危ないからこれで遊ぼう。」

母親に取られた金棒を必死に取り戻そうとする子ども。でも母親はそんな子どもを無視して金棒を子どもの手の届かないところに片づけてしまう。

他にもおもしろいものは多いが、子どもがその金棒を取ったのには理由があった。おもちゃの中にあったシロホンを叩く棒を探していたのである。少しでも敏感な母親だったら、子どもが何をしようとしたのか、なぜその金棒を手に取ったのかすぐわかったはずである。そして人形を渡すのでなく、危ない金棒の代わりにシロホンを叩ける他の物を子どもに渡しただろう。

子どもはすぐ母親に怒って泣き出しはじめた。しばらくあやしていた母親は、これ以上はどうしていいかわからない様子で私に助けを求める合図をしてきた。

遊びを終えた後、母親を坐らせて母親の敏感性に問題があるという話をした。話を聞いた母親は悔しそうな表情をしてこう言った。

「私の性格がもともとそうなのに、どうしたらいいんですか？」

もちろん、母親の敏感性は生まれつきの部分がないことはない。幼い時代、親からそのような配慮を受けられなかった場合、なおさら子どもの感情を理解するのが不得手であるにちがいない。

しかし私は先述した愛と同じく、敏感性もやはりいくらでも育てられるものだと思う。「女は弱いが、母親は強い」という言葉もあるではないか。「生まれつきの性格のため」子どもに敏感でない、というのは説得力がない。そう言う前に育児環境はどうであるか、自分がどの程度準備された心構えを持っているかを点検してみるべきである。

夫とよくけんかする母親がいた。ささいなことでも夫と何だかんだと言い合いになってしまう彼女。けんかが毎日繰り返されるので、子どもに注ぐエネルギーさえ使い果たしていた。子どもを2回抱っこしてやるところを 1 回で済ませたり、さらには昨日食べさせていた離乳食をそのまま子どもに出したりした。大したことではないと考えていたようだが、その渦中で子どもへの視線が段々遠くなり、そうなるにつれ、母親は子どものサインの一つ一つに鈍感になってしまった。

どんな理由があろうとも、子どものサインをしっかり読めない母親たちは、まず必ずそこから治さなければならない。「子どもがこうする時には、何をしてもらいたいでしょうか？」という質問にきちんと答えられるように、自ら努力して練習しよう。すぐできなくても、子どもをうまく育てている周りの母親たちをモデルにして努力すれば、いくらでも変ることができる。

万一、母親がおかれた周辺の状況や感情に問題があれば、葛藤の要因になることから探して解決しなければならない。誠意さえあれば、子どもを育てるのに妨害となる要素から賢く抜け出す方法は会得できる。

憂鬱であれば、憂鬱な理由から探して、それをなくすようにしよう。あまりにも忙しければ、周りに助けを要請しよう。夫との葛藤があれば、妥協点を探すか、互いに原則を立ててみよう。

今すぐは不可能にみえても、それが子どもの成長にもっとも重要な基礎になる点を認識すれば、何とか方法は出てくるはずだ。

3） 反応性

敏感性を備えたら、次に考えることは、それに対応する適切な反応である。子どものサインに敏感に気づくだけでは何の役にも立たない。これに必要な反応をその都度してやらないと、子どもの心の中には欲求不満がたまる。乳幼児期には、とくに子どものサインが食べて寝て、排泄して、遊ぶという基本的な欲求と関連したものが多いが、母親がこうした子どものサインに素早く反応してあげないと、性格形成に深刻な障害がともなう。

反応をするというと、目に見えるある要求への対応と考えがちであるが、時には単純に目を合わせることも立派な反応になる。

初めての子を産んであまり経たない内に、すぐ二番目の子を妊娠したある母親のことが思い出される。上の子だけの時には別に困ることなく子どもを育てたが、二番目の子を産んでからまもなく身体的疲労が重なり、すべてがめちゃくちゃになった。夫からも手伝ってもらうことのなかったその母親は、上の子は神経質になったし、下の子はいつも泣いてばかりだといって私を訪ねてきた。

「下の子が泣くと、なぜ泣くかわかりますが、上の子に疲れて、下の子に反応することができません。」

このように子どもの感情に合わせて反応することのできない母親をみると、だいたいは身体が弱いか、育児と家事労働によって疲れ果てているか、過剰な仕事でストレスを受けている場合が多い。子どもが望むのが何かわかっていながらも、身体的精神的疲労によってその都度、反応をみせることができないのだ。

仮にそうだとしても、子どもが大きくなり、ある程度の独立性を備えるまでは、絶対に母親の反応が必要である。状況がいくら大変でも、子どもの状況に合わせてやらなければならない時期がある。この時、母親が厄介だとか、他のことに神経を使うことが多いという理由でその時期を見逃すと、草取り鎌で取り除けるものを鋤で取り除くようなことになってしまう。

それで私は母親たちに、本当に大変ならビタミン剤でも飲むように言う。そして子どもを育てること以外に自分を疲れさせるものから解放されるようにと言ってやる。

しかし、考えてみると母親が自ら自分を締めつけている場合も多い。家がちょっと汚いからといってそれがどうであろう。食卓のおかずの数をいつも多くする必要があるだろうか。週に一度は訪ねていた夫の実家を、２週に１回訪ねてはどうだろう。また、夫に「疲れているからしばらく子どもの面倒をみてほしい」とも言えるのではないか。

このように反応が遅い母親も問題だが、一方では子どもに度の過ぎる反応をみせるので問題がある場合もある。子どもはそんなに望んでいないのに、性急に反応する場合である。子どもがある程度育った時、よくそのようなミスをおかすが、早期教育が一般化されて以降、さらにその問題が増える趨勢である。

賢く育てたい一心で、子どもが文字の一つも読めたらもう童話の本をめくる母親たちがその体表的な例である。最近はとても小さな赤ちゃんのための教育用おもちゃが多いが、知能開発に良いとの理由で、子どもに無条件に与える母親たちも問題である。子どもが少しでも気分がよさそうになると、その気分に合わせてあげるのでなく、その隙間をねらって子どもに教え込もうとするのである。

子どもに反応をする場合、母親の思い通りにするのでなく、子どもの行動にしたがって反応しよう。すべての基準を子どもの感情に合わせるなら、母親の欲求のたにめ無理に先走るような失敗はしないだろう。

4）一貫性

最後に備えるべき条件は、一貫性である。子どものサインに敏感に反応はするが、時々刻々変化する母親の気分のために、移り気になってはならない。

もちろん、母親にも感情があるのだから、常に子どもの気分に合わせることはできないだろう。しかし、母親を最初の交流相手にする子どもの立場からすれば、何事も自分の気分次第のわがままな母親では、非常に混乱する。大人のように相手の感情の状態を考慮して受け入れる練習がまったくできていないためである。

しかし、私がこのように言うと、母親たちは直ちにこう聞く。

「それなら、どのような基準で子どもに接すればいいのですか。」

ところが、すべての子どもは個性のある存在であるため、どの子どもにも通用する普遍的基準というのはない、としかいえない。母親の気質によって、子どもの生まれつきの性格によって、そして環境によって、原則は異なるのだ。

育児書籍や雑誌をみると、「これだけは守れ」、「子どもに接する時はこうしなければならない」と多くの育児の原則が提示されているが、私はむしろそれらを気にしすぎないように言う。

もちろん、何にも知らない状況で周囲に助言を求めることはある。しかし、助言は助言に過ぎない。たまに、母親が自ら守ることもできない原則を立てて、無理強いをして合わせていくことがあるが、これは母親にも子どもにも何一つよいことはない。

そして一つ忘れてはならないことは、母親の一貫的な態度を妨げる要素がないか、まず点検することである。

とても頑固な姑のために、自分の考えで子どもを育てられない母親がいた。姑と育児観が異なって悩んでいた母親は、自分の主張をあまりせず、教育や生活など育児問題で葛藤がある時は、自分の考えを諦めて姑に従っていた。そうしているうちに、子どもに一貫的な態度を見せられず、よく変わる母親の下で育った子どもの性格もだんだん気難しくなっていった。

姑に育児をすべて任せる場合は違うが、子どもと一番多くの時間を過ごすのが母親であれば、このような葛藤の状況からまず解決しなければならない。それで私は、子どものために姑と１年間だけでも離れていることがよいと助言した。子どもが母親の一貫的な養育態度に完全に適応した後、孫に会うのが子どもの精神的な健康によいという説明をつけた。

この前、私を訪ねてきた別の母親は、あまりにも憂鬱で子どもを育てるのが苦しいと訴えた。話を聞いてみると、結婚して実家の近くに住んでいたが、最近夫の職場の問題で引っ越しをした。以前には母親と姉がいてよかったが、遠いところで一人離れて過ごしたことで、鬱病となったのだ。鬱病が極端になると子どもに怒りを向けるようになってしまい、罪の意識を感じながらもそれを治すことができなかった。

根本的な問題は、その母親が精神的に未成熟であることだが、これは短期間に解決される問題ではない。結局、今子どもが受けている混乱を考えて、その母親はまた実家の近くに引っ越しをした。

どのような状況にしろ、何より大事なのは、母親がおかれた状況が、子どもと接する態度と関係してはならないという点である。気分がよい時は限りなくよくしてやるが、問題が生じると、子どもに当たり散らす母親たち。自分はそうではないと言うが、このような母親があまりにも多い。

常に、頭の中で子どもと自分の周辺の状況を離して考える練習からしよう。そして短期間に一貫した態度を形成することが難しいなら、まず原則を立てる前に忍耐力から育てよう。どんな状況であっても、子どものために堪え忍ぶという心構えで出発すれば、道がみえてくるはずである。

感情の調節は下着のように考えて、チェックしよう

何が気に入らなかったのか、いきなり上の子が泣きながら駄々をこねる。持って遊んでいたおもちゃのどこかが故障したようだ。いくら言い聞かせても泣く子を落ち着かせることができない。子どもは、あげくには手あたり次第、おもちゃを投げ出しはじめた。

怒りで切れかかった私。言い聞かせることを諦め、つい感情に負けてしまい子どもを叱りはじめ、もう少しで手を出すところだった。ところが、子どもはそうした母親の心を知っているのか知らないのか、床をごろごろ転がり出した。こうなると仕方がない、最後の切り札！

「キョンモ、椅子に坐って反省しなさい！」

子どもの顔に瞬間、不満がかすめる。大声を出すことで最後の反抗をする。しかし、母親の断固とした表情をみて、椅子に行って坐る。

今は要らなくなったが、子どもが３、４歳頃まで我が家の居間の片隅には「考える椅子」があった。子どもが理由もなく駄々をこねる時、なだめたり叱ったりしてもどうにもならない時、使ったものである。

子どもが５歳位になればある程度対話が可能だが、それ以前の子どもには状況を理解する思考力が不足している。したがって、この時期の子どもたちは、母親がいくら落ち着いてわかりやすくなだめても、欲求がかなうまで無条件に駄々をこねる。我が子もそうだった。

それで考え出したのが「考える椅子」である。最初は「果たして効果があるだろうか」と半信半疑で子どもを椅子に坐らせた。実際、子どもを反省させるという意図よりは、興奮した私の心から子どもを少し離して落ち着かせようという意図の方が大きかった。

子どもとけんかをしていると、ある瞬間、母親の私の方がもっと興奮して怒っている場合が多かった。そうなると葛藤がなくなるどころか、事態はもっと悪化するばかりであった。

いつだったか、私が診たクライアントの父親から電話がかかってきた。私がテレビに出て人間の暴力性について話したのを見たようだ。私がした話の要旨は、次のようなものだった。

「暴力性というのはすべての人間の本能であるがゆえに、小さい時からよく調節できるように親が助けなければならない。そして、そのためには親自身が自分の感情を正しく調節できるモデルを見せなければならない。子どもに何かの問題があっても、できるだけ怒らず受け入れてあげよう。」

その父親は、私にこう聞いた。

「なぜ先生は、子どものことばかり考えて、親の痛みとか苦しい心情の方には配慮しないのですか？」

その言い分を理解できないわけではない。親の立場からすれば、限りなく我慢しなければならないことは当然悔しい。親も人間なのに何の罪があって、休みたい週末に子どもにまとわりつかれ、子どものわがままを受け入れてやらねばならないのか？ それでも不充分で、常に笑顔で子どもに接していかなければならないのか？　聖人君子でない限り、常に自分の感情を殺して理性的に子どもに接するというのは、無理ではないか。

それにもかかわらず、親に我慢せよというのは、まだ不安定な子どもよりは親が精神的に完成された存在であるからである。堪えることのできる内在化された力は、親の方が強いということだ。

子どもたちには、ある状況を堪えて我慢できる「元手」がまだない。

今育っている子どもたちの方に、我慢して忍耐することを強要すると、子どもたちは自分の感情を正しく表出させる方法がわからないので情緒上の不安を経験する。しかし、親はすでに精神的に完成された成人であるために、そこまではいかない。だから堪えられる元手のある方が、我慢するのが正しいのではないだろうか。

アメリカの児童心理学者、トロニク（Tronick）博士は、満３～６ヶ月の赤ちゃんを対象に、とても小さな時の感情調節についての実験をした。まず、母親が子どもにニコニコ笑う顔をみせる。そうしてから母親は急に深刻な固い表情で、他のところを凝視する。赤ちゃんがいくら母親を見つめても、いっさい目を合わさず、怒った表情ばかりを見せるのである。

言葉もできない赤ちゃんたちが、目を丸々と見開いて驚いた顔になった。それからすぐ無表情になって、もう母親に目を合わすことを回避した。３分後、母親がまたニッコリと微笑みかけるのだが、子どもの固い表情は何時間たっても元に戻らなかった。

このようにとても幼い子どもは、成人と類似の構造の脳をもって生まれたにもかかわらず、母親が感情調節をしてくれないと、それをすぐ戻すことができないほど深く学習してしまう。

簡単に考えてみよう。夫とけんかした後その感情は、３、４日は続く。それで子どもの世話をする際にもその感情は心に残り、顔に現れる。これが続くとしよう。そうすると子どもは当然それを学ぶのではないだろうか。

病院に小児期鬱病で来る子どもたちをみると、母親が同傾向の場合が多い。そうした時には子どもと母親をいっしょに治療するが、母親が治療を受けてよくなると、何ヶ月もしないうちに子どもも非常によくなるものである。したがって、親は子どもに接する瞬間だけでなく、すべての生活において適切な感情の調節法を身につける必要がある。それで私は母親たちにももちろん語るが、私自身も常に次のように肝に銘じている。

「自分を常に振り返ってみること、自分の気分の状態を常にチェックすること。」

このような前提の下で、私が我が子に接する時の大原則がある。「私の気分が悪い時は、絶対子どもを叱らない」ことである。

人間である以上、憂鬱な時もある。私もたまには病院に行きたくないほど憂鬱な時もある。このように私の感情の信号灯に赤が点灯するときは、子どもが宿題をしなくても母親との約束を破ってもいったんは放っておく。そんな時はいくらよい顔で子どもに接しようとしても、内在する感情が顔に現れるためである。ある程度気分が転換され、感情点数が10点満点中、少なくとも最低7～8点以上になった時、子どもに言いたいことを言うことにしている。

ところが、多くの親は自分の気分がどうであれ、子どもだけを見つめたまま、言葉でなだめたり、抱っこしてあげたりし、あげくには怒り出し手を出して、また同じ過程を繰り返す。その時、瞬間的に込みあげてくる怒りを押さえて理性を取り戻す力は、親のIQや知的な能力とは限らない。私はむしろ知識人と称する人達が、子どもを勝手に扱い、あるがままの自分の感情を先行させる場面を多く見ている。

こうした感情調節は、きちんとした訓練と努力によってこそ可能である。もちろん、先天的にそうした感情調節がよくできる人もいるが、子どもを育てること自体が、多くの忍耐と犠牲を伴うことであるだけに、人為的な努力が必要だということである。

もともと血の気の多い私が、感情調節のために選択することは、音楽鑑賞である。もともとは山登りなどの運動が好きだが、それができない状況なので用意した次善の策である。実際、落ち着いた音楽を聞いていると、ある程度心が静まることを感じる。

それでもダメな時は、子どもと接することを避ける。病院に遅くまで残って勉強をするか、本を読みながら時間を過ごす。子どもは母親を待っているはずだが、憂鬱な気分で帰り、子どもに険しい顔をするよりその方がよい。

しかし、人間は感情の動物である。努力したとしても完璧に自分の感情を調節できる人はそんなに多くない。常に完璧になろうとするより、失敗をするたびにそれを悟ってやり直すことからはじめよう。一日で変わることはないが、子どもに対して失敗をしても、知っていて失敗することと、それが悪い影響を及ぼす事実さえ知らないままそうすることとは、かなり異なる。

たまに私は、わけもなく子どもを怒って、後から悪かったと思い、「キョンモくん、さっきはごめん。お母さんが怒ったけど、理由も知らず怒ったりして」、と言う。そうすると子どもは、「わかっているよ。お母さんは仕事をたくさんして、疲れているからでしょ」、とかえって私を慰めてくれる。子どももやはり人知れず、母親のそうした努力と本音を知っているのである。

だから、感情調節は下着のように考えたらいい、と思う。人であれは、誰でも基本的に下着をチェックするように、子どもに接する時に、感情調節がよくできているかどうかを、まずチェックせよということだ。

前述のように子どもの潜在能力はいつ爆発するかわからない。したがって、親は子どもの発達が少し遅くても、常に肯定的な姿勢を見せる必要がある。そうしてこそ、子どもが自信を失わず、世間に堂々と向き合いながら成長できるからである。

しかし、親の感情調節がよくできないと、子どもの肯定的な自己像の確立に役に立つところか、子どもをもっともっと萎縮させてしまうことがある。したがって、子どもの発達を妨げる親にならないためには、感情調節をする方法から学ぶ必要がある。

子どもから「なぜ」という疑問を引き出させよう

「もし、子どもの行儀が悪くなったらどうしたらよいですか？」

私が母親たちから一番多く受ける質問が、これである。子どものしつけの問題は、教育とともに昔も今も母親たちの共通の話題のようだ。

「そのままにしていたら行儀の悪い子になるだろう」、「後になって、もしも親の言うことを全然聞かない子になったらどうしよう」、「大きくなってから、社会生活ができるのだろうか」などなど…。

考えるだけではない。壁紙やタンスに落書きをする子どもをみて、そのまま見過ごす母親はない。ごはんを食べるとき、子どもが茶碗に手を入れようものなら、手の甲を叩いて目をむく。

このように韓国の母親がとくに訓育に強迫観念をもっているのは、昔ながらの治し難い病気である。「尊い子どもであるからこそ、厳しく育てなければならない。」という慣習が、母親たちに無意識のうちに根強く残っているからである。

さらに、韓国の社会では礼儀正しさがよく強調される。しかし、私は礼儀を教えるという名目の下で子どもの自発的な発達が抑圧される場合も多く見てきた。きびしいしつけは、子どもたちに過酷なことであることが明らかだが、親は当然すべきことをしただけだと思っている。

似たような例を見せるのが、お隣りの日本である。「他人に迷惑をかけないように」という彼らの固定観念は、日本らしさの代名詞として知られている。しかし、それは子どもを育てるのに絶対強要されてはならない。幼い時代の度の過ぎた制裁と圧迫は、自我を殺す近道であるからだ。結局、今日本では親子関係の問題が深刻な社会問題にまで台頭している状況である。

もちろん、親の立場で子どもを正しくしつける必要はある。幼い時代の制裁は、ただ行動自体だけを矯正する意味ではなく、「現実への適応」という課題をともに抱えているからである。しかし、そうだからといって一方的に叱るのはよくない。

私は訓育の代わりに、「協議（交渉）」をするように言ってあげたい。子どもが納得できる線で、親も少しずつ妥協をしてみようということだ。

いつか子どもといっしょにデパートでショッピングをしたことがある。今日は見るだけだよと約束をして出かけたが、玩具のコーナーに行った子どもが10万ウォン以上のロボットセットを買ってほしいとねだりはじめた。隣の友達も買ってもらったのに、僕はなぜ買ってもらえないのと母親の目をじっと見つめるのだ。

ここからが交渉に入るチャンスである。子どもが出した交渉案は、「欲しい」それ自体である。それが何の交渉だと言われるかもしれないが、子どもの立場では欲しいという以上に正当な提案はない。私が出した交渉案は「あまりにも高いから保留すること」。

小さい時には、欲しいという欲求が自我を作っていく過程の一部であるため、大体それを聞いてやったが、満5歳ならすでにその段階は過ぎた。したがって、初期の道徳性形成が始まるこの時期からは、「できること、できないこと」の基準が子どもにもある程度は適用

されなければならない。当時の私としては、何の努力もなしに欲しいものは得られない事実を子どもに教える必要があった。

互いの交渉案が出たら、これからは妥協をせねばならない。どのように話を運んでいけばいいだろうか。

まず、私は子どものほしがる欲求をすぐ押さえたくなかった。それでその欲求をやわらげるこのできるような他の要素を見つけ出した。

「それをもって遊んだらいいよね。でもその値段がどれくらいだか知っている？」

子どもの口から知らないという答えが出る。そして価格を教えてやり、また続ける。

「キョンモくん、家ではお父さんが給料をもってくると、それでお米を買って、服も買わなきゃいけないんだ。でも君のものだけ全部買っちゃうと、家ではごはんが食べられないこともあるよ。それでもいいかな。」

「10 万ウォンがないと、そういうことが全部できないの？」

子どもがお金の価値を聞くのである。それで私は「10 万ウォンはとても高いお金だよ。」と子どもの言葉で説明してやった。

子どもの顔に難色が見える。いったんは理解をしたという意味である。しかし、また聞く。

「それなら、隣のおばさんは何で買ってくれたの？」

「隣の家はうちよりお金持ちかも知れないし、もしかしたら子どもの誕生日だったかも知れないよ。君も１年に１回か２回、誕生日やクリスマスの時、素敵なプレゼントをもらうでしょ。」

「今買ってもらいたかったら、お父さんがお金をもっと稼がなきゃいけないんだね。」

心残りがあるようだったが、子どもの顔に納得した表情が現れる。交渉成立の気配が見えるのである。しかし、完全に私の意思だけをこだわり通すことはできない。そうすると、次の協議が必要な時、子どもが対話の窓を塞いでしまうこともあるためだ。

「キョンモくん、大きなプレゼントをもらうためには、ただというわけにはいかないよ。君が何かいいことをした方がいいんじゃないかな。」

当時幼稚園に通っていたキョンモには、ごはんを食べる途中で吐き出してしまうとか、幼稚園へ行きたくないと駄々をこねるなどのいくつかの悪い癖があった。私はそのうちいくつかを挙げて、一つだけを直してみないかと提案した。しっかり直すことができれば、お母さんが何ヶ月間かお金を貯めて買ってあげる、という前提をつけて言うのである。

このような努力が続けられるなかで、我が家の子どもたちは「なぜ？」という質問をとくによくするようになった。私が何か言うと「いやだ」と背くのではなく、「何でできないの、お母さん？」と聞く。そして母親の説明を熱心に聞く。

それは私もやはり同じである。何か一つをさせるにも、なぜそうしなければならないのかという正当な理由を説明する。部屋の掃除一つでも、「お手伝いのおばあさんが大変でしょう。それに君たちがこうやってあちこちにおもちゃを置くと後で探すのが大変でしょう？」と言ってやる。もちろん、私がこのように言うと、子どももやはり理由を挙げて拒否する時がある。

「今は眠たいから後でするよ」、「今おもしろい漫画をみているから、これが終わったらするよ」と。

子どもがこのように理由を挙げるとき、それが言い訳のようにみえても、いったんは聞いてやる。その後、自分の言ったことを守るかどうかを見るだけである。

母親がその程度してやるだけでも、子どもは頭ごなしに叱られてわかるより、もっと多くのことを学ぶ。この世では願っていてもかなわないこともあるということ、そして願うことを成し遂げるためには何らかの努力が必要なこと、は言うまでもなく、他人の見解が自分の意思と食い違う時、適切に調和させる社会性もこの過程を通して学ぶのだ。

それだけではない。妥当な交渉案を用意するため、子どもは論理的に理由を考え、これを言葉で表現する方法を学ぶ。そうなると基本的な道徳性はもちろん、思考力など母親が望むIQの伸長とも関連したあらゆる機能もともに育つ。

そのような側面から下の子を見るとびっくりする時がある。私は下の子のことを「交渉の鬼」というほどである。

下の子は、友達が大好きだ。その中でもとくに一人の子に情を注ぐタイプであるが、その度が過ぎて、友達の家へ遊びに行くと日が沈んでから帰ってくることが多い。

子どもの立場では、自分が好きでそうするのだが、その家の母親の目によく見えるはずがない。私もそれが気になり、いつかはその母親に一度会おうと思っていた時、連絡が来た。いよいよ来るときが来たなと思ったが、意外にもその母親の声はとても明るかった。

「チョンモ君は、やらせてもいないのに、どうして部屋の掃除をしようと思ったのでしょうね。お宅でそう教えているのですか？」

私はその友達の問題で実は一度も下の子と話を交わしたことがなかった。子どもは母親とふだんしていた協議（交渉）を根拠に、「ぼくがこの家で遊ぶためには、友達のお母さんの気に入られなきゃ」と、自分なりの解決案を準備したのである。

誰かが強制するのではなく、自ら考えて会得することは尊い。しかし、いつでもその方法を使えということではない。子どもが理解する・しないに関係なく、一方的に教えなければならないこともあるためだ。他人を殴ってはいけない、物を盗んではいけないなど、必ず守っていくべき常識のことである。親は、社会の中で生きていくためのこのような大きな枠（ルール）だけは、きちんと教えなければならない。

この前、小学校３年生の上の子がインターネットの成人サイトを見ているのを偶然目撃した。非常に驚いて聞くと、友達の中でこんなのを見る子がいて自分も一度見たかったという。

この場合は妥協できることではない。一方的ではあるが、いけないとしっかり教えなければならない。この時はためらってはいけない。この時、親が揺れる様子を見せると、子どもの頭の中で持続的に未練が残るからである。したがって、なぜいけないのかを子どもの視点からも明らかに説明してやらなければならない。

「その絵はあまりも刺激的だから、君が一日中そればかり考えてしまうこともある。そうすると、ほかのことはできないでしょう。そうなってもいいの？」

「それじゃあ、友達は何でこんなのを見るの？」

「それはお友達のお父さん、お母さんが間違ったの。すぐに止めさせるべきなのに、それができなかったの。でもうちでは絶対だめ。君がこの家で住むためには、この家の法に

従わなきゃ。」

協議や交渉ではなく、一方的に教えた経験があるとすれば、このようなものである。コンピュータの部屋へ一人で行ってはならない、怠けてはならない、対価なしに何かを得ようとしてはならない、などもそれに含まれる。

しかしこれが可能になるためには、子どもと親の間に信頼がなければならない。親がある原理を一方的に教える時、すなわち「訓育」をする際に、ふだんうるさく叱る親の下で育った子どもは、それを小言と聞き流す。このような子どもは大きくなって思春期になると、親の言葉をあざ笑って聞き流す、「怪物」になってしまうことがある。

ところが、ふだんから親と話し合いをして親の配慮をよく感じて育った子どもは、親が一方的に何かを強要する時、それが気に入らなくても「本当にこうしてはならないんだ」と心の底から従うことができる。

それで私は、母親にこのようなことをしばしば言う。

「子どもを訓育することは、とても小さい時から築いてきた親と子どもの良い関係を少しずつかじって食べることなのだ」と。

子どもを育てていると、勉強をさせ、学校にも行かせ、友達の付き合いにも干渉することになる。しかし、子どもの立場からみれば、これらは絶え間ない統制である。勉強をしたくてする子どもはどれだけいるだろうか。

子どもが大きくなればなるほど、親は子どもがしたくないこと、守りたくないことを教えることになる。こうしたしつけが子どもに正しく伝達され、他人の言うことは聞かなくても親の言うことは聞くようにするその力は、初期に親が子どもの言葉を絶えず聞いてやり、配慮していた親の姿勢から始まる。

我が家の子どもたちは、私がたまに鞭打ちをしてもその理由がしっかりわかる。自分が本当に間違ったことをしたから叱られたのであり、絶対母親が自分を愛していないからではない事実がわかるのである。私がもし子どもたちを交渉のテーブルに導き、折衷案を模索する練習を怠ったならば、そのような結果は得られなかっただろう。

子どもが何かを必要とする時、そして母親の意思に逆らう行動をとる時、いったんは子どもの言葉を聞いて協議（交渉）をしてみよう。子どもに「なぜ？」という疑問を引き出させることによって、子どもが傷つけられず、その状況を理解できるようにするのだ。そうしないと、子どもは無条件に教えようとする母親を遠ざけ、結局、その時期ごとに必ず学ぶべきことも避けてしまうような恐しい結果を招くかも知れない。

子どもをユーモアの海へ入れよう

３年前小学校に入学した時から、キョンモはさまざまなことで私を学校へ呼び出させた。大きな問題は起こさなかったが、一風変わったところのあるキョンモの行動が、もしかして先生や他の子どもたちに受け入れられなかったらどうしようかと、入学するときから常に気を揉んでいたところだった。

入学してまもなくぶつかった問題は、給食であった。とくに触覚が鋭敏なキョンモは小さい時からごはんを食べる途中、口の中におかしな――何の根拠でおかしいと感じるかは

わからないが―― 何かを噛むとすぐ吐き出したりした。いくら食べさせようとしても自分が嫌いなものは絶対口にしないので、脱水症状まで起こしたほどであった。

そうした子どもが学校へ入り、さまざまなおかずがが出てくる給食を食べるはずがない。先生は偏食をするキョンモに「何でもよく食べないと、栄養をしっかり取れないよ」と強いて食べさせようとし、キョンモは死力を尽くして抵抗した。

結局、私が先生を訪ね、当分は子どもの為すがままにして欲しいとお願いした。無理に食べさせようとすれば、食べていたものまでも口にしないことが火を見るより明らかであったからだ。

キョンモの担任の先生からまた電話がかかってきたのは、そういうことがあってからあまり日が経たないうちであった。今度はまた何のことだろう？

先生の話は、キョンモが授業時間に集中していないとのことであった。しっかり勉強しないと進度に追いつけないのに、キョンモが勉強時間になると他のことを考えているというのだ。言い聞かせてみたり、誘ったりもしたが、表情一つ変わらないので、どうすればよいかとのことであった。

キョンモのそのような気質をよく知っていたので、ふだん私は母親としてより小児精神科の医師として、あらゆる治療を試みていた。ところが、いざ私の耳でそういう事実を聞くと、腹が立つとともに本当にいらだってきた。

その日の夜、私はやはり勉強には目もくれず、遊びに夢中になっている子どもにこっそり近寄った。

「キョンモくん、勉強はしたの？」

返事は返って来ない。もう一度聞いた。

「もうやめて勉強した方がいいんじゃないかな。」

依然として反応のない子ども。徐々に腹が立ってくる。それでももう一度我慢してから優しい声でまた声をかける。

「キョンモくん、お母さんの言うことは聞かなきゃ。」

やはり返事はない。

ここからはもう小児精神科の医師ではない。言うことを聞かない子どものためにひどく腹が立った平凡な大韓民国の母親である。怒り心頭に達し、大声を出そうとした途端、しまったと思い息を飲み込む。また、失敗するところだった。

もう一度失った理性を取り戻し、一歩後ろに退く。そして感情が落ち着くのを待つ。

「どうすればよいか…。」

夕飯の仕度をしながら、子どもが傷つかないように私のメッセージを伝える方法を模索する。頭の中では続けてそういう思いをしながら…。

食事時間だけは、絶対怒るとか大声を出さないのが、我が家の規則である。家族が集まる唯一の時間であるだけに感情を傷つけられることなく、楽しく過ごすことにしている。

こうしてごはんを食べて子どもとテレビの前に坐った。ちょうど子ども向けのドラマをやっている。同年輩の子どもが出るドラマなのでキョンモが面白そうに見ている。私も坐って見ていたが、はっと気がついた。これだ！

「キョンモくん、ドラマの子は君よりひどいんじゃないの。そうでしょう。」

「なに？」

「きみ、さっき宿題したくなかったでしょう。でもじっと見てたら、君よりひどい子もいるんだね。」

いきなり子どもが母親の言う通りだとケラケラと笑う。そこで私は一言加える。

「あの子のお母さんはどんな気分だろう。あの子、もうすぐひどく怒られるだろうね。」

「そうだね、お母さん。あの子これからすごく叱られるよね。」

少し前まで母親と目も合わさなかった子どもが、母親の冗談交じりの一言でニヤニヤと笑う。

「もうわかったよ。」

ドラマが終わると、キョンモは何気なく自分の部屋へ入り本を開く。鼻歌まで歌いながら。

このようにして、いったんほっとひと息ついた。子どもが一日で変わることはないが、一度だけでも母親のメッセージをきちんと伝えられたら、それで足りる。それに子どもの気分は少しも損なわなかったから、それより効果的な方法はないだろう。

大変気難しいところが多いだけに、キョンモに接する時にはこのようにはらはらすることが一度や二度ではない。一日中病院の仕事で疲れて家へ帰ってきたのに、子どもの面倒を見てくれるお婆さんから子どもが問題を起こしたことを伝えられると、俗な言い方で「理性を失う」。でも叱るのも一度二度で、子どもと言い争っていると私だけが力が抜けてしまう。それで子どもがよくなるかというとそうでもない。叱られるとしばらくの間は聞いているようだけれど、一日過ぎると以前と全然変わらない。

しかし、そうこうするうち私にも自分なりの対処法ができた。いわゆる「笑いにまぎらわして言う方法」である。経験をした母親はわかるだろうが、母親の言うことをすぐ納得する子どもはそんなに多くない。気質的に素直な性格をもっている子はわからないが、成長途上の子どもがほかの人の言うことをよく聞くことは、かえって異常である。さらにキョンモのように自己の世界が強い子どもには、そのようにぶつかる方法は、反って逆効果を招くだけである。

それで私はある時からキョンモを笑わせはじめた。遠回しに誰かになぞらえるやり方で、キョンモの行動自体は指摘しないで、子どもに自分の行動を振り返らせることである。

ユーモアは人間が直面した状況に対する精神的防御の中、もっとも上位の能力である。不快なことが起きた時に、感情のまま仕返しするとしたらどれほど苦しいだろうか。何かよくないことには気持ちの悪い感情も随伴するのが当然である。その時、その感情を中和させるのがユーモアである。事実自体は認めるが、その事実に随伴された感情は希薄化させるのである。

だからユーモアは、相手の気分を損なわないようにしながらも、伝えようとするメッセージだけは正確に伝える。子どもを育てる母親にユーモアの必要なのはそのためである。西洋の諺に「笑うことができない人は、子どもを産まないように」ということばがある。笑いは子どもを育てるのになくてはならない親の美徳だということだ。

これは、科学的にも本当に正しい言葉である。母親の気分の状態によって子どもの情緒も変わる。憂鬱症に苦しんでいる母親の子どもは百人いれば百人、情緒上の問題を起こす

のはそのよい例である。

そのため、私は家でだけは絶対浮かない表情をしないように注意している。そのためか子どもたちも家にいる時には表情が明るく、気分も安定していることが多い。もちろん、子どもの明るい微笑みを見ていると、私の笑い声も一層大きくなる。

ただ、常に注意するのは、ユーモアを繰り広げても、その中で子どもをけなしてはならないということだ。

ユーモアは大きく二つの種類に分けられるが、その一つが相手をけなして笑わせるユーモアで、もう一つは自分をおとしめて笑わせるユーモアである。相手をけなすユーモアは、その時は笑わせることができるかも知れないけれど、相手に深い傷を残す。しかし、ユーモアを繰り広げる当事者が自らを笑い飛ばすユーモアは、自分自身さえよければ相手に何の被害も与えない。

もちろん、子どもと母親をともにけなさないユーモアがもっともよいが、その程度の技術がなければ、母親自身が笑いのネタになろう。私もこうした理由で子どもの前で「間抜けなピエロ」になったことが一度や二度ではない。

これは大変でも面倒なことでもない。キョンモとひとしきり笑うたびに、私は子どもを育てるのに必要なエネルギーが新たに充電されることを感じる。こんなに笑うことができれば、子どもを育てることはそれほど辛いことではないという思いがどこかしてくるのが不思議である。

鉄筋のように重い育児の負担感を、羽のように吹き飛ばしてしまう魔術、それがユーモアである。

子どもにとって理由がわからない時期には、親が「我慢」しよう

この前から、下の子が遊び方式の教材で数概念を勉強しはじめた。自分の兄が勉強するのを見て自分もすると騒いだので、週末に少しずつ時間を割いて私が直接教えている。

ある日、テキストを見ていたチョンモの表情がむっつりとなった。何か理解できない時に出てくる癖である。どこで詰まったのだろうかと思い、テキストを見ると、左のページに帽子から靴下までさまざまな色の服を着ている子どもが描かれていて、右側のページにはその子どもが着ている服とその色がそれぞれ別に描かれていた。

「ふうん、この子が着ている服と同じものを探し当てるんだな…。」

たとえば、絵の中の子どもがはいている青色の靴下を見て、右側で「青色」と「靴下」の形をつなげて「青い靴下」を考え出せばよいものであった。とても単純なものだが、チョンモには意味がよく理解できないようだった。

翌日、小学校１年の子どもに同じ問題を解かせてみた。その子どもは説明も聞かず、「こんなの簡単だ」と言い、すぐやってしまった。

すべての発達がそうだが、とくに認知発達の場合は、ある時期になってこそ可能になる。いくら訓練をさせても、ある時期に至るまではできないことがあるということだ。

これを主張した代表的な学者が、私達のよく知っているピアジェである。彼によると、

学齢期前、すなわち満６歳までにはエネルギー保存の法則や集合概念のように高次元の思考力を要する概念は理解し難い。すなわち、一度に一つの次元しか認識できないのである。我が家の下の子が「形」と「色」を一度に一つしか認識できないのは、子どもの学習能力が劣っているのではなく、発達上当然のことであった。一度、考えてみよう。７ヶ月の赤ちゃんに歩けと言えば、その赤ちゃんはパッと起きて歩くことができるだろうか。

このように目に見える身体発達は、それぞれの成長段階があるということはよく受け入れられるが、情緒や言語、認知などの発達についてはその過程も知らないまま、無理に子どもに強要する場合が多い。子どもができないと、能力のせいだとか、やる気がないと思うばかりで、まだその時期になっていないからできないのだとは思わない。

要はこうした学習だけでなく、子どもの全般的な生活の面でも、母親の無知からはじまる強要と制裁があることだ。人間性の正しい子どもに育てたい思いで、母親たちはとても小さい時から生活習慣のしつけをし、世の中の規範を教える。

信号の前に立っていると仮定してみよう。母親たちは子どもに信号が青の時に渡らねばならないと重ねて強調する。子どもが信号が赤の時に渡ろうとすれば、お尻を叩いて「お母さんが渡っちゃダメと言ったでしょう！」とどやしつける。子どもが赤信号の時渡るのは、母親の言葉を無視したからではない。なぜ止らなくてはいけないのかをきちんと理解できていないからである。幼い子どもに「なぜ青の時に渡り、赤の時には渡ってはいけないの？」と聞いてみると、出て来る答えはただ「お母さんに叱られるから」である。小さな子どもには、間違うとけがをするなどの観念が未だに頭の中にできていないのである。

食堂で泣きわめいている子どもがいると、よく「しつけが足りない」と言う。そして、母親たちはごはんを食べかけている子どもの腕をつかんで、見ている人がいたたまれなくなるほど叱りつける。

もちろん、公共の場所で子どもが他人に迷惑をかける行動をすることは、防いだ方が良い。しかし、そうだとしても子どもにあんたが間違っていると言ってはならない。なぜダメなのかへの概念がない子どもにそんな言葉が何の役に立つだろう。

しかし、母親のなかにはとくに道徳概念や良い子シンドロームにとらわれ、子どもを一方的におさえつける人がたまにある。そのような母親に私が言う言葉がある。

「子どもがわからないのなら、あなたが我慢したらいい。」

子どもが、理由がわからなくてどうしても母親の言葉を聞かない時には、ただ我慢して待った方が良い。よけいな執着を捨て、適当に保護するというラインから子どもが願うことを聞いてあげると、よくなるということだ。

ただ、もう少し欲を出して教えたいなら、先述の “One step ahead” 原則を使えば良い。多くではなく、一歩だけ先に立って教えれば良い。必ずそうすべき時には指摘するが、急に引っ張るとか、あまり先走らないのが常に重要である。

たとえば、子どもが 15～20 ヶ月位になると、物を買うのに面白味を感じはじめる。おもちゃの店に連れて行くと、車もつかみ、人形もつかみ、飛行機もつかみ上げる。

敏感な母親であれば、こんな時に葛藤がおこるだろう。「さぞや欲しくてそうしているんだろうな」という理解する心と、「このままにしておくと癖になるのでは」という心の間で。

しかし、大体の母親たちは子どもの手を叩いて、「ダメ！」とどなりつける。そうすると、子どもがうなずくだろうか。絶対そうではない。子どもは我を張って泣き、母親はそうした子どもをもっと大きな声で叱り、その時からいわゆる戦争がはじまる。

私の子どももやはり18ヶ月頃になると、とくにあれこれ買ってほしいとねだることが多くなった。陳列棚であれこれのものを一度につかんでしまう子どもをみて、当惑しない親はない。しかし、私はいったん子どもがするまま放っておいた。その時期には元来そのような特性を持ち、それを母親がよく調節してやると、子どもが世界に自信を持てるようになることを知っていたからである。

ただ、子どもがあまりにも多くのものを一度に買ってほしいとねだる時には、このように言ってやった。

「これは、明日買おうね。今日一日でこれ全部を持って遊ぶことはできないから。」

自分で考えてみても、母親の言うことが正しいと思ったのか子どもがうなずく。しかし翌日もその後も、私は絶対その店のあたりには行かない。子どもは単純ですぐ忘れるからである。それでも子どもが忘れず覚えていた時には、買ってやった。ただ、その時にはなぜ必要なのか必ず聞いた。

「なぜ赤い車を買ってほしいの？」

「僕には赤い車がないの。」

無条件に欲しがることですむのでなく、自分なりの理由がなければならないという程度は知らせてやりたいとの考えからであった。

それから何日か後、甥たちをとても可愛がる小姑が、うちの子どもたちを連れてスーパーへ行った。

「おばさんが買ってあげるから、食べたいもの何でも選んでいいよ。」

ところが、子どもたちが手に持っていたのは、それぞれお菓子一袋だけであった。

おじいさんやおばあさんがおもちゃを買ってあげると言うと、ある時には要らないと言うこともある。周りの人たちはとても不思議に思うようで、まだこんな幼い子どもにどうしてそれができるの？と私に聞く。

答えは非常に簡単である。よけいな制裁をしていないからである。今は、我が子たちは自分が必ずいるものでないとあえてほしがらない。必要になったら、またもらえるという信頼感と自分の意見が常に受け入れられているという満足感が、子どもにそのような余裕を持たせたのである。私は、このように子どもから「忍耐の美学」を学んだ。

今も私は子どもの行動に対していったん「我慢」することが多い。必要以上に制裁しなくても、何かを教えようとしなくても、いったんこちらが「我慢すること」だけで教育の半分は成し遂げられるということがわかるからである。

「見せてやる」ことの威力は思いのほか強い

「お母さん、お婆さんの具合が悪いから、母さんがお皿洗いして。お母さんはお婆さんより若いから大丈夫でしょ？」

玄関の戸を開けて靴を脱ごうとすると、上の子が私の前に立ってそう言う。私が何か聞き違えたかと思い、子どもにまた聞いて見た。

「お婆さんが風邪を引いたんだ。お母さんがお皿洗いして。」

この子が本当にキョンモなのか。昨日までごはんを食べなくてお婆さんを困らせていた子なのに。

ふだんとは違うキョンモの前でしばらく感動してたたずんでいると、そばにいたベビーシッターのお婆さんがそっと私の手を引っ張る。子どもから見えない台所へ私を連れて行って、お婆さんは話しはじめた。

風邪気味なので休んでいると、キョンモが来てお婆さんの手を引っ張ってタンスのところへ行ったという。そして常備薬を入れてあった薬箱を取り出し、「お婆さん、これは熱を下げる薬で、これは咳止めの薬だよ」と、ひとつひとつ取りまとめてくれた。そして一日中、お婆さんの後を追い回しながら、仕事をしないで休むように、と言ったという。最初はこの子が何かいたずらをするかと思ったが、子どもの表情があまりにも真剣だったので涙が出そうだったという。

私がキョンモの行動を不思議に思ったのには、理由があった。小さい時から日中はお婆さんに世話をしてもらったキョンモは、とくにお婆さんにあれこれねだることが多かった。幸い、その方がとても優しくて経験の豊かな方だったので、そうしたキョンモの行動は大きな問題にはならなかった。しかし、子どもが幼稚園へ通う頃だった。

ある日の食事の時、駄々をこねていた子どもが、いきなりのどが渇くと水をほしがった。

「水は冷蔵庫の中にあるから、出して飲みなさい。」

当然、自分でできることをさせたかったのだが、子どもはこう言った。

「いや！　何で僕がするの。お婆さんがやってよ。そういうことをしてくれるために、お婆さんは僕の家にいるんじゃないの？」

５歳の子の口から、それも私の子どもの口からそういう言葉が出て来るとは。瞬間的に多くの思いが頭をかすめた。

「これまでの私の育て方が間違っていたのではないか。子どもの心に傷をつけてはならないと思って子どもの意思を尊重してやったのが、結局この子を『悪い子』にしたのではないか。」

子どもがこのように否定的で、偏見にとらわれた考え方をするようになったのは、母親の態度が少なからず影響しているのだと思い至ると、過ぎ去った日々を後悔した。

「これからは正しく育てなければならない。」

私は気を取り直して、説得に入った。

「君を世話してくださる方にそんなこと言ってはダメ。君はお婆さんが仕事しているとき手伝ってあげようとは思わないの？」

「わかんない。」

聞く素振りも見せない子どもを見ながら、焦る気持ちにとらわれた。その年齢なら、もうすでに性格形成はもちろん、さまざまな面で自分の枠を決めていく年齢ではないか。直すにはあまりに時期が遅いのではないか。

しかし、いくら叱って説明をしても、子どもの行動はそれほどよくならなかった。夫とも相談したが解決案が出ず、キョンモを本当の孫のように可愛がってくれるお婆さんに非

常に済まない気持ちになった。
私は子どもにお婆さんを大切にするように促す一方で、自分自身がお婆さんによくしてあげようと努力した。このように気をもませたのが２年前。だから急にキョンモの行動が変わったのを見て、驚いたのは当然であった。

子どもたちは生まれた瞬間から、快速艇に乗ったように身体的にも精神的にも非常にすばやく変わっていく。それが子どもの最も重要な特性である。そんなつもりで見ると、おとなの目にはその変化がまるで「粥がたぎる」ようにみえることもある。それが当然の成長過程であるにもかかわらず…。言うことをよく聞いていた子どもが、いきなり駄々をこねるのも、そして自分のことしか考えていないようにみえるのも、この世で自己存在を認識し、自我を探して行く過程なのである。こうした発達過程で現れる行動は、強制的に親が矯めることもできないし、子どももやはり言うことを聞かない。
実際そうだとしても、親の立場ではそれをそのまま見逃すことはできない。それでいらいらする母親たちに私は言う。
「あなたが、子どものモデルになるんですよ」と。
何か直してやりたいことがあれば、今すぐ直そうとせず、時間をおいて行動で見せてやるのだ。それを見るだけでも学べるように。
多くの母親たちは「礼儀をわきまえないとダメ」と言いながら、本人はそう行動しない。友達とけんかしてはとダメと教えながらも、電話で近所の人と大声でけんかする。
我が子が突然お婆さんに優しくなったのは、子どもがある程度成熟した思考をもつようになったからでもあるが、私たち夫婦が子どものモデルとなったことが大きく作用したと思う。
もちろん、それ以前からお婆さんに丁寧に暖かく接していたが、子どもの態度が悪くなってからは、もっとその方によくしてあげるように努力した。具合の悪いときには薬をあげ、おいしいものがあれば子どもの前でいつも先にあげた。
陳腐に聞こえるかも知れないが、子どもは親がすることをそのまま見て学ぶということは不変の真実なのだ。「～しなさい」という言葉を通して学ぶよりは、母親の言葉つき、行動一つ一つを見ながら子どもはモデルにするということだ。
子どもを押し付けてコントロールしようとしてはならない。そして子どものもつ本性である変化それ自体を認め、それが成熟に至る過程であると考えよう。そうしながら考えることは「私は今日、子どものモデルとして正しく生きたのか」である。子どもは、今この瞬間にも、母親の姿を見つめているという事実を忘れないようにしよう。
「見せてやること」の威力は思ったよりずっと偉大なのだから。

平行線の美徳を学ぼう

小児精神科医として私は、これまで多くの子どもたちに出会ってきたが、診療室のドアを開けて入って来る子どもたちを見るたびに、新鮮な思いがする。それで私は毎朝、今日はどのような子たちが私を訪ねて来るか気になる。今日訪ねて来る子どもたちは、あまり

症状の重くない子たちであってほしいと望みながら…。

月曜日の朝、私を訪ねてきた最初のクライアントは、３歳のちびっこ紳士だった。顔にいたずらっ気が溢れているそのちびっこは、入るやいなや、診療室を見回して特有の好奇心が発動したのかあれこれ触りはじめた。

「じっとしなさい。」

子どもの手を引っ張る母親の声。それでも子どもは椅子に坐ったまま、ずっと手と足をごそごそ動かす。

「先生、この子はこうなんです。一度も私の言うことをきちんと聞いたことがありません。」

母親の言葉を借りると、やらせることは絶対しないで、やらせてもないことばかりして、しばらく目を離すともういたずらをしている子どもであった。性格的に何かの問題があって、このようなことをするのではないかと哀訴する母親。

いったん、私は母親と子どもをプレイルームに招じ入れた。入るやいなや、子どもが銃を片手に取って、床を叩きはじめる。

「やめなさい！」

外から観察するプレイルームの光景は、まさに修羅場であった。しかし、じっと見ていると、子どもより母親がもっと興奮している。子どもが少し動いても緊張する様子が、申し訳ない表現だけれど、羊を追い立てる犬のように見える。

プレイルームから出てきた母子の様子は、非常に対照的であった。母親はまるで山登りにでも行ってきた人のように額に汗をかいていて、子どもはけろりとしている。あれこれ話した末、私が出した処方は次のようなものであった。

「お母さんが、生活態度を少し変えた方がいいでしょうね。」

それを聞いた母親は私をにらんで、「子どもに問題があって来たのに、私が変わるべきだというんですか？」と問い詰めた。

「また、始まるんだな…。」

興奮した母親を落ち着かせた後、「お子さんには大きな問題はないので、お母さんが少し気持ちを変えればいいんです」となだめても、手のつけようがない。

結局、その母親は後でまた来ると言い、子どもの手を引っ張って出て行ってしまった。

子どもと葛藤がある場面を考えてみよう。なぜ子どものことで大変なのか。率直にいって、それは子どもが親の「思い通り」にならないからである。

こうした時、俗に言うなら、親たちは「発狂する」。子どもの精神的発達について勉強をしていなかった時分の私もそうだった。お腹を痛めて産んだ子どもが大きくなって、言うことを聞かない時、本当に「胸の中から火が出る」ような心情だった。私の意思に合わせようと子どもをあやしてみたり、叱ってもみた。ところが何も変わらない。ただ疲れ果てた母親の心が残るだけであった。

いつも同じ失敗が繰り返される時には、自分が知らない他の要因があるのではないかと、全体の状況を点検してみる必要がある。どんな方法を使っても子どもが言うことを聞かない時は、子どもだけが悪いのでなく、何か他の理由がある。それではその理由とはいったい何だろう。

小児精神科医をしながら、私が一番大きく悟った点は、「子どもはどの方向へ跳ねるかわからないラグビボールのような存在」である、ということだ。

成長期の子どもたちは母親がいくら神経を使っても、よく病気にかかる。風邪もよくひき、転んであちこちけがをすることも多い。なぜだろう？　まだ免疫器官や身体のあらゆる機能が完成されていないので抵抗力が劣るためである。

情緒上の発育も同じである。自我が発達していく幼児期には、いくら親の思い通りにさせようとしても、子どもは絶対それに従ってくれない。世界とぶつかりながら、あれこれ経験するのがその時期の子どもたちの本能だからだ。時にはそれが親の目にはおかしく映り制裁を加えるが、本能の次元で起こるそれらの行動は、そうしたとしてもなくならない。

このような発想の転換があるまで、私もやはり多くの感情的な葛藤を経験した。子どもの寝顔を見ていると、わけもなく「この子は私がやらせることであれば何でもやってくれる」ような幻想にとらわれることがある。それなのに、子どもの口から「いや！」という言葉が出てくると、「また自分のお腹のなかに戻してしまいたい」心情となった。このように送った時間が数年。子どもとともに過したその時間は、どれほど忍耐と苦しみの歳月だったであろうか…。

この心は、最後まで子どものことを諦めない力にもなると同時に、子どもと母親自身を台無しにしてしまう毒になることもある。

それが毒と変質されず、「力」そのものとして残るためには、まず自分と子どもが共生関係にあるという幻想から脱け出さなければならない。そして子どもが遠隔操縦装置で動くおもちゃの車ではないということも、やはり理性のレベルだけではなく腹の底から悟らねばならない。

まず、子どもの心の中をのぞいてみよう。子どもの心が自分の心と違うこと、子どもがそのように行動することは、その年齢では当然であることをよくよく肝に銘じておくことだ。しかし、それは思うほどたやすいことではない。

小さい時から、とくに癇癪を起こすことが多かった上の子は、私が休む週末になるとむずかったりした。母親のことは少しも考えず、泣きながら駄々をこねる子どもを見て腹が立ったことが一度や二度ではない。それだけではない。学校の宿題を母親の言うことは聞き流して、今日、明日と延ばす子どもをみると、知らず知らずのうちに「憎らしい」という思いが浮かんでくる。

しかし、いったん家を離れ、病院に戻って来て多くの子どもたちに会ってみると、そのような感情はある程度は冷めていく。すでに統制線の外へ出てしまった私の意志を周囲の状況が直してくれるのだ。

それで、私は母親たちに「自分だけの精神的な空間」、「子どもへの度の過ぎた執着を緩和させるほかの世界」を持つべきだと言うようになった。

これは決して子どもを遠ざけるように、という意味ではない。育児自体を避ける方便でもなければ、ほんの一瞬の解放感のための断片的な方便もない。「子ども」という井戸に閉じ込められている自分自身に、持続的に流れる活力の素を探すべきだ、ということだ。文章を書くことでもよいし、ボランティア活動でもよい。どんなことでも何か自分に合った活力の素を見出した時、はじめて子どもによる葛藤をやわらげることができるということ

だ。そしてまた笑いながら子どもを見つめる力を得ることができる。

私の知るある母親の例を挙げてみよう。家の事情で短期大学を卒業したその母親は、世間でいう少し釣り合いの悪い結婚をすることになった。夫は一流大出身で、大手企業で認められ、出世の道を走っていた。舅や姑もやはり社会で若い人に劣らない能力を発揮していた。夫の実家の反対を押し切って結婚した彼女。結婚後、彼女は仕事もやめた。そして子どもを産んだ。自らを「能力のない女」と考えた彼女は、子どもにどれほど執着しただろう。

子どもをしっかりと育てなければならないという強迫観念にとらわれ、彼女は何事につけて子どもをいじりはじめた。母親のそうした強圧に耐えられなかった子どもは、とうとう母親の財布に入っているお金を盗むなどの盗癖の症状を見せた。

私のところに来た時、治療が必要なのは子どもではなく実は母親であった。しかし、状況がそうであるにもかかわらず、彼女は最後まで子どもへの執着を捨てることができなかった。

子どもを育てることにおいて、本当の問題の原因は、子どもにあるというより母親自身にある場合がさらに多い。子どもの立場では当然の行動が、母親の執着ある眼からは矯めねばならなく、直すべきことだと感じられるのである。

子どもを正しく理解するために、そして母親自身も幸福になるためには、子どもと平行線の関係に立とう。子どもから一歩退いた時、近くでは見えなかった子どもの心が一つ、二つと感じられるだろう。結局、それこそ子どもをゆっくり育てるために母親がもつべき基本的な姿勢ではないかと思う。

4．こんな時はこんなふうに　―　子どもをゆっくり育てるための申宜真式処方箋

1)　子どもに落ち着きがありません

幼い子どもたちはまだ神経系が未成熟であるため、大人に比べ活動量が多く、物事に集中できる時間が短い。このような特性のため、子どもの行動が正常な発達過程における注意散漫であるか、病的な散漫であるか区別し難い。特に５歳未満ではこうした傾向が著しいが、病的な散漫の原因は次のとおりである。

まず、注意欠陥/多動性障害（ADHD）があげられる。この症状のある子どもは、体質的にほかの子どもより集中力が短く衝動的で、活動量が多い。もし子どもが別に環境的問題もないのに、小さい時から落ち着きがなく、口数が多く、がまんができず、休まず動いているのであればADHDの可能性がある。この時は、専門的な援助が必要である。もし放置すると、学習能力が低下することはもちろん、社会性に問題を起こすか、親との関係にも問題が起こる可能性がある。また、大きくなって非行青少年になる確率が高い。

これは、専門家による診断が可能だが、最近はコンピュータ化された集中力検査があり、薬物治療で70%以上の効果がある。これらの薬品は、食欲低下以外に大きな副作用や中毒性もなく、長期服用しても安全である。このほか、社会性集団治療、親教育、思考力訓練なども役に立つ。

次に、情緒不安障害を挙げることができる。すなわち、情緒的に不安定であるとか、憂鬱で長く集中できないケースである。

こうした子どもは、まず心が安らぐと集中できる。症状としてはいらいらしたり、指の爪を噛むなど少しもじっといられず、手遊びをするのが特徴である。これは、先述したADHDと似ているが、専門家がみれば区別できる。場合によっては、情緒不安障害がADHDとともに現れることもある。

このように病的な場合でなければ、次のような指針が役に立つ。

（1）　勉強する時、一定の時間を決めて周囲の環境を整理した後にさせよう。この時、最初は短時間勉強し、10分休むという式に段々勉強時間を増やすようにする。子どもの習慣になるまで母親がそばについて手伝わなければならない。

（2）　一度に一つだけ注文しよう。あれこれ一度にやらせると、きちんと整理もできずに失敗する。また、指示は簡単明瞭にする。

（3）　できるだけ叱る量を減らそう。いずれにしても子どもには叱る機会が多いので、誉めることの量と叱る量のバランスがとれるようによく誉めてあげよう。小さな間違いはそのままにしておいて、大きな間違いだけ叱ろう。そうすれば親との仲もよくなるから。

（4）　叱ることばかりせず、代案を提示しよう。集中力が落ちる子どもは、深く考えよ

うとしないので失敗した後に、考える機会を与えてもっとよい方法を提示しよう。

（5） 子どもの行動が故意ではない点を理解し、他の子どもと比較しないようにしよう。大きくなればよくなるので、子どもに肯定的期待を持ち、落ち着いてその都度賢く解決しよう。

2) 保育所（ノリバン）へ行かせる時は、どのようなことに注意したらよいですか？

最近、仕事をする母親が増え、子どもがとても幼い時から民間の保育所・保育室（ノリバン）へ行く。母親が家にいる主婦でも、近所に友達が足りないので社会性向上のためと行かせることもある。しかし、子どもが準備できていない状態で無理に行かせると、得るものより失うものの方が多い。子どもを保育所へ行かせる時は、子どもの状態とその保育所がどのような環境を備えているのかを同時に考慮しなければならない。

子どもへの配慮

（1） 子どもの精神的成熟度が、母親と離れて過ごせる程度になっていなければならない。２歳以前の子どもは、母親が目に見えないと永遠にいなくなると誤解し、非常に不安がる。普通の子どもなら、満３歳前後になれば安定して「母親と離れてもまた会える」とわかる。個人差は大きいが、女の子の方が早い。早く成熟する子どもは、２歳前後に通わせても適応できる場合がある。しかし、できるだけ２歳以前には行かせないようにしよう。

（2） 意志疎通能力をある程度もっていないと、自分の意志をきちんと伝達できない。

（3） 他の子どもたちとある程度妥協できなければならない。自分の物に手を出すことを許せなかったり、先生を独り占めしようとしたりする子どもは、保育所に行かせるのはまだ早い。

（4） 大小便を漏らさないで、よく食べて身体的に健康でなければならない。成長期の子どもは、まだ免疫体系があまり発達していないため、多くの子どもたちと過ごすとよく病気になる。したがって、体が弱い子どもは大きくなってから行かせた方がよい。

保育所についての留意

（1）できるだけ先生が多い方がよい。３歳未満の子どもは、少なくとも子ども３～４名あたり先生１人、３～５歳は、子ども７～８名あたり先生１人の配置がのぞましい。

（2） 乳幼児保育を専攻した先生なら一番よいが、何より子どもが好きで心の暖かい先生でなければならない。学習やしつけを重要視する場合はあまりよくない。

（3） 換気がよくでき、できるだけ広い空間がよい。

このような条件が全て揃っていなくても、仕方なく子どもを行かせなければならない場合もある。この場合、いきなり長時間行かせず、最初の何日間かは子どもといっしょに保育

所へ通い、漸次１～２時間ずつ母親と離れて過ごすやり方にして、子どもがあまり不安がらないように適応させた方がよい。この時、先生もやはり子どもを抱っこして親しくなるように特別に配慮しなければならない。

子どもが好んで通っていたのに、ある日突然行きたがらない時は、原因を調べた後、行かせなければならない。癖になるかと思い、続けて行くように強要すると、保育所へ行くこと自体を拒否することもある。原因は必ずある。もしそれが何かわからない時も、忍耐強く何日間か休ませた後、行かせよう。

3) 言葉が遅れているようです

子どもが他の子どもたちに比べ、言葉が遅れていると心配する親が多い。母親によっては、「大きくなるとよくなるだろう」、「この子の父親が小さい時、言葉が遅れていたから、父親に似ているのだろう」、ひどい場合には、「遅れている子ほど後でもっとよくできるようになるのだ」などの漠然とした考えをすることもある。子どもの言語発達が遅い時、あまり不安がるのも、あまり安易に対処するのもよくない。そのままおいていても大丈夫なのかに対する大まかな判断方法は、次のとおりである。

（1） 非言語的な意志疎通は大丈夫か

目を合わす、模倣するなどの、非言語的な意志疎通に大きな問題がなければ、いったんはあまり過剰に心配する必要はない。しかし、非言語的な意志疎通にも問題があれば、自閉症のような発達障害の疑いがあるので、必ず専門機関へ行った方がよい。

（2）認知の発達は正常か

ことばの発達も認知発達を反映するので、知能に問題のある子どもは言葉も遅れる。この場合、全般的に運動面の発達が正常なのか、遊びの水準が他の子どもと同じかを、よく調べなければならない。とくに、言語表現が足りない子どもたちは、遊びの水準をみると、現在の認知発達の程度を推定できる。人形遊びのような想像遊びができず、レゴやブロック遊び、身体遊び、感覚遊びだけに没入しているのであれば、問題があることもある。すなわち、知能が発達してこそ、言語も発達するということだ。私は言語発達に問題のある子どもが来ると必ず知能をチェックする。もし、知能に問題があると、言語治療をしてもよくならない。

（3）情緒的な問題はないのか

言語の発達は子どもの気分の状態に多くの影響を受ける。子どもの不安がひどいとか、子どもに鬱の傾向がある場合、なかなか口をきかず、自己表現をしない。このような子どもたちは大体、聞いてわかる言葉は多いが、言語表現との差は大きい。

私は、気の小さかった５歳の男の子が、幼稚園へ行ってから突然口をきかなくなったケースを治療したことがある。病院へ来た当時、子どもはひどく萎縮していて他人の様子をうかがい、一言も言わず、母親にしがみついて遊ぶことさえもできなかった。その子どもはまだ準備ができていないのに母親から引き離されて幼稚園へ行くことになり、友達にいじ

められ不安になった状態だった。

この子どもは遊びによる心理治療を受けながら、幼稚園をやめて母親に優しく世話してもらった。そうすると、すぐに回復し、今はすべての面で正常な発達を見せている。

このように情緒的原因で言葉が遅れる場合も、専門家に行ってみた方がよい。

（4）社会性の発達に問題はないか

言語は意思疎通の手段として発達するため、他人に別に関心がなければ、言語発達も活発に起こらない。小さい子どもの社会性発達にもっとも大事なのは、主な養育者との関係である。母親との関係が小さい時から円満でないとか、多くの人が順番で子どもを世話せざるを得なかった場合、子どもは他人へ向ける心の窓を閉ざしてしまい、自分だけの世界に閉じ込もる。

母親のマタニティ・ブルーがひどかったり、産後に腰を痛めたり、家に大きな問題があったりで、子どもとの活発な相互作用をしてやれなかった場合、子どもの言語発達、社会性の発達に問題が生じ、病院へ来る場合がよくある。愛着障害、自閉症的だといわれる場合だが、早期に発見されて治療をすると、ほとんど正常な発達での回復が可能である。しかし、子どもの脳の発達がすでに完成した満４～５歳以降になると、後天的な原因で生じた問題であっても、後遺症を残す場合が多い。

子どもの発達に問題が生じたら、ことばの治療や認知面の教育からはじめるよりは、社会性を発達させられる心理面の治療と母親への積極的な援助が特に必要である。家庭環境に問題がある場合、夫と夫の実家の援助なども重要で、家族皆が母親を助けて子どもをきちんと育てられるように努力しなければならない。そうすると、子どもは社会性を身につけながらことばも増え、情緒的にも落ち着いていく。

このように、段階的に言語発達の遅延の原因を調べた後、明らかな理由もなく言語発達だけ遅れていると判明されると、発達性言語障害と診断され、言語治療に入ることになる。もし子どもが中耳炎にかかるとか、風邪をよくひくなら、小さな声をよく聞きとることができないこともあるので、耳鼻咽喉科で聴力検査と口腔検査を受けさせる。

しかし、子どもがまだ満２歳位で幼く、すぐ言葉ができるようだったら、あえて専門機関へ行かず、母親が言語的刺激を適切に与えればよい。この時、子どもに強制的に言葉を模倣させると、逆にさらに口を閉ざす心配がある。

最初には子どもが言葉を話したら、母親がまねしながら少しずつ直してあげよう。そしてあまり長い説明を避けて、子どもが簡単にまねできる単語を反復して話してあげよう。子どもは楽しいときにこそよくしゃべるということを心に刻み、興味を感じる機会を多く作り、気分がよい時、反復的な言語刺激を与える。たとえば、子どもがおもちゃの車に多くの興味をみせれば、「ブーブー」、「くるま」のように単純なことばをよく聞かせると、子どもがまねすることになる。

おもしろい研究結果だが、母親がふだん話す単語数は、子どもの発話量に比例する。正常な脳の発達をとげている子どもなら、周囲の環境によって言語の発達がある程度促されるという意味である。

しかし、最近の母親たちは、言語能力が発達して頭がよくなるからと、とても小さい時から本を読んでやる。しかし、言語は社会的状況で使われた言葉を通してこそ発達するものである。まるで我々が本を通して英語を学ぶと、読むことはできるが、外国人との対話はほとんどできないことと同じである。子どもたちは、実際の状況のなかでの経験を通してこそ、意思疎通に必要な正しい言語を習得するようになることを覚えておこう。

4) 食事の習慣づけがうまくいきません

食事の問題は、子どもと母親の両者にとって重要な問題である。生まれてから母乳でも粉乳でも何でもよく飲んで育つ子どもたちは、母親にとって大きな祝福である。しかし、一部の子どもたちはあまり食べないで眠ったり、繰り返し吐いて母親を心配させる。子どもに別の身体的な問題がなければ、苦労させられても成長するのに問題はない。

本格的に食べることで苦労するのは、離乳食が始まってからである。異なる味や感触、匂いにとくに鋭敏で、離乳食をすぐに受け入れられず、全部吐いてしまう子どももよくある。こうなると、栄養欠乏症にかかるか、強制的に食べさせようとする母親と必死に食べ物を拒否する子どもの間で戦争が始まる。

私は幼い時、食べることを嫌って母親を苦労させた。妹は、魚をはじめさまざまなおかずをよく食べると誉められたが、私は魚の匂いが嫌で、鼻を塞いでむかつきながら、スプーンを口にくわえたまま、機会があると食事から逃げ出していたことをよく覚えている。小学校に通っている時も、なぜみんなはそんなに臭くてまずいものを食べるのかと不思議でならなかった。その結果、体がとても弱くなり、補助薬を飲み続けなければならなかった。私がある程度食べ物の味に慣れたのは、思春期が過ぎてからであった。

このように先天的に食べ物の味に慣れるのに難しい子どもたちがいる。こういう子どもに何かを強制的に食べさせると、親と子どもの仲が険悪になる。ひいては、子どもは食べ物を拒否することによって、親をコントロールする方法を選ぶこともある。母親を怒らせる方法が食べないことだと気づくからだ。

子どもが味覚に敏感な舌をもっているようだったら、栄養のために無理に食べさせようとすることが、子どもとの仲を険悪にすることを一度は考慮することも大事である。

長男のキョンモも私に似ているのか、食べ物に対してとても気難しい子だった。3～4歳までごはんを食べることを嫌い、食事ごとに苦労した。しかし、私は強制的に食べさせるより、子どもが好きな方へと調理法を変えながら食べさせようと努力した。幸いキョンモは、小学校2年の時から偏食が減ってよく食べるようになり、今は結構ぽっちゃりしている。

このように子どもたちは、食べることにも個性があり、年を重ねて慣れる時間が必要である。したがって、それに合わせて習慣をつける必要がある。最初からスプーンを使わせ、規則的に坐って食べさせてもよくついてくる子もあれば、ついてこない子もある。家庭や幼稚園で、しつける意味で食べることを強制すると、反って逆効果があるという点を念頭におかなければならない。

5) 子どもがひどく人見知りします

普通の子どもたちは生後、6～8ヶ月頃になると、母親と他人を区別する。それで他人が接近すると嫌がり、母親にばかりすがりつく。これを「人見知り」と言うが、正常な発達過程に現れる自然の現象なので心配する必要はない。むしろ、人見知りのあらわれないことを、気にしなくてはならない。

ところで、一部の子どもたちは人見知りがひどく、母親以外に誰も自分の体に触れることを許さないとか、慣れてないところへ行くと拒否して泣くので家の外へ連れて行くことが恐いような場合もある。

この場合、環境上大きな問題がなければ、生まれつきの気難しさからはじまった問題である可能性が高いため、徐々に適応させる方向で努力しなければならない。何でも徐々に慣れる時まで待ってやり、子どもが拒否したら一度避けて、また気分がよくなったら再び試してみなければならない。また、年齢を重ねれば少しずつよくなるので、過剰に心配する必要はない。

ただし、このような気質をもった子どもたちは後で不安障害のような情緒的な問題をもつ確率も高いので、ストレス状況に一人で対処できない時には、援助してやらなければならない。たとえば、非常に荒っぽい友達がこのような子どもに手を出すと、大きなストレスを受けて二度とその友達のところへ行こうとしないこともあるので、予め子どもを保護することも必要である。

このような気難しい子どもは、繊細で優しい親に恵まれれば無理なく成長することが可能だが、親の声が大きくてせっかちで、子どもをびくびくさせるなら、不安障害にまでなることがある。したがって、こうした子どもをもった親は、よく自分の性格を知って、子どもに合わせる努力が必要である。

6) 子どもが我を張ります

上の子が1歳ちょっと過ぎた頃、いくつかの単語を学んでいたが、ある日いきなり「食べない」と言って食事の前に、首を横に振った記憶が未だに鮮明である。上の子は小さい時から牛乳、離乳食など食べることを嫌い、なだめながらも強制的に食べさせたことが多かった。最初に「食べない」という言葉を学び、口にしたことから、これまで強制的に食べさせられたことがどれほど嫌だったのか理解できた。しかし、食べ物をみるたびに、「食べない」と逃げ出す上の子を見ながら、むしろ言葉が出ずに与えられるまま食べていた以前の方が、ずっと育てやすかったと思いもした。

このように、子どもの自己主張が強くなればなるほど、親の立場からは感心しながらも、手強くなったぞと思わされるのが事実である。よく親たちは子どもが言うことを聞かず自分の言い分をゆずらない時、「我が強い」と言う。子どもたちのこだわりは、大体その結果が子ども自身にもよい結果をもたらさないため、これを心配する親の制裁が究極的に正しい場合が多い。

たとえば、幼稚園へ行く時間が差しせまっているのに自分の着たい服を着せてくれなかったとか、焼き飯にケチャップで自分の名前を書いてくれなかったと我を張る我が子を前に母親たちは「誰に似てこんなに我が強いのだろう」と険しい顔になるだろう。

しかし、親の立場ではなく、子どもの立場でそのこだわりがどのような意味をもつかを必ず考えなければならない。多くの親たちは、子どもたちのこだわりのため苦労しながらも、そのこだわりの裏に隠れた動機を把握しようとする努力はあまりしない。

しかし、人生は常に相対的である。母親が不便なら子どもも不便である。子どもよりはずっと賢い親が、まず子どもの立場を理解することが、子どものこだわりを正しく扱う第一歩である。

1歳を過ぎると、子どもは自分が母親と違う存在であることを具体的に悟る。いくつかの児童発達の研究成果によると、自我概念は生後約15〜18ヶ月の間に形成される。私は診療室で、その子どもは嫌だという意思表示をどんなふうにするのか必ず親に聞いてみる。子どもが自我概念をどの程度獲得したかを推測するためである。

かすかに自我概念が形成された子どもたちは、首を横に振ることで自分の意図が相手と違うということを表現できる。しかし、まだ自我概念が未分化な子どもたちは大声を出すとか、頭を床にぶつけるなどの過激な行動で表現する。

もっと発達した子どもたちは「いや」、「ダメ」などの言語で自分の意思を表現することができる。この段階に至ると、子どもたちは何でも一方的に我を張ることがひどくなり、「醜い3歳児」という別名をもつことになる。この時期の子どもたちは、自分の意思を主張する能力はあるが賢明な判断力はないため、大人の目にはわがままなわからず屋にみえる。つまり、子どもが新しく獲得した自我を通して初めて堂々と自己主張をするのが、親の目にはこだわりとして映るのである。

しかし、最初から完璧な人はない。子どもたちは未熟な自己主張を続けて行うなかで、自己節制、他人に対する配慮などを次第に学ぶようになる。逆に言うと、こうした機会がきちんと与えられなければ、子どもは永遠に自己主張をしなくなることもある。

このような観点からみる時、「子どものこだわりは最初から確実に絶たなければならない」という、一部の大人たちの主張がどれほど危険なものなのかがわかる。子どもの主張をとんでもないと判断し、一方的に制裁すると、自律的に自分の主張を堂々と行う能力がきちんと育たない。また、自分の自律性が侵害されることに対する怒りが、心中にぎっしりと積み上げられることになる。

私は、小さい時から自己主張ができず、親の言う通りにして来たものの、思春期になっていきなり問題児に急変する青少年たちとときどき接することがある。この子どもたちは、思春期になって自我同一性が台頭する時、これを手に負うことができず、問題行動を起こすのである。

もちろん、そのこだわりが非常に危ないとか、常識を大きく超える場合、制裁をしてたしなめることも必要である。しかし、あまり些細なことまで一々制裁することは、非常に危ないことだということを肝に銘じよう。

7) 子どもが乱暴です

多くの親が「子どもが友達を突き飛ばしてしまう」とか、「思いどおりにならないと物を投げてしまう」と訴える。男の子の場合は特にひどい。

なぜ、小さな子どもたちがこのような行動をとるのか。これに対して学者たちは「人間の性的本能と攻撃性は生まれつきのものだ」と言う。すなわち、人類が長い間進化しながら、敵から自分を保護し、生き残るために持つようになった本能が攻撃性として潜在化されていると言えるだろう。したがって、攻撃的本能が必ずしも悪いわけではなく、人間が苦労しながらこの世を生きるための重要な力なのである。

このような攻撃的本能は、一人で歩けるようになり、意思表示のできる１歳以降に本格的に現れる。最初は、意のままにならないと物を投げたり、噛んだり、足で蹴ったりする行動として現われ、さらに大きくなってからは、意図的に親の言葉と正反対の行動をとるようになったりする。

このような行動を、人間の自然な本能だとしてそのままにしておくべきだろうか。実際、あまり危ない行動でなければ、年を重ねるにつれ、徐々に乱暴な行為はおさまっていく。したがって、適度に自由にしてやるが、あまりにもひどい時には統制する方がよい。子どもたちのもって生まれた本能を一方的に抑圧するのではなく、私たちの風習と社会秩序に合わせて表現するように教えることである。このような親の絶え間ない努力を「しつけ」、「家庭教育」という。

子どもたちの攻撃的な行動をどれほど許容して統制するかは、その家の文化によって異なる。しかし、その過程においては統制と自律のバランスをとらねばならない。

もし、子どもの攻撃的行動に対して、親が妥協するよりも身体的処罰や大声で怒鳴ることで一貫するなら、子どももやはり親のこのような行動を模倣することになる。このような親のもとで育つ子どもたちは、下の子や友達と意見の違いでけんかになった時、親が自分を統制した方法を使うようになる。また、間違った行動を暴力で押さえねばならない子どもに育つ確率が高い。

とくに、攻撃性を適切に処理する技術を学ぶべき２～３歳の子どもをもった親は、「親の行動は子どもの鏡である」という点を自覚しなければならない。

私は攻撃性の発達に問題が生じ、乱暴で反抗的に育った子どもたちによく出会う。子どもたちの癖は初期に直さねばならないという親の考えにより、攻撃的な行動を事あるごとに統制された子どもは、小学校生になって先生に反抗し、友達をいじめる場合が非常に多い。

また、兄が年の差のあまりない下の子をいじめる時、これをひどく制裁すると反抗的な子どもに育つ可能性が高い。また、祖父母といっしょに住む場合、おばあさん、おじいさんは子どもの甘えを無条件に受け入れるが、親がこれに反してもっと強力に統制するようになると、子どもは一貫した統制を受けることができなくなって、礼儀をわきまえない反抗的な傾向を持ちやすくなる。

このような極端な事態を防ぎ、子どもが適度に自分の攻撃性を表現しながらも、節制もできるように育てるには、親が賢く対処せねばならない。子どもが攻撃性を見せはじめたら、「来るべきときが来たな」という姿勢で、親自身の心を落ち着かせることが大事で、子どものペースに感情的に巻き込まれてはならない。子どもが攻撃的な行動をする時、落ち着

いた心構えで優しく制裁し、子どもがこれに従わなくても大目にみてやる余裕をもちながら、それが正しくないのだということを言葉や行動で一貫して表現しなければならない。

大部分の女の子たちは、ある程度の制裁を加えると納得するが、気質の荒っぽい男の子たちは続けて攻撃性を見せることもある。この時は、親もやはり少し強く対応する必要があり、３～４歳くらいになったら、「考える椅子」を部屋のすみにおいて、ひどく乱暴する時ごとに１～２分程度その椅子に坐らせ反省させる。この時、部屋のドアを閉めてしまうとか、部屋が暗い場合、過度に恐怖心を刺激し、子どもが反省する余裕がなくなるから注意しよう。

そして、こうした制裁を加える前に、子どもがなぜ怒ったのか理由を調べてみる。もし周囲の環境の問題や親の勘違いのためなら、子どもに罰を与えてはならない。子どもたちが怒る状況を予め防止することが、子どもが乱暴な行動をしてから、制裁を加えることよりずっと重要である。

8) 子どもがあまりにも気弱です

子どもの気があまりにも弱く、自分より強い子が来ると何でも譲ってしまい、自分の主張ができない時、親の立場からは心配が先立つ。以前ならおとなしいと誉められたような子どもたちが、競争の激しくなった昨今では、むしろ問題になったりする。さらに、子どもを幼稚園へ早く行かせる趨勢なので、気が弱い子どもたちはしばしば傷つけられることもある。

それならば、どのような子どもたちが気の弱い特性を持つようになるのだろうか。大きく二つに分けて考えられる。

第一に、体質的に鋭敏ですぐ不安になる子どもの場合である。このような子どもは赤ちゃんの時からよく驚き、よく泣き、人見知りがひどく、見慣れないところでひどく萎縮する傾向を見せる。

初期の児童発達研究では、気質（temperament）は児童ごとに違い、親はこれを考慮して養育すべきだという結果を多く報告している。この結果によると、子どもたちの中には新しい状況でとくに萎縮し、恥ずかしがり、不安がるグループがあるが、彼らは小さい時から少し驚いても心拍が普通の子どもより多く速くなり、自律神経系が過渡に活性化されるという。また、大きくなってもこのような性向が持続され、成人になると、不安障害、憂鬱症、対人恐怖症にかかる確率も高いという。

このクループに属する子どもの親も、やはりこのような性向をみせる場合が多く、遺伝的な傾向がある。この場合、親はこれを認め、子どもが適応できるように環境的な後押しをしてやることが重要である。すなわち、子どもがよく泣き、よく驚く時、叱ったり腹を立てたりせず、まず子どもを保護し、心を落ち着かせなければならない。

新しい場所では徐々に慣れるように配慮し、あまり嫌がるところには連れて行かないようにしよう。もちろん、子どもが嫌がることを無条件に避けるように、ということではない。ただ、子どもが慣れるのを待つとか、子どもが好きなものを提供して恐怖感を忘れさせれば、新しいところでも適応可能であろう。もし、強制的に適応させようと欲張ると、

子どもが二度と新しいところへ行こうとしないこともある。

このような子どもは、友達関係で消極的なため、社会性を育てるという名目で幼い年齢のときに集団生活をさせられることがよくある。しかし、これは子どもをさらに苦労させ、正常な適応能力を失わせることにもなる。無理して幼稚園や塾などへ行かせる場合、不安障害に発展し、病院へ来る場合もよくみられる。バネをあまりにも強く引っ張ると、その弾力性を失うことと同じ理屈だ。

第二のケースは、小さい時から子どもに肯定的な自己像を植えつけてやらなかった場合である。たとえば、兄弟の中でほかの子どもを偏愛するとか、子どもがみている前で夫婦げんかをして子どもを不安にさせたり、幼い時、長い期間親と離れて過ごしたり、父親が母親を殴打する場面をしばしば目撃するなど、さまざまな環境的問題が原因となる。このような経験が反復されると、子どもたちは「私は誰からも大切にされない子、不幸な子、叱られてばかりの子」と思い、堂々とした自尊感情を育てられない。最近はとても小さい時期から学習をさせるので、学習のなかで子どもを叱るようなことも、子どもの自信感を早期に剥奪する原因のひとつになっている。

このような子どもたちに、「なぜ自信が持てないの！」と叱るとか、これを解決するため活発な運動をさせるなどの方法は、むしろ子どもを萎縮させる。この時はまず子どもの気分を盛り立てるべきである。すなわち、よく誉めてできるだけ叱らないでいると、子どもは徐々に自分に対して肯定的な考えをもつようになる。

子どもが自信感を少しずつ取り戻すと、度が過ぎるほど一方的な自己主張をし、我を張り、親に反抗することもある。しかし、これは子どもが良くなる過程で現れる一般的な現象である。すなわち、長いこと押しつけられて自己主張をできないでいたのが、初めて自己表現をするのだから方法が未熟なのだ。したがって、親はこれまで積もり積もった感情が一度に噴出することによる自然な現象なのだとそのまま受け入れるとよい。充分に受け入れてやると、そのうち子どもも自制できるようになるだろう。たまに親たちはこのままでは子どもの行儀が悪くなるのではないかと心配するが、礼儀は自信感を取り戻した後に教えられる徳目である。

9) 発達が遅れているようです

最近、親たちは子どもがとても小さい時から発達が早いか遅いか、正常か正常的でないかに関心をもつ。そのためか「言葉が遅い」、「認知の発達が遅い」というのが診療室で一番よく聞かれる親の訴えである。

実際、私が児童の精神的発達について専門的知識があるとしても、成長初期にある子どもたちが今後、どのように発達するかは確実に断言できない。ただ、子どもに発達障害があるのか、特別な援助がなくては正常な発達を遂げ難いのかを診断して評価した後、専門的に助けてあげるだけである。正常な児童の場合も、個人によって発達速度が異なり、個性もそれぞれ違う。したがって、特定の発達検査の数値だけで子どもの発達程度を断言するのは危ない。

しかし、多くの子どもたちは病院へ来る前にすでにほかの専門機関に寄り、発達評価、

言語評価、知能評価を受けて深刻だと聞いて来る。そして親たちは「ほかの子どもより言語発達が１年以上遅れている」、「認知発達が６ヶ月遅れている」などの評価結果を心配する。

もちろん、客観的にみて他の子よりも、各々の発達領域でどの程度、発達を遂げたのか考慮することは大事だが、小さい子であればあるほど、その点数自体が一生持続されるとは考えにくい。発達遅延の原因によって予後が違って現れるためである。

子どもたちの発達に影響を及ぼす要素は、子どもが持って生まれたものと、周辺の環境によるものの、大きく二つにわけて考えられる。この二つの要素は、妊娠の時から相互作用するために分離して考えられない。すなわち、生後４～５歳までは脳の構造と機能が早く発達するため、非常に悪い環境で育った子どもは、脳の発達が正常であるはずがない。

反対にいくらよい環境で育ったとしても、生まれた時から脳の発達の問題が深刻である場合、正常に育つことはできない。したがって、児童に発達の問題が生じた時、この二つの要因がそれぞれどの程度問題になるのか詳細に調べなければならない。

「自閉症」という病名は、一般人に比較的、耳に慣れた発達障害の一つである。この疾患は子どもが生まれながらにして脳の発達に問題があって、問題が深刻であるため、母親が上手に育てたとしても社会性の発達と言語発達に障害が発生する。しかし、子どもの不安がひどくて意思表示がきちんとできない場合、脳の器質的問題が深刻でなくても言語発達の遅延が起こる。この場合は不安を早く無くしてやると、正常な言語発達を取り戻すことができる。

したがって、児童の発達が一つ、二つの領域で多少遅れているとか早いとかに大きな意味をおかないで、むしろ全般的な発達が適度に成し遂げられているか、正常に適応するかをみる知恵が必要である。

10）　とくに性に関心が高く、自慰行為をします

人間の性本能は、種の保存のための必須要素であると言える。

子どもは生まれて最初の頃は食べることにばかり関心をもつが、これもやはり本能的行動である。しかし、成長しながら徐々に性器で快感を感じはじめる。乳を飲むと満腹感を感じるのと同じ理屈である。さらにはおむつを替える時、母親の手が性器に触れても快感を得る。

だいたい子どもたちは１歳を過ぎると性器を手で触りながらいたずらをはじめる。この時はほかの身体部位を触るよりもピリピリする快感がくることを感じ、さらに男の子たちは性器をもって遊びながら勃起することもある。この時は慌てず「楽にして待っていれば大丈夫よ」と子どもを安心させねばならない。

しかし、子どもにはこのように身体的に性的快感を得ること以外に、精神的な性発達もともに起こる。詳しくみると、自分が男性か女性かを確実に知る性的同一性（Gender Identity)、女性と男性としての役割を状況に合わせられる性役割（Gender Role)、性的な興奮を感じる対象が決定される性的志向性（Sexual Orientation）などは、正常的な精神的性発達のための必須事項である。

性的同一性は18ヶ月頃から発達し、2～3歳くらいになると自分が男性群に属するのか、女性群に属するのか、ぼんやりとわかるようになり、これに基づいて女性の役割、男性の役割を模倣して学ぶ。小さい子どもたちのままごとをみるとすぐ理解できるだろう。このような発達は、無意識的な学習過程と生物学的要因によって親も知らないうちに起こる。

したがって、子どもたちが小さい時から性的な面に関心が高いのは自然な現象であり、これを度のすぎるほど抑圧すると、正常な性発達の問題になることがある。

ところが、私たち韓国の文化がいまだに性的本能を直接に表現することを禁じているため、大部分の親たちは子どもたちが性的な遊びをすると非常に気にする。この時は、心配することではなく、むしろこれを自然に受け入れて、子どもたちの健全な性発達ができるように正しい教育の場として利用しよう。

ただ、子どもたちが性器をもってひどくいたずらをする時には、子どもに不安感を感じさせない範囲内で適切に制裁せねばならない。子どもたちもいつかは私たちの社会の構成員になるので、ある程度性的本能を抑制し、洗練された表現ができなければならないからである。

この時は、優しくほかのことに関心を誘導したり、「オチンチンを強く触ると痛いこともあるよ」と抑制すると、普通の子どもたちはすぐ止めてほかのことに関心を変える。

ところが、子どもに何か心理的な問題があったり、環境が悪い場合、性器でいたずらすること以外の興味を周辺から探せないで、ずっと性器いじりにしがみつき、時にはひどい自慰行為に発展する。

私は外来でこのような子どもによく接するが、自慰行為以外には生きることの面白さがない子どもたちが非常にかわいそうである。「同年輩の子どもたちは、いろいろな事に好奇心と興味をたくさん持っているのに、この子どもたちはなぜこれに縛られているのだろう」と、もどかしいばかりである。

親が関心をもって子どもを詳細に観察すると、下の子が生まれたとか、母親と離れて祖母の家で過ごすなど母親からの愛に変化がある時、一時的に自慰行為を多くすることがわかる。この場合、環境がよくなると以前のように戻る。

しかし、すでに子どもの精神的問題が深刻な場合、治療プログラムが導入されないと治すことができない場合には、専門家を訪ねた方がよい。子どもたちが一時的に自慰行為をする時には外へ連れていくとか、子どもがとても好きなほかの活動で注意を引く方法がよい。もし、一人で部屋に入ろうとしたら、いつもドアを開けておいてそのような機会を防ごう。子どもをきつく叱りつけて怒鳴るとか、強制的に禁じると、不安な気持ちなり、むしろもっと多くすることになるので注意しよう。

11）兄弟げんかがひどいです

大人たちの予想とは異なり、兄弟愛は単に同じ血を分けたという理由だけでおのずから生れるものではない。むしろ兄弟は親の限定された愛と関心のため熾烈に競争する関係である。とくに、年齢の差が少ないほど、上の子の方に下の子に関心を奪われたことに耐えられなかったための精神的な傷（たとえば、劣等感のようなもの）が深く残る。

このような場合、大人がいない状態で二人だけを家に残したり、上の子に下の子をしばらく世話させることは、回避しなくてはならない。上の子は、下の子に母親の愛を奪われた怒りを自ら抑制できない状況であるため、下の子に悪さをすることもある。この時、親は行動の結果だけで上の子を怒るが、実際のところ責任は親にある。とくに最近、親が店の仕事をしていて上の子に下の子の世話をさせる場合をしばしば見るが、これは非常に危険な発想である。親が見えない状況のなかで、上の子は自分も守ることのできない厳格な規則を適用して、非常に厳しい姑の役をするためだ。

兄弟間のこのような葛藤をなくすためには、基本的に二人の年齢の差が３年くらいなければならない。最近の母親たちは「年の差をおかず産んで、子育てを早く片づけよう」という言葉をよく言うが、これほど危ない発想もない。母親の立場からみても上の子を産んだ後、ある程度身体の回復時間も必要で、上の子の立場からは、下の子ができた時の辛さをある程度耐えられるほど精神的に成熟していなければならないためである。女の子の場合は成熟が少し早いが、男の子は少なくとも満３歳くらいにならないとこのような状況に堪えられない。

これは、二番目の子を産む前に考慮すべき点であり、もしすでに二番目の子がある場合であれば、次のような点を考慮しなければならない。

まず、上の子が小さければ小さいほど下の子が生まれた後、上の子にいっそう気をつかわなければならない。下の子が生まれた直後から、母親は上の子より生まれたばかりの赤ちゃんに気をつかう。よく産後、上の子を親戚の家に預けたり、または家にいっしょにいても母親と離れさせる場合が多いが、この時受けた子どもの衝撃は長く残る。下の子を「母親を奪ったやつ」という考えが、頭に深く刻まれてしまうのである。

この時はむしろ、赤ちゃんの世話をほかの人とともにすることがあっても、母親は上の子の方にもっと気をつかうべきである。

下の子が生まれた後、私は何気なくキョンモが赤ちゃんの時かけた布団を取り出して使おうとした。ところがキョンモがそれを見て、何で自分のものを赤ちゃんにあげるのかと腹を立てた。結局、１ヶ月あまりその布団を上の子がかけるようにし、下の子にはキョンモが使っていた大きな布団をかけてやった。

それだけではない。下の子が生まれて 100 日になる日の写真をみると、その日がキョンモの誕生日ではないかと錯覚するくらいである。主人公の下の子はどこにもみえず、真ん中でキョンモがポーズをとっている。

その後、私は何日間か、寝る時も必ずキョンモといっしょに寝て、下の子が生まれても母親、父親の愛がなくなったのではないという事実を悟らせるため大いに努力した。「キョンモが小さい時はもっと可愛かったよ。キョンモは下の子よりいい子だったね」、というふうに。

このように下の子が生まれた時から、最初のボタンをきちんとかけなければならない。もしこれがよくできていない状態なら、上の子を叱ることでなく、母親の基本的心構えから変えなければならない。

二番目に考えられる方法は、下の子を世話することに上の子を積極的に参加させることである。哺乳瓶で飲ませるのを手伝ってもらうとか、おむつをいっしょに替えさせて、「下の子は、私の助けが必要な存在」という事実を認識させてやると、子どもの行動が大きく

変わる。

そして、最後に最も大事に考えたい点は、弟に意地悪する兄の気持ちを常に理解しなければならないということだ。家族が多かった以前とは違い、最近では子どもたちに愛情を注ぐ存在が、親だけに限られる場合が多い。

したがって、上の子は下の子をみる時、愛する人のために命をかけて戦わなければならない敵と考える。兄弟がいる家でその関係を兄、弟、母親の三角構図で描く場合が多いのはこのためだ。

この時、上の子は自分の心を「退行現象」で現すこともある。母親が食べさせてあげないとごはんを食べようとしなかったり、下の子の哺乳瓶を奪い取り、自分がくわえるというふうにである。この時、母親は絶対に叱ってはならない。「赤ちゃんになりたいの？ お母さんはどうしてあげたらいい？」とあやすべきである。

そうすると上の子は不便を感じてすぐ自ら止めるだろう。一人で食べる時は、あれこれおいしいおかずを食べていたが、母親が食べさせるものしか口にできず、おいしくもない哺乳瓶をくわえているのは、子どもにあまり愉快なことではないからだ。この時、もしも子どもを急き立てると、子どもは自分の切実な願いが伝わらなかったという怒りから、それよりひどい行動をみせることになるだろう。

母親がこのような事実を知らず、ただ目に見える行動だけに執着し、子どもを急き立てる場合、後で友達関係などにおいても深刻な問題が発生することがある。母親から急き立てられることは、子どもにとって下の子と差別されていると感じられるので、友達と付き合う時に、非常に卑屈になったり、これと正反対に強暴になるような異常行動を見せるようになる。充足されない愛情を友達から得ようとするとか、反対にそれへの怒りを友達に表出するのである。

兄弟間の葛藤は、このように子どもの隠れた心が端的に表出される例である。したがって、これを解決するためにはまず子どもの心を理解し、それに対応させて母親の育児態度を点検することからはじめたい。

12）社会性が足りないのか、友達を作れません

最近ようやく、知的発達に劣らず社会性の発達も重要であると言われるようになった。社会性とは他人と交わる能力を言うが、これが形成される根幹には母親との関係がある。子どもは母親との親密な関係を基礎としてはじめて世界について学ぶためである。

したがって、満３歳まで母親と親密に過ごしてこそ、世界や他人に肯定的な期待をするようになる。もしもこの時に問題が生じると、大きくなって友達に関心がないとか、友達をいじめるとか、もじもじしながら問題に対処できなくなったりする。

これ以外に、父親と兄弟との関係もやはり社会性形成に影響を及ぼす。親たちは小さい子どもが社会性が足りない時、友達と付き合わせたらよくなると期待して幼稚園に行かせる。しかし、家で親や兄弟達と関係を結ぶのが難しい子どもを幼稚園へ行かせることになると、友達や先生からもっと大きな傷を受け、世界に対する心の窓を閉ざしてしまうこと

がある。

このような時は、まず家族との関係をよく形成させ、子どもが明るくなって自分の意思をよく表現し、他人と妥協する能力ができた後、幼稚園へ行かせた方がよい。そして、子どもが肯定的自我像を形成できるように、よく誉め、楽しい経験をするように手伝ってあげよう。

ただ、この時子どもを勇敢にさせようと思って、テコンドー塾や雄弁塾などへ行かせると、むしろ逆効果が現れることもあるので、注意すべきである。焦らず徐々に適応させよう。

13）子どもがよく嘘をつきます

子どもたちは自分がどうしようもない状況のとき嘘をつくようになる。小さい子どもたちは大人と違い、世界を客観的、論理的にみることができず、主観的で非現実的な思考をする特徴がある。したがって、ある状況が子どもに不安を起こし堪えられないようにさせると、実際と違う作り話をするようになり、自分でもそう信じてしまう場合もある。

たとえば、ハングルの勉強にあきた５歳の子どもが、母親が出した宿題をしないで遊んだとしよう。母親が子どもに「勉強はできたか」と聞くと「ウン」と答え、持って来るように言われると慌てて「これからする」という状況がよくある。この時、子どもは母親に怒られるのが不安で、いったん「した」と答えるのである。

子どもは後で母親にばれると考えられるほど論理的でないため、危機を逃れるため嘘を容易についてしまう。したがって、幼い年齢でこの種の嘘をつく時、親は「このままにしておくと、永遠に嘘つきになるのではないか」と気にしたり、厳しく責め立てたりするが、その必要はない。もしもこの時子どもを一方的に叱ると、子どもはもっと不安になり、さらに異なる嘘もつくようになる。

しかし、学齢期以降に物を盗んだり、他人の権利を侵害する嘘をつく場合、道徳性の発達に問題があって発生することもあるので、この時は親がこれを矯正させるよう努力すべきである。この時、最初は厳しく叱るとか罰を与えることが役に立つこともある。しかし、親がいくら叱っても矯正できない場合、子どもに精神的な問題があることもある。この時は根本的な問題、すなわち、愛情の欠乏、親の無関心などが原因になったのではないかをまず調べて、これを矯正したらよくなる。

14）子どもを叩くことはどのような影響を及ぼしますか？

叩くことが必ず悪いとは言えないが、できるだけ叩かないでしつけをする方がさらによい。その理由は次のとおりである。

まず第一に、子どもは親の姿をそのまま学習する。したがって、親がよく叩くと、子どももやはり友達との葛藤ができた時、暴力で対応するようになるためだ。

第二に、鞭打ちによって子どもがひどく痛いとか恐い思いをすると、何が悪かったのか考える余裕がなくなる。すなわち、自分の誤った行動に対する反省より鞭打ちで痛く、気分が悪く、親が恐いという記憶がもっと大きくなるということだ。

第三に、子どもを叩いてしつけをすると、これからもそれ以上に多く叩かないと効果がなくなる。反面、よくたしなめて悟らせると、子どもは自ら判断し、悪い行動をしないように努力する。このような現象を「道徳性の内面化」と言うが、鞭打ちをすると、外部の力だけで子どもを統制することになるので、自ら内面化する過程を妨害してしまう。

最後に、よく叩かれると自己像ゆがんでしまう。すなわち、「私は悪い子だから、もう良くなれないんだ」と考え、自信を失うのである。

しかし、それにもかかわらず、必ず叩かねばならない場合がある。子どもの行動は実にさまざまなので、その判断は親が直接すべきである。しかし、この時は次のような点に注意しなければならない。

第一、 怒りを落ち着かせてから叩く。

第二、 また、こういうことをすると２回鞭打ちするというようにあらかじめ警告し、できるだけ同じ場所で鞭打ちの回数を決めて打つ。不意に叩いたり、手をあげることはよくない。

第三、叩いてからは、必ず慰めてやる。そして子どもに叩かれた後の気持ちはどうだったのかを聞く。

15）行儀の悪い子に育つのではないかと心配です

韓国人は昔から「礼儀作法」という概念が頭に深く刻まれていて、子どもの行動を統制しようとする傾向がある。もちろん、適当な訓育と教えは必要である。しかし礼儀というのは、子ども自ら周りの人達と無意識に同一化する過程で、さらに多くを学ぶ。親や周りの人達が大声を出して他人の権利をすぐ侵害するような環境で育った子どもに、礼儀の教育をしても役に立たない。

反面、常に自己の感情をよく調節し、他人によく譲る親の下で育った子どもは、意識的な教えがなくても、自然に礼儀を学ぶようになる。

このように重要な事実を看過したまま、最近の親たちは礼儀作法を教えるという名目の下で、子どもの自律性を侵害するほど必要以上に統制し、口うるさい場合が多い。とくに、３～４歳以前の子どもたちには、礼儀作法を教えるのはまだ早い。それよりもむしろ妥協

を教えよう。

16）親の権威を保つことは必要ですか？

親の権威は一方的なものではない。これは、子どもとの相互作用でできるものである。したがって、親の権威を人為的に子どもに強要することはよくないことである。

しかし、親と子どもとの境界（Boundary）ははっきりしていなければならない。たとえば、親が子どもより上位の位置で子どもを保護し、子どもを導く役割をすることは重要である。ところが、たまに母親の権威が他者（姑、夫など）によって保たれない時、母親と子どもの間の境界がぼけて、子どもは母親を見くびり、母親の言うことに従わないことがある。

父親が家長の責務を果たさないような場合には、子どもたちは父親を親として見なくなり、何の言うことも聞かなくなる。

このように親の権威が弱くなると、思春期初めにとくに多くの問題が発生する。最近、社会問題になっている親への暴力もやはり小さい時から親の権威がなかった家でよく起きる。親の権威は自然にできるのではなく、正しい親の役割を果たす時、子ども自身が自分の心の中に抱くものである。教えるだけでできることではない。

権威を保つことへの強迫観念を捨てて、まず親として正しく立つのが先だ。親としての責任を果たし、子どもに愛を伝える時、権威は自然にあとからついてくるものである。

17）迷子になるほど誰にでもついて行きます

大体、親たちは子どもが誰にでもなつき、親しいしぐさをすると社会性がよいと考える。しかし、子どもたちはまず主たる養育者を選別して好きなのである。そして、大きくなって親と離れても過ごせるほど精神的に成熟すると、独立性を備え、さまざまな人たちと交流する時にもうまく過ごせるようになる。これを「愛着の発達」と言い、次のような順序を踏む。

生まれて６ヶ月くらいまでは母親の匂い、声がもっとも好きだが、まだ母親と他人を区別したり、母親がいないと気が動転して探しまわるようなことはない。

人見知りが始まる６～７ヶ月頃になると、母親との間に選別的愛着関係を形成し、母親を通して世界を安全なものと認知する。このような現象は、１歳頃もっともひどくなり、母親がしばらくでもいなくなると不安で泣くが、母親がいるなら自分から少し遠くまで行ってみることもできる。

もし、この時期にやむをえない事情で保育所へ行かせるとか、母親と長期間離れて過ごすのは子どもにひどい分離不安を起こし、世界の外へ出て活発に探索する能力を奪い取る。子どもは２歳頃になると、母親がしばらく目に見えなくても完全にいなくなったのではないということがぼんやりとわかり、３歳ぐらいになると、母親と分離されても自分の心の中に母親像を留めて、ある程度心の安定を得ることができる。

このような一連の発達過程の中で、初期に母親と選別的な愛着関係を形成できないと、子どもがひどく萎縮するとか、または誰にでも抱かれて安定を追求する、無分別な愛着を見せるようになる。

このような現象は、第２次世界大戦当時、親を失った幼い子どもたちが孤児院で育った時、食べ物をくれる人なら誰にでもすぐ抱かれ、またすぐ離れるのが観察され、社会性発達の問題として見なされるようになった。このような子どもたちは、大きくなって特定の対象と親密な人間関係を結ぶことができず、精神的にも不安定な大人になるという。

母親の仕事のため、子どもをあちこちに預けたり、兄弟がたびたび入院をするのでもう一方の子どもをきちんと世話できなかった場合、主養育者との愛着関係形成に問題が生じているのを私はよく経験する。このような子どもたちは、親と手をつながないで一人でずんずん進んで迷子になったり、お菓子をくれる誰にでもすがりついたりするなど、無分別な愛着を見せる。このような子どもたちに、母親が治療を通して多くの関心をみせると、再び母親と選別的な愛着を形成し、社会性も正常に発達する。

18）子どもが依存的で気になります

私たちの文化は欧米諸国と比較した時、親が子どもたちを干渉して保護する傾向が強い。西欧では大人だけでなく子どものプライバシーも極端に尊重するが、それが私たちの目で見ると情が薄いようにみえることもある。このような文化的差異は、相互に長所短所があって、どちらがよいと判断することは難しい。ところが私たちは子どもを育てると、何事にも親に依存的にならず、自ら責任をもって開拓していく子どもに育つことを願うようになる。

子どもたちが自立心をもつためには、まず自分自身に対して誇りに思う肯定的自己像と自己信頼感がなければならない。親の中には子どもの自立心を育てるために、わざと子ども自身にすべてのことをさせるようにし、結果に対して厳しく責任を追究する場合がある。ところが、子どもがとても小さいとか、まだ自信感の発達がみられない場合、このような方式を使うと、むしろ子どもが気後れし、もっと依存的な子どもになることがある。

一方、親が小さい時から子どもが必要とする時に適度に助けてやって、子どもが「私は、やればどんな事でもよくできる子どもなのだ」という考えをもつようになると、自分のことを自分ですると同時に、責任も自分がもつようになる。親が必要な時、気楽に依存しているかにみえていた子どもが、むしろずっと勇敢に親を離れ、世間を渡っていくことができるようになる。

また、子どもたちには失敗をしてみて、自ら悟る機会が必要である。過保護な親たちは、常に子どもにすべてのことをあらかじめ準備してやるため、子どもが自ら悟る機会を奪い取り、ひどい場合は自立性まで侵害する。このように、自らあることを計画し推進する過程で、子どもたちはあらゆる失敗をすることになり、その過程を通して同じ失敗を反復しなくなり、段々と賢明になるのである。

したがって、真に自立性の強い子どもに育てたいなら、小さい時には十分に依存的な欲求を受け入れてやるのがよく、自ら立てる力があるほど成長した後は、親が大目に見てや

る知恵が必要である。

19）ハングルはいつから教えたらいいですか？

最近、とても幼い時から読み書きをはじめ、数字および計算まで教えるのが流行っている。社会が競争的になり、過去より高度の知的能力が要求される現実だから、小さい時から知的な能力を育てようとする親の関心は当然とも考えられる。

しかし、学習能力や知的な能力が果たして何を意味するのか考えてみてほしい。それは単純に字を読み、書くことや数字を計算することなのか。親たちは、子どもに新しい知識を興味をもって自分のものにし、論理的で創意的な思考ができる能力を育てるのが重要だということを看過してはならない。

学齢期以前の子どもたちの思考は非論理的だが、自分だけの空想をよくするなど創意力の面では大人以上のものがある。この時期の子どもたちは、事物を自分流に解釈する能力に優れ、大人たちが見逃してしまうことも鋭く指摘できたりする。このような発達段階にある子どもたちに文字を暗記させ、数字を教えるのが果たして何の効果があるのかは疑わしい。

私は子どもが５歳の時、幼稚園で数字を初めて学び、「２」を裏返しに書いたのをみて訂正しようとしたことがある。ところが、子どもは「お母さん、ぼくこっち向きのあひるさんがいい」と言った。数字の２をあひるの形に考えていたのである。

実際、５歳の子に数字の２がどのような意味をもつかはそんなに重要でないこともある。むしろ何日か前に観察したあひるの形を連想しながら、おもしろい想像をする方がもっとよいということだ。このような子どもに、正確に数字を書かせよう、覚えさせようとすると、当然子どもは拒否する。それでもなお、叱ってまで教えると、結局学習的な刺激を全般的に嫌うようになることもある。

「うちの子は数字と文字がとても好きで、強制的にさせなくても自ら学ぶんですよ」とほかの母親たちから気になる話もよく聞く。しかし私は、あまり小さい時に文字に関心が強い場合、自閉症系統の問題をもった子どもではないかとむしろ心配したりする。

幼い子どもたちは母親の愛と関心を引くため、少し大変でも母親が好きな学習刺激を受け入れて熱心に暗記しようと努力することがある。しかし、母親が得意になって子どもが容易に学んでいると考え、さらに難度を高めた場合、結局その子は学習そのものに多くの負担を感じるようになる。そして学校に入って難しい学習内容が出ると、最初から諦めるようになることもある。

こうした側面から、私は２～３歳にしかなっていない子どもがハングルをすらすら読む場面を流すテレビ広告を見ながら、資本主義の無慈悲さを強く感じるのだ。

もちろん、知能が多少遅れているとか学習障害があって、適当な年齢になっても学習能力が劣る場合は、専門家の助けを受ける必要がある。しかし、これはそんなによくあることではない。だから他の発達に大きな問題がないのに、学習的な刺激に関心のない６歳以前の子どもをもった親たちは、あまり焦る必要はない。むしろ、その子どもの関心があることをともに話し、母親自らもおもしろく考え、子どもが自分だけの論理を繰り広げられ

るように支えてあげるのがよい。

学習能力とは、文字や数字を暗記する能力ではなく、思考がよくできる能力である。このような意味で、私は子どもが学校へ行く１年前くらいになってやっとハングルを教えても十分構わないと思う。もちろん、自然に子ども自らが学習する場合はあえてやめさせる必要はない。子どもがいろいろな事に関心が多く、よく考える能力があるならば、焦らないでゆっくり教えても差し支えないということだ。

本をたくさん読むと頭がよくなり、勉強もよくできるという考えから、あえて早く教える必要はない。幼い年齢に教えれば教えるるほど、文字を学ぶのに時間と努力が多くかかるのである。先述したが、うちの上の子は学校へ入る２ヶ月前にハングルを学び、無事に学校へ入学した。小さい時、強制的にやらせていたら、決してできなかっただろう。

むしろ下の子は、幼稚園で早くからハングルを教えるため、子どもが負担を感じているようで気がかりだ。ほかの友達は皆できるのに一人だけできなくてもおかしいが、文字を教えない幼稚園が近所にないので、仕方なく行かせているだけである。

もし、あなたが今子どもにハングル教育をしているのなら、歩けもしない子に自転車に乗らせているのではないかと一度考えてみよう。

20）子どもが突然、幼稚園へ行くのを嫌がりはじめました

最近は、子どもを早くから幼稚園、保育所、塾へ行かせる傾向がある。このようなところへ子どもを行かせると、楽しく通っていた子が気まぐれで何日も行かなくなる場合がある。また、最初から行きたがらない場合もしばしばある。

前者の場合、いったん子どもの意思を尊重し、また行くと言うまで休ませながらその原因を把握するのがよい。もっともよくある原因は、身体が疲れているとか、先生に叱られたとか、友達とけんかしてしゃくにさわったといったようなものである。また、家で子どもの関心が下の子だけに注がれているとか、夫婦不和によって子どもが不安を感じる場合にもこのような症状が現れることがある。

うちの下の子もやはり幼稚園に行きたくないと急に駄々をこねたことがあった。いったん幼稚園へ行かせることを諦めて、何日間か子どもを休ませたが、その原因を知ることができなかった。後でわかったことだが、何日か前に兄が賞を受け、父親からおもちゃのプレゼントをもらったことにやきもちをやき、兄が学校へ行っている間、それをもって遊びたくて幼稚園へ行きたくないと駄々をこねたのである。

この時はまず原因を除き、何日か休ませてまた送り出せば何の問題もない。しかし、もし親が癖になるからと子どもを強制的に幼稚園へ行かせると、この時は無理が生じる。

最初から適応できない場合は、まだ子どもが親と離れて過ごす心の準備ができていなかったとか、何か新しい環境に適応するのに問題があるということなので、子どもがより成熟した後、行かせるように配慮しなければならない。

21）子どもがお漏らしをします

子どもは２歳位になると大小便を漏らさなくなるが、初めからこれが大変な子どもがある。全般的に発達が遅れている場合もあるし、排便訓練上の難しさのためもある。そうでなければ、身体的な理由で肛門括約筋の調節ができないとか、夜尿症体質である場合もある。このように最初から大小便の調節が大変な場合は、専門家に行って原因を明らかにすることが必要である。

ところがこれとは異なり、小さい時はよくできたが、急に小便や大便を下着に漏らす子どもがいる。この場合、大小便を漏らさない能力はあるのに、何か心理的な理由で退行現象を見せていることがよくある。とくに、子どもたちは何か不安になると、トイレが近くなったりお漏らしをする症状を見せたりするが、この場合、根本的な不安を解消してやればその症状はなくなる。

大便をパンツに付ける症状はもう少し深刻である。臭い匂いのために友達に罵られることもあるし、本人も羞恥心を多く感じるからだ。

この症状で私のところに来た子どもがいた。この子どもは毎日酒を飲む父親のため、常に夫婦げんかが絶えない環境におかれていた。母親が１ヶ月間、家出をして帰ってきたこともあった。この時から子どもは大便を漏らす症状を見せはじめた。子どもの母親が叱って、時間に合わせて大便をさせても、いつもパンツに大便を漏らしたりし、結局病院へ来るようになった。診断後、父親に酒を止めさせることにした。そうすると、治らなかった子どもの症状がすぐよくなった。

このように何か子どもにひどいストレスが加えられた時、一時的に大小便を漏らす現象が現れるし、この時は子どもを叱らず、根本原因を除去した後、子どもが楽になるよう配慮してやると、１、２ヶ月内に症状がよくなる。もしも症状がそれ以上続くときは、専門医に行ってみた方がよい。

22）子どもが長い間入院していますが、情緒上の問題はありませんか？

大学病院に勤務している私は、小児科、小児外科などに入院中の子どもを多く治療する。慢性的な疾患、すなわち小児糖尿病、慢性腎臓病、喘息などの病気をもっている子どもたちが、意外に日常生活および学校に適応するのに、苦労が多いためである。

未熟児で生まれて病院に長期間入院するとか、とくに集中治療室などで親と分離され長い間生活した場合などに、あらゆる発達上の苦労がありうる。しかし、このような子どもたち皆が精神的問題をもつのではない。成長とともに上手に克服する子どもたちも多い。

それでは慢性的な身体的疾患をもった子どもたちがよく見せる精神的問題とはどのようなものであろうか。

幼い年齢で受けたくない治療や、注射など痛みを伴う治療過程のために子どもは不安を感じることがある。このような子どもたちは医者の服をみるだけでも泣いて逃げ、病院では不安で落ち着きがなくなる。こうした現象がもっと深刻になると、病院だけでなく多少恐いところとか新しい場所へ行ってもすぐ不安になる。韓国の医療手段が改善され、外国

でのようにできるだけ痛くないようにあやしながら治療するようになれば、このような不安を予防できると思う。また、母親が慌てず、子どもに状況をよく納得させ、リラックスした状態を維持することも必要である。

小さい時、集中治療室で母親と離れて長い期間入院する場合、分離不安障害が生じることもある。先述したように、赤ちゃんは一定期間、主養育者と選別的愛着を形成してこそ精神的分離が可能である。まだ、精神的に未成熟な子どもが母親の代わりに見慣れない機械に囲まれて過ごさねばならない状況は、子どもにとって大きな不安を誘発することになる。他に問題のなかった子どもが、突然大小便を漏らして寝つかれない症状を見せるのもその中の一つである。この場合、母親ができるだけよく面会し、家で遊んでいた人形を持って行ってやるなどさまざまな努力をしなくてはならない。

小児糖尿病の場合、食事調節とともにインシュリン注射を毎日打たれるためにストレスを感じる。自立性を獲得すべきまさにその時期に、食べ物もしっかり食べられず、毎日注射を打たれて、血液検査をすることは、子どもの立場では耐えられない重荷であるためだ。親がこのような事をよく理解して、あらかじめ気遣ってやるなら、子どもは大変でも適応していくことができる。

もし、あまり強圧的な態度で子どもに怒りながら看護をすると、結局、子どもがある瞬間、すべての援助を拒否して飛び出して行ってしまう状況をおこすこともある。

慢性疾患を病んでいる子どもたちは、学校をよく休むことになるので学業や友達関係で大変なこともある。その都度その都度、きちんとついて行けるように、親と先生が対話を交わしながら、子どものための特別な援助を模索する必要がある。学校で仲良くしている友達一人、二人にその子どもを支援するように頼み、家にもよく遊びにくるようにしてもらうのもよい方法である。

現在、ソウル大学病院では、このような子どもたちのための病院内学校を用意しているし、新村セブランス病院でも間もなく開校する予定である。

23）夫が酒を飲むと、子どもをひどく痛めつけます

酒を飲むと家族に暴力や暴言をふるう父親に、あなたの酒癖のため奥さんとお子さんが大変苦労しているというと、「俺はアルコール中毒などではない」などと自分の問題をきちんと見つめない場合が大部分である。事実、アルコール中毒は、言い聞かせて治る病気ではなく、本人の固い意志の下で専門的治療を受けてはじめて治るので、非常にやっかいである。それで大部分の家族は諦めるようになり、家庭は徐々に荒廃化していく。

夫が毎日酒を飲むとか、酒による経済的な負担が大きいにもかかわらず週３回以上酒を飲む場合、アルコール中毒ないしは依存症の可能性が高い。当事者に直接治療を勧めると、反発心で妻をさかうらみすることもあるので、夫の実家や兄弟の助けが必要である。家族皆が積極的に酒をやめて治療を受けるように努力してこそ、この問題を解決することができる。

酒の問題以外にも父親に精神的な問題があると、必ず母親をはじめ子どもたちも大きな苦しみを味わうようになる。

最近は、とくに株式投資やコンピュータ中毒で、家のことをかえりみない父親たちが多くの問題を誘発している。その中でも、株式投資は金を儲けるという大義名分によって、本人たちは中毒になっていくことを悟れないので、家族達に精神的、経済的に大きな損害を与える。

我々が金を儲ける理由は、結局家族とともに幸せに生きるためだが、金を儲けるため家族を犠牲にするのは本当に愚かなことではないか。私は株のため家庭が破綻し、子どもが心の病気を病んでいるケースとよく接しながら、社会的レベルで国民への広報が必要だと思う。彼らは株式さえなければ幸せに生きることのできる家族なのに、このように凄惨に家庭を破壊してしまうのが、もどかしくてたまらない。このような父親は、妻がいくらやめさせようとしても夫婦げんかにしかならない。むしろ家族以外の人が父親を説得するのが、現実的である。

父親に精神的な問題がある場合、精神科の治療や相談を勧めることは、やはり難しいが重要なことである。子どもの問題で来たが、父親の問題が深刻なのを発見してよく説得し、子どもと父親がともに治療を受ける場合がしばしばある。

そうなると、子どもの問題はすぐ治療され、家族皆が再び幸せを取り戻す。

多くの親たちは、自分よりも子どものために自分の問題を治療しようとするときに、さらに熱心に治療に取り組むようである。親になるということは、平凡な人を偉大な努力家に変えてくれるのだ。

もし今、父親の精神的な問題のため、苦しんでいる家庭があれば、勇気を出して父親に治療を受けさせることを試してみよう。

24）子どもが夜泣きをします

子どもたちの睡眠も、やはりほかの機能と同じように一連の発達過程を経る。生まれてまもなくは 24 時間中 20 時間以上眠っている。そうして３ヶ月になると、昼よりは夜に寝る時間が長くなり、１歳になってから初めて成人と類似のパターンをもつようになる。したがって、子どもの就眠の習慣について大人と比較して理解しようとするのはよくない。

人間の睡眠は医学的用語でレム睡眠（REM Sleep）、ノンレム睡眠（NON REM Sleep）とに分けられる。前者は夢をみる睡眠を言い、後者は夢をみずぐっすり眠る睡眠を言う。人が寝る時、睡眠の後半部になるほどレム睡眠が増加し夢をみるようになる。ノンレム睡眠からレム睡眠へと変わる時、しばらく意識が覚醒される瞬間がある。しかし、成人の場合はこれを意識しないでしばらく寝返りを打つとかするようだが、再び眠りに入る。

しかし、これに慣れていない小さい子どもの場合、しきりに寝返りを打ったりして、そのまま眠りから覚めてしまうこともある。こうした覚醒の程度がひどい子どもたちは、ときどき突然泣いたり、起きて坐ることもある。

うちの下の子がそうだった。寝ながらいきなり昼にあったことを思い出す。これは半睡眠状態で、少し覚醒された状態なので寝ていないわけではない。子どももやはり眠っていて知らず知らずのうちにする行動なのだ。

ところが、このような事実を知らない母親は、寝ている子どもがいきなり大声でしゃべ

り出すと、びっくりする一方、この言葉をそのまま信じ、深刻に悩む。少し程度がひどい場合は、子どもが起きて歩き回ることもあるが、この時、母親は子どもに深刻な病気があるのではないかともっと慌てる。

ところが、そんなに心配する必要はない。睡眠状態で出てくることは無意識のことであるため、ふだん子どもがそのように考えているとは言い難い。程度がひどくなければ、正常な発達の範囲に属し、ある程度大きくなると自然になくなるものである。したがって、子どもがこのような症状を見せても驚いたり慌てたりせず、ただ子どもをなだめてまた寝かせばよい。

ところが、このような現象がひどく起きたり、単純に言葉を言う程度ではなく、大声を出し過激な行動をとるなら、ほかの問題があるのではないかと考えた方がよい。睡眠時の脳波がよくないとか、不安障害がひどく悪夢をみるなどのほかの理由があるからだ。

私のところに来たある子どもは、ひどい不安障害によってこのような症状をみせた。子どもの不安を起こした原因を調べてみたら、何日か前にひどい交通事故現場を目撃した後、それが大きな衝撃として残った事実がわかった。この場合はまず不安障害の方を治療しなければならない。

もし、脳機能上の問題がともにあれば、小児精神科および小児神経科と連携し、治療を並行する場合もある。

25）父親と母親の育児方式が違って、夫婦げんかをよくします

「この子は、何でこんなに行儀が悪いんだ。お前はいったい家で何をしているんだ！子どももしっかり育てられないのか。」

「あなたは何で子どもにそんなに厳しくするの？子どもがかわいそうじゃない。」

周りをみるとこのような問題で夫婦げんかをする例が多い。とても小さな問題から根本的な部分に至るまで、育児において夫婦が意見の違いをみせる場合はよくある。

なぜだろう。これは、単純な価値観の差ではなく男女の道徳性の発達が違うためである。

これに対してフロイトは、女性は非道徳的だと称した。理性的な善悪よりもより感情に偏る女性が男性より道徳観念が不足しているということだ。この説は過去には正しいと思われていた。

ところが、これは男性的視角だけで判断した誤謬であったことが明らかになった。

例えば、1960年代にアメリカのある女流心理学者が男女の大学生を対象として質問紙調査を実施している。友達が麻薬をするとかテストで不正行為をした時、これを告発するかどうかに関する質問であった。

その結果、男子学生たちは告げると答えた方が多かった。正しくないことをしたから正当な代価を払わねばならないというのがその理由であった。

これに比べ、女子学生たちは「よくわからない」、「告げないこともできる」と留保的に答えた比率が高かった。理由は、その友達にそうせねばならなかった切実な理由があるとか、または自分がこれを口外することによってその友達が傷つけられるかも知れない、というものだった。

そうだとしたら、フロイトの言う通りにこのような女性は果たして非道徳的と言えるだろうか。そうではない。その実験に対する結果は、女性が男性に比べて相手をおもいやる「親社会的性向」が強いということだった。

フロイトによって「非道徳的」と評価された女性の特性が、相手の心に共感してあげる能力が卓越であるという方に再評価されたのである。そしてこのような能力は、また異なる道徳的性向であることが社会的にも認められた。

このような男女の性向の違いは子どもを育てるのにそのまま反映される。男女の育児スタイルが異なるというのは、すでに昔から指摘されてきた概念でもある。「厳しい父親、慈悲深い母親（厳父慈母）」という言葉は、意味もなくできたものではないだろう。

端的に言って、父親たちは子どもに接する時、融通性がない。子どもが何か間違うと、その事件自体だけで是非を確実にする。規則は規則ということだ。

ところが、母親たちは事件の真偽の可否よりは子どもの感情をまず考える。事件を起こした子どもの心にまず目が行くということだ。

私の夫の場合も、子どもによく「私が一番嫌いなのは約束を守らない人だ」という。そして子どもが約束を守らなかった場合、仮借なく処断する。しかし私は、もし子どもが疲れて仕方なく約束を破ったら、それだけは許す。約束の重要性を知らないからではなく、子どもの心に共感するからだ。

子どもが完成された人格として育つためには、実はこの二つの側面が必要である。母親からは優しさと、状況を融通性をもって見つめる心の余裕を学ぶこと。一方、父親からは厳しく規範をしつけられることである。

ところが、この場合、母親と父親の間では意見の不一致からの葛藤が有り得る。それならば、どのようにこの葛藤を解決していくべきだろうか。

まず、本質的な両者の思考方式の差を認め、これをともに補完しあわなければならない。元来そうであることを認めないで、自分の考えだけに合わせようとすれば、葛藤が生じるしかない。一方にだけ合わせられる問題ではないからだ。

ところが、そうだとしてもこれよりもっと重要なのは、母親と父親が最後に志向するところは違ってはならないということだ。一つの志向点をもち、二人が一貫性を維持しなければならない。

例えば、我が家の場合、子どもを育てるのに一つの原則を立てると、二人ともそれだけは認める。それ自体は否定しないということだ。

しかし、方向が同じだとしても方法まで同じかというとそれは違う。もし、父親がその問題で怒ると、私はむしろなだめる方法を使う。

キョンモが毎朝、遅刻して苛々していたことがあった。夫はその事実を知らず、私だけその問題で悩んでいた。どうしようかと悩んで、ある日の夜、子どもが見えないところで夫と相談した。

夫が出した処方は、毎日登校時間を一々記録することだった。私もこれに同意した。そして夫は子どもが遅れると、鞭で１回ずつ打った。父親がこのような態度を取ると、子どもの癖がすごくよくなった。もちろん、私はこの方法が気に入らなかったが、ある程度強圧的にする必要がある問題であったため、一度は認めた。

しかし、私は子どもを治すのに夫とは違う方法を選んだ。登校時間を守らなかった時叱

るより、子どもが早く学校へ行ったりすると誉めてあげる方法を使ったのである。家を出た時間が早いと、子どもが好きなフライドチキンを買ってあげるというやり方で。

ある研究結果によると、事ごとに行儀の悪い小さな子どもの場合、両親の養育方式に差があると段々そのような性向が強くなり、大きくなってまで問題になるという。

したがって、子どもと接する時は、その場凌ぎで行動するのではなく、夫婦が相談する方がよい。それで一つの原則を立てた後、子どもと接する時、その原則が揺れないように夫婦が一貫した態度を見せなければならない。

方法においては違っても、原則と志向するところが同じであれば、夫婦がけんかすることもなく、その中で子どもも多くのことを学ぶことができるだろう。

26）子どもに精神的な問題が起きた時、どうすればいいですか？

多くの親たちは、子どもにおいて何が精神的な問題であるかよくわからず、たとえ問題をわかったとしても合理的に対処できないことが多い。

実際、言うことを聞かなかったり、勉強をしなかったり、親に逆らったり、友達を殴ったりすることは、すべて精神的な問題と関連しているが、親たちは「もうよくなるだろう」、「もともと性格がそうなのだ」と安易に思い、放っておく。

しかし、この程度がひどくなり、問題と認識してからもこれを科学的に解決しようとするのでなく、宗教を頼ったり、周囲の人達から助言を得ることで解決しようとする。しかし、親がそうする間に、子どもの問題はもっと深刻になる。

小児精神科で子どもの精神的な問題を扱う時の大原則は、「早期に措置する」ということである。

子どもがもっている問題は、大部分は早期に対処すればよくなるものだ。しかし、私を訪ねてくる子どもたちを見ると、大部分“病気を育ててから”やって来る。前述したように、社会的に作り上げられた精神科に対する偏見のためだ。

しかし、ともかくこのように“病気を育てて”来た場合、実際のところ、治すのはかなり大変だ。私達の社会が現在青少年問題でひどく病んでいるのも、このような点にも少なからぬ原因があるといえないだろうか。

私は、「子どもがほかの子どもよりちょっと気難しい」、「何か違う」と思ったら、隣のおばさんの忠告を聞くのでなく、まず科学的な事実から確認するようにと言いたい。

最近はインターネットなどを通して子どもの精神的な問題に関する多くの情報を得られるし、相談機関などを通して意見を聞くことができる。周辺をよく見回すと、児童相談所や地域社会の福祉館などで子どもの精神的な問題に関して相談を受けることもできる。少なくとも相談にのってくれる人たちは、この分野については母親よりずっと経験が豊富である。

その言葉を100%信じろということではない。ただ、子どもの問題を把握することにおいて参考にするように、ということである。もし、このような方法で子どもが変わらなければ、その時は小児精神科に行った方がよい。それがことばの遅れであれ、ADHDであれ、親に反抗的な行動をするのであれ、友達を殴ることであれ、「長く続くということは何か問

題があるということ」を意味する。

私が小児精神科に行くように母親に勧める理由は、子どもが抱えている問題が単純に心理的な次元のものではなく、脳発達と関連した場合も多いからである。この場合、医者たちは心と身体と同時に見るために、さまざまな要因を同時に統合的に観察できる。ところが、心理学者や各分野の治療者、相談員達は生物学的な面を看過すことがある。

たとえば、子どもの言語発達に問題があるとしよう。母親はまず言語セラピストのところに行った。そうなると、あるカリキュラムによって言語治療を受けるようになるだろう。しかし、子どもの言語発達上の問題の原因は、非常に多様である。もし、子どもが情緒上の問題で言語発達に問題を見せれば、この時はまずその部分から治さなければならない。そうしてこそ、言語発達も一般治療を通して正常に戻ってくるからである。したがって、いったん小児精神科に来て診断を受けた後、診断によってその時からカウンセラーを探したり、プレイ・セラピーを受けたりしても遅くない。

子どもに精神的な問題がおこった時には、悩まないようにしよう。そして精神科に対する偏見を捨てよう。中学生になって私のところに来る場合、中産階級以上の家庭で育った子どもが多いが、精神科に対する偏見のため、簡単に言って家の恥になると思って、病気を隠していた場合が多い。中には、恥ずかしいからと子どもを早期に留学させてしまう人もある。

私は、子どもを扱うのに「ゆっくり」を強調するが、これは単に見守るという意味ではない。私が言うことは、「賢いゆっくり」である。「何か問題があってそれが長引いている」、「何らかの方法を使ってもうまくいかない」ようだったら、よくなるだろうと待つのでなく、解決策を早速用意しなければならない。

27）子どもがテレビ、ビデオに没頭しすぎです

子どもがテレビやビデオを見る問題において、まず考えるべきことは年齢である。年齢は低ければ低いほど問題になるが、とくに満２歳未満の子どもがテレビやビデオに没頭することは、必ず防止しなければならない。

しかし、これを知らない母親たちが教育用ビデオのような商術にだまされ、わざわざ子どもに見せたりする。また、一日中テレビをつけっぱなしで、子どもがそれに我を忘れて見とれていることもわからない場合が意外に多い。さらには、動き回る子どもを坐らせておく方便として、テレビやビデオを見せる場合もある。いったん、母親たちは自分が子どもをテレビ狂、ビデオ狂に育てているのではないかと振り返らなければならない。

では、ここからは子どもの立場で考えてみよう。なぜ子どもたちは、テレビやビデオにそんなに没頭するのだろうか。

単にそれがおもしろいからだ。色がきれいなだけでなく、早く動き、さまざまな声が出てくる、そういった一連のものが子どもたちの本能の好奇心を十分に刺激する。一言で言えば、子どもの適性にぴったりなのである。そしてこのようにおもしろいので中毒性が強い。一度おもしろくなると絶ち難いということだ。

それなら子どもがテレビやビデオに度の過ぎるほど没頭する時、どのような問題を起こ

すだろうか。

まず、実生活で経験することを、何の苦労もなく受動的に経験する癖がつきはじめる。これは、学習スタイル、最終的にはこの世を生きていくスタイルに影響を及ぼす。すなわち、学習やすべての生活においてもそのように受動的な傾向を現わすようになるということだ。幼い時代、このように、学びにおける主体になれず客体になってしまうと、取り戻すことが大変に難しい。

第二に、このような状態で、もし親が無関心であれば、子どもはもっとテレビ・ビデオに依存するようになり、脳の発達に問題を起こす。実際の状況で互いに意思を交わす社会性の発達を担当する脳の機能に、問題が生じることもある。

とくに、子どもが２歳までは外部の刺激によって、社会性を担当する脳の領域が急速に発展する。しかし、この時期に子どもがビデオやテレビだけ見て育ったならば、実生活で使う言葉ではなく、テレビやビデオのキャラクターが使う言葉ばかり真似することもある。また、私たちが文法の本で見るような、日常生活ではよく使わない言語を無作為に使用することもある。

また、テレビ・ラジオ漬けの子どもたちは仮想の現実に住んでいるので、実生活での対人関係が円満でない。対人関係や社会性は、それぞれ違う世界にいる他人と自分がその世界を共有することに喜びを感じることで発展する。しかし、テレビとビデオに没頭した子どもたちは、その感覚を失うようになり、人と義務的に接するなど社会性の発達に多くの障害が生じる。

それだけではない。学習においてもっとも重要な思考力さえも落ちる可能性がある。思考力とは外部の刺激を内面化させて、これを自分なりに解釈していく能力のことである。しかし、外部の刺激に対して受動的で、自分の世界だけにこもって生きていくと、思考力が落ちるのは当然である。このような子どもたちは数字をよく覚えるが、足し算や引き算ができないなど、何か思考を要する問題にぶつかるとその限界が現れる。

第三に、テレビやビデオはあまりにも多くのことを即興的に見せてくれるという特性をもっているため、子どもが文字を読みながら何かを想像する能力が十分に伸ばされない。アメリカのある実験によると、中産層の家庭で子どもがビデオを多くみる場合、言語能力の中で読みの能力が大きく落ちることが明らかになった。

子どもにとって本を読むことがよいのは、抽象的な思考ができるという点である。読んで推論する能力ができるということだ。しかし、テレビやビデオを多く見た子どもたちは、退屈な読み自体を拒否するため、このような能力はやはり育たない可能性が高い。

また、このような精神的問題だけでなく「肥満」という身体的問題まで及ぼす。小児肥満の少なくない原因が、坐ってテレビやビデオばかり見る生活習慣から出ている。

結局、テレビやビデオの弊害は、子どもの発達の全般にわたって現れると言えよう。しかし、そうだとして全然見ないでおくこともできない。同年輩の子どもたちの話題がテレビ番組と関連したものが多いため、一歩間違うと友達の間で「いじめ」、「仲間はずれ」にあう恐れもある。私はそれで子どもたちがみる番組は録画をしてでも見せてやる方である。

それではどのように指導すべきなのか。

前述したように、まず子どものための番組や教育放送を中心に見せるが、一度に１時間

半以上は超えない方がよい。暴力的でなければ、アニメを見せることも禁じない。子どもが好きになるものの中で、想像力を刺激するとか、感動を与えられるようなものを中心に選別する。

私は子どもとニュースやドキュメンタリーなどをよく見る方だが、子どもとともにニュースのテーマについて対話し、子どもがわからないことについて答えてやるなど教育的に活用している。

ところが、もし子どもがテレビやビデオなしでは生きられないなら、断固としてこれを制裁する必要がある。見る機会を初めから防ぎ、外へ子どもを出そう。

しかし、無条件に見せないようにするより、代案を用意しなければならない。すなわち、テレビやビデオよりもっとおもしろいほかの刺激が数時間続くように準備することだ。遊園地へ連れていくとか、子どもが好きなプールへ連れていくとか、映画を見せる方法などである。

そして、家にあるビデオテープは、いったんすべてなくそう。子どもの目の前で燃やしてもよい。これは君に悪いと、お母さんがほかのおもしろいことをしてあげると言いながら。

テレビも同じである。なくし難いなら故障したことにしたり、または一時期片づけておいて、好奇心を起こさせる糸口をなくすのだ。少なくとも、このような努力を１ヶ月以上持続したら効果がある。

私は、子どもにだけは文明の利器があまり要らないと思う。しかし、そうだとしても初めから子どもをこれらから隔離することはできない。したがって、子どもが中毒症状を起こす前に、これを教育的によく活用できる方法を探すのが母親の備えるべき知恵であろう。

（第１部　校閲協力：　佐藤由美、丹羽孝、巷野悟郎、植松紀子、山本登志哉、一見真理子）

第　2　部

韓国における早期教育の研究動向、実態、政策提言

資　料　Ⅱ

「創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新」

（抄訳）

李　基　淑

張　英　姫

鄭　美　羅

フンヤンヒ

丹羽　孝　訳

資料Ⅱ　概要

「創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新」　2001.12

研究責任者	梨花女子大学校	李基淑
共同研究者	聖信女子大学校	張英姫
	暻園　大学校	鄭美羅
	梨花女子大学校	フンヤンヒ
研究助言	フウオン大学校	ノチョンファ
	仁川市立専門大	カンスギョン
研究協力官	教育人的資源部教育研究官	シンチョンスク

○この研究は2001年度教育人的資源部学術研究費（教育政策研究課題）によって研究された。

○この研究は教育人的資源部学術研究費で遂行されたが、本研究で提案された政策提言や意見等は教育人的資源部の公式意見ではなく、本研究チームの個人見解である。

要　旨

本研究の目的は、韓国における幼児期の早期・特技教育の実態を調査することによって、創造的で全人的な人的資源の養成のために、幼児教育で行われなければならない革新の方向を、総合的かつ体系的に提示することである。ここでは、21世紀を迎えた韓国の全ての幼児たちが、質的に優れた幼児教育を受けて、創造的で全人的な人的資源として成長できるような、国家による制度的装置を準備するのに必要な基礎資料を提供することをめざしている。

このような研究目的に応じて、本研究が設定した研究課題は、次の通りである。

1. 創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新の動向はいかなるものか？
2. 創造的で全人的な人的資源養成の次元からみた韓国の幼児教育の現況はいかなるものか？
3. 創造的で全人的な幼児教育革新のための政策方案とはどのようなものか？

以上の研究課題を解決するために、文献研究、質問紙調査、観察、面談、協議会が行われた。

① 創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新の動向を調べるために行われた関連文献調査では、創造性の発達及び全人的な発達の概念と教育との相互関連性、韓国の早期教育の現況及び問題点を分析した先行研究だけでなく、主要先進国の幼児教育課程を比較してみた。

② 韓国の早期・特技教育の実態を調べるために、教育部幼児教育政策課（当時）を通して全国（ソウル、プサン、テグ、仁川、光州、大田、蔚山、京畿、江原、全北、全南、慶北、慶南、済州など）の私立幼稚園に幼児を通わせている父母2,600名と、幼稚園教師1,300名を対象に、質問紙調査を実施した。

③ 早期教育の運用実態と問題点をより具体的に描き、正確に把握するために、現在早期教育を受けている幼児1名を対象に、一日の日課を追跡観察して分析した。

④ このような資料の分析に基づいて、創造的で全人的な幼児教育革新のための政策方案を国家の次元、幼児教育専門家の次元、父母及び市民の次元から提示した。

目　次

Ⅰ．序　論 127
1．研究の目的および必要性 127
2．研究課題 128
3．研究方法 129
Ⅱ．創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新の動向 134
1．創造的で全人的な人的資源養成の必要性（抄） 134
A.　創造的な人的資源養成のための幼児教育 135
B.　全人的な人的資源養成のための幼児教育 135
2．国家レベルの教育課程がある主要各国の幼稚園教育課程 136
A.　韓 国　（抄） 136
B.　英　国 138
C.　フランス 140
D.　日　本　（抄） 142
E.　各国の国家レベルの教育課程の特色と示唆点 143
3．韓国と日本の早期・特技教育に関する先行研究 145
A.　韓　国 145
B.　日　本　(抄) 153
Ⅲ．韓国における早期教育の実態と現況　（抄） 156
1. 私立幼稚園での早期・特技教育実態調査 156
A.　研究対象の一般的背景 156
B.　幼稚園での特別活動の実施現況 156
2.　家庭での早期・特技教育に関する実態調査 157
A.　研究対象の一般的背景 157
B.　早期・特技教育の実施現況 157
C.　早期・特技教育に対する親の認識 158
3.　早期・特技教育の問題点 158
A.　教師の観点 158
B.　父母の観点 158
4.　早期教育を受けている幼児の生活と問題点の調査　（本資料集巻末参照） 159
A.　幼児の生活 159
B.　小学校１年生の教師の観点 159
Ⅳ．創造的で全人的な、幼児教育革新のための政策方案 160
1．幼児教育の公教育体制の確立 160
2．幼児教育に必要な財政予算の支援 161
3．幼稚園の認定制の適用と幼稚園教育課程の管理と監督 162
4．幼児の発達と教育の効果に関する体系的研究への積極的な支援 165
5．幼児の権利と幼児教育を擁護するための団体の結成 166
6．幼児教育の正しい内容や方法等の広報（抄） 167

7．幼児教育に関するウェッブ・サイトの専門化（抄） 168
8．私教育の水準を監督・統制できる信頼性ある専門機構の運営（抄） 168
9．幼児教師と園長に対する研修機会の強化（抄） 168
10．幼児教育視学制度の確立（抄） 168
11．幼稚園の全日制クラス運営の拡大実施（抄） 168
12．小学校低学年と連携する教育課程の開発（抄） 169
V．要約と結論 170
1．要　約 170
2．結　論 171

参考文献（略）
付録（略）
表目次（略）

Ⅰ．序　論

1．研究の目的および必要性

幼児教育の目的は、幼児が全人的な人間に成長できるよう援助することである。このような幼児教育の目的に立脚して、第６次幼稚園教育課程（1998）では、「21 世紀の国際化、情報化時代をリードすることのできる自立的で創造的な韓国人の育成」を教育課程構成の基本方向として設定して、とりわけ健全な人格と創造性を開発しようとするならば、なによりも基本的で基礎的な教育を充実しなければならないことを強調している。

しかし、このような幼児教育の目的は、早期教育の熱風の中でだんだんとその立つ瀬を失っている。我が国では教育が、社会的成功や地位または階層上昇移動のための手段であることが認識されるに従い、早期教育によって誕生の初期から子女を支援しようとする父母たちの熱望は、社会階層及び教育水準に関係なく、強烈なものとなった。最近では、韓国の社会に幼児を対象とする各種の「特技教育」と、外国語教育等が急速に増加し、蔓延している。このような誤った早期教育の風潮は、我が国の注入式で知識伝達中心の教育伝統と相まって、幼児一人ひとりの潜在能力や興味とは関係のない、成人社会で重要視されている一分野の特技や学問的な基礎技術を身につけることを強要する結果を招いている。

これまで「早期・特技教育」に関する先行研究では、主として小学生を対象にして、私設学院（編者注：「私設学院」または「学院」は、日本における学習塾や進学塾、各種習い事の教室に当たるもの。）や課外教育に対する態度・種類・内容・方法等に対する実態調査段階での問題点と結果だけが指摘され、批判されただけで、実際に早期教育が幼児の発達や学習にどのような影響を与えるかについては、実証的資料が提示されていないのである（クチェピル、1983；キムソンスク，1980；キムヨンミ，1989；パクジョンミン, 1987；ユジョンヒョン, 1980；ノク, 1977；イジョンソプ，1987；チョンドンイル, 1983；チョンエジャ, 1984)。家庭で子女のために支出する私教育費も深刻な社会的問題だと認識されているが、これに対する具体的な研究はほとんどない。従って、現在の我が国における早期・特技教育の実態と問題点については体系的な研究が必要なのである。

幼児たちを対象として行われた研究では、家庭用学習紙（編者注：「学習紙」はドリル、トレーニングペーパーのこと。業者によって毎日宅配され、電話や訪問による指導とセットになっていることが多い）の内容に対する研究（パクジョンミン，1987)、幼稚園での学習紙使用実態及び内容分析（ウナムヒ、ヒャンウンジャ、イジョンヒ，1992)、幼稚園での英語教育に対する実態研究（チュヘヨン，1998）等がある。チャンヘジョン他（1994）の研究結果によれば、早期・特技教育の風潮は、韓国の社会に蔓延する学力重視思想や知識主体の教育と噛み合い、幼児がその能力や興味と関係なく成人たちによってほとんど受動的に導かれて行く、誤った性向を育てられている。ウナンヒ他（1992）によれば、学院、家庭訪問指導、学習紙等を通じて行われている過度の早期教育で、幼児たちは情緒障害をはじめとする創造性の発達障害、学校入学後の学習障害等の深刻な問題を起こしていることが報告されている。最近では、父母たちの要求や園児募集等の理由で、幼稚園でも正規の日課の中で特別活動の教師が３～４種類の特技活動を実施していて、教育課程の正常な運営が難しいと言う訴

えもある。このほかにも早期教育によって社会階層間に格差と違和感が広がり、幼児に与える発達的な損傷、父母に与える経済的な負担、正規の教育に対する不信感及び正規教育の地位の失墜、理想的な教育観の喪失等、その被害と問題点は非常に深刻なものがある。

以上を総括すると、第一に、現時点の韓国の幼児教育機関で実施されている各種の特技教育の実態を総合的に分析することが必要である。早期教育に対する父母、幼児教育者の認識を全般的に分析して、その問題点を見つけることである。

第二に、知識基盤社会における創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新の正当性を提示できるよう、教育先進国の早期教育の実態や、創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新方案を比較検討する作業も必要である。これらの国家でも、一時は早期教育の熱風が吹き荒れたが、早期教育の中・長期的効果は期待できないという縦断的な研究成果が出されることで、以後は早期教育を制限して幼児たちに適合しながら創造性を育てる幼児教育課程を開発し、運営している。従って本研究では、教育先進国の幼児教育政策に多くの影響を与えている、早期教育の効果に対する先行研究を調査し、またこれらの国家で現在実施されている創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育課程を紹介することにしたい。

第三に、最近くい止めることのできないほどにいびつな高まりをみせている早期教育を、手遅れになる前に正常化させて質的に優れた幼児教育へと転換できるよう、国家的次元からいかなる制度的装置と財政的支援策を用意しなければならないかについての深層にまで及ぶ研究が必要である。本研究ではまた、父母たちに、創造的で全人的な人間を養成する質的に優れた幼児教育プログラムの重要性と、早期教育によって惹起した深刻な弊害、すなわち幼児の認知・社会性・情緒・言語・身体の発達障害、教育の非効率性、正常でない教育課程運営、社会階層間の違和感の醸成、各家庭に与える経済的負担等について、効果的に改善する方法を模索したい。

したがって、本研究では、我が国の早期教育の実状を総合的に分析して、その実態と問題点を診断して、「知識基盤社会を生きる創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新」の正当性を提示することを目的とする。特に、我が国とよく似た社会・文化的背景を有する日本の早期教育の実態と我が国との比較分析を試み、主要先進国の幼児教育政策を調べることで、我が国の「創造的で全人的な人的資源開発のための幼児教育」への望ましい政策方案を提示するものである。

2. 研究課題

以上の研究目的を達成するために、本研究では次のような研究課題を設定した。

A. 創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新の動向はどのようなものか？

(1) 創造的で全人的な人的資源はどのように養成されるべきか？

(2) 国家が定める教育課程基準がある国の教育課程構成と運営はどうなっているのか？

(3) 韓国と日本の早期・特技教育の実態とその問題点はどこにあるか？

B. 創造的で全人的な人的資源養成の目標から見た幼児教育の現況はどのようなものか？

(1) 我が国の早期・特技教育の実態と問題はどこにあるか？

(1)-1 幼児教育機関で実施する早期・特技教育の実態と問題は何か？

(1)-2 家庭での早期・特技教育の実態と問題はどのようなものだろうか？

(2) 創造的で全人的な発達を阻害するような早期教育を受けた幼児の生活はどうなっていて、問題は何なのか？

C. 創造的で全人的な幼児教育革新のための政策方案はどのようなものだろうか？

(1) 創造的で全人的な幼児教育革新のための国家レベルの支援方案はどのようなものか？

(2) 幼児教育機関における教育課程運営の正常化のための方案はどのようなものか？

(3) 父母たちの幼児教育に対する意識水準を向上させるための方案はどのようなものか？

3. 研究方法

本研究の方法は文献研究、質問紙調査、観察、面談、協議会等で、これを具体的に説明すると次のようになる。

A. 文献研究

創造性の発達及び全人的な発達の概念と教育との相互関連性、早期教育の概念、早期教育が幼児の発達に与える影響、現在の我が国の早期教育の現況等を知るために、関連文献及び先行研究を検討した。国家水準の教育課程を運営している教育先進国の教育課程と現在実行している創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育政策を検討、分析した。また、本研究では我が国と最も近接した地域に位置し、歴史的に緊密な交流をしてきた日本の早期教育の実態を知るために、日本の事例研究を参考にした。

B. 質問紙調査

(1) 調査の目的

韓国における早期教育の実態と問題を総合的に理解するため、家庭と幼児教育機関を中心にして、質問紙調査を実施した。質問紙は家庭と私立幼稚園を対象として実施し、家庭で父母たちが幼児期の子女たちにどのような早期・特技教育をさせていて、問題は何なのかを調べ、幼児教育機関で特別活動を実施する理由と動向、種類の数、担当教師等を調査した。

(2) 調査対象

早期・特技教育の実態を分析するため、全国の私立幼稚園教師と幼稚園に子女を通わせている父母たちを対象に質問紙調査を実施した。質問紙は教育部（当時）幼児教育政策課を通じて全国（ソウル、プサン、テグ、仁川、光州、大田、蔚山、京畿、江原、全北、全南、

慶北、慶南、済州等）の私立幼稚園に子女を通わせている親 2,600 名と私立幼稚園に勤務している幼稚園教師 1,300 名に配布・回収した。教師用質問紙は、全国の市・道教育庁が管轄する私立幼稚園数に応じてグループ抽出して配布し、父母用質問紙は研究対象になった 1,300 カ所の私立幼稚園のうち 130 カ所の私立幼稚園をさらに抽出して、各機関あたり 20 部ずつ配布した。

私立幼稚園

2000 年の私立幼稚園現況表を基準にして全国（ソウル、プサン、テグ、仁川、光州、大田、蔚山、京畿、江原、全北、全南、慶北、慶南、済州　等）の私立幼稚園のうち、各地域で 0.3%に該当する機関を無作為抽出した。質問紙は教育部幼児教育政策課を通じて各地方の教育長に協力依頼の公文とともにサンプリングの方法を叙述して配布し、各幼稚園で満５歳のクラスを担当する教師１名が回答するようにした。教師用質問紙は、全部で 1,300 部配布され、そのうち 1,166 部が回収され、回答漏れがあった 50 部を除外した 1,116 部が分析に使用された。具体的な分析対象の分布は次のとおりである。

＜表１－１＞研究対象幼稚園の地域別分布

区　分	幼稚園数（百分率）
大都市	600(54.3%)
中・小都市	356(32.2%)
町村	149(13.5%)
無回答	11(1.0%)
計	1,116(100%)

幼稚園に子女を通わせている父母

教師と同様に、全国の 16 の地域で私立幼稚園に子女を通わせている父母を、幼稚園１カ園当たり 20 名を選定した。選定された幼児教育機関 130 カ所に、それぞれ 20 部ずつの父母用質問紙 2,600 部を配布し、2,279 部が回収され、そのうち無効の 120 部を除外した 2,159 部が分析に使用された。

(3) 調査ツール

研究に使用された質問紙は、幼稚園教師用と父母用で構成されていた。早期教育の現況と教師と父母の意識を調査した国内外の先行研究に基づいて、研究者たちが項目を構成した。質問項目は、父母・幼児教育機関長、幼稚園教師、幼児教育専門家たちによる質問紙の妥当性の検討を受け、修正・補完して最終項目を完成させた。

教師用質問紙の内容は、幼稚園の特別活動の実施現況、特別活動実施の理由と問題点、特別活動プログラムに関する教師の認識、教師のプロフィール等で、具体的な内容は＜表１－２＞のとおりである。

父母用質問紙の内容は、早期・特技教育実施現況(2)、特技教育実施の理由と問題点など父母の意見に関する項目、早期・特技教育に対する父母たちの認識に関する項目、父母のプロフィール、子女のプロフィール等で、具体的な内容は<表1-3>の通りである。

収集された資料はSASプログラムを利用して、頻度と百分率を算出し、父母と幼児の変因に応じて分析した。

<表1 -2>早期教育の実態調査　教師用項目の構造

領域	教師用項目内容	項目番号
特別活動実施現況	特別活動実施方法	1
	特別活動プログラム	4
	特別活動実施可否	4 - 1
	週あたり教育回数	4 - 2
	1回の教育時間	4 - 3
	集団構成(大、小集団、個別幼児)	4 - 4
	対象幼児(全体、選択制、全日制)	4 - 5
	特別活動プログラム担当者	5
	担任教師の役割	6 , 7
	特別活動の費用	8
特別活動実施理由と問題点	特別活動の実施理由	2
	特別活動実施の問題点	3
	特別活動に関する教師の意見	1 0
特別活動に対する教師の認識	幼稚園教師資格証の有無	9 - 1
	特別活動指導者の理解不足	9 - 2
	教育課程運営の妨害	9 - 3
	幼児観察時間の不足	9 - 4
	特別活動の種類が多い	9 - 5
	実施時期がとても早い	9 - 6
	ストレスが深刻	9 - 7
	正規教育課程内で進行	9 - 8
	父母たちの負担	9 - 9
	幼稚園教師の賃金	9 - 1 0
教師のプロフィール	経歴、学歴、幼稚園クラス数と園児数	1, 2 , 3
	担当クラスの年齢と園児数、地域	4 , 5

＜表１－３＞ 幼児早期教育の実態調査　父母用質問項目の構造

領域	父母用項目構造	項目番号
早期・特技教育実施現況	実施の有無	1
	早期・特技教育の実施現況	2
	実施領域	２－１
	現在の状態（継続中、やめた年齢）	２－２
	１週あたりの教育回数	２－３
	１回あたりの教育時間	２－４
	月あたり教育費	２－５
	学習形態（学院、学習紙、個人指導、グループ指導）	2－６
早期・特技教育をさせる理由	特技教育をさせる理由	3
	特技教育をやめさせた理由	4
	特技教育の実態に関する父母の意見	7
特技教育に関する父母の認識	特技教育の必要性	5
	特技教育の時期	６－１
	特技教育の種類	６－２
	特技教育の費用	６－３
父母のプロフィール	年齢、学歴、月収、職業	
子女のプロフィール	性別、生年月日	

C. 観 察

創造的で全人的な発達を阻害する早期・特技教育を受けた幼児の生活はどのようで、問題は何かについて知るために、各種の早期・特技教育を受けている幼児１名を選定して、一日の日課を追跡観察し、記録した。

D. 面 談

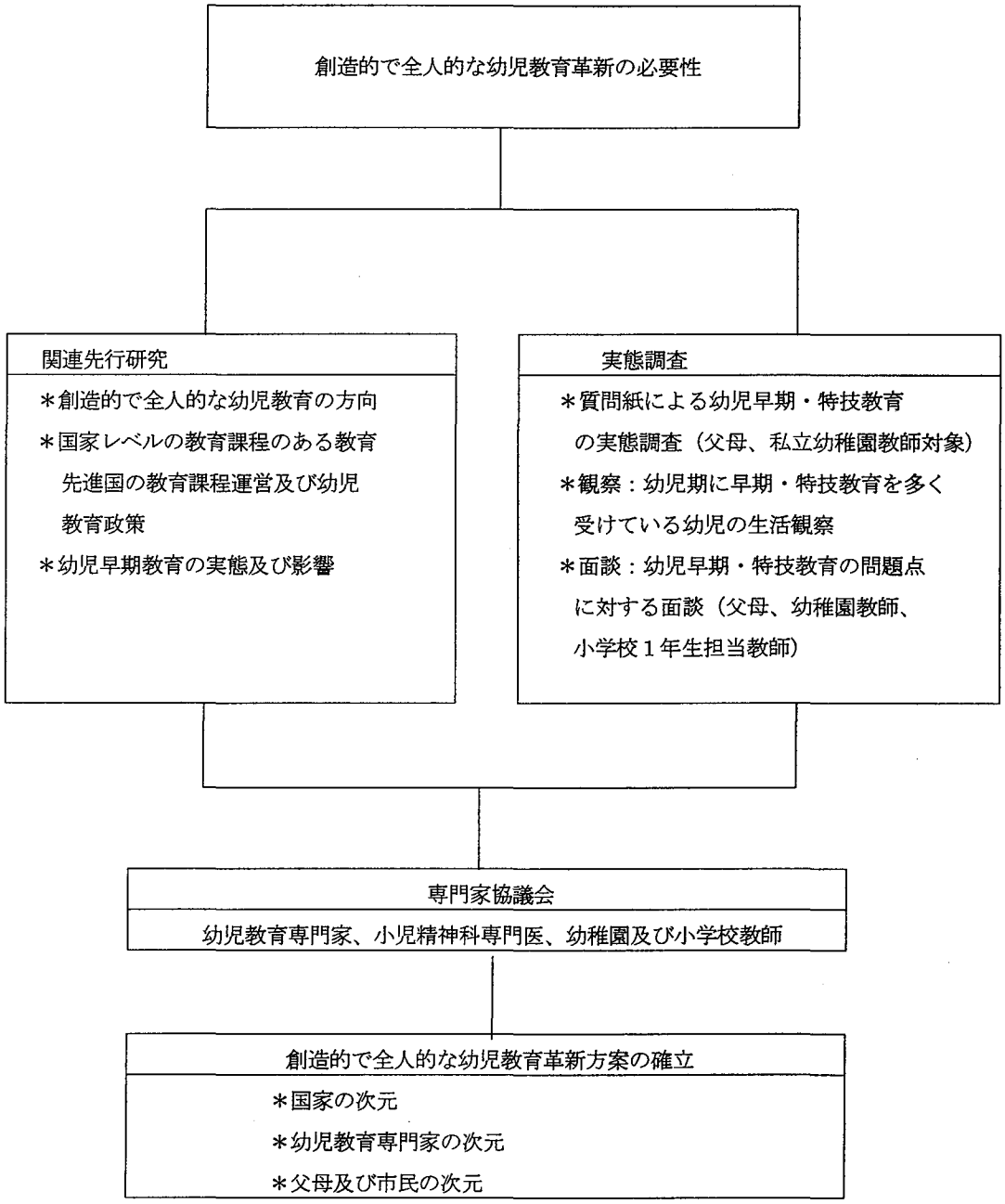
早期・特技教育の運営実態と問題点を深層にまで及んで分析するために、子女に早期教育をさせている家庭と各種特技教育活動を提供している幼児教育機関の運営者と教師たちを対象に、面談を実施した。創造的で全人的な人的資源養成という次元から見るとき、父母として、機関長として、または教師として、どのような種類の早期教育をした経験があるか、早期教育をするに至った背景、早期教育の現況（種類、時期、内容、方法等）、幼児たちや父母たちの反応及び早期教育の問題について公式にあるいは非公式に面談を実施した。

同時に、私立と公立の小学校１年生の教師との面談を通じて、現在１年生の子どもたちが幼稚園で受けた教育課程の内容及び方法と、早期・特技教育が小学生に及ぼす問題点、教師が家庭や幼児教育機関に望む点などを調査した。面談の実施に先だって父母、幼児教育機関長及び教師たちがその内容を認知できるよう、面談内容をあらかじめ郵送した。

E. 協議会：幼児教育専門家、幼児教育機関長、教師及び父母

創造的で全人的な人的資源養成の次元から見た、我が国の幼児教育の実態と問題点及び莫大に支出されている家庭の私教育費の現況、観察及び面談を通じて収集された資料を解析するために、協議会を開催した。協議会では、諸外国の創造的で全人的な人的資源養成政策及びこれらの政策の適用可能性を検討し、我が国の早期・特技教育の実態及び問題点とその解決方案を総合的に討議した。また、創造的で全人的な幼児教育革新のための政策方案（政策的課題とその支援方案）を、国家的次元と幼児教育機関、父母教育及び市民運動の各次元から論議した。このような研究の手続きを示したのが、<図１－１>である。

<図１－１>研究の手続き



Ⅱ．創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新の動向

1．創造的で全人的な人的資源養成の必要性（抄）

全世界的に創造性に対する期待と関心が高まっている。創造性に対する関心は第２次世界大戦以後高まり（Urban, 1996)、現在各国では創造的な人的資源養成のための努力に拍車をかけている。創造的能力に対する国家的・社会的要求が切実なのはなぜかと言えば、科学技術分野だけではなく社会、経済、芸術、文化などの分野においても構成員たちが創造的能力を発揮すれば、社会が持続的に発展するからである（Schank & Foster, 1995)。もっと根本的な理由は、先進国家を中心に開発され蓄積されてきた資源と技術が枯渇しはじめており、未来社会では創造性による生産を行わなければ、国家経済力が低下するからである（チョヨンスン、チョソッキ、フンヤンヒ、キムジョンホ, 1997)。個人的なレベルから見たとき、創造力は、情報化・多様化・専門化・個性化の時代の変化に対応して 21 世紀社会を生きていく場合の必須の能力である。それだけでなく、創造力は情報を適切に活用して、独創的で有用な価値を持った産物を生産し、生活の質を向上させることができるという点で、とても重要なのである（キムオンギ, 2000；チェインス, 1999)。

創造的能力が重要視される中で、創造性の発達は、これまで世界各国で 21 世紀の未来社会に対応する教育の革新課題とされてきた（キムオンギ, 2000)。韓国の場合、初等教育では第６次教育課程から、幼児教育では第５次教育課程から創造的な人間像の重要性が自覚され、教育改革時にも自律的で創造的な人間のための教育が強調されていた（教育部, 1995、1998)。

創造性発達のためには何を、どのように教育しなければならないか？　創造性の構成モデル（Components Model）で世界的に有名な Urban（1996）は、創造性発達のために全人的な発達を強化することが効果的で、特に「開放的な学習／開放的な教室と連結された時が、一番理想的である」と主張している。だとすれば、韓国では全人的な発達という目標のもと、開放的な教育を通じて創造性を育む教育を適切に実施しているだろうか？

残念なことに我が国の教育現場は、入試制度の固執的弊害によって私設学院に正規教育機関の席を渡しているという現象がある。また他の教育段階のことはともかく、幼稚園が全人発達及び創造性発達のための開放教育を実行することを、請け負っているかどうかは疑わしい。幼稚園でも教育崩壊の兆しが、至る所に見えている。現在多くの幼稚園が、一日の日課を各種の早期特技教育に該当する特別活動で埋めるような運営をしている。特に驚くべきことは、教師資格の無い人たちを特別活動の教師に雇用して、幼児の創造性と全人的な発達を度外視していることである。

従って本節では、創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育の総合的な改革方案を模索するため、前半部では創造性の概念の定義、創造性を構成する要素、創造性発達のための教育等を論議し、後半部では全人的な発達に対する概念、全人的な人的資源養成のための教育について、文献等を考察して提示した。

A. 創造的な人的資源養成のための幼児教育

（以下訳者による抄訳、要約等は字体を変えて示してある。）

(1) 創造性の定義

創造性とは 「新しくて（novel)、適切なものを産出できる個人の能力のことである」(Hennessey & Amabile, 1983； Lubart, 1994；Stemberg & Lubert, 1999）という定義を引用して説明している。

(2) 創造性への接近

Rogers の「創造性とは一つの新しい成果を生む行動を出現させて、それはその個人の特性と、その個人を取り囲んでいる事柄、人間、資料、状況等から生成される過程である」、を紹介し、以下の３点から、さらに紹介を加えている。

＜ 以下については、訳を省略する。＞

①認知的観察

②性格特性の観点

③構成的観点

(3) 創造性の発達のための教師と父母の役割

創造性の発達における教師と父母の役割は重要で、以下の環境と活動が提供されるべきであるとしている。

① 多様な経験を提供できる優秀な教育課程を提供すること。

② 多様な経験を骨格にして、その中から特定分野の興味を育て、持続的に活動していくこと。

③ 答が決まりきった「限定的な」質問ではなく、多様な思考を触発する「開放的な」質問を幼児に対してすること。

④ 幼児の創造的で意外性のあるアイデアや作品を受容して、また他人のそのような作品も尊重し、賞賛と激励をすること。

⑤ 発展的な思考を促進する「遊び」を奨励すること。

⑥ 余裕を持って考え、探索できるよう「待つこと」で、不安と圧力のない環境を提供すること。

⑦ 自分の考えや感覚を、多様な方法で表現できるような機会を提供すること。

⑧ 実際に体験する活動を通じての学習を励ますこと。

⑨ 幼児との多様な、たくさんの対話をすすめること。

B. 全人的な人的資源養成のための幼児教育

(1) 幼児期における全人的な発達の重要性

国民の基礎教育である幼児教育の主たる目的は、幼児の全人的な発達である。そのことは、先進国及び韓国の教育界でもすでに確認されているところである。

(2) 幼児期における発達と学習の原理と全人的な発達について

幼児の全人的発達の重要性をより良く理解するために、幼児の発達と学習に対する一般的原理についての先行知識と理解に関する情報の提供が行われている。

(3) 全人発達のための統合的幼児教育課程の運営

① 統合的幼児教育の思想はフレーベル以来の主張であること。

② イギリスの小学校及び幼児学校の「統合」概念の特徴を、(Brown &Precious, 1960) に依拠して説明。

③ <教育部 2000>文書によって、 心理学的側面から説明。

部分訳：原文 p.32 l.19-26

要約すれば、幼児の全人（Whole-Child）的な発達は、国民基礎教育である幼稚園教育の最も主要な目的である。幼児の全人的な発達を成り立たせるよう支援するためには、ホリスティックに接近する（holistic approach）方法を適応しながら統合的な運営をすべきであり、「創造性の発達は統合的運営の代表的プログラムとして評価される開放教育／開放教室で一番効果的に行われている」という Urban（1996）の主張を念頭に置かなければならない。また、教育先進国が、幼児教育の公教育体制を確立して、適正な幼児教育を通じて幼児の全体的発達を調和的にとげる全人教育を実行することによって、幼児期からの全人的な人的資源養成に力を注いでいることも想起されるべきである。

2．国家レベルの教育課程がある主要各国の幼稚園教育課程

A. 韓 国 （抄）

(1) 国家レベルの教育課程の性格

2000 年から施行されている「第 6 次幼稚園教育課程」は、教育法規によって公示された国家レベルの「基準」で、「文書化された計画」すなわち教育の基本設計図としての性格を持っている。すなわち、学習者に学習経験を選定して組織して、教育経験の質を具体的に管理する教育の基本設計図だと見なすことができ、さらにそれは教育目標、内容、方法や運営方式、評価を含む幅広い概念だと見なすことができる。国家レベルの教育課程は、幼稚園を初めとする初等・中等学校の教育内容に関する全国共通の一般的な基準のことで、この基準には幼稚園と初等・中等学校で編成・運営しなければならない教育課程の目標、内容、方法、評価運営等に関する国家レベルの基準及び基本指針が提示されている。

第 6 次幼稚園教育課程は、① 多様性を追求する教育課程、② 幼児を中心にする教育課程、③ 教員・幼児・父母がともに実現する教育課程、④ 教育課程を中心とする教育課程（原文のママ）、⑤ 教育の質的水準を維持、管理するための教育課程、という性格を提示していて（教育部, 1998）、特に、21 世紀の情報化・国際化時代をリードする創造的な韓国人の育成を改訂の基本方向に設定している。

第 6 次幼稚園教育課程の主要内容を調べてみると、基本生活習慣と協同的な生活態度を

育てるような具体的な教育内容を準備することを通じて、人間性教育の方向を提示することに重点をおいている。また、感情を啓発する教育と統合教育を強調して、健康生活・社会生活・表現生活・言語生活・探求生活等の全領域にわたって幼児たちの感性を開発できる経験が含まれていることに重点をおいている。このような感情を啓発する教育を実践するために、幼児教育は統合的に運営されなければならないこと、すなわち、学習者中心、遊び中心の教育への接近方法を通じて、幼児の発達と生活経験との有機的関連、活動領域間の連携、教育内容間の連携等を通じて統合教育を実施しなければならないこと、また、国際化・情報化の時代を主導して生きていくためには、自律的で創造的な教育活動が幼児の発達のレベルに合わせて提示されなければならないことが強調されている。

第６次幼稚園教育課程では、教育課程の全領域にわたって創造的な経験ができる環境構成、創造的表現の機会の提供ができるよう強調されていて、国際化に対応した伝統文化教育の充実も強調している。同時に、世界市民的資質を育てることが教育の重要な任務であるとしていて、このような要求を受け止めて、特に環境問題、多様な文化に対する理解、他者の尊重や民族に対する偏見のない態度等の内容を教育課程に反映させている。

幼稚園で適用されている第６次教育課程（教育部, 1998）の創造的な思考に関連する内容を調べてみると、「健康生活」・「社会生活」・「表現生活」・「言語生活」・「探求生活」等全ての領域で創造性が強調されていて、特に「探求生活」領域は、「科学的探求」、「数学的探求」及び「創造的探求」で構成されている。探求生活領域の性格と目標、内容等を調べてみると次のような内容である。

探求生活領域は、「幼児たちが興味と好奇心を持って自然現象と周囲の事物を探求するのに必要な基礎能力と態度を育てるための領域」である。「科学的探求」では、幼児たちが周囲のいろいろな事物や現象を観察し、探求して、変化の過程を調べる等の能動的な活動を行うことによって科学的な探求能力と態度を育て、幼児たちを創造的な思考と方法でものごとに接近できるよう導いてやることを明示している。この中で「創造的探求」では、生活の中で直面するいろいろな状況を敏感に認識し、多様かつ独特で融通性を持った対応のできる力と態度を育てること、特に言語及び表現生活と統合して展開すること、が求められている。「創造的探求」の目標は、日常生活でぶつかる問題を創造的に探求して多様な方法で解決しようとする態度を育てることで、教育内容は「周辺状況に関心を持って探索する」、「多様に考える」、「独特に考える」等の内容で構成されている。

(2) 教育課程の目標と内容

５領域の教育目標について、簡単に記述・説明している。詳細は省略。

(3) 創造的・全人的な人的資源養成の側面からの韓国の幼児教育課程の考察

＜p.37 の要約＞

国家レベルの教育課程は、根本的に国家が育てようとする教育的人間像に基づいている。我が国の教育は教育基本法第２条に提示されている「弘益人間の理念」（編者注：「弘益人間」とは古典『帝王韻紀』、『三国遺史』に出典があり、「広く人間世界を有益にする」という意味で、元々は

韓国の開闢の祖である「檀君」が唱えたとされ、古来、韓国の政治と教育の理想であった。大韓民国政府は1949年に教育法を制定した時に、これを教育理念として採択し、1997年に制定の教育基本法でも継承された。世の人のために尽くす人間像のことであり、人類共栄の理念を含んでいる。以上は、鄭廣姫, 2003）をもとに、全人教育と創造的教育を強調していて、これを幼児教育課程でも最も重要なものとして提示している。幼児教育課程で提示している全人教育と創造性教育について調べてみると、次のようになる。

① 人間的成長の基盤の上に個性を追求する人間

② 創造的な能力を発揮する人間

B. 英　国

(1)　国家レベルの教育課程の性格

英国は、幼児教育だけでなく教育全般にわたって、中央政府が教育には最小限の役割と機能を果たすことを原則としているが、長期的な経済不況を打開するための方案の一つとして、1988年の「教育改革法」が制定された。この法は、学校教育に対する不干渉主義を指向して、国民教育課程の範囲を法的に規定する権限を明示している。この国家レベルの教育課程は義務教育の対象である5～16歳までの生徒に適用されているが、幼児教育にも多くの影響を与えた。したがって、義務教育の対象である満5歳児の教育内容は、国家レベルの教育課程に適用され、これと連携して義務教育直前の幼児を対象に、「望ましい学習結果」（Desirable Outcomes for Children's Learning）という指針書が制定された。この名称は以後「学習目標」へと変更されて英国の幼児教育の指針となっている。

『学習目標』(Learning Goals)　は、教育雇用省(編者注：当時。2001年より教育技能省)が教育課程評価院(SCAA　編者注：1998年に廃止)とともに、義務教育直前年齢の幼児を対象に運営されている英国の全ての私立及び準公立、そして公立教育機関のために開発した文書である。先に言及したように、『学習目標』は国家水準の教育課程をよりよく理解する目的を持っているので、『学習目標』の構成や内容は、国家水準教育課程の第1水準と連結されている。むろん、各幼児教育機関で『学習目標』に義務的に従う必要はないが、政府の財政支援を受けるためにはこの内容を忠実に履行しているという証拠を示す必要があり、また教育水準局が幼稚園機関評価の準拠としているために、事実上は義務的な規定となっている。

(2)　教育課程の目標（Learning Goals）

『学習目標』は、初歩のリテラシー（読解力）と数概念、人格と社会的技術の発達に重点を置き、その他の領域に対する知識及び理解、技術の習得に焦点を置いている。『学習目標』は人格と社会性の発達領域、言語領域、数学領域、世界に対する理解と知識、身体の発達、創造力の発達に分けられている。

「人格と社会性の発達」は、幼児がどのように学習し、遊び、他人と協働するか、つまり家族を越えた集団のなかでどのように機能するか、に焦点を合わせている。人間の尊厳及び自分と他人に対する理解を含めて、人格と社会性、道徳性と精神性の発達の重要な側面を扱っている。自分についての理解と自立心を育ててくれる内容で、自己尊重感と他の

幼児や成人とのよりよい関係形成を強調する。「他人に対する理解」と関連して、他の人の要求と感情に敏感で、他の文化と価値観を持った人たちを尊重するようにして、順序を守って公平に共有できるよう援助する。また、自分の感情を表現するだけでなく、適切な方法で行動することが要求されているが、これはその際の善悪の判断理由についても幼児なりの理解をもつことを意味している。

「言語」領域は、言語発達の重要な側面を扱って、リテラシー発達の基礎を提供する。幼児たちは可能な限り早く、母国語に対するなめらかさを獲得できるように援助を受ける。言語領域は話すこと、聞くこと、読むこと、書くことの発達に焦点を置いており、話すこと及び聞くことに関連した内容としては、注意深く聞いてお話をしたり作ってみたりして役割遊びに参加することがあげられている。またリテラシー教育の内容としては、本を楽しく注意深く扱って、本の構造を理解する内容と、音韻を連合させて音と単語、音と文章を連結させ自分の名前といくつかの身近な単語を認識することなどの内容が含まれている。また、絵と象徴、身近な単語、綴り字を利用して意味を伝達して、自分の名前を大文字と小文字とに適切に区分して書くなど文章に対する基礎的な理解が含まれている。

「数学」教育は、数学的理解の重要な側面を扱っていて、数概念に対する基礎を提供している。数学的理解を援助する内容として、ものの形、位置、大きさ、量を説明するために、「円」、「～の前」、「～より大きい」、「～より多い」というような数学的用語の使用が含まれている。また韻をあわせて数字を読む、歌う、話すように数を数えるゲームと日常生活で接する事物を使用して比較、分類、対応、順序づけ、序列化、数えることをする。実際の活動を通じて数を理解し、記録して、足し算、引き算のような演算を認識し始めるだけでなく、これと関連した用語も使用する。

「世界に対する認識」と関連した内容は、幼児の周辺環境と他人、自然の特徴、世界に対する知識と理解に焦点を置いて、歴史的、地理的、科学的学習に対する基礎を提供するようにしている。

「周辺環境に対する内容」は、自分の住んでいるところ、周辺環境、家族、自分の過去と現在の事件に対する関心と理解を強調している。自然に対する内容には、生物と無生物の特徴及び自然現象と既存世界を探索し、認識して、類似点と差違点、パターンと変化を調べてみる内容が含まれている。また材料と道具を探索し、選択して、多様な目的のために切る、つける、載せるといった技術を使用するようにしている。

「身体発達を助ける内容」は、幼児の創造力、意志疎通能力、アイデアと感じ方を創造的な方法で表現する能力の発達に焦点を置いている。細かい内容としては、２次元と３次元の空間で音と色、質感、模様、形態、空間を探索することと、自分が見たもの、聞いた音、かいだにおい、触って感じたものについて多様な方法で表現することも含んでいる。また美術、音楽、踊り、お話、想像遊びを通じてアイデアや感情を表現し伝達するために広範な材料、適切な道具と器具、その他の資源を利用することなどで構成されている。

(3) 創造的、全人的な人的資源養成の側面からの英国の教育課程の考察

1988 年、教育法において提示されている教育目的を調べると、「学校と社会で生活する学生たちの知的、道徳的、文化的、精神的、身体的発達を促進させて、成人になって与えられる機会、経験と責任にむけて学生たちが準備するようにする」と提示していて（カクノ

イ、チョミンス、キムキュス、ユクジョン、チェヨンチョル, 1996)、このような全人教育に対する目的は、幼児にも適用されている。

先に提示した義務教育直前の幼児を対象にした“Learning Goals”は、全ての子どもたちが小学校に入学するときまでに国家レベルの教育課程に応じて準備されているべき基準を提供したという意味で、形式的な教育を強調していると見なすことができる。しかし、各領域に提示された内容を検討してみれば、幼児に適合した全人的な教育を指向していることも理解できる。「人格と社会性の発達」では、人間の尊厳性及び自分と他人に対する理解を含めた人格と社会性、道徳性と精神性の発達を重要なものとしていて、「言語」と「数学」の学習目標も、初歩のリテラシーや数概念の基礎を扱っていて、発達的に幼児に適合した内容が提示されているからである。また「創造力の発達」では、幼児の想像力とアイデアと感覚を創造的な方法で表現する能力の発達に焦点を置いている。

また、教育水準局が、“Learning Goals”を幼児教育機関評価の準拠と見なし、各学校や学級では、政府の支援を受けるためにその内容が忠実に履行されていること示す必要があることは、国家レベルの教育課程の履行に対する質的管理の側面からの示唆を、私たちに与えてくれる。

C. フランス

(1) 国家レベルの教育課程の性格

フランスの教育政策は、学習者の個人差を尊重して社会階層や経済的能力に関わりなく、希望する全ての人々に教育機会を提供することを目指している。このような精神は、自由・平等・博愛のフランス大革命の精神を継承している。フランスではこの精神によって 19 世紀以後、無償教育、中立教育、公教育体制を確立して、全ての幼児が教育を受けることのできる均等な機会を保障している。フランスの国家レベルの教育課程は、このような教育政策を反映して公布され、これに基づいて教育の方向と質的水準を評価している。

現行の国家レベルの幼児学校の教育課程（Ministerere de L'education Nationale Direction des Ecoles 1995）が提示した目的は、成人や他の幼児とともに生活する方法を学ぶことに重点を置いている。また、幼児が他の人々と対話する方法を学び、将来受ける市民教育の基礎を形成すること、周辺の世界を発見すること、文語と口語を含んだ言語を学習することによって話すこと・聞くこと・読むこと・書くことの基礎的な能力を形成することも含まれている。また、幼稚園は、芸術的楽しさのための活動と遊びを提供するための教育機関であって、感覚運動能力を育て、想像力を開発して、感じたことを表現し創造することの価値を経験して、これらを通じて感受性を育てるところなのである。

(2) 教育課程の目標と内容

教育課程の内容は、「ともに生きること」、「聞くこと・話すこと・読むこと・書くことに関心を持つこと」、「身体運動」、「周辺環境の探索」、「想像して感じて創造すること」、「分類・系列等の数と空間関係」などから構成されている。

大部分の幼児たちは、幼児学校ではじめて家族以外の他者と団体生活を経験することになるが、家庭生活と小学校教育の間で幼児が友達や他の人々とともに生活できる力と態度

を育てることに重点がある。

「聞くこと・話すこと・読むこと・書くことに関心を持つこと」を中心に行われている言語教育では、自分の経験を適切に話す能力と、読み書きを学ぶための基礎能力を育てることに重点がある。

「身体運動」の活動は、幼児たちが動くことを通じて周辺空間を探索して身近な事物を操作して、これらを通じて、自分の身体部分の機能と特性を認識できるようにするためのものである。

「周辺環境を探索すること」とは、幼児が周辺世界を探索して、自分の属する社会の文化ついて理解することができるようにするものである。周辺環境の探索活動では幼児の周辺にある多様な事物や自然物、すなわち空気、光、水、熱だけでなく生物や無生物、自然と人間を理解して、衛生や感染、安全に対する認識を深めるようにする。

「想像して感じて創造する活動」とは、幼児が多様な種類の芸術作品と文化を経験することで感受性を育て、想像力を刺激するためのものである。幼児は事物や行動、イメージ等を想像して創造する過程で、自分の感じたことを言語や動作その他の多様な方法で適切に表現する方法を学習する。これは他の人たちに自分の考えを伝え、交流することができるようになるためである。例えばその中の「グラフィック活動」では、さまざまな道具や身体や手で、紙や板などの素材に痕跡を残す活動をするが、幼児たちは手を精巧に動かす方法と多様な道具の使用法も経験しながら、意志表現をはっきりとすることを学ぶ。

「分類・系列・計算・測定・形態と空間の関係」の学習は、事物間の論理的関係を発見し、分類、比較、順序だてた配列などによって分類と系列の基礎概念を経験するためのものである。

(3) 創造的で全人的な人的資源養成の観点からみたフランスの幼児教育課程

フランスの幼児教育課程の特性は、人間が共同社会を形成するうえで守らなければならない生き方の基本姿勢を教える人格教育が強調されていて、そのために全人的な成長を助けるよう課程内容が構成されている。このような教育内容は、究極的に自由、平等、博愛の精神を幼いときから開発させるもので、特に他の人とともに生きていくのに必要な能力と態度を非常に強調している。この能力は、特に幼児たちが家庭生活から初めて団体生活を経験するなかで育てられなければならない最も基本的な能力である。それと同時に、言語教育も、他の人たちと対話して意志疎通をする媒体としての言語を通じて市民教育の基礎を形成するものだと考えられている。また、幼児の感受性と創造性を育てるような教育内容が強調されている。

また、幼児期の発達に適合した感覚・運動活動を通じて、幼児が自発的に学習する過程を重視し、言語を通じた注入式教育や断片的な知識の習得ではなく、幼児自らが学習する力を涵養することを教育の方向として提示している。

このようなフランスの幼児教育課程は、究極的に全人教育を指向していて、特に「ともに生きる世界」という認識と、これに基づく他者を尊重し思いやることができる能力と態度を重視している点から、示唆を受けることが多い。

D. 日　本　（抄）

(1)　国家レベルの教育課程の性格

日本は「学校教育法」第79条に基づいて、監督庁である文部省（当時）が初等・中等教育課程の改訂に伴い、「幼稚園教育要領」をその都度提示している。最も新しい幼稚園教育要領は、1998年に公布され、2000年から施行されている。幼稚園教育要領では基本的な規律を身につけるよう道徳教育を強化する一方、国際化に対応して他の文化に対して互いに開いた心を持つこと、情報化社会、環境問題、少子高齢化社会に対する対応が必要なことを強調していると整理できる（パクウネ, 2000)。

日本の幼稚園は、年間39週以上、幼稚園の一日の教育時間は4時間を標準として、幼児の心身の発達程度、季節、地域の要求にあわせて融通性を持って運営される。幼稚園の教育内容は、「学校教育法施行規則」による幼稚園教育要領に従っており、現行の幼稚園教育要領は健康、人間関係、言語、環境、表現の5領域に教育内容を区分している。

各領域の目標を要約すれば、次のとおりである。

「健康」領域：健康な心を育て、自ら健康で安全な生活を作っていく力を育てる。

「人間関係」領域：他の人たちと親しくして互いに助け合う生活のために自立心を育て、人々と関係を結ぶ力を育てる。

「環境」領域：周囲の多様な環境に好奇心と探索心を持って、それを生活に適用していく力を育てる。

「言語」領域：経験したこと、考えたことをそのまま言葉で表現して相手の言葉を聞こうとする気持ちと態度を育て、言語に対する感覚と、言語で表現する能力を育てる。

「表現」領域：感じたことと考えをそのまま表現することで、豊かな感性と表現力を育て、創造性を豊かにする。

(2)　教育課程の目標と内容

＜省略＞

(3)　創造的・全人的人的資源養成の側面からの日本幼児教育課程の考察

日本では学校を、立派な市民を教育するための道徳的共同体で、社会化の基礎的訓練の場所だと見なしている。したがって幼児教育に最も期待することは、他の子どもたちと一緒に遊びを分かち合い、互いに感情移入することを学ぶこと、特に集団の一員として社会化されていく過程を援助することである。

日本の教育では、何よりも教育を通じて知識や技術を習得する以外に、道徳教育と人格の発達という重要な目的を達成しようとしている。特に既存の秩序に対する尊重、個人の理解より集団の目標を強調し、勤勉等の価値を重要だとしている。すなわち、日本の教育では子どもの社会化を重視していて、特に日本の文化と価値観を遵守することを重要視している。

このような脈絡から、幼稚園教育要領は大きく５つの目標を提示している。

第一、　健康で安全で幸福な生活のために基本的な生活習慣及び態度を育て、健全な心身の基礎を固める。

第二、 人間に対する愛情と信頼感を持って自立、協同の態度及び道徳性を育てる。
第三、 自然等身近な事物と現象について興味と関心を持って、それに対する豊かな感情、思考力を育てる。
第四、 日常生活の中で言葉に対する興味と関心を持って、楽しく話を聞く態度、言語に対する感覚を育てる。
第五、 多様な体験を通じて豊かな感情を育て、創造性を豊かにする。

すなわち、日本の幼児教育課程は、道徳教育と価値観形成を重視しながら、社会的な変化に対処できる能力を開発させること、教育内容は現在と未来の学習の基礎となることに焦点を合わせている。

E. 各国の国家レベルの教育課程の特色と示唆点

一国の教育課程は、その国の教育の方向を規定し、引いてはその国の未来に直結するため、各国では現代社会における持続的な変化と変革を反映する教育課程の開発と改善のための弛みない努力を注いでいる。

本節で探ってみた各国の国家レベルの教育課程が示唆する点は、次の通りである。

(1) 教育の機会均等のため、幼児のおかれた社会的・経済的環境に関わらず、幼児教育を受けようとするすべての幼児のための幼児教育制度を発展させるとともに、その質の向上にも力を注いでいる点。例えば、1997年からイギリスで実施されているSure Start Projectは、4歳未満の子どもとその家庭とを対象にする総合的な施策であり、フランスが1982年に、低所得層または少数民族が密集した地域を対象に教育投資優先地域（ZEP：Zone d'Education Prioritaires）を指定し、集中的な教育投資を通して幼児教育の平等性を実現していることが、それである。また、1994年に策定された日本のエンゼルプラン（Angle Plan）も、幼児に対する社会的支援を総合的かつ計画的に推進するための目標に基づき、幼児教育への支援施策の基本方針と重点施策を設けている。

すなわち、すべての子どものための幼児教育の保障と、そのために子どもがいる家庭を支援する総合的な体制を設けることによって、機会均等を保障し、質的に優秀な教育を受けることができるよう、指導・管理しているのである。

(2) 教育の質的水準を保障しながら、教育課程の面で小学校・家庭と連携することを強調している点。こうした連携は、国家レベルの教育課程の中に明確に表記されており、これらに対する実行の有無を評価する体制も設けている。すなわち、国家による財政的支援とそれに準ずる教育課程運営の質的水準とを結び付けて指導している。こうした例は、イギリスにおいて実施されている学習目標を通した義務教育との連携案に明確に現れている。イギリス政府は、すべての子どもが義務教育の開始段階である小学校に入学した際には、国家水準の教育課程に追いつくことができるようになっていることを期待しており、このために学習目標を提示するだけでなくその実行の有無に対する評価制度も導入している。

こうした例は、国家が教育的方向を明確に提示しなければならない時には、その実行の

有無を評価できる方法まで研究し、これを財政的支援案とセットで行うと、その効果が大きいという事実を示しており、大きな示唆を与えてくれる。また、幼稚園と小学校との連繋教育の重要性も教育課程の改訂過程において、強調されることが望ましい。

(3) 教育目的や方針において、幼児の全人教育に重点をおき、初期の社会化過程を手助けすることに焦点をおいている点。すなわち、他者と共に生きる能力と態度を重要視し、自分と他者に対する尊重や望ましい社会化過程を強調している。全人教育や社会化過程についてはすべての教育段階において強調されるが、特に、幼児期の場合は、初めて集団の中に入って家庭とは異なる社会的経験をするため、最も重要視されている。個人生活から共同生活への変化を経験し、一人ではなく多数の人と生活しながら順序を守り、公平に共有し、他を配慮する能力を育むことは、人間教育の基礎としての幼児教育において重要視されている。こうした内容は、韓国の「幼稚園教育課程」においても強調されているため、どのように教育現場において実行されているかに焦点を合わせる必要がある。こうした意味から、幼児教育の課程の中で最も強調され、必ず実行されなければならない教育内容をいかに幼児教育の現場に適用するかに対する論議が必要である。

(4) 幼児の創造的思考を強調している点。創造性は、今日どの国においても教育の最も大きな目的として浮上しており、各国の国家レベルの教育課程において強調されている。創造性の教育は、教育部の教育改革委員会においても、未来社会の教育指標としての民主的市民教育、共同体的生活適応教育、創造性の育成教育、道徳的な人間教育というふうに提示されている。創造性の教育は、すべての国、そして韓国においても学校教育がなすべき最優先課題として選定されている。しかし、具体的にいかに創造性の教育を実現できるかについては多くの難問がある。特に、多くの知識をいかに速く伝達するかを重視し、これを基準に比較、評価する課程においては、創造性の教育はその立場を失いかねない。

創造性の教育は、個人差のある、学習への好奇心と要求を尊重し、多様な探索と思考を励ます風土の中で育むことができるという知見は、幼児教育の革新的方向を示唆してくれるだろう。

3. 韓国と日本の早期・特技教育に関する先行研究

A. 韓　国

早期教育が人間の知的･情意的･社会的な基礎を形成するという事実に照らしてみると、幼児教育は個人的側面からだけでなく、国家的な次元からも非常に重要な事業である。これは、21 世紀の知識基盤社会では、知識を創出できる人的資源の早期発見とその教育が、とても重要だとみなされているためである。このような立場から教育先進国では、早くから幼児教育に多くの関心を持って、教育機関の普及と教育水準の質的向上を政策の基本理念として打ち出しており、そのために教育投資の増大に力を注いでいる。このような国家では、幼児の潜在能力を最大限に発揮させるために、3～5 歳児のための公教育（編者注：公費負担の教育の意味）の機会を拡大し、他方では、障害・貧困・疾病・虐待・学習困難等の危険な状況に直面している幼児たちに対して国家が社会的責任を負って教育的に介入する、２種類の指導を同時に遂行しようと努力している（パクウネ, 2000)。

我が国でも、1980 年以降、幼児教育は量的発展をみせ、1990 年代になって幼児教育を公教育体系の中に位置付けるための努力を活発に行った。最近では、社会発展とともに国民基礎教育の範疇を拡張して、無償教育を拡大、実施しなければならないという認識が高まって、無償教育機関を下は幼稚園を含む就学前教育、上は高等学校にまで広げるべきだという意見が提示されている。このような状況に対応して、1997・6・2 教育改革委員会は「新教育体制樹立のための教育改革方案」で（Ⅳ）「幼児教育の公教育体制確立案」を提示して、これを具体化するための研究を行った。

これまでに我が国で実施されてきた幼児の早期・特技教育に関する研究は、主として早期・特技教育が幼児の発達に与える影響を明らかにすることと、幼児に早期・特技教育をさせる理由・種類を知るための実態調査であった。最近では、母親の側の成功圧力と学院や学習紙利用程度の相関関係を分析して、過度の学院や学習紙利用が、幼児のストレスに与える影響を明らかにする研究も行われている。また外国語教育に対する韓国社会の関心の高まりとともに最近急速に増加している幼児英語教育と関連して、言語教育の適切な時期を明らかにしようとする研究、早期英語教育の実態を分析する研究も発表されている。このような研究成果を簡単に紹介すれば、次のとおりである。

(1)　早期・特技教育と幼児の発達

幼児期の発達や教育が人生の全過程で占める意味は何かといえば、この時期の適切な教育を通じて個人の潜在能力を最大限に伸張させることである。しかし時としてはこのような考え方がよく理解されず、幼児に人よりもより早期により多くの環境的刺激を与えることが、それ以後の学習に役立ち、個人的な成功にむすびつくという無知な考えが韓国の幼児教育に対する関心を加熱させて、幼児教育の本質的役割や方向を歪曲する原因となっている。このような現象は、むろん幼児期の重要性を明らかにした多くの研究成果に対する一般人たちの理解不足や誤解からも始まっているが、韓国の社会文化的特性からも、家族構造の変化や社会経済の水準の向上（世帯あたりの所得増大等）の社会的要因によっても生じている。

特に、20 世紀以降活発に行われてきた発達心理学分野の研究の中で、Bloom の知能発達に関する研究や、環境的影響の重要性を強調した Hunt の理論は、幼児の初期に多くの経験を提供してやることによって先天的な能力をよりいっそう伸ばすことができるという考えを社会に広く流布させた。また、1990 年代以降の脳科学分野の研究成果は、脳の発達のために生後初期 3 年間の外部環境と経験の質的要因が重要であることを強調した。このような研究結果を通じて人々は以前よりも、幼児により水準の高い知覚的・認知的・言語的能力と成功を期待するようになった。このように幼児期のより早い時期に、より多くの経験を提供することで幼児たちの能力を開発できるという考えは、最近急速に成長している幼児教育産業の商業的要素と連結することで、幼児の早期・特技教育の過熱現象まで生み出している。

早期教育に対する関心は、我が国にだけ限定された問題ではない。1957 年のスプートニク・ショックでアメリカでは教育に特別な関心をおくようになり、世界の各国にも影響を与えた。その後、早期教育は社会の低所得層の貧困打破のための突破口とみなされるようになり、小学校での学業の失敗を予防し、教育機会均等の原則を実現するための具体的方法として社会的に大きなブームとなった（Gordon & Browne, 1985）。

早期教育に対する関心は、父母の職業や教育水準、社会的階層等に関わりなく、全ての幼児に教育の機会を拡大するという政策から、さらに「英才教育」にも向けられるようになった。アメリカの場合、英才教育は国際競争力の増強、教育における機会均の原則等の次元から、社会学的、政治的、哲学的な論議が継続されており、英才児の定義についても学問的な探求が継続されている（シンセホ, 1983；ヤンソンヒ, 1990）。

教育の実際においても、英才児をどのように判定できるかという問題から、一般学校での英才児教育、英才のための特殊教育に至るまで、多様な主題に対する研究が活発に行われて、英才教育は学問的にも、実践的にもその領域を固めている（Karnes, 1983）。

韓国の場合、英才教育は早期教育の熱風とともに大きなブームを起こしているという点で、アメリカの場合とよく似ているが、性質上いくつかの点で大きな違いがある。

第一に、英才教育に対する学問的研究の歴史が浅く、これまで行われてきた研究の実際的影響力もまたかなり限られている。

第二に、韓国の場合、英才という用語はアメリカの場合とは異なり、単に学業的な能力が飛び抜けている場合にだけ限定する傾向がある。アメリカでは英才児は知的能力だけではなく、学業的適性、創造的・生産的思考、リーダーシップ、芸術的素質、身体能力のうち一種または複合的な側面で卓越している場合を意味すると概念化されていて、これに加えて集中力、開放性、非同調性、勇気、情熱、決断力、忍耐力、独立心等の情意的特性をその基本的な性向として定義している（シンセホ, 1988；Gardner, 1983）。

第三に、韓国の場合には英才教育プログラムが学問的、政策的次元からの研究過程を経て実行される以前から、その大部分が知能開発を標榜する私設教育機関や家庭で、1～2 歳の幼児までをその対象として実施されている。特に、英才教育の一番基本的な過程である英才の選抜や判別段階についてはほとんど無視されたまま、商業的な目的と子女に対する父母たちの期待によって実施されている点に問題がある。

韓国の英才教育のこのような特性は、他の特技・課外教育にも影響を与えて、例えば速算、珠算はむろん音楽、美術、テコンド、コンピュータなどの私設学院教育が実施されて

いる。多くの人々は現在、韓国では過去のどの時代よりも幼児教育のために多くの努力と投資がされていると考えているが、実際には年ごとに過度のストレスによる幼児の精神疾患、胃潰瘍、腸炎等の数が急激に増加している事実がある。科学技術の発達と物質文明の豊かさによってかえって大人たちは、幼児たちが未来にどのような姿で育っていくかについて際限なく焦燥し、期待をふくらませている。そしてそのために、現代を幼児たちにとって一番不幸な時代にしてしまっている（Leshan, 1990)。早期教育に対する熱風は、幼児教育を小学校教育の準備段階であると認識して、父母間の過度の競争心理を煽ることで、幼児に過度の期待やストレスを与えて、彼らの身体的、精神的発達にもむしろ悪影響を与えているのである。

(2) 幼児早期・特技教育の実態

韓国の早期教育は、幼児の発達に適合した経験を提供する適時の教育の意味よりは、発達を早めるための教育、または小学校での学習に事前対応するための準備教育の意味として理解されてきた。従って早期教育を担当する機関も、正規の幼児教育機関よりは私設学院及び家庭で行われる特技・課外教育がその本拠地だと認識されてきた。幼児のための特技・課外教育は、特技及び課外教育の本質的な意味は無視されたまま、社会の流行病のように浸透することによって、父母はむろん幼児の発達にも否定的な影響を与えている。幼児たちの早期教育の実態を調査したソウル教育統計年報によれば（1989、1990、1995、1999)、就学前に学院で受講した幼児たちの数は継続的に増加する趨勢で、学習紙市場の規模も毎年 1,000 億ウオン以上増加の勢いを見せている。

特技教育や課外教育は、本来学習者が持っている資質や個性を開発したり、補完するためのものであるにも関わらず、実際に多くの幼児たちは、父母の望ましくない心理的動機によって私設学院のような商業的な機関で教育を受けている。教育対象となる幼児の年齢も漸次下降化していて、最近では就学前の幼児は無論、1-2 歳の乳幼児まで早期・特技教育の対象となっている。

このように早期・特技教育が、幼児の個性や潜在可能性・素質を開発する結果とは関わりなく、子女に対する父母の一般的な期待や計画によって実施されるならば、幼児の素質を早期に開発するというより、幼児に不必要な負担だけを与える結果を招くのである。結局、幼児は、それぞれの潜在可能性を開発し、多様な状況に自ら対処して適応できる能力を育てるべきときに、早期・特技教育という名の下に、成人たちの要求・必要にあわせていじりまわされているのである。このような早期教育の熱風は、幼児期をゆがめ、社会階層間の違和感を醸成して、父母たちの経済的負担を増すだけでなく、韓国社会に営利を目的とする早期・特技教育機関が乱立する結果を招いている（ウナムヒ, 1993；チュヘヨン, 1998；ヒョンオンガン, 1997)。

韓国における幼児の私教育の実態を調査した研究によれば（ウナムヒ、ヒョンウンジャ、イジョンヒ, 1993)、幼児たちは満３歳以前から私設学院に通い初め、幼稚園に通っている幼児の 92.3%が私設学院で教育を受けていることが明らかとなっている。ハングルと数字を教える学習紙からピアノ、美術、速算、テコンド、水泳、スケート、コンピュータ、英語、英才教育、雄弁術等に至るまで、その種類は全部知ることができないほど多様である。また幼稚園に通っている幼児の場合、平均約２種類以上の特技教育を受けている。幼児たち

が就学前から早期・特技教育を受けた場合、他人と調和して生きていくことより他人を負かすことが重要だとする考えを持つようになるだけでなく、正答探しや語彙習得等が主流をなす学習紙の特性から、2〜3歳という幼い年齢から開放的で創造的、自律的な思考よりは、閉鎖的で他律的な思考を形成してしまうことが憂慮される。幼児に早期教育をさせている今の実態について、大部分の父母たちは、「教育の開始時期がとても早く」、「費用が高い」などの否定的見解を持っている。また、過半数以上の父母たちは現在のような早期教育の奇現象を招いている要因は、「父母たちの過大な欲心」であると指摘し、「正規の教育の質的水準を高めること」を希望している。

幼児早期教育の過熱現象が著しいソウル市の江南区と京畿道の盆唐地域での実態を調査したパクスジン（2001）の研究では、早期・特技教育を以前受けていた、あるいは現在受けている幼児が全体の94.9%と、ほとんど大部分の幼児が特技教育を受けた経験のあることを示した。早期教育をさせている理由は「周囲でさせているから」(18.2%) が一番多く、多くの父母たちが「特技教育の時期がとても早い」(71.3%)、「種類がとても多い」(88.8%)、「費用がとてもかかる」(91.2%) と考えている。幼児が受けている特技教育の種類の数を調査した結果、平均4.23種で、その内訳は英語(65.4%)が一番多く、その次に美術(58.1%)、ハングル（54.7%）であった。早期・特技教育を実施する理由は、「子女が好むため」、「やむを得ず」、「他人に遅れないため」等で、中断した理由は「別に効果がない」または「教育方法と内容が不適切なため」が多かった。現在、我が国の幼児早期・特技教育の実態について父母たちは、現在の雰囲気の問題点を主として指摘するとともに、公教育の機会を拡大する必要性を強く主張していて、その次に「韓国社会の私教育の過熱現象」、「幼児の素質と適性にあった教育の必要性」、「知識中心の教育よりは人格教育が必要なこと」を強調している。

フンウンジャ（2001）の研究では、幼児が一番多く行っている早期・特技教育はハングル（75.3%）で、その次が総合学習紙（56.2%）、数学（50.6%）、英語（38.2%）、国語、美術、ピアノの順である。幼児たちが学習紙を始める時期は満 3〜4 歳が一番多く、父母が幼児に学習紙をさせる主要な理由は「知能開発」（44.9%）と「小学校準備」（19.1%）であることが明らかになった。3種類以上の学院や学習紙を利用している幼児の比率は60〜68%を示し、韓国の幼児早期教育の過熱現象を知ることができる。一部の幼児は、同時に9種類以上（4.5%）の学院通いや学習紙の購読をしていることも示された。

キムヨンシル（1998）の研究でも、学院や個人指導等の幼児教育機関以外の教育を受ける幼児が62.9%を示して、働く母親よりむしろ専業主婦の母親が子女の早期教育をより多くさせていることを明らかにしている。早期教育の主たる目的は、フンウンジャの研究と同じように「小学校準備」と「特技教育をさせる」ためのものが多く、特技教育の種類では、楽器練習、美術、数学、ハングル、英語が多かった。

ソウル市に居住する2000世帯の私教育の実態を調査した97年の調査結果を見れば、保育園（オリニジップ）・幼稚園と保育室（ノリバン）に通っていない就学前の幼児の77.3%が一定の形態の私教育を受けていることを示していた（シンチン, 1997)。パクジョンミン（1987）は、幼児を対象に販売されている家庭学習紙の内容を分析したが、4歳児の75%と5歳児の80%が家庭学習紙を購読した時期があって、このうち3分の1は単純な問題の反復に嫌気がさして購読を中断している。幼児たちが受けてみた家庭学習紙の主要内容は、

数の教育に関する内容が平均53.6%、言語教育に関する内容が12.4%で、数学教育の内容は、空間や図形等の内容より、主として数の学習に、言語教育の内容は話すこと・聞くことよりは読むこと・書くことの学習にかたよっていた。

(3) 早期教育と幼児のストレス

最近までストレスに関する研究は、主に精神病理学的な立場からの大人を対象とする研究だった。しかし、現在では大人よりも幼児が受けるストレスのほうがより危険であるという認識と関心が高まってきた。幼児は大人とは違い、ストレスの原因を認識してそれに対処するような知的技術と言語的能力をもちあわせていないので、ストレスがいっそう累積され、その被害の程度はより大きい。従って、幼児が受けるストレスは社会性や情緒の発達と適応に否定的な影響を与えることになる。

幼児ストレスの原因の中で一番深刻なのは、父母の別居や離婚で、次が発達に不適合な学習負担である。Brenckman と彼の同僚たち（1987）は、幼稚園児のストレスを研究した結果、ストレッサーとなるのは「幼児の発達に不適合な学習負荷」や、「家族や友達の死亡」、「引っ越しや転学」、「兄弟の出生」、「個人的傷害や疾病」、「父母の別居や離婚」である。その中で父母の別居や離婚が一番深刻な不安症状の原因となり、発達的に不適合な学習負担がその次に深刻な不安症状を引き起こす要因だと報告している。従って、早期に幼児に過重な学習負担を与えることは、幼児のストレス行動の原因となっている。

また、職場を持つ母親よりも専業主婦の母親の子どもが学業と関連したストレスをより多く受けるという調査結果があり、専業主婦の母親たちのわが子に対する過度の執着と期待が、幼児にはより大きなストレスとなっていると報告されている（ハンミヒョン, 1996）。キムチェウン（1998）も過重な学習負担と母親の期待と圧迫が幼児にはストレスとなっていて、専業主婦の母親の幼児が、働らく母親の幼児よりも学習関連ストレスをより多く受けていることを明らかにした。

早期の過重な学習負担は、ストレスの原因となって「学院に行きたくない」、「学院の先生が嫌い」という反応を見せるようになる（キムチェウン, 1998）。

学院と学習紙が幼児のストレスに与える影響を調査したフンウンジャ（2000）の研究では、母親の成功圧力が高いほど、幼児のストレスが高くなっていて、学院通い・学習紙購読を多くさせる傾向のあることを知ることができる。学院と学習紙での学習を多く行う幼児の方が、そのような学習をあまりしない幼児よりも、ストレスをより多く受けるということも明らかになっている。

Solderman(1984)も、発達能力以上の成功を要求することは、幼児にストレスを与えることだとしており、Burts ら（1990）によれば、発達的に不適合な教育プログラム、すなわちトレーニングペーパーや機械的学習を多用する教育の有害性を報告した。実際に我が国で学院に通う経験が就学前幼児の発達に与える影響を研究した結果、就学前に1種類だけの学院に通った幼児の方が、数種類の学院に通う幼児グループよりも学習習慣、教師・友だち関係でより肯定的な態度を見せたことが示された。

このような側面から、小児精神科医たちも過度の早期学習や学院・学習紙利用が、幼児の頭脳の発達と精神衛生に深刻な影響を与えるストレスの要因であることを強調している（シンイジン, 2001。編者注: 本資料集所収の『賢い親はゆっくり育てる』著者）。最近、大学病

院の消化器内科外来では、過度の英語学習の負担からストレス神経性胃炎の症状を訴える乳幼児のケースが続出している。実際に育児関連情報提供業界や小児科と神経精神科病院のインターネットサイトには、一日で 10～30 件の早期英語教育関連の乳幼児のストレスについての質問が寄せられている。

最近では、父母たちの早期英語教育に対する過剰な反応として、本来は言語疎通に支障のある人たちにだけ施術される「ソルソデ整形術」という舌小帯を切除する手術を、発音がよくなると信じて幼児たちにまで受けさせている。英語を学んだために母語ができなくなる幼児から、英語に対する過度の負担感で円形脱毛症にかかる子どもまで、各大学病院の小児科と精神科では、ゆがんだ早期教育の熱風の犠牲になった子どもたちの事例が報告されている（『週刊東亜』, 2001)。

(4)　早期英語教育の実態

最近の国際化の波によって、韓国の社会では英語教育に対する関心が高まると同時に、学習紙や私設学院を通じて英語教育を受ける幼児たちの数も増加している。1994 年の調査では、すでに幼稚園で英語教育を受けている幼児が 35.4%になっていて（イジョンヒ, 1996)、 1998 年には 88.2%の私立幼稚園で英語教育を実施していることも示されている（キムキョンスク, 1998)。研究対象の特殊性を考慮したとしても、4 年の間に英語教育を実施している幼稚園の数が 2 倍以上に増加したことは、英語教育に対する韓国社会の関心を反映するものである。

我が国の幼児英語教育の実態を分析した研究では、幼稚園で英語教育が始まったのは 1994 年以後で、幼稚園児の過半数以上が英語教育を受けていることが報告された（キムチンヨン, 2000、; キムウナ, 1995 ; ソンチュンビン, 1998 ; ハンユミ他, 1997)。

しかし、早期外国語教育の効果を研究した Rivers(1981)は、大人は推理力と分析的思考で幼児より優秀で、幼児よりも短い時間で外国語を習得できることを示し、早期外国語教育の必要性はないことを主張した。Saville-Troike(1998)は、早期の外国語教育は発音や柔軟性の面では効果があるが、母国語を習得してから外国語を学習する場合の方が抽象的語彙を早く習得できることを明らかにした。彼は一つ以上の言語学習を幼児に強いることは、精神発達に害を与えると早期外国語教育に反対する見解を提出している。

韓国での幼児英語教育は、学問的研究過程を通じて検討・検証された結果によってなされているというより、個人的要求が社会的要求に拡大された社会的現象の一つだと見ることができる。特に、1995 年に小学校で英語教育が実施されてから、早期英語教育熱がいっそう膨張し、幼児教育機関でも幼児に早期英語教育を実施するようになった。

現在の韓国の小学校で実施されている英語教育の実態を分析したイワンギ(1997)は、その問題点を二つの側面から提示している。一つは私教育の膨張による加熱課外教育の問題で、もう一つは教材・教具、教育資源が不充分なために発生する教育の質に関するものである。こうした問題以外にも、我が国では外国語学習のための現実的な教育環境が非常に制限されているので、韓国的な文化価値観が未だ形成されていない児童に、西洋の価値観を与えることができるかという問題点と、国語の習得が完全でない児童に英語の学習が招来する問題点があり、これらを根拠として早期外国語教育への反対論も提起されている。

ウナンヒ(1995)も韓国で実施されている早期英語教育の問題点を指摘している。無条件

に早く学ぶことが効果的だという考えから親はとても早くから英語を強要し、子どもたちが自由に遊ぶ時間を奪ってしまう。幼いときから学べばより容易に学ぶことができることを期待するけれど、韓国では英語を第二言語として使用することが無く、日常生活の中で幼児が自然に英語に接する環境が具備されていない。簡単な歌とリズムを学ぶことでは、英語学習に大きな効果を期待することはできず、外国語をいち早く学んでもそれが生活の中で持続されない場合には、大人になってから学ぶよりも早く忘れてしまう、というのがその主張である。

英語教育の指導方法も基礎教育としての幼児教育の基本方向に反する長時間のヒアリング、スピーキングの教授方法が主として成立していて（ウナムヒ、イジョンヒ， 1996)、そのほかにも多くの研究者たちは、幼児のための適切な英語教育プログラムや専門的な教師の不足等（キムウナ, 1995；イソンヒ、オヨンヒ、パクヨンシン, 1996）をあげている。

このような傾向は、幼稚園での英語教育の実態と教師の認識を調査した研究でも同じように示されている。幼稚園では英語学習を日課の中で主に大集団活動（84.0%）で実施していて、英語教育のための適切な教育内容や教材・教具が絶対的に不足している状態で、英語を担当する教師の資質にも問題があり、限界が多いことが指摘されている（パクファユン他， 1997)。

英語の授業を実施する幼稚園を観察と面談によって調査したチュヘヨン(1998)の研究では、英語教育が大部分大集団活動（77.3%）で行われていて、英語の授業と幼稚園の活動の連繋ができていないこと、英語担当教師の71.1%が幼児の特性や授業内容について幼稚園の教師と全く討議していないことがわかった。幼稚園で英語教育を実施する場合、いろいろな問題点があるけれども、その中で最も深刻な問題の一つは、教師の資格と資質に関するものである。英語教育を担当する教師の中で、大学で英語教育を専攻した人は4名（8.9%）にすぎず、ほぼ過半数（46.7%）が幼児教育や英語とは関係のない非専攻者であることが示された。これは英語教育に対する関心とはうらはらに、英語教育を担当している教師の資質が看過されていることだと見なければならない。このような傾向は、教師を対象として英語教育実態を調査したキムチンヨン(2000)の研究によっても示されている。それによれば、幼児英語教育と関連して過半数以上の教師たちが「自分は十分な知識がない」と認識している。

幼児たちのための教育内容や方法の不適切性や教師の資格問題は、英語の学院だけでなく、美術や音楽等、他の学院の場合も同様である。我が国の美術学院と音楽学院の現況を調査したユジョンヒョン（1990）によれば、学院の院長や教師の50%以上が幼稚園教師の資格を取得しておらず、大部分の学院が建物の2階3階に位置していて、室外の遊び場もなく、実技のような技能教育を偏重したり、小学校準備教育を実施したりしており、全人的な幼児教育を実施しているとはいえない。

(5)　小学校及び幼稚園の私教育費

幼児教育に対する過熱は、結局父母たちの私教育費の負担と連ぶついている。統計庁（2001）が調査した我が国の就学前幼児の月平均教育費は、12万2000ウオンで、小学生（11万2000ウオン）を上回っていて、そのうち教育機関に納入する費用（4万8000ウオン）より課外教育費（5万8000ウオン）に対する支出が多い。子女の教育費が所得に

比べて負担となっているという世帯が全体の 72.5%で、96 年の調査の時より 66.7%増加した。1999 年にソウル市内の 2000 世帯を対象に調査した資料によれば、10 世帯中 1 世帯の比率で私教育費が世帯総所得の 30%を占めていて、37%の主婦が私教育費に充てるため副業をしたり借金をしていることが明らかになった（カクスラン、イユミ, 1999)。

イムヘギョン(1991)は、「小学生の私教育費と学業成績との関係」を明らかにする論文で、私教育費支出の原因が、公教育に対する父母たちの満足度の欠如にあることを指摘し、父母たちは私教育費を投じることで子どもの学業成績を向上させたいという大きな期待を持っていることを報告した。また、キムヒョンジン（1994）は、小学生の大部分が 1、2 個の課外教育を受けていて（80.7%)、学業成績向上や補習のために毎日平均 2 時間程度を費やしていることを示した。

イチェヒョン(1994)は、「私教育費の実態分析」の研究で、私教育費支出は社会階層と密接な関係を持っていて、上流層の方が子女の私教育費投資を多くしていること、月平均私教育費は女児の方が男児より多く占めていることを明らかにした。キムサンナム(1994)は、「私教育費支出の内容と性格に関する研究」で、課外教育費は父母の学歴が高卒よりは大卒、農村よりは都市に行くほど、より多く支出される傾向のあることを示している。また、ソチョンス（1998）は、小学生の私教育費の効果を分析して、父母たちは主に子女の基礎学力を補完するために課外教育をさせていると報告している。特に、父母の学歴が低いほど基礎学力補完のための課外教育をさせる傾向が高く、高学歴の父母になるほど趣味・特技開発のための課外教育をさせる傾向が高かった。

イジュンヒ(1990)は、小学生の私教育費が家計に与える影響を分析しているが、父母の月平均私教育費のうち、学院にかかる費用の負担が莫大なことを明らかにした。また、小学生の父母は私教育費への負担感があり、実際の家計費支出で私教育費が占めている比重も大きい。コンウンベ(1991)も、公・私教育費の投資規模を比較しているが、韓国全体の直接教育費のうち、公教育費は 48%で、私教育費を下回っていることを明らかにした。このように小学生の私教育費は、公教育費を超えて次第に増加していることを理解することができる。また父母の学歴や経済的能力によって、私教育費支出における格差や違和感が生じていることもわかった。

幼児の私教育費に関する研究を実施したカクスラン、イユミ（1999）によれば、幼稚園児、小、中、高校生の 51.3%の家庭が負担する課外の私教育費の総量規模は、9 兆 4271 億ウオンで、公教育費を超えている。学生一人あたりの課外教育費は幼稚園児が月平均 16 万 5000 ウオンを支出していて、このように私教育費に対する家計負担は、かなり大きいことを調査した。

ウナムヒ、ヒョンウンジャ、イジョンヒ（1993）の「私設学院及び家庭中心の早期・特技・課外教育の実態に関する研究」によれば、ここ 10 年あまりの間、早期・特技教育が過熱してその費用は一世帯あたり平均 10 万 5000 ウオンで、最高 120 万ウオンまでの私教育費を支出している家庭も少なくなかった。

ホンウンジャ（2001）の研究でも、幼児の月平均私教育費は 5 万ウオンから 9 万 9000 ウオンの間が 26.97%、4 万 9000 ウオン以下が 24.72%、20 万ウオン以上が 21.35%と私教育費の差を示している。早期教育のさかんな前掲の江南区と盆唐地域の幼児の早期・特技教育に支出される費用を調査した結果からは、幼児一人あたり月平均約 25 万ウオン程

度の特技教育費用が使われていることが示されて、10 万ウオン台(23.1%)と 20 万ウオン台(24.3%)が全体の約 50%を占めていた。幼児が受けている早期・特技教育の科目数が多い数ほどその費用も増加することを示している。

以上のように、現在大部分の幼児たちが早期・特技教育を家庭と幼児教育機関で受けていて、幼稚園以外の私教育費に対する父母の家計負担が大きいことがわかる。

このような私教育と私教育費が園児・児童と父母に与える否定的側面を解消するためには、学校教育を正常化し、公教育を強化することが最優先課題といえる。キムビョンチュ(2000)は、公教育の現実が私教育と比較ができないほど劣悪だと指摘しながら、何よりも学校教育の充実化で課外教育への需要を減らしていく根本的な処方が必要だと述べている。幼児教育の分野でも、中産層の父母たちの過度の教育熱が競争的で、幼児たちを課外授業に追い立てている。このような父母の要求のために一部の幼児教育機関では教育課程の運営もいびつになっている状況である。

無論、私設学院の教育には、多様な教育を提供し、学校教育に不可能な教育要求を充足させる肯定的な側面もあるが、否定的な面を憂慮する声は高い。父母たちの過度の教育熱、子どもの過度の学習負担、教育費の負担は、私設学院教育を受けられない子どもとの間にも違和感を生ずるなど、教育の外的な問題を指摘する声はもちろん、テクニックの訓練や認知の発達にだけ傾いた学習は、自律的な興味にもとづいて学習を進める能力を低下させるなど、全人教育の方向とは食い違っているという主張も多い。

過度な私教育費の負担が、家庭経済の悪化という社会的文脈だけでなく、幼児教育の分野でも問題となっている理由は、父母の過重な経済的負担が、結局幼児たちに学習に対するストレスを与えるからである。その結果、幼児たちは精神的、肉体的に圧迫されて、民主的な市民として成長するための素養や身体の鍛錬訓練の機会を剥奪されることになる。また、父母たちも経済的・心理的負担からストレスを受けるし、父母間の加熱した私教育競争は、共同体意識の崩壊というマイナスの相乗作用まで招来する。このような点を考慮すれば、幼児教育に対する父母たちの正しい認識の形成とともに幼稚園教育の方向を正常化させることは、緊急を要することで、国家による強力な政策的支援が必要なことはいうまでもない。

B. 日　本 (抄)

日本は我が国と類似した社会文化的背景を持っている国である。従って、教育に対する父母たちの関心や熱望も、我々とよく似た水準にある。特に日本の場合は、最近、幼児早期教育の原因や効果に対する集中的な研究が専門機関や国家的レベルから多く実施されているので、このような研究の成果を紹介してみる。ここでは幼児早期・特技教育に関する日本の先行研究が、「幼児早期・特技教育が主に母親の育児不安から始まっている点」に注目していることから、(1)母親の育児不安の原因を明らかにする研究と、(2)幼児たちが受けている早期・特技教育の実態を分析する研究に大別してみることにする。

(1)　母親の育児不安

（編者注：以下については国立教育政策研究所内「早期教育研究会」編『「早期教育」に関する事例研究・資料編』2001.3 所収の「文献解題編」が参照されている）

母親の生活と育児不安を研究した重要な研究としては、横浜国立大学教育学部教授（当時）、牧野カツコが「乳幼児を持つ母親の生活と＜育児不安＞」（1982）と、「働く母親と育児不安」（1983）を明らかにする研究を行っている。育児不安と母親の生活との関連性を知るために「育児不安のある集団」と「育児不安のない集団」に分けて比較した結果、後者には夫が育児に一緒に参加したり、母親が自分で働いていたり、趣味を持っているなど、子女と離れている時間のあることがわかり、また隣人と親しい関係が深い場合、母親の育児不安は軽減されると言うことを示した。母親の就労の有無に関係なく、全ての母親にとって「他者との親しい関係の形成」が育児不安の解消に役立つことを明らかにしている。就労している母親の場合、時間に追われた育児で緊張感や疲労感を多く感じる傾向があり、専業主婦は生活の単調さと孤独感のために育児に自信をなくしがちであることも明らかにされた。しかし、母親の就労の有無に関わりなく、母親が育児不安を感じるようになる決定的な要因は、夫婦関係である。夫が育児に協調的な場合、妻は育児に満足感を持つことができることをこの研究は示している。

(2)　早期教育に対する認識

早期教育という概念について根本的な問いを投じた研究もあった。お茶の水女子大学の内田伸子は、「早期教育という迷信」（1994.12）という論文で、早期教育というのは、「適期を越えてさらに教える」という風潮を背景にして、子女を一流に育てたいという母親の心情と幼児人口の減少で打撃を受けている企業が営利目的から作り出す情報から始まったものだと見ている。このような考え方に基づく早期教育が、幼児の発達にどのような影響を与えるかについて分析した結果、一番大きな問題点は、①早く学習を始めたことで、知的により高い到達点に至ることが保障されているわけではない、②先取り学習した幼児がさらに学習を進められるようなサポートシステムがあるわけではなく、返って学習意欲を失わせる、③「何ができるか」という点でしか子どもの発達を判断しないため、子どもに劣等感を植えつけがちなばかりか、創造的に学習するために必要な「見えない力」を失わせかねないと指摘している。

井頭均（1994）は、大学生を対象にして、早期教育に対する意識を調査した結果、学生たちが幼児期に経験した早期教育は、ピアノが一番多く、次に書道、珠算等の順だった。また面談者の過半数以上が就学前に国語、算数、英語等の早期教育をさせることについて反対している。

横山さやかと横山範子は、「保育系学生の早期教育に対する認識」（1996）を調査した。学生たちは、早期教育という言葉を聞いて「押し付け・強制によるストレス」、「子どもがかわいそう」というイメージを想起し、早期教育をさせたくない理由については過半数以上の母親と学生が、早期教育が「子どもに無理なことをさせてしまうから」、「幼児たちは早期教育以外にしなければならないことがあるから」、アカデミックな学習は「小学校から始めても遅くない」と回答している。

田中規子ら(1999)は、父母たちが子女に早期教育をさせる理由とその影響を調べるために、0～2歳まで早期教育を受けて、現在満5歳半から小学4年に在学中の144名の父母を対象に研究した。その結果、早期教育を受けた幼児たちの体格は平均であって、健康状態も良く、極めて一般的な核家族（4人家族で2人の子ども）で生活していた。また発達の程度も2語文、数を数えることではとても早く習得した幼児がいて、歩き始めることも平均より早いことを示していた。しかし、発達が早い幼児たちは極めて一部分であって、身体的には普通水準であることを示していた。

岡野朗子、濱野惠一(1996)は、早期教育が知的発達に与える影響を分析するために、幼稚園に通う5歳児とその母親を対象にして幼児には面接、母親には質問紙調査を実施した。その結果、過半数以上の幼児（男子の40%程度、女子の90%程度；平均60%）が早期教育を受けていて、母親の大部分(73%)は「早期教育が必要かどうかははっきりわからない」と回答した。

鈴木真由子と柿野茂美(1998)は、早期教育に影響を与える要因を検討した結果、多くの父母たちが早期教育をさせる理由は「性格面、精神面での成長の期待」、「体力増強」、「幼児たちが楽しく過ごすようにするため」、と答えている。反対に早期教育をさせない理由では、「幼児には早期教育より遊びが重要」と考えていることが明らかになった。子どもの年齢が高くなればなるほど、女児が早期教育を受ける比率が高く、専業主婦の学歴が高いほど子女に早期教育を多くさせる傾向のあることが示された。

(3)　早期教育の実態

日本の早期教育の実態についての先行研究は、最近文部省生涯学習局（当時）の委託を受けて日本の国立教育研究所（当時）で「生涯学習活動の促進に関する研究開発」の一環として研究された「早期教育の実態に関する総合的調査研究」（委託期間：1998-2000）を中心に紹介する。この研究は、東京都、名古屋市、愛知県に在住の1歳半児と3歳児の保護者を対象に、幼児の生活全般を調査していて、早期教育に対する父母の意識と育児不安、早期教育による幼児の病理的現象の実例を分析している。

訳者注：以下本節では　国立教育政策研究所によって実施された、上記研究報告書の概要説明がされている（詳細は下記を参照されたい）。

文献名：・『「早期教育」に対する保護者の意識調査』　平成13年3月
国立教育政策研究所、「早期教育研究会」（代表　山田兼尚）
・『「早期教育」に関する事例研究・資料編』平成１３年３月
国立教育政策研究所、「早期教育研究会」（代表　山田兼尚）

その概要説明は、以下の諸点に沿って行われている。以下その項目名のみ記述する。

ｉ）子女養育現況
・早期教育に対する父母の認識、・幼稚園と保育所に対する期待、・早期教育の現況

ii）父母の「育児不安」と早期教育

iii）事例研究
・小児医学の観点から：満４歳３ヶ月　A児の事例
・心理学的観点から：満７歳２ヶ月　　B児の事例

Ⅲ. 韓国における早期教育の実態と現況　（抄）

訳者注：第Ⅲ章は韓国早期教育の現況に関するアンケート調査資料、実態調査の結果分析並びに一人の幼児を対象とした事例研究が記録されている。ここでは、最小限の情報提供として、収録されているデータの内容が分かる資料紹介のみを行っている。

1. 私立幼稚園での早期・特技教育実態調査

A. 研究対象の一般的背景

＜表Ⅲ－1＞　回答した教師とその幼稚園の背景：研究対象幼稚園の背景

B. 幼稚園での特別活動の実施現況

(1)　特別活動の実施の有無及び種類の数

＜表Ⅲ－2＞　特別活動の実施の有無及び種類

＜表Ⅲ－3＞　特別活動プログラムの種類数の地域別分布：特別市・広域市、中小都市、町村

(2)　特別活動の種類と週あたり実施回数

＜表Ⅲ－4＞　特別活動の種類別順位：　ちなみに１位は英語である。

＜表Ⅲ－5＞　特別活動の種類及び週あたり実施回数

＜表Ⅲ－6＞　特別活動種類の地域別分布

(3)　特別活動実施方法

＜表Ⅲ－7＞　特別活動実施方法：正課の時間中が一番多い。

(4)　特別活動担当者

＜表Ⅲ－8＞　特別活動担当者：分野別専門家が１位

＜表Ⅲ－9＞　授業時間中実施するプログラムでの担当役割

＜表Ⅲ－10＞　放課後プログラムでの担当役割

(5)　特別活動の集団構成方法

＜表Ⅲ－11＞　特別活動集団構成方法：種類によって多様である。

(6)　特別活動プログラムの対象幼児及び１回平均教育時間

＜表Ⅲ－12＞　特別活動プログラムの対象幼児及び平均教育時　：平均 30 分

(7)　特別活動費用

＜表Ⅲ－13＞　特別活動費用：特別活動費としての徴収が多い。

(8)　特別活動の実施理由

＜表Ⅲ－14＞　特別活動実施理由：園児募集のためと親の希望

(9)　特別活動実施の問題点
＜表Ⅲ－15＞　特別活動実施の問題点：幼稚園教育の妨害、費用等

C.　特別活動に対する教師の認識
＜表Ⅲ－16＞　特別活動に対する教師の認識：10項目回答

2.　家庭での早期・特技教育に関する実態調査

A.　研究対象の一般的背景
＜表Ⅲ－17＞　研究対象父母の一般的背景

B.　早期・特技教育の実施現況
(1)　早期・特技教育実施の有無
＜表Ⅲ－18＞　早期・特技教育実施の有無
＜表Ⅲ－19＞　幼児の性別、年齢別特技教育実施の現況

(2)　早期・特技教育の種類数
＜表Ⅲ－20＞　早期・特技教育の種類数：２種類が多い
＜表Ⅲ－21＞　幼児の性別、学習の種類数
＜表Ⅲ－22＞　幼児の年齢別、学習の種類数
＜表Ⅲ－23＞　母親の職業の有無による学習の種類数

(3)　早期・特技教育の種類
＜表Ⅲ－24＞　早期・特技教育の種類別順位：１位はハングルの読み書き
＜表Ⅲ－25＞　幼児の年齢別早期・特技教育の種類
＜表Ⅲ－26＞　幼児の性別早期・特技教育の種類
＜表Ⅲ－27＞　特技教育の開始年齢、持続期間、週あたり回数、教育時間

(4)　特技教育学習形態
＜表Ⅲ－28＞　特技教育学習形態：学習誌が１位
＜表Ⅲ－29＞　特技教育の種類と学習形態

(5)　月あたり私教育費
＜表Ⅲ－30＞　家庭あたり月別早期・特技教育費：１０万ウォン未満が１位
＜図Ⅲ－1＞　父親の学歴による月当たり教育費
＜図Ⅲ－2＞　父親の職業別月当たり教育費
＜図Ⅲ－3＞　月収に対する私教育費

C. 早期・特技教育に対する親の認識

(1) 早期・特技教育の必要性

＜表Ⅲ－31＞ 早期・特技教育の必要性

＜表Ⅲ－32＞ 早期・特技教育の時期

＜表Ⅲ－33＞ 早期・特技教育の種類と費用：みんなとても多いと回答している

(2)特技教育をさせる理由と問題点

＜表Ⅲ－34＞ 特技教育をさせる理由：１位は知能開発

＜表Ⅲ－35＞ 特技教育をやめた理由：子どもがいやがるが１位

＜表Ⅲ－36＞ 特技教育の実態に対する親の意見：早期教育熱風の改善

3. 早期・特技教育の問題点

訳者注：本節では、様々な観点から問題点が指摘されている。その主なソースはアンケート調査における自由記述である。以下、紹介されている観点のみ記述しておく。

A. 教師の観点

(1) 幼稚園教育プログラムの質の低下

(2) 幼児の負担過重及び友だち関係の断絶

(3) 担任教師の負担過重及び志気の低下

(4) 特別活動担当教師の専門性不足

B. 父母の観点

(1) 家庭での早期・特技教育の問題点

(A) 幼児の遊び時間不足

(B) 幼児の特性を考慮しない家庭での早期・特技教育

(C) 幼児の負担過重

(D) 親の教育費負担過重

(E) アンバランスに運営される幼稚園教育課程

(2) 親たちが早期教育をさせる理由

（省略）

(3) 父母の要求

(A) 幼児教育案内資料の普及

(B) 幼稚園の公教育化

4. 早期教育を受けている幼児の生活と問題点の調査　（本資料集巻末参照）

A. 幼児の生活

訳者注：ここではソウル市に住む　満５歳の男児・ソンミン（仮名）を対象に、その一日の行動日程を詳細に紹介している。家族は母親、父親、そして小２の姉の４人家族である。ソンミンはM幼稚園の半日制クラスに通っている。

調査時間は、2001年10月22日、午前9：10から11時20分まで（幼稚園での生活）と2001年10月25日、午後12時から5時までの6時間、および10月30日、午後1時半から3時15分（放課後の生活）で、この時間における詳細な観察記録が収録されている。

B. 小学校１年生の教師の観点

この部分は、公立小学校の担任２名、私立小学校の担任２名との面談調査結果の記録である。結論部分のみ翻訳する。

部分訳（p.169　l.1-155）

小学校の教師たちの意見を整理すれば、家庭で行われている早期・特技教育や幼稚園で行われている特別活動を受けてきた子どもたちが、情緒的、認知的な問題点を持っているという。特技教育は小学校生活に積極的に役立つと言うよりもむしろ逆効果であると主張する教師もいた。子どもたちは、自慢したり、ストレスによって授業時間に集中できなくて、妨害をしたりすることで自分だけでなく他の子どもたちにも被害を与えていることを教師たちは指摘している。また、正答あわせや簡単な暗記のような技術中心の学習を好む反面、概念や基本原理理解のような論理的思考力が弱いと評価している。

小学校教師は、ハングルを皆がすでに知っていることを前提に行われている小学校１年生の教育課程の問題を指摘している。このことは家庭で行われている特技教育の 49%が「ハングルの読み書き」ということと密接に関連しており、至急解決を要する問題点だといえよう。

最後に、小学校教師は幼稚園の教育課程と、小学校１学年の教育課程に連携が必要であることを提案し、双方の教師の間に、幼児及び児童の発達と学習に対する意見を交換できる場を作っていくことを期待していた。

Ⅳ. 創造的で全人的な、幼児教育革新のための政策方案

1. 幼児教育の公教育体制の確立

国民のための基礎教育としての幼稚園教育の主たる目的は、幼児の全人的な発達、すなわち身体、情緒、社会、言語、認知の調和ある発達を援助することである。教育先進国では幼児教育の公教育体制を確立して、正常な幼児教育を通じて創造的で全人的な人的資源の養成に力を入れている。しかし、我が国の場合、幼児教育の公教育体制が成立していない中で、幼稚園教育は、競争的な市場経済の論理によって巨大な私教育市場へと変貌している。最近過度の園児募集競争と早期特技教育の熱風で、正規の教育時間に各種の特別活動が実施されていて、アンバランスで極端な幼稚園教育運営が行われている。

本研究でも、約90%の私立幼稚園が特別活動を実施していて、3種類以上実施している幼稚園は60%を越えていることが明らかとなった。特別活動プログラムは、主に大集団で一日の日課の中で実施（43.4%）されていて、放課後に実施(16.6%)することもある。特別活動の担当教師は、その分野の専門家だったり(38.8%)、専門団体から派遣されていて（32.6%)、時間帯別に担当する場合が多く、幼稚園の教師が直接特別活動を担当する場合（29.2%）もあった。教師たちは、大部分が特別活動担当教師の非教育的な言動と教授について深い憂慮を表明していて、私立特技教育機関に転落している幼稚園教育が一日も早く正常化されることを希望していた。

幼稚園教育が正常化されるためには、幼児教育の公教育体制が確立しなければならない。幼児教育が公教育化されなければならないのは、各種の特別活動によってアンバランスになっている幼稚園教育を正常化させ、過度な早期特技教育による幼児たちの被害を終わらせることができるからである。幼稚園教育の公教育化は、1994年に発表された第1次計画案をはじめとして、数次にわたって論議されてきたが、国家が推進する教育政策の優先順位ではいつも後回しにされ、2000年になっても実現されていない。2001年1月22日、先進国としての跳躍のために、幼稚園の無償教育化を段階的に準備しようとする金大中大統領の指示を契機に、幼児教育の公教育化をある程度期待できることになった。しかし、幼稚園教育を正常化させるためには、幼児教育の公教育化と同時に、次のような政策が至急推進されなければならない。

(1)「幼児教育法」を制定する。

普遍主義の理念に立脚して、全ての 3～5 歳の幼児に、彼らの発達特性に適合した教育と保育を提供して、全人的発達を促すと同時に、保護者の社会・経済的活動を円滑にできるよう国家が保障する「幼児教育法」が制定され、幼児教育の公教育体制の確立と政策が順序立てて行われなければならない。

(2)二元化されている 3～5 歳の教育体制を一元化する。

3～5 歳の幼児を対象とする機関は、教育部門が主管する幼稚園と保健福祉部門が主管する保育施設に二元化しているため、予算と人力が浪費されていて、重複管理による部署間の葛藤が深まっている。また、保育施設が 3～5 の歳幼児たちを主として受け入れている

ために、就労している母親の 0～2 歳児を預かるところが無いという実状である。これは核家族と女性の就労の拡大で 0～2 歳児の全日制保育への要求が高まっている現実性を無視したものである。従って、保育施設では 0～2 歳児を受け入れるようにしなければならない。

(3)「幼児教育発展（振興）推進委員会」を設置する。

広域自治体と基礎自治体に「幼児教育発展（振興）推進委員会」を設置して、地域の特性にあった幼児教育を発展させるようにする。「幼児教育発展（振興）推進委員会」は父母、地域内の幼児教育専門家、地方自治体と教育庁の関係者を含めて、官民協同で構成する。「幼児教育発展（振興）推進委員会」は教育長と教育庁の諮問機関に該当し、地域の幼児教育政策を審議して調整する役割を担当する。

2．幼児教育に必要な財政予算の支援

我が国の幼児教育予算はかなり低い。OECD 諸国の幼児教育平均予算は教育部予算の７％に達しているのに比べ、我が国の場合 1.17%の水準にとどまっている。全ての先進国で国際競争力を高めるために、教育の礎石となる幼児教育に莫大な財政予算を投資しているという点に鑑み、当然韓国でもこのようなビジョンがあるのかどうかを問いたい。21 世紀に対応する創造的で全人的な人的資源を養成するために、政府は幼児教育に必要な財政予算を少なくとも OECD 諸国の平均水準並に策定して、幼児教育の正常化に使用するようにすることがのぞましい。政府が幼稚園教育の正常化のために支援しなければならない重要な項目を提示すれば次の如くである。

(1)幼稚園教師の人件費を支援する。

私立幼稚園では人件費は全体経費の 80%近くにまで達している。私立幼稚園の教師の本給は公立幼稚園や国・公立・民間保育施設の教師の本給と比較してみると、かなり低い。政府は私立幼稚園の教師の人件費を支援することで、幼稚園教育の正常化を前倒しできるのである。また、公立幼稚園の全日制クラスの教師にも、午後の教育手当てを支給しなければならない。

(2)無償教育の拡大を支援する。

我が国の幼稚園の就園率は、法的就園年齢である満 3～5 歳を基準にすると、2001 年現在 26.9%にすぎず、しかも、幼稚園就園児の 70%以上が私立幼稚園に通っている。特に大都市の低所得層の子女の就園率が低い。これは我が国の憲法第 31 条に明示されている教育を受ける権利に違反している。2002 年 3 月から教育人的資源部と保健福祉部が協同で、全国満 5 歳児の 20%に当たる約 13 万 4000 名に教育費を支援する計画があるというが、これは従前の支援対象が 8%であることに比べれば、大幅な増加である。しかし、幼児教育機会の不平等が可視化され、階層間の格差と違和感とが拡大しているので、国家的次元から無償幼児教育の対象を大幅に広げなければならない。また、政府の財政支援がないた

めに、一般の父母の幼稚園教育費負担も深刻である。従って、政府は幼稚園教育費を全額または部分的に補助することで各家庭の教育費負担を軽減すべきである。

(3)幼児教育の研究費を支援する。

幼児教育の改革や改編に備えて、平素より中・長期的研究を遂行して、その研究成果に基づいた改革や改編を断行するようにする。特に、早期・特技教育による弊害を出している幼児教育の正常化のために、これから遂行しなければならない研究は多い。政府はこのような研究にかかる費用を支援すべきである。

(4)幼児教育の広報にかかる費用を支援する。

幼稚園教育正常化のために、父母や一般社会が幼児教育に対する正しい観点を持つように多様な方法で広報が行われるべきである。言論・放送メディア及び出版物を通して、幼児教育の内容と正しい教育方法を伝達するのにかかる費用を政府は支援すべきである。

３．幼稚園の認定制の適用と幼稚園教育課程の管理と監督

認定制とは、幼児教育機関の質を向上させるための評価体制である。まず各教育現場に、教育の質を自己点検できるような認定基準を提供し、質的に優秀なプログラムが何であるかを現場に認識させ、その認定基準に応じて機関の教師と運営者が自ら研究し実践することが中心となる。そして専門家（助力者）集団が機関を直接訪問して観察・確認・判断して、最終的にその機関が認定準拠及び基準に到達し適合しているかどうかを総合的に判定して認可するものである。この制度を通じて、優秀な幼児教育機関を認定していくことは、教育消費者（幼児と家族）が、よりよい幼児教育機関を選択することにも役立つ。

認定制は、多様な評価方法の中で教育的な質を向上させるのに最も効果的な方法であることが知られている。これは認定制が、機関の責任を追及したり存廃の可否を決定したりする手段として使用されるものではなく、改善のための手段として活用されるためである。

現在、韓国では幼児教育の崩壊という深刻な問題に直面しているために、幼児教育機関の認定制を一日も早く実施しなければならない。このために結成された「BK21 梨花女子大学校幼児教育革新チーム」では、1999～2001 年に韓国の幼児教育機関の認定制モデルを開発し、さらに教育部に対してこれを実施できる行政的、制度的支援を要請している。韓国の幼児教育機関に認定制を適用すれば、各種の特別活動の実施によってアンバランスに運営されている幼稚園教育を正常化することができるだろう。

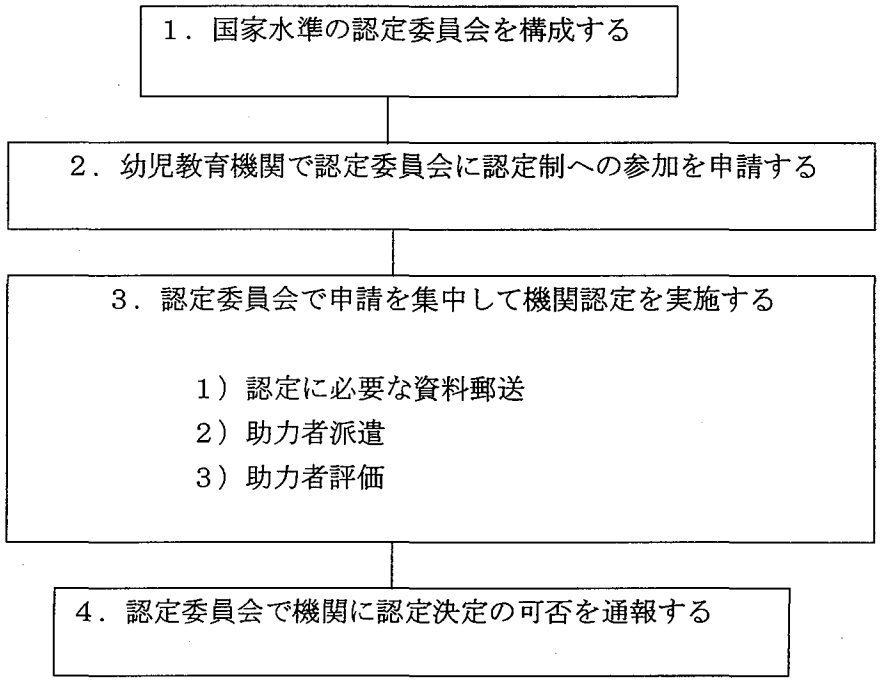
ただし、幼児教育機関への認定制適用のためには、次のような問題が課題として残っている。第一に、認定制の実行機関の決定に対する社会的信用性を国家が確実に保証しなければならない。第二に、認定対象機関の地域特性をどのように反映させるかについての十分な論議がなされなければならない。第三に、国家から認定制実施のための費用を支出しなければならない。第四に、助力者訓練を体系的に徹底して、助力者の専門性を高めるようにしなければならない。第五に、認定判定委員（評価委員）会の構成及び権限を国家で保証しなければならない。

また、認定制を体系化する過程にも解決すべき問題点が多々ある。例えば、多様な形態のプログラムの設置問題や、財政的な問題、認定制の公正さや一貫性の確保と維持、融通性と多様性の確保と維持に関する問題をあげることができる。これらを克服するためには、幼児教育専門家と現場の教師たちの意見を幅広く受容して、認定基準を開発しなければならない。認定制の質と効率性をいっそう高めるためには、認定評価（助力）者の体系的な訓練を進めるとともに、質の向上のための戦略を持続的に模索しなければならない。

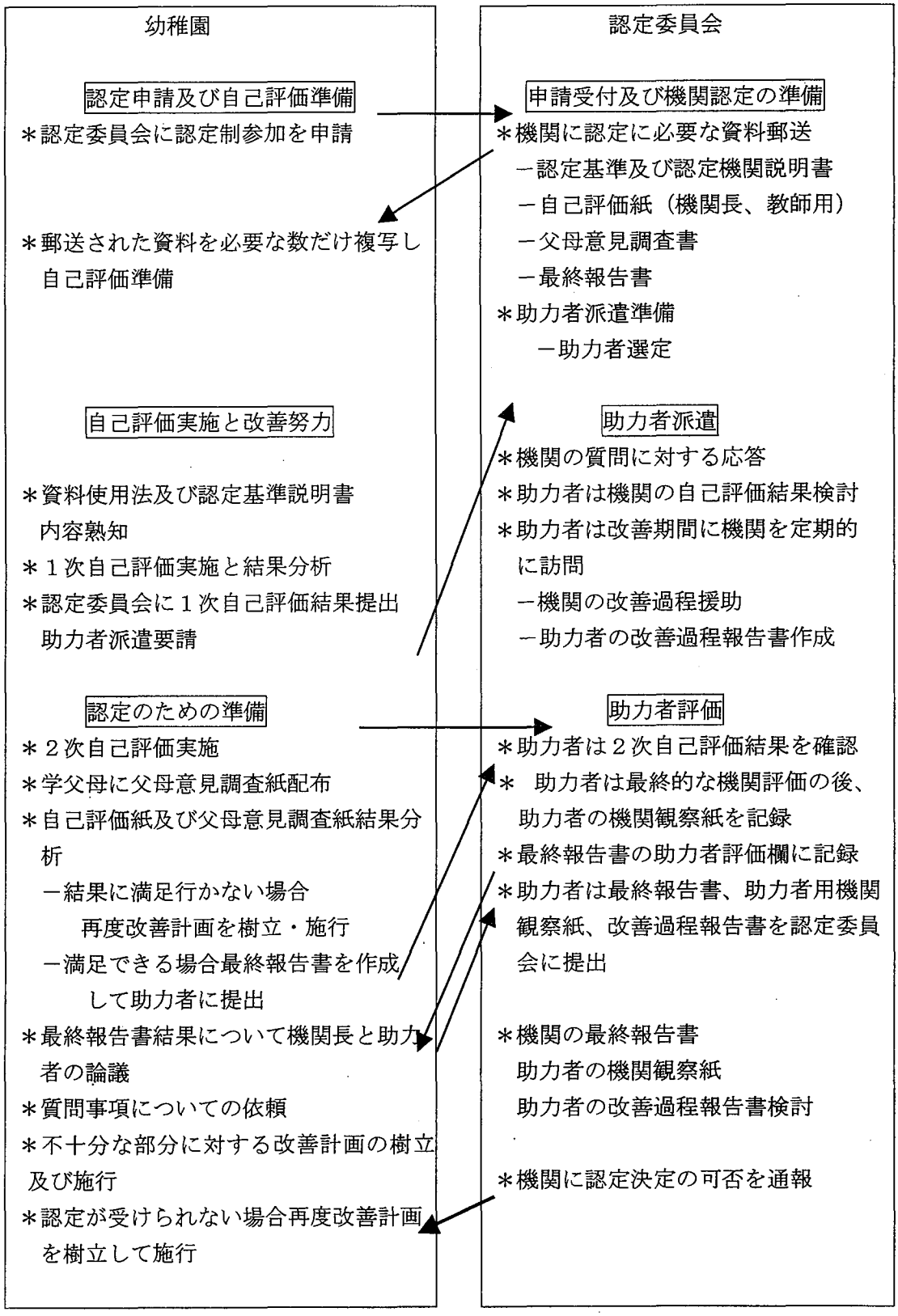
幼児教育機関の認定制の手続きを紹介すれば次の＜図－Ⅳ－１＞の如くである。

また、参考までに BK２１革新チームで開発した韓国幼児教育機関認定制モデルの認定過程の３段階を提示すれば、次の＜図－Ⅳ－２＞の如くである。

＜図　Ⅳ－１　幼児教育機関認定制の手続き＞



＜図Ⅳ－２　認定制モデルの認定課程３段階＞



4．幼児の発達と教育の効果に関する体系的研究への積極的な支援

韓国の幼児教育の改革や改編の過程を見れば、国家が樹立した発展計画に応じて計画的に執行されるというよりは、急に「衆論」を集めて決定する例が多い。または幼児教育改革の必要なとき、政策研究を委託したり役割を与えたりして、一時的に簡単に解決しようとする傾向があった。しかし、教育は「百年の大計」という言葉に留意して、幼児教育改革や改編に対応する中・長期的な研究を遂行して、その研究結果に基づいた改革や改編を断行するようにしなければならない。

以下に、早期特技教育の弊害を受けている幼児教育の正常化のためにこれから遂行しなければならない研究のリストを提示する。

(1)　早期特技教育が幼児教育全般に与える影響に対する研究

早期特技教育に関する先行研究は、主に小学生を対象にしていて、幼児を対象にした研究は「私設学院教育」の種類、内容、方法等に対する実態調査と私教育費の増加による問題点だけを指摘している。私教育費についても、主に家庭学習紙、英語、音楽、美術教育などごく一部分に対する現況把握にだけ局限されて、実質的に早期特技教育が幼児教育全般にどのような影響を与えているかについては知られていなかった。従って、早期・特技教育が幼児教育全般に与える影響について研究することが必要である。

(2)　幼児の早期の能力と創造性の発達に対する縦断的研究

幼児の早期の能力は前－領域的（pre-domain）、前－分野的（pre-field）である。すなわち、幼児は基本的に多元的な領域に能力を持っているものである。創造性を発達させるためには、幼児期の初期に、自由に探索することを通していろいろな領域の知識と技術を学び、自分の多元知能を使う機会を可能な限り多く持つようにしなければならない。従って、幼児期に特定領域だけの教育を受けるように限定していくのではなく、全領域にわたって多様な経験をして、全人的な発達を意図することが重要である。

(3)　早期の過剰な知育の持続的な効果に対する縦断的研究

我が国では早期の過剰な知育によって、幼い子どもたちに過度の知的刺激を与える傾向がある。このように、幼児の発達に先立って認知面の刺激が過度に与えられるならば、その時期に適切に発達しなければならない他の認知、情緒、社会性等の領域が発達する機会が絶対的に不足する可能性が高い。従って、早期の過剰な認知面の教育の持続的な効果についての縦断的な研究が必要である。

(4)　「私設学院教育」を受けた幼児と正常な幼稚園教育を受けた幼児の間の発達上の差異に関する研究

私設学院教育を受けた幼児は、正常な幼稚園に通う幼児に対して違和感、劣等意識、否定的自我概念を形成することがあって、結果的に社会問題へ発展する可能性が高いという指摘がなされている。これは「私設学院教育」は技能訓練にだけ重点を置いて、幼児期に最も大切な人格形成や基本生活習慣の形成をおろそかにするだけでなく、無資格の教師、

劣悪な教育・保育環境で行われているためでもある。従って、幼児の発達的特性を度外視するような劣悪な教育環境と無資格教師による私設学院で教育を受けた幼児と正常な幼稚園教育を受けた幼児の間の発達的差異に対する研究が必要である。また、私設学院と幼稚園で教育を受ける幼児たちの生活、学習及び発達に対する深層的な理解を助けるような質的研究が必要である。

５．幼児の権利と幼児教育を擁護するための団体の結成

幼児たちの「遊びの権利」を守り、また幼児教育機関で質的に優れた正常な幼児教育がなされるようにするためには、幼児教育者だけでなく父母、幼児と関係のある全ての人々、一般市民を含んだ汎国民的な市民運動を展開しなければならない。幼児教育者、父母、一般市民が連帯して正しい幼児教育のための政策の開発及び共同事業の推進、懸案事項に対する情報交換及び相互協力を推進しなくては、現在崩壊している幼児教育と最も被害を受けている韓国の幼児たちを危険から守ることはできない。

次は「幼児の権利と幼児教育を擁護する運動」のために結成できる団体例のリストである。

(1)　幼児教育正常化のための全国幼児教育者連帯組織（ネットワーク）

幼児教師（編者注：幼稚園・保育園・保育室の教師全体を指す。ここに私設学院の教師は含まれない）、幼児教育機関長、及び教員養成機関の教授、現職研修を担当する教授たちを中心に結成される団体である。幼児教育とはいかなるものか、幼児たちに本質的に必要な遊びの重要性とはどういうことか、などを父母と一般社会に理解させるためのキャンペーンを行う。広報資料の制作、ホームページの構築、インターネット相談等多様な方法で幼児教育について広報する。

(2)　幼児教育正常化のための全国父母連帯組織（ネットワーク）

幼児期の子女のいる父母、幼児教育機関に子女を通わせている父母が、幼児教育の重要性の認識とアンバランスで不正常な幼稚園教育に対する憂慮を経て、正常な幼児教育を擁護しようとする意図のもとに集う組織である。幼児教育の重要性を他の父母と一般に知らせるためにキャンペーンを展開し、(1)と同様、各種の広報活動を行う。

(3) 幼児教育正常化のための市民連帯組織（ネットワーク）

幼児教育の専門家だけでなく父母、幼児と関係する人たちや機関（例：小児科医、小児精神科医、女性運動家、童話作家、幼児用図書出版社等）そして一般市民の全てを含んで汎国民的な市民連帯を組織する。幼児の全人的な発達を妨害したり、幼児教育を崩壊させたりする諸般の原因を分析診断し、各専門分野で幼児期の早期特技教育によって発生する問題点を検討・報告して、困難な状況に直面している父母たちの相談に応じる等、幼児教育の正常化のための前衛組織として機能する。

(4)幼児教育正常化情報センター（仮称）

幼児たちの遊ぶ権利を保障するためには、上記のような組織や団体が相互に情報と意見を交換し、問題事例を論議する等、円滑に意志疎通できるネットワークを準備しなければならない。従って、幼児教育正常化情報センター（仮称）を設立して、問題を協同解決するために各団体に情報と意見を提供する必要がある。

６．幼児教育の正しい内容や方法等の広報（抄）

教育学や発達心理学の分野で行われている多くの研究成果に基づいて、1970年代以降の韓国では、幼児教育の重要性を広く知らせるための作業が絶え間なく行われてきた。その結果、これまで多くの父母たちが、幼児期が人生で一番重要な時期であり、この時期の学習や経験が一生にわたって影響を与えるという事実を理解するようになった。しかし、父母たちの正しい幼児教育の具体的な内容と方法に関する認識は、まだ不足している。このため、最近韓国で乱立している商業的な幼児教育産業の影響により、父母たちが子女の発達水準や特性を考慮しないまま、早期・特技教育に対して無分別な焦燥感を持つことになり、その結果、幼児たちの直接的な被害を招いている。

本研究でも、韓国の幼児早期・特技教育の問題点を自由記述してもらった結果、多くの父母たちは、幼児早期・特技教育に対する韓国社会の過度の熱風と社会の雰囲気を改善しなければならないという意見を記入した。父母たちは早期・特技教育が子女たちには無論、父母自身にも経済的な側面で負担となっていること、現在韓国における早期・特技教育の開始は早すぎることなどを認めながらも、「他の父母たちがするのを見て不安で」、「他人がしているから」早期・特技教育をさせていると回答している。また、ある父母は知育に偏重せずに子女の素質と適性、希望に応じて教育しなければならないことを理解しているが入試制度に対する不安から、幼児期から大学入試への準備のために課外教育を受けさせていることを認めていて、創造性や個性を抹殺する画一的な教育を指向せざるを得ない状況を訴えた。

結局、子女の教育に対する確固たる信念が無く、父母たちは幼児期の早期・特技教育を煽り焚きつける韓国社会の雰囲気の影響を受けている。従って、父母たちが幼児期の子女教育に対する正しい視角を身につけるためには、幼児教育の具体的な内容と方法に関する父母教育が、多角的な方法で実施されなければならない。

このために、広く国家社会的次元において、次のように多様な父母教育の資料が開発されて、教育が実施されるべきである。

（以下箇条のみあげ、詳細は省略）

(1) TVやラジオ放送による広域広告を制作・実施する。

(2) 父母教育用の簡単な冊子やパンフレットまたはCD-ROMを制作して配布する。

(3) 父母教育の資料や冊子を病院や子ども図書館、町内会、保健所、等の公共機関に配置し配布する。

(4) 保健所と児童相談所、青少年相談所で父母教室を定期的に運営する。

(5) 高等学校または大学で幼児教育や父母教育に対する科目を開設して、将来の父母のための教育を実施する。

7. 幼児教育に関するウェッブ・サイトの専門化（抄）

(1) 教育部のホームページに幼児教育専門のウェッブ・サイトを開設して、幼児教育に対する信頼できる情報と資料を提供する。
(2) 幼児教育関連ウェッブ・サイトの質的水準を審査し、再整備する。
(3) 「サイバー父母支援センター」と「サイバー子女教育相談室」を運営する。
(4) 父母の生涯教育、趣味、余暇生活に関する総合的なデータベースを構築する。
(5) 早期・特技教育の問題点と被害事例の通報専用窓口を設ける。

8. 私教育の水準を監督・統制できる信頼性ある専門機構の運営（抄）

(1) 幼児教育の資料や出版物の審議機構を設置する。
(2) 幼児教育の出版物の審議委員会（仮称）を運営する。
(3) 幼児教育産業への認可制度を導入する。

9. 幼児教師と園長に対する研修機会の強化（抄）

(1) 資格研修、職務研修の教育プログラムに「創造的で全人的な幼児教育」を包含させる。
(2) 特別活動の実施による幼児教育現場の問題点を中心に、正常化方案を模索する課程を資格研修、職務研修のカリキュラムに包含させる。
(3) 園長のための研修過程を通じて、特別活動を正規のカリキュラムからはずして幼児教育の正常化を実現するための支援を積極的にする。
(4) 大学と連携して、各学期に「創造的で全人的な幼児教育」講座を開設する。

10. 幼児教育視学制度*の確立（抄）

(編者注: 視学制度の原語は「奨学制度」、後出の視学官の原語は「奨学士」である。韓国における奨学とは教育現場を指導・督励することである。)

(1) 創造的で全人的な幼児教育のための正常化研修を実施する。
(2) 幼児教育の視学を担当する幼稚園専担部署を拡大する。
(2) 幼児教育の視学を担当する専門職は今後幼児教育専攻者から任命する。

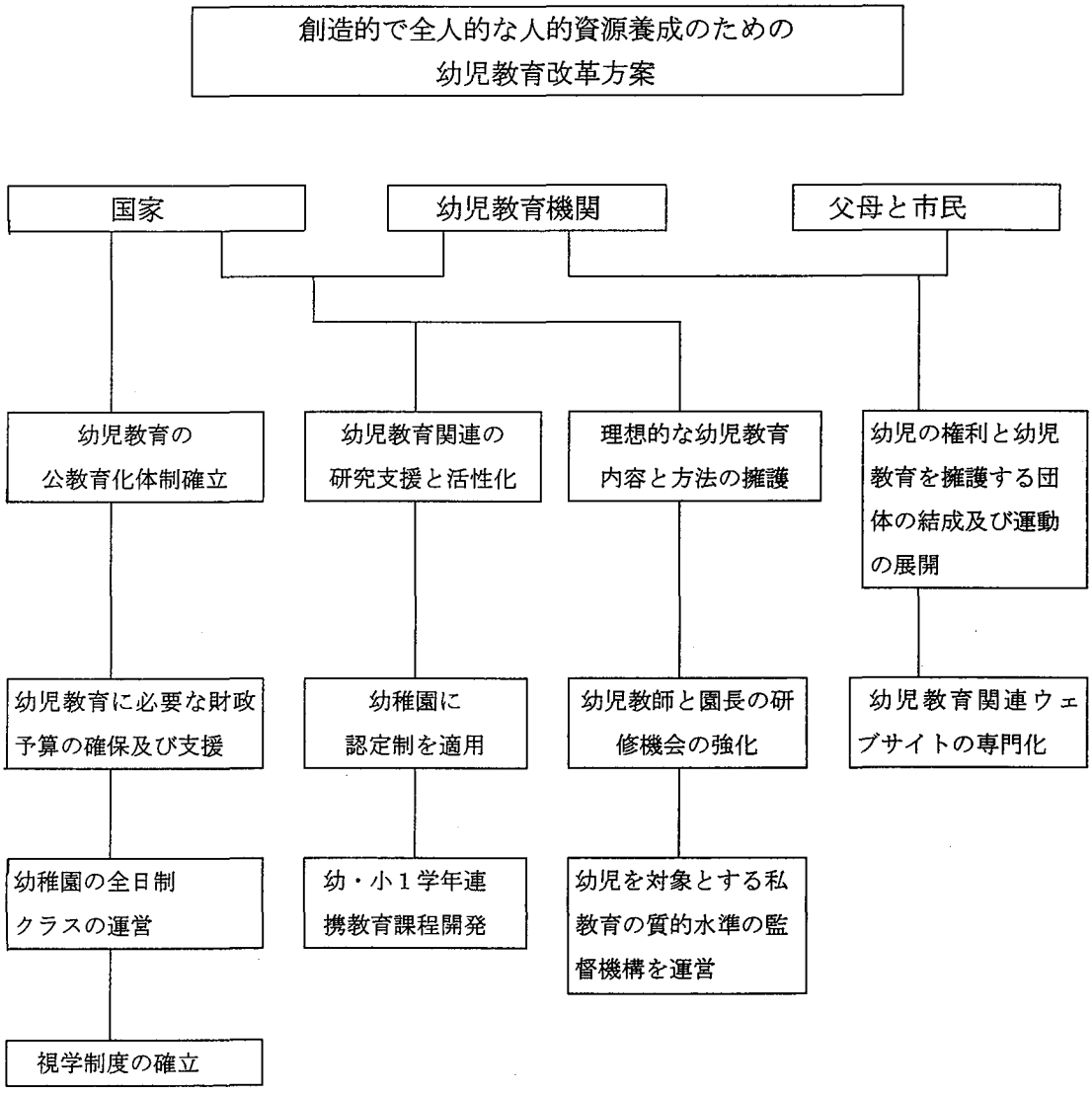
11. 幼稚園の全日制クラス運営の拡大実施（抄）

(1) 全日制プログラムを設置運営するための支援体制を準備する。
(2) 生活中心、活動中心の全日制プログラムを開発してこれを普及する。
(3) 質の高い全日制クラス運営のため「正教師二交代制」や「主教師制度」(major teacher system) 等を確立して、これに必要な財政的支援策を準備する。

12. 小学校低学年と連携する教育課程の開発（抄）

(1) 教育課程改訂過程において幼・小連携教育課程研究チームを構成して教育課程を研究・開発する。
(2) 幼稚園と小学校低学年で活用できる教具・教材開発を研究してこれを普及させる。
(3) 幼稚園と小学校の視学を担当している視学官を対象に、幼・小連携教育課程に対する研修を実施する。
(4) 父母を対象に、幼・小教育課程がどのように連携されているかを理解するための広報を積極的に実施する。

＜図－Ⅳ－３　創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育改革＞



Ⅴ．要約と結論

1．要　約

本研究の目的は、現在の我が国の早期・特技教育の実態を調査して、創造的で全人的な人的資源養成のために、幼児教育において行われなければならない革新方向を総合的で体系的に提示することである。このような研究を通じて、21 世紀を迎える我が国の全ての幼児たちが質的に優れた幼児教育を受けて、創造的で全人的な人的資源へと成長できるよう、国家が制度的装置を準備するのに必要な基礎資料を提供するものである。

このような研究目的に応じて、本研究が設定した研究課題は、次のとおりである。

（1） 創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新の動向はどのようなものか？

（2） 創造的で全人的な人的資源養成の次元から見た幼児教育の現況はどうなっているのか？

（3） 創造的で全人的な幼児教育革新のための政策方案は何か？

このような研究問題を解決するために、文献研究、質問紙調査、観察、面談、協議会が行われた。創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新の動向を調べるために、関連文献を考察した。創造性の発達及び全人的な発達の概念と教育との相互関連性、我が国の早期・特技教育の現況及び問題点を分析した先行研究だけでなく、韓国と主要先進国の国家レベルの教育課程を比較してみた。

我が国の早期・特技教育の実態を調べるために、教育部幼児教育政策課を通じて全国（ソウル、プサン、テグ、仁川、光州、大田、蔚山、京畿、江原、全北、全南、慶北、慶南、済州等）の私立幼稚園に子女を通わせている父母 2,600 名と、私立幼稚園教師 1,300 名を対象に、質問調査を実施した。早期教育の運営実態と問題点をより具体的にそして正確に把握するために、現在早期教育を受けている幼児１名を対象に一日の日課を追跡観察して分析した。このような分析資料に基づいて、創造的で全人的な幼児教育革新のための政策方案を国家レベル、幼児教育の専門家レベル、父母及び市民レベルでそれぞれ提示した。

(A) 私立幼稚園での早期・特技教育の実態調査

① 研究対象の幼稚園のうち、88%が特別活動を実施していて、3～4 種類以上を実施する幼稚園が 58.3%に達していて、幼稚園での特別活動の実施が相当に普遍化していて、その種類が多いことがわかった。

② 幼稚園で実施されている特別活動のうち、一番多く実施されているものは、英語（64.3%）で、その次が美術（50.9%）、体育（48.1%）等であった。特別活動は主として幼稚園の正規授業時間に実施され(66.2%)、教師たちはこれによって正常な教育活動を運営できないと回答している。外部講師が特別活動を担当する場合(71.4%)、教師が補助者として参加する場合も、授業に全く関係しない場合もあって、幼児指導の一貫性と連携性

に問題があることを示していた。特別活動は主に大集団(59.7%)で実施されていた。費用は正規授業で実施する場合、幼稚園教育費から、放課後に実施する場合は父母が負担していて（35.2%)、教育費とは別途に特別活動費を徴収していることが多かった(30.5%)。

③　幼稚園教師たちは、特別活動を担当する教師たちも幼稚園の教師資格証を取得していなければならないと認識していた。特別活動の指導者は、幼児教育に対する理解が不足しており、幼稚園で特別活動を正規授業時間に行うことは、教育課程の運営に支障をきたしていること、幼児たちが受けている特別活動の種類がとても多いことを認識していた。

(B)　家庭での早期・特技教育実態調査

①　幼児たちが受けている早期・特技教育の数は、２種類が 30%で一番多く、次に１種類(28.8%)、３種類(20.6%)だった。

②　幼児たちが受けている早期・特技教育の種類は多い順に、ハングル、数学、英語、ピアノ、美術、総合学習紙だった。幼児の年齢が幼いほど、ハングルと総合学習紙中心の教育を多く受けていて、年齢が増加するほどハングルや総合誌以外に数学、英語、ピアノ、美術等の教育を加える場合が多い。

幼児たちが早期・特技教育を始める年齢は分析した結果、総合学習紙を始める年齢が一番早く、次にハングルとフレーベルの恩物だった。早期・特技教育を始めてから止めるまでの平均持続期間を分析した結果、その期間が一番長いもので総合学習紙（14.5 ヶ月)、フレーベルの恩物（11.9 ヶ月)、ハングル（10.6 ヶ月）の順だった。反面、持続時間が一番短いものは漢字（3 ヶ月）で、次がピアノ(5.9 ヶ月)と舞踊（7.1 ヶ月）の順だった。

特技教育の学習形態は、全体的に学習紙を一番多く利用していて、次が学院と個人指導、グループ指導だった。幼児たちが受けている早期・特技教育の学習形態を分析してみた結果、主に学習紙によって実施しているのはハングル（70%）と数学（73%）で、学院で勉強する場合が多いのは美術（54%)、ピアノ（69%)、テコンド(79%)、舞踊（54%）等であった。

父母たちが子女の早期・特技教育に支出する月平均費用は、一人あたり 12 万 6000 ウオンで、父親の学歴が高いほど、月収入が多いほど、子女に支出する月平均教育費が増加することが示され、父親の職業が公務員である家庭が、私教育費を一番多く支出していた。

③　幼児期の子女に対する早期・特技教育の必要性及び時期、費用についての父母の意識を調べた結果、調査対象の 70.3%が「必要だ」と答えているが、その時期については 75.3%の父母たちが「早い」と感じ、88.7%の父母たちは早期・特技教育の「種類が多い」と感じていた。また、早期・特技教育の費用についても約 90%の父母たちが「多い」と感じていた。

2．結　論

本研究は、以上の文献研究と研究結果を総合して、次のような創造的で全人的な人的資

源養成のための政策方案を提示した。

(A) 幼児教育の公教育体制を確立して幼児の全人的な発達が教育の最優先目標となるようにする。

・幼児教育法を制定する。
・二元化されている3～5歳の教育体制を一元化するようにする。
・3～5歳児を対象にした「幼児教育発展（振興）推進委員会」を設置する。

(B) 政府は幼児教育に必要な財政予算を大幅に増やして幼児教育の正常化を支援するようにする。

・幼児教師の人件費を支援する。
・無償教育の対象拡大を支援する。
・幼児教育研究費を支援する。
・幼児教育の広報にかかる費用を支援する。

(C) 幼稚園に認定制を適用して、教育部が公示した幼稚園教育課程の運営が正常化されるようにする。

(D) 幼児の発達と学習及び教育の効果に関する体系的研究を積極的に支援し、活性化させる。

・早期教育が幼児教育全般に与える影響を研究する。
・幼児の早期能力と創造性の発達に関する縦断的研究を実施する。
・早期の過剰な認知教育の持続的効果に関する縦断的研究を実施する。
・「私設学院教育」を受けた幼児と正常な幼稚園教育を受けた幼児の間の発達的差異に対する研究を実施する。

(E) 幼児教育者と父母たちをはじめとする各階各層の人たちが集まって、「幼児の権利と幼児教育保護」のための団体を結成して、汎国民的運動を展開する。

・幼児教育正常化のための全国幼児教育者連帯組織（ネットワーク）を結成して汎国民的運動を展開する。
・幼児教育正常化のための全国父母連帯組織（ネットワーク）を結成して汎国民的運動を展開する。
・幼児教育正常化のための市民連帯組織（ネットワーク）を結成して汎国民的運動を展開する。
・幼児教育正常化情報センター（仮称）を設立する。

(F) 父母の意識を高めるために、汎社会・国家的な次元から幼児教育の正しい内容や方法等を広報する。

・TVやラジオ放送による広域広告を制作・放映する。
・父母教育用の簡単な冊子やパンフレットまたはCD - Romを製作して配布する。

・父母教育用の資料や冊子を病院や子ども図書館、町内会、保健所等の公共機関に配置し配布する。
・保健所と児童相談所、青少年相談所で父母教室を定期的に運営する。
・高等学校または大学校で幼児教育や父母教育に対する科目を開設して父母になるための準備教育を実施する。

(G) 幼児教育関連のウェブサイトを専門化することによって学校・地域・家庭の連帯を強化する。
・教育部ホームページに幼児教育専門ウェブサイトを開設して、幼児教育に対する信頼できる情報と資料を提供する。
・幼児教育関連ウェブサイトの質的水準を審査し改訂する。
・「サイバー父母支援センター」と「サイバー子女教育相談室」を運営する。
・父母の生涯教育及び趣味及び余暇生活に関する総合的なデータベースを構築する。
・早期・特技教育の問題点と被害事例の相談窓口を設ける。

(H) 私設学院、幼児教育用資料等の幼児対象の私教育の質的水準を監督・統制できる信頼性のある専門機構を運営する。
・幼児教育資料や出版物審議機構を設置する。
・幼児教育出版物審議委員会（仮称）を運営する。
・幼児教育産業の認可制度を実施する。

(I) 幼児教育の正常化のために、幼児教師と園長に対する研修機会を強化して、積極的に実施する。
・資格・職務研修の教育課程に＜創造的で全人的な幼児教育＞を包含させる。
・特別活動実施による幼児教育現場の問題点を中心に、正常化方案を模索する過程を資格研修、職務研修の教育課程に包含させる。
・幼稚園園長のための研修課程を通じて特別活動を充実させて幼児教育の正常化を実現するよう積極支援する。
・大学と連携して学期ごとに＜創造的で全人的な幼児教育＞講座を開設する。

(J) 幼児教育の視学体制を確立して幼児教育正常化を支援する。
・創造的で全人的な幼児教育のための視学官研修を実施する。
・幼児教育の視学を担当する幼稚園専門担当部署を拡大する。
・幼児教育の視学を担当する専門職は、今後幼児教育専攻者から任命する。

(K) 幼稚園の全日制クラスの運営を拡大・実施する。
・全日制プログラムを設置及び運営するための支援体制を準備する。
・生活中心、活動中心の全日制クラスプログラムを開発して普及させる。
・質の高い全日制クラス運営のための「正教師二交代制」や「主任教師制度（major teacher system)」等を確立して、これに必要な財政的支援策を準備する。

(L) 幼稚園と小学校低学年１年間の教育内容及び教授・学習方法に対する連携教育課程が開発されるようにする。

・教育課程の改訂過程において幼・小連携教育課程研究チームを構成して、教育課程を研究・開発する。

・幼稚園と小学校低学年で活用できる教具・教材を開発して普及させる。

・幼稚園と小学校の視学を担当する視学官を対象に、幼・小連携教育課程に対する研修を実施する。

・父母を対象に、幼・小教育課程がどのように連携しているかを積極的に広報する。

参考資料 ①

ここに、掲載するのは、韓国児童学会の2002年度春期学術大会（「早期教育研究大会」）で報告された発表資料である。この大会では、早期教育に関する次のような報告があった。(丹羽記)

主題（1）韓国早期教育の現況と課題

① 「早期教育の産業化 ―学習紙・児童図書およびおもちゃを中心に」＊
金明順 （延世大学校児童学科教授） →以下に翻訳を掲載

② 「早期教育の産業性：オンライン幼児教育、CDタイトルと学習産業を中心に」
クオンミンギュン （チャンウォン大学校教授）

③ 「早期教育に対する父母の認識」
フアンエシン （サンミョン大学校家族福祉学科教授）

主題（2）韓国早期教育の虚と実

① 「韓国の早期教育の虚と実」
ウナンヒ （トンドク女子大学校児童学科教授）

② 「早期教育と発達病理的問題：2001」
申宜真 （延世大学校医科大学精神科教授）

2002年「早期教育研究大会」発表資料

早期教育の産業化

―学習紙、児童図書及びおもちゃを中心に―

金明順（延世大学校児童学科教授）
丹羽 孝 訳

Ⅰ．はじめに

韓国はいま「早期教育」でわきかえっている。その状況に立ち入って見ると、第一の問題は、肝心の教育の対象である「子ども」とは関係が無く、大人が薪を持ってきて火を焚きつけているという点である。薪は絶えることなく新しくくべられていて、火を焚く理由もさまざまである。父母の過度の欲求、関連企業の利潤の追求、専門家たちと公教育界の無責任な放任、貧弱な教育インフラを放置する政府、女性の就業難等の理由である。第二の問題は、未来の主人公となる子どもの教育的、社会的、文化的環境を健全にしようとする人たちの声がとても小さいことである。

一例をあげよう。アメリカでは先週を「テレビを見ない週」に定めて、大々的にテレビで失った父母と子女間の対話時間を増やすような社会的雰囲気を作ろうとした。また、読書活動マラソンを実施し、とても小さい町にまでおもちゃを貸す車が無料で運行されている例は、他の国の例である。

韓国で薪の火を消すことは、子どもの生活の質と関連して緊急で重大な問題である。個々人ではその役目を果たすことはできない。

この発表原稿を準備しながら、燃えさかっている早期教育の薪のうち、企業形態の学習紙産業について、そして産業化の風が吹き荒れている児童図書市場及びおもちゃ産業について 20

分の発表時間にどのように整理すればよいか、とても苦悩した。しかしとりあえず報告では、それぞれの長所よりは問題点を、小さな問題よりは大きな問題点だけを指摘することとしたい。

本稿の資料は、政府や関連団体の統計資料、新聞及びインターネット資料、今まで大規模に行われてきた関連研究成果を参考にし、不足する内容については本発表者が質問紙調査を行い内容分析をして追加した。

Ⅱ. 学習紙市場

1. 学習紙市場及び使用の実態

1) 学習紙の現況

2001 年度　推計年商 4 兆ウォン、毎年 15－30%の急増

幼児学習紙：8－9 千億ウォン

2) 学習紙使用の実態:　2002 児童発達白書、2002 年李基淑他

ハングル学習紙：40.2%

数学学習紙：23.8%

英語学習紙：21.6%

学習紙会社会員数：500 万人程度

3) 学習紙の内容構成

① 科目別と総合型

② 教材価格例（ハングル）

教材価格　295,000 ウォン、月当たり講習料　35,000 ウォン（8 ヶ月 10 段階）

4) 学習紙管理方式と広告戦略

管理：電話・訪問で質問に答える、利用者とのコミュニケーションをとる

広告：TV　　幼児用　125 時間　21 億 3,050 万ウォン（20 日）

2. 学習紙市場の問題点

① 反復練習法の不適。

② 個人差の大きさにプログラムが対応していない。

③ その効果が分析されていない。

④ 相互作用を伴う遊びが保証されていない。

⑤ 広告によって過大な期待を持たせている。

⑥ 公教育費支援の少なさが私教育費支出をさせている。

⑦ 訪問教師の資質と教材の質の問題。

Ⅲ. 児童図書市場

1. 児童図書市場の実態

1) 児童図書市場の現況

児童図書の発行総数：4,062／25,632＝15.8%　漸増

2) 児童図書の分類（教保文庫，2002）

3) 翻訳図書の現況

国外翻訳童話の比率が高い：2001 年度で 27.3%

内容があわない、翻訳が悪い、・・・(後略)

4) 子ども図書館の現況

全国で40カ所あるが、国立はソウル子ども図書館のみ

2. 児童図書館の問題点

① 外国の創作分野の翻訳が多い。

② 産業出版目的の全集販売・家庭訪問販売が多い：児童図書ばら売り運動1980〜。

③ 子どもが本に接する機会を拡大するために子ども図書館増設等の努力が必要。

④ 良書の目録の積極的な提供が必要。

⑤ 専門店、大型書店の子どもコーナーの拡大と環境の改善が必要。

⑥ 子ども図書の訪問貸与店の産業的攻略の拡大は、子ども自身の選択幅を狭くしている。

⑦ 読書環境を充実する必要がある。

Ⅳ. 児童おもちゃ市場

1. おもちゃ市場の動向

① 2000年1月：児童福祉法第9条第2項

「国家は大統領令が定めるところにより、児童福祉施設と児童用品について安全基準を定める。児童用品を製作、設置、管理するものはこれを遵守するようにしなければならない」

② アメリカ、日本、ヨーロッパへの輸出は継続して減少しているが、中国からの輸入が毎年急増している。(安全基準の問題)

2. 児童おもちゃ市場の問題点

① 安全基準を徹底すること。

② 国家的レベルのおもちゃ安全事故保護システムの構築と運営。

③ 適性年齢の表示。

④ 武器類おもちゃの販売拡大と生産の禁止。

⑤ 無分別な輸入の検討。

⑥ 中国産おもちゃの安全基準の確認。

Ⅴ. 終わりに

児童の安全と幸福を守り、彼らを健全に教育して未来社会を導いていけるようにすることは、私的な行為ではなく公的な行為であり、もっと国家及び社会のレベルから責任を持って行われなければならない。これは、子どもをターゲットに利潤を創出するより、児童のための行為が優先されなければならないことを意味している。

2002年4月初旬、「朝鮮日報」の全面広告に「読書教育専門企業△△△……」とあったが、自国の児童の精神的成長を担う読書教育を、営利企業に責任を負わせる国がどこにあるだろうか？ 学習メディア、児童図書、おもちゃ等は児童の望ましい成長に有益であることは言うまでもない。しかし、企業の健全な哲学及び非営利の教育投資比率の増加、教育開発部門が営業部門より下位にある意志決定構造の改善、学習紙・図書、おもちゃの開発時に児童専門家と協議する体制づくり等、至急に解決しなければならない課題が残されている。 (以上)

参考資料 ②

以下は本資料集掲載の資料Ⅱ『創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新』の第Ⅲ章第4節を別掲するものである。

早期教育を受けている幼児の生活及び問題点の調査

ー『創造的で全人的な人的資源養成のための幼児教育革新』第Ⅲ章よりー

片 成 男　訳

A. 幼児の生活

バクソンミン（仮名）はソウルで生活している5歳の男児である。ソンミンの家族は、父親、母親、そして小学校2年生の姉の四人家族である。ソンミンは現在、M幼稚園の銀の鈴組（半日制）に通っている。ソンミンが通う幼稚園の教育目標は、幼児たちの全人的な発達を助ける優秀なプログラムを行うところで、親たちの認知レベルもとても高い。

質的に優秀な幼児教育を受けているが、ソンミンのお母さんはこれだけに満足していないようである。ソンミンは幼稚園が終わった後、家からまた他の機関に行って様々な特技教育を受けている。ソンミンの一日の日課を見てみると、多くの課題でとても忙しい。たった5歳の子どもがこれほど多くのことをしなければいけないということが信じられない。ソンミンの一日の日課を傍で見守ってみると、不幸なことに、まるで重すぎる業務に追われて心身ともに疲れた成人の姿を連想させる。

幼稚園でソンミンを観察してみると、何よりゆっくりとした行動が気になる。ソンミンの動きは他の幼児に比べてとても遅かった。そのためか、他の幼児は活気に溢れて見えるのとは違って、ソンミンは気力がないように、また何の意欲もないように見える。担任教師が幼稚園生活以外で様々な特技活動をしている幼児の日課を追跡してみたいケースとしてソンミンを挙げた理由が分かるような気がした。ソンミンは特定の作業に没頭して集中する時以外には大体疲れているように、そして意欲がないように見えた。ゆっくり歩き、背筋を伸ばし、欠伸をし続け、両手で頭を抱えたり、体をよく捻ったりなど、ソンミンの動作は、仕事に疲れているのに休息がとれず疲労がたまったり、睡眠不足の時によく見られるものである。または過剰な刺激により普通のことには興味を持てなかったり、自分の意志どおりにできず意欲を喪失した時に現れる症状とも言える。

教師の側は、クラスの幼児たちが多様な好奇心を満たしながら勉強し、成長するように豊富で魅力的な教育環境を用意してあげようとするが、これに関心を示さず意欲がないように見える幼児がいるとしたら、どうしてもその理由が知りたくなり、また心配するだろう。そして、そのような幼児たちが幼稚園での生活以外に放課後、8種類もの特技活動をしていることを知れば、その非意欲的な態度の理由は大体推測できるだろう。そうだと分かれば、教師として幼児に対する心配はかえって大きくなるだろう。この時期の幼児にとって、基本的に必要なのは正規の幼稚園教育なのに、特技活動に追われて疲れた心身を幼稚園にきて癒しているということは、論外のことである。全人的な発達のために、幼稚園

で統合的教育を受けるべき幼児期に、特技教育に追われるあまり幼稚園教育が軽く見られてしまうのは、主客が顛倒されたことで教育的にまことに深刻な問題であるからだ。

次は、幼稚園に通いながら特技活動を8種類を行っている5歳のソンミンの生活が一体どういうものであるか、彼が通う「銀の鈴」組、自宅、そして彼が参加しているいくつかの特技活動を観察し内容を紹介する。(以下太字は原文のとおり)

〔10月22日　銀の鈴組〕

9:10

男児3名、女児1名、教師、ソンミンが、教室の真中にある丸いテーブルを囲んでスタンプ押し活動をしている。教師がスタンプの押し方について、やって見せながら説明する。ソンミンは左手でスタンプをスタンプインクにつけて1回押して、その横に何かを書く。右手でスタンプにインクをつけて、紙に当て両手で押す。スタンプを離したあと、色鉛筆でまた何かを書く。ソンミンが教師に何かを話すと、先生が「軽く押して」という答えがふと聞こえてくる。ソンミンは教師とある幼児が手洗い方向に行くと振り返って見て、友達が話していることにもしばらく注意を傾けながら話をするのだが、幼児たちはソンミンの話に特に反応しない。

9:15

ソンミンは美術コーナーに場所を移し、のりとはさみを持ってきて紙を切り始める。紙に描いてある絵を気をつけながら切る。切り出した絵の裏側にのりをつけ、手帳に張っていく。教師がトライアングルを打つと、幼児たちは自分が遊んでいたところを整理しはじめる。ソンミンは絵の切り出しを続ける。教育実習生(以下教生)がソンミンに近付いて何かを話すと、ソンミンはのりのふたをして、椅子を持ち、カーペットのあるコーナーに行く。ソンミンが作業をしていた場所は、のり、はさみ、紙くずがそのまま散らばっている。

9:21

ソンミンは一方の足をもう一方の足の上に乗せた姿勢で、となりの男の子と短く話をする。クラスの幼児たちが一緒に歌を歌っているが、ソンミンは歌わない。乗せた方の足首に触っている。口をちょっと動かしながら、歌の2節、3節の部分は熱心に歌う。歌を熱心に歌い始める。"I am so happy, I am so happy……"　乗せた足を下ろして、教師を見る。**頭を撫でながら欠伸をする。**教師が一日の日課を紹介するあいだ、再び一方の足をもう一方の膝の上に乗せながら**欠伸をする。体を前の方に曲げてまた伸ばす。**教師に「先生、では今日は(園)庭から家にそのまま帰ってもいいですか?」と聞くが、答えは確認しない。

9:23

一日の日課について紹介が終わり少々ざわめいている中で、教師がトライアングルの音を聞いて手拍子を打つ遊びをしようと提案する。幼児たちはトライアングルの音の数と拍子を注意深く聞き、手拍子を打ち始める。ソンミンは拍子を正確に打つのだが、終りに手拍子をもう一回打って急に止める。ソンミンは手拍子遊びが終わると、壁の絵を見てまわりながら**欠伸をする。ジファンが持ってきたものを見てから"友達を愛するこども"という歌を歌うのに、ソンミンは手を頭に乗せており、その手で顔を撫で下ろし、欠伸をして目のまわりを揉む。腋の下を掻き、また欠伸をする。腰を前に曲げてまた延ばす。**

9:27

設定されたプログラムが終わり、自由選択活動が始まると、ソンミンは椅子を持ってちょっと前に自分が作業をしていた机の方に行く。籠から違う紙を取り出して切り出す。一方の手で紙をしっかり持ち、はさみで余白をすこしずつ切出し、のりをつけた後手帳に貼る。手帳の前の約 8−9 枚に絵が貼ってある。ソンミンは時々ピアノの音が聞こえて来る方を顧ながら作業を熱心にやっている。**手帳を開いて、空いた紙が何枚残ったか数えて見る。**作業をする間、間に、ドンスと話をする。再び籠の中の紙を出してはさみで切る。ソンミンは教師に手帳を開いて見せ、ちょっとお話をしてから手帳を籠に入れ、積み木領域（コーナーのこと、以下領域のまま使用)）に行く。**ソンミンが作業していた机の上には切り出した紙くずとはさみ、そしてのりの蓋があけておかれたままの状態である。**

9:34

積み木遊びの教具棚の上にある籠の中のブロックを触る。ソンミンは積み木遊び領域に坐って、ある男児と話をしながらレゴブロックを挟み始める。しばらく頭を斜めにしながら、ブロックを組み合わせようと努力する。ブロックを再び籠に入れる。ブロック籠に腹を当て、斜めに寄り立つ姿勢でブロックピースをあちこち組み合わせて見る。一人で何か呟いたりもする。ドンスとミンチョルがソンミンの後から覗きながら話しかける。ソンミンが「一個ずつだよ。」と大きな声で答えるのだが、これはまるで何かを主張しているかのように聞こえる。ドンスがソンミンの前にある籠からブロックを一握り持って、ソンミンの様子を伺う。ソンミンも一緒にブロックを一握り持ち、二人は積み木遊び領域を離れて他のところへ移動する。

ドンスは作業机の前に立ち止まる。ソンミンはごっこ遊び領域の食卓前に膝をついて坐り、手に持っているブロックを触ったりする。教生がソンミンに近付き声をかける。ソンミンはやっていることを続けながら、あまり関心を見せない。**教生はソンミンに作業机を指しながら整理することを喚起する。**ドンスが寄ってきて、教生がソンミンに言うことを聞く。ドンスがソンミンのブロックに手を伸ばすとソンミンは「あ〜あ〜！」と大きな声で制止しながら手に持っていた小さい部品中の一つを床にドンと投げ捨てる。**教生はソンミンが持ってきたブロックをしばらく預けて、作業机を整理してくるよう提案する。しかしソンミンはブロックをしっかり握って放さない。教生は引き続きソンミンにブロックを預けるよう要求するが、ソンミンは後に退き体を捻りながらブロックを取られないようにする。**

教生は続けてソンミンに作業机を整理することを要求する。ソンミンの体を作業机の方に向けさせよく見るようにする。「バクソンミン、どうぞ！」教生が断固と指示すると、ソンミンは「やればいいんでしょ。」と不満気に答える。教生はソンミンに付いて来るよう動作で指示し机の方に行く。ソンミンは仕方なく付いて行き、紙屑を拾ってゴミ箱に捨てるなど、机を整理する。ある女児がソンミンに話を掛けると、話の終りに「このバカ。」と言う声が聞こえる。

9:42

ソンミンは積み木遊び領域に行って飛行機模型で遊び始める。積み木遊び領域では 5 人の男児が遊びをしている。ドンスとソンミンが並んで坐って遊びながら時々話をする。ドンスがソンミンの両手に持っている飛行機模型に関心を示す。ソンミンは飛行機を持って膝を進めながら偶々他の子どもたちの遊びを眺める。ソンミンは立ち上がって玩具棚に行って籠の中の黄色い大型トラックに触る。フォークレインを取って見て、また他の車をも見る。ソンミンが車を 3−4 個持ち、ドンスが残りの車が入っている籠を持って一緒に坐る。ソンミンは歌を口ずさみながら大型トラックの模型を探り出す。適当なものを探している

様子である。籠の中に何かを入れてから急に再び取りだし、もう一つを取って触りながら何か考え込んでいるようである。

9:54

ソンミンはフォークレインを回して見たり、車輪を掌に当てたりもする。手で熱心に操作しながら「トトト…ドド…」と声を出したりする。積み木遊び領域にいる子どもたちはそれぞれ玩具を前に並んでおき、各自の活動に夢中になっている。その内の２－３人の子どもが遊びの提案をしたり、作ったものを見てという内容の話をする。**「おい、お前は積むことしか分からないか」とだれかがソンミンを非難すると、チラッと見るが特に反応を見せない。周りの子どもたちから時々笑い声が聞こえるが、ソンミンはそれには関心を持たない。**ある女児がソンミンのところに来て手で先生のいる方を指す。ソンミンは自分のことをやめて、立ち上がって先生のところに行く。

10:00

教師はソンミンを前に坐らせ、何かを始める。ソンミンの前には録音機が置かれてある。ソンミンが来る前に既に終わらせた女児３人がその場を離れず見守っている。教師はソンミンにゆっくりと文章を読んで上げる。教師が読んだ文章を、ソンミンが続いてレコーダーに向けて話すのであった。教師との活動が終わると、ソンミンは自分が遊んでいた積み木遊び領域に戻った。

10:04

ソンミンが頭を下げて、自分が持って遊んでいた玩具をじっと見つめてから、ブロック籠を一つ力尽くしで出してきた。「もう遊びを終わらせて、片付けの準備をしましょう。」教師が整理整頓の準備時間であることを知らせる。何人かの幼児は教師の話が終わるとすぐに遊びを止めて整理し始める。ドンスが玩具をうえに持ち上げソンミンに見せながら何かを話す。ソンミンはチラッと見て関心を示さないようである。教師は個別的に幼児との録音活動を続けている。

ソンミンは積み木遊び領域から立ちあがって机の周りを１回歩き回り、ごっこ遊び領域に行く。ごっこ遊び領域を見まわり、冷蔵庫のドアを開ける。入れ物から模型食品を何種類か出して床に置いて坐る。食品模型の入れ物から何かを探しながら呟き、調理台の下の棚を開けて覗いて見る。冷蔵庫のドアと調理台下の棚のドア開けたまま、食器棚から必要なものを探す。器を出して、調理台の前に坐って出した器を触る。教生がソンミンの傍に来て坐って見守る。ある女児がソンミンを観察する。ソンミンは教生と何か話を交わす。

10:11

ごっこ遊び部屋に女児１名と男児１名が来て、ソンミンが棚から出したものを見る。ソンミンは続けて棚の上のものを触ったり、材料を探して器に入れる。器に入れた食品模型を分けて他の器に入れたりもする。洗い台と調理台を行き来しながら、食べ物を用意する。調理台の上に深い皿を四つ出して置き、その中にプラスチック製の箱に入ってあった食品の模型を入れる。ミンチョルが横で物を触るが、ソンミンは制止しない。しかし、他の男児が器に手を触れると「いや～！」と強く制止する。食器棚から器を一つ出して、調理台上のものを洗い台に移す。再び新しい食品の模型を出して器に入れる。突然、コンピューターから子どもの声が大きく聞こえて来るとソンミンはコンピューターの方に寄って行く。ソンミンのように、子ども何人かがコンピューターの方に集まっていくと、教師は「音を小さくするから」と言いながらボリュームを下げる。ソンミンは再び調理台に行く。

10:17

調理台の材料を再び洗い台に移し、洗い台の下から籠を取り出す。**食卓の準備を始める。食卓上の器には食べ物がいっぱい入れてある。ごっこ遊び場の床にはいろんな物と食品籠が散らばっており、冷蔵庫のドアも開いている。**ソンミンは食卓上の器をあちこち移しておく。きれいに配列しようとしているようでもある。ソンミンはまた冷蔵庫の中を覗き、あちこち歩きまわり、調理台下の棚から何かを出した。まな板とハンバーガーパンの模型を食卓に置いてフライ返しとナイフを出す。ごっこ遊び領域にいた幼児たちがソンミンが準備した食卓に関心を示す。教生もソンミンが用意した食卓に来て味を見るふりをする。ソンミンは嬉しそうな顔で教生を見上げる。

10:24

この時、教師のトライアングルの音が聞こえてきた。教生が立ちあがるとソンミンも立って器を手に取る。ソンミンは洗い台の前に立って残った食べ物を床に捨てる動作をする。**空いた器を洗い台に入れる。ソンミンは洗い台の前に立って食品模型を整理する。籠に一つ一つきちんと押して入れるが、最後まで整理せず出ていく。**教室は整理整頓する幼児で混雑の状態。ソンミンが作業棚まで来た時、その近くにいた教師が「ソンミン、お願いするよ！」と言う。そのお願いを受けたソンミンは作業机の上の紙皿を集めて教具棚上に置く。順番に並んで置いたので整理した感じがする。

ソンミンは空いた籠をきちんと積み上げた。「ソンミン、ありがとう。」教師が誉める。ソンミンは色鉛筆箱を教具棚の元の場所に置いといた。テープカッター2 個も元の場所に置いた。教師が作業台上のビニールを畳むのを、ソンミンと男児 1 名、女児 1 名が手伝う。「積み木遊び場を整理しに行こう。」と教師が言いながら行く間に、ソンミンは再びごっこ遊び部屋に入って冷蔵庫の前に坐り込む。

10:26

教師がトライアングルを打ちながら「そのまま止まれ」の歌を小さな声で歌った。ソンミンは 1 回見てからずっと坐っている。食品模型を何個か拾って食器棚に入れてから、敷物の上を歩く。ミンチョルが鍋を取ってあげる。ソンミンは持っていた蓋を鍋にして調理台下に入れる。教師がおやつ当番にソンミンの名前を呼ぶと、調理台の棚のドアは開けたまま走って行き、「先生、僕…明日することにします。」と言う。教生がごっこ遊び領域に行って調理台のドアを閉め、冷蔵庫の中を整理する。ソンミンはトイレに行って手を洗い、エプロンには片方の手だけを通したまま外に出る。表情は明るい。

10:30

ソンミンはエプロンに片方の腕だけを通したまま再び入ってくる。エプロンを服掛けに掛けようとしたが、うまく行かずタンスの上に置いて教師のところへ行く。「先生、僕やりません。」と言う。教師がソンミンに寄ってきて様子を見て、再びエプロンを出してソンミンにゆっくり着せてやりながら何かやさしく話す。ソンミンは頭を深く下げ、教師が着せてくれるままじっとしていて、ゆっくりと教室を出ていく。

10:31

しばらくしてから教師は「ソンミン、ジェウが代わりにやってあげると言っているけど、頼む？」と言う。ソンミンはエプロンを脱いでジェウにわたす。ソンミンは 6 人用テーブルに坐る。そのテーブルには女児 3 名、男児 1 名が坐っている。ジェウがキッチンタオルでテーブルを拭くと、ソンミンは後からジェウを抱いて背中に伏せようとする。ジェウは続けて拭きながらソンミンを制止したり避けたりはしない。

ソンミンはジェウが自分の代わりにおやつ当番をしてくれることに感謝し、その気持を表現しているように見える。ジェウはソンミンの行動に反応を見せず、自分の仕事に没頭する。

ジェウがパンを取りに行く。**ソンミンは伏せたまま頭を揚げて欠伸をする。**ジェウが置いといた牛乳に触って掌と指を唇に当ててみる。ジェウが友達の前にパンを入れる皿を置く。ある男児が「ワン、ツー、スリー、フォー…」と言う。ソンミンは笑いながらジェウに「ワ！　英語をした。」と大きな声で言う。**ソンミンは一方の足を振いながら**女児がコップに牛乳を注ぐところを見ている。そして牛乳箱をもらって蓋を押しながら自分のコップに気をつけながら注ぐ。牛乳箱を隣の友達に渡す。ソンミンは大きな皿からパンを一個取って自分の皿に置き、隣の友達の方にパン皿を押しておく。ソンミンは拳で口を叩き、パンを手で軽く掻く。唇をパンに一回擦り指の爪でパンをちょっと千切る。パン片を牛乳コップに落す。一緒に感謝のお祈りの歌を歌う。ソンミンも目を閉じて、頭をちょっと下げて、両手を合わせて歌を歌う。

10:37

パンを一口かじり、牛乳を飲む。指を舐めながら幼児たちが話をしているところを眺める。パン切れを取って牛乳につけて口の中に入れる。後ろを振り向いて他のテーブルの子どもたちを観察する。ジェウに一言言うと、パンを食べながらソンミンの話に答える。ソンミンはパンを右手にし、左手でキッチンタオルを取って皿にこぼした牛乳を拭く。**ずっと足を振っている。**キッチンタオルを置いて、パン切れを手で千切って取りながら「10 匹ぐらいでも運ぶことができる…」と言って、幼児たちの話に割り込む。ジェウが話題を主導するようである。ソンミンは左手を額に当て、パンを食べながら話を傾聴する。左手でコップを取り、牛乳を一口飲む。女児がソンミンに何かを話すと答える。

10:42

ソンミンがお手洗いに行って、ゆっくり歩いて来る。皿とコップを整理用盆に置いて椅子に坐って足を振う。**上体を後にぐっと伸ばしながら目を揉む。足を振いながら友達を見、体を捻ってから椅子を引っ張ってきちんと坐る。親指を口に入れる。**ジェウに近付き、抱っこをするようにして話をすると、ソンミンを押し離す。再び自分の位置に戻りながら、「ヤ、お前たちが…」と呟く。ジェウは頭を横にする。

10:44

自分の位置に坐り、両手親指を口の中に入れている。机に胸を当て、伏せた姿勢で両親指をずっと口の中に入れている。体を左右に揺らす。指で唇を触り、頭を振り、机の上に伏せる。おやつが終わった幼児たちは他の子どもたちが終わるまで自分の位置で待ってあげることになっているため、ソンミンはとても退屈そうに見える。**机に肘を乗せ、両手で顔を包み、顎を支えた姿勢で待つ。**

10:46

ソンミンはジェウとしばらく話をする。**腕を捻りながら背筋を伸ばす。右手の指を曲げながら数を数える。両手を上げて頭を下げ腕の中に顔を埋める。伏せる。両手で顎を支えてから頭を掻く。掌で目を揉む。**ジェウと女児 1 名がまだおやつを食べる途中である。他の子どもたちは全部食べたか器を整理した状態である。教師が腰を曲げてジェウと話をする。ソンミンは教師の背中とその下の方を掌で撫でるようにする。

10:50

ソンミンは T シャツの襟を上げて顔を隠す。友達がソンミンを見る。顔が出て、T シャツがソンミンの鼻に引っかかっている。友達が見て笑う。ソンミンは立ち上がって椅子を押したが、教師がソンミンを

振り返って見るとまた坐る。まだ女児のおやつが終わってない。**ソンミンは手を伸ばして机に乗せ、頭をその上に下ろす。再びシャツを引っ張り上げて顔を隠してから頭を出す。首をカメのように服の中に埋めて手を空中で振り出す。**教師がおやつの終わった子どもは遊んでもいいと許可すると、ソンミンが坐っていたテーブルでは一人の女児を除いてみんなが立って、椅子を押し入れて離れていく。

10:53

ソンミンがパズルを腋の下に挟み、作業棚上の消しゴムをしばらく見て、作業棚の中を覗き込んでいる。他の幼児たちのためによく見えないのか、彼らの足の間から覗いている。教室真中に置いてあるテーブルに行ってパズルをひっくり返して散らしておく。パズル合わせを始める。そのテーブルでは一人の女児が色鉛筆で絵を描いている。他の女児が色鉛筆と手帳を持ってきてその隣に坐る。二人の女児が来てソンミンがパズルをしているところを見物する。教師がソンミンの傍に来て坐る。教師はパズルピースを一つ取って適当な位置に置く。ソンミンはピースとパズルを順番に見ながら適当な位置を探すところである。ピースが全部きちんと嵌ると、教師とソンミンはすぐに空中で手を合わせる（ハーイ、タッチをする）。教師は「ファイト！」と言ってソンミンを励まし、他のところに行く。

10:57

ソンミンは絵が線だけで表示されている 20 ピースパズルを全部合わせるまで続ける。女児がソンミンのパズル合わせに参加する。ソンミンは女児が合わせるようにさせながら、自分は違うピースを探して合わせる。ソンミンはパズル板とピースを順番に見ながら頭を掻く。2 名の女児が隣でアドバイスをする。パズルが難しいためか、ソンミンは女児たちの介入を許す。結果としては、3 人の幼児が一緒にパズル合わせをしている。

11:00

タンバリンの音とともに、「自分がやっていたことときれいに整理しよう。そして椅子を持って集まろう。」という教師の声が聞こえる。教師はカーペットに椅子と教材を持って坐り、準備をする。幼児たちが椅子を持って教師の周りに集まる。**ソンミンがパズルを教具棚に若干斜めに上げておき、椅子を持ってみんなが集まる場所にゆっくりと歩いていく。遅い歩き方である。一方の手に椅子を持ったが力なく垂れており、引きずるようにして歩く。びっこを引くような歩き方である。坐る場所を探す。**

11:02

ちょっと前に一緒にパズル合わせをした女児の傍に坐る。**頭を下げて腰を曲げる。指を口に入れる。指で鼻をほじる。指についた鼻くそを床に捨てる。指を口に入れる。**「私は楽しい」を一緒に歌う。ソンミンは最初一緒に歌わないが、外国語の歌詞の部分で一緒に歌う。教師がインチョン国際空港に関する主題で話し合いを始める。幼児たちが教師の話に注意を傾ける。ソンミンは両手をぐっと上げてから頭の上に乗せる。両手を乗せたまま頭を後に傾ける。

11:05

教師は「アロハ」という挨拶を紹介する。**ソンミンはちょうど後に位置した積み木遊び棚の上にある玩具に視線を向ける。教師が模範を見せて歌を歌う間に、車を触る。積み木遊び棚に頭を当て、伏せる姿勢を取るがまた体を起こす。**教師の歌が終わるとソンミンは前を向いてきちんと坐る。教師は何人かの幼児たちに席を換えることを指示する。ソンミンはきちんと坐っているため教師の移動指示はない。

11:07

歌の曲だけを聴く時間である。幼児たちは静かである。ソンミンの隣の女児がピアノを覗き込む。ソンミンは隣の子どもの方に体を傾け、頭を捻ってピアノを見てから積み木遊び棚に頭を寄せる。‘ラララ’と友達がピアノについて歌う間、ソンミンはついて歌わない。

11:09

ソンミンは手を上に挙げて頭を触り、目を揉む。手を頭の上に乗せ、両手の指を組み合わせる。目を揉み体を捻る。そうしながらも教師の話には注意を傾けているように見える。腰を後に伸ばし教具棚によりかかる。手で首を巻き、頭を完全に後に垂らす。教具棚の上に頭を乗せる。突然腰を完全に下げて教具棚の下へ入り見えなくなる。再び頭を挙げて後に垂らす。教師が歌詞を聞かせて、子どもたちはリフレーンを先生について歌う時間である。ソンミンはついて歌わない。ソンミンは体を前に完全に曲げながら手を頭の上に乗せる。ついて歌おうとするが意のままにならないように見える。腕を後に伸ばし上に挙げる。積み木遊び棚の上に置いてあった物が音を立てながら崩れる。ソンミンは再び腰を伸ばし、自分の席にきちんと坐る。

11:12

再び腰を曲げて前の方に傾く。じっと坐って窓の外側を凝視する。友達の歌声を聞く。腰を捻って積み木遊び棚の上のものを見ながら「アロハ」と言う。頭の後を手で撫で、教師の話に耳を傾けようと努力する。大人に会ったとき、どう挨拶するかと教師が幼児たちに聞く。子どもたちはそれぞれ表情、声、身振りで反応する。ソンミンは教師の話と幼児たちの答えに注意を傾ける。体を傾けて腰を曲げようとするが、ちょっと騒がしくなったことを注意する教師の声に戸惑う。ソンミンが姿勢を正して坐る。教師は明日幼児たちが調べて来ることについて話す。

11:16

ソンミンが手を膝に乗せ、きちんと坐ろうと努力する。しかしまた手を挙げて鼻を触り、両手を挙げて背筋を伸ばす。腰を捻る。ソンミンの姿勢について教師が注意をする。教師はきちんと坐っている幼児から外にでるよう名前を呼ぶ。そのうち、何人かずつグループで名前を呼ぶ。ソンミンも名前が呼ばれて、立ちあがる。ゆっくりと椅子を戻し、教室の外に出て行く。

11:20

ソンミンが上着と靴を持って出てくる。約 10 人ぐらいの幼児たちが緑の教室のドアの前に並んでいる。必ず並ばなければならないことでもないのに、彼らは秩序を守っている。幼児たちは順番に教室を出ていった。ソンミンの順番だが、ソンミンは出るのを全然急がない。却ってドアの傍の椅子に坐り、前の掲示板を見ている。ゆっくりと靴を一方だけ履いて、壁の “I am so happy”、という文字を声出して読んだ。友達が全員出て行き、一人の男児がソンミンの壁の字を読んでいるところを見ている。ソンミンは「一緒に遊んだらだめ？」と聞かれると「だめ、僕は今日他の子と遊ぶよ。」と答えて出ていってしまう。他の男児が来て教室を覗きながらソンミンに遊ぼうと言うと、断りながらゆっくりと出ていく。ソンミンが一番最後に教室からグランドに出たことになる。

次はソンミンの一日の日課を観察するために、幼稚園が終わった後、ソンミンが行く場所を二日間追跡観察した内容である。観察日は、2001 年 10 月 25 日（木）で、観察場所はソンミンの家とソンミンが通う社会福祉館の「ハングル・ジャンプ教室」と「科学教室」である。観察時間は午後 12 時から 5 時までの計 6 時間である。

12 時頃にツツジ班の玄関が開き、教師と幼児たちが出て来る。ソンミンのお母さんがイチョウの木の隣にあるベンチに坐っていたが、玄関の前に向かう。ソンミンが出てからまた入ってジャンパーと靴を持って出て来る。ソンミンはジャンパーに腕を一方だけ通したまま服を引きずりながら出て来る。玄関に坐り込み、紐のついた運動靴スタイルの靴を履く。一人で紐を結ぶのにちょっと時間が掛かった。お母さんがビニール袋に入ったパンを手で千切ってソンミンにあげる。ソンミンがいやと頭を横にすると周りにいる幼児たちに分けてあげる。ソンミンはお母さんが手に持たせてくれたパン切れを持って遊び場の自転車に乗った。玄関からイチョウの木の方へ、ブランコの前まで進み、足を一方だけ下ろして他の子どもたちが遊ぶところを見守る。

幼稚園の遊び場で遊んでから家に戻ると 12 時 45 分頃である。お母さんは家に入ると、すぐソンミンに早く課題を終わらせるよう促す。

お母さん：　早くやっておいて、これやるの、それともこの前のように延ばすの？

ソンミン：　先生が…

お母さん：　先生が何、先生が何と言った？　何も言ってないのに。家でやることがあるのに、先にやってからすることを約束したでしょう。

ソンミン：　それはお母さんが決めたんじゃない。

お母さん：　あなたがお母さんの話を聞かないと、私もあなたの言うことを聞かないよ。あなた、ピザが食べたいと言ったでしょう？お母さんの言うことを聞かないとピザを買ってあげないよ。

ソンミンはお母さんの脅しにそれ以上反駁することができず、自分の部屋に行きながら「やったらいいんでしょ。」と呟く。ソンミンは5、6 冊のワークブックを持ってきて、食卓の上にどさっと放りながら、ソンミン：「これを全部しろって？　話にならないよ。話にならないことだよ。」とまるで大人のような論評をする。

ソンミンはノートを開いてあれこれ探りながら「分からない、分からない、誰も分からない」と、歌手の歌を真似る。ソンミンは本を開いて、算数問題を解く。5＋2=__、5+3=__、5+4=__、6+2=__、6+3=__、6+4=__と書かれた問題を、すらすらと解いて行く。個単位の数の足し算問題がページ毎に続いている。ソンミンは問題を解きながら、何枚残ったか確認することを繰り返す。ソンミンは機械的に答えを書いて行く。ほとんど正解するが、9+2=__の問題で答えを 12 と書いた。ソンミンが次のページに移ろうとする時、観察者が「ソンミンちゃん、これ合っている？」と聞くと、「あら~」と言いながら‘11’と書き直す。ソンミンは問題を解きながら目を揉む。

1 時になった。ソンミンが「お母さん、終わったよ。」と言うと、食器洗いをしていたお母さんが「横において、国語して。」と言う。お母さんが手を拭きながら、ソンミンの隣に坐った。お母さんが算数の本を開いて見ながら「いい一日を！　言って見て。」と言うと、ソンミンは「Have a nice day!」と言う。お母さんはソンミンの算数の間違いをチェックする途中、続けて質問する。「先生、水をください、言って見て。」ソンミンは「Water, please.」と言った。お母さんは「では、先生が水を持っきてくれたら、何

と言うの？」すると、「Okay, Thank you!」と答える。お母さんはソンミンが英語学院で学んだ内容を忘れないよう時々復習させているようである。

実は、ソンミンは算数、英語、国語を同時に勉強している。お母さんは算数問題の答えを検査し、ソンミンは文字を書く練習をする。お母さんはソンミンが間違えた答えを消しゴムで消す。2、3 ページに 1 問題程度で間違っていた。お母さんは算数の本を見ながら、ソンミンに続けて質問をする。「キウックとオを合わせると？」ソンミンは鉛筆を唇に当てて考えながら「ク」と答えると、お母さんはまじめな顔をして「キウックとオなのに？」と聞きなおす。「コキリ〈像〉」と書いてしばらく鉛筆を唇に当てて考えてから「コン！」と言いながら嬉しそうな顔でコンと書いて、「ハトがコンを食べる」と言った。これはソンミンの書きノートにある文章だった。ソンミンは読みの練習をしているところだった。

ソンミンがドアの方を見ながら聞く。「いつ来るの？」　お母さんがソンミンに算数の本を開いて見せながら「ここ、一つやってないよ。」すると、ソンミンは「しまった」といいながらすぐ答えを書き入れた。そして、鉛筆の端を口に噛んだ。「鉛筆を口で噛むと…」毎日言う文句のように、途中で言葉を濁した。ソンミンは頭を机に乗せながら「ビ、ドル、ギ」と声を出して読みながら一文字ずつ書いた。「ビドゥルギ」とお母さんが直す。「ちょっとだけ。」と言って、お母さんが国語の本を前の方に何ページか戻って指で指すと、ソンミンは読む。「ビドゥルギ、ビヘンギ、ビオッ、ドケビ、テレビジョン」とソンミンが読むと「テルレビジョン」とお母さんが発音を直してあげる。ソンミンの読む声がだんだん小さくなる。

ソンミンが国語の本で書き方の練習をしているところ、お母さんが突然聞く。「嬉しい時にどうする？英語で？」ソンミンは即座に答える。「happy!」「あなたプレゼントもらってうれしかった？」　お母さんが聞くとソンミンはただ頭を軽く振りながら字を書く。「そうだ、プレゼントしてあげようか？」お母さんがまた聞く。「僕の誕生日まだだよ」「あなたの誕生日ではなく、ハギョンの誕生日。」　ソンミンが不満気な声で答える。「お母さん、僕にハギョンの誕生日なんかわかるわけないじゃない！」

算数の本を再びチェックしていたお母さんが間違った問題を指摘する。

お母さん：　これ、間違っているわよ。
ソンミン：　間違った？　全部間違った？
お母さん：　いいえ、一つ間違っているの。
ソンミン：　恥ずかしい。お腹空いたよ。
お母さん：　ちょっと待って。（昼ご飯にピザを配達してもらうことにして、待っているところだった。）
ソンミン：　いつまで？　何時まで？
お母さん：　時計の針が…、牛乳あげようか？　牛乳先にあげようか？
ソンミン：　（欠伸をしながら）いいよ。（溜息をつく。）
お母さん：　お腹空いたからそうなのよ。

やっとインターフォンが鳴り、ピザが到着した。ソンミン、お母さん、観察者が二切れずつ食べる。1 時 25 分になった。再び勉強が始まった。ソンミンは書き方の練習を続ける。ソンミンは「スカートをタンスに入れる」と読んだ。ソンミンの読み書きテキストには短い文章と挿絵が描いてあって、ページの下側に単語を書き入れるようになっている。ソンミンは“チ”字で始まる単語を書き、文章を書く練習をしている。“鼻が長い”とソンミンが文章を読んだ。お母さんが聞く。「だれの鼻が長い？」ソンミンが答えた。「分からない。」「本当に分からない？」「分かるけど言わない。」「お母さんと話したくないのね、分かったわ」　しばらくして、ソンミンがお母さんに話をした。「ワッフルって何？」「凹凸した形だけど、中にジャムを入れてきゅっと押してビスケットのようにサクサク焼いたものよ。」「で、なぜ僕達たちはそれ

を買わないの？」「甘すぎるから。」「僕が太るのを心配して？」「いいえ、太ってないわよ、うちのソンミンは。」

再び文字の勉強が本格的に始まる。

ソンミン：　ネク、タ、イ、ト、タ、ジョ、ラ、ダ。

お母さん：　ティウッとアを合わせると？

ソンミン：　ダ。

お母さん：　違うでしょう！

ソンミン：　（しばらく考えてから）タ！

お母さん：　ピウップとオを合わせると？

ソンミン：　ポ！

ソンミン：　ラピュタ…ラクダの背中に乗る（本にある文章を読む。）

（中略）

ソンミン：　（再び本を読む）うさぎがぴょんと跳ねる。ト、ト、トマトにもトがあるのに。

お母さん：　本当だ。トマトもあるね。（誇り気にソンミンを眺める。）

ソンミン：　オートバイ。

お母さん：　中に“ト”字が入るね！

ソンミン：　漫画に“オト”という子どもがいるよ！

お母さん：　その子は言うことをよく聞くの？

ソンミン：　サーフィン（本にある文章を読む）サーフィンがうまい子がいる。その子は女の子なのに…女の子がサーフィンがとてもうまい。

お母さん：　女性もサーフィンがうまくできるの。あなたもチューブの中をウォータースライディングして下りてきたのね！

ソンミン：　うん。

お母さん：　おばさんは、「あ～！あ～！」と大声ばかり出したでしょう？

ソンミン：　（答えない）

お母さん：　初めて会った時、何と挨拶するの？

ソンミン：　Hello, nice to meet you!

お母さん：　早くして、２ページ残ったよ。

（中略）

ソンミン：　青い、パインアップル、パイプ（単語を読む）こんなとんでもない言葉をだれが分かるの？（ソンミンはパイプの意味を分からないようであった。）

お母さん：　（パイプの形と用途について説明しようと苦労）このようにプーと息を吐くようにして煙がでるの。（話題をすぐ変えて）全部終わった？まだ２ページ残ったよ。

ソンミン：　（パイプを吸う真似をしてみる。）

お母さん：　ほら、やめて早くして。

1時45分まで読みと書きを続ける。やがてソンミンがお母さんに宣言でもするかのように「僕行くよ」と言いながら立ちあがる。お母さんが「どこ行くの？」と聞くと、「ただ」と言って行ってしまう。「ここに戻って！何がただなの！」　ソンミンは立ったままお母さんを見てから自分の部屋に入る。「これはいつするつもり？」とお母さんが聞くと、「晩に！」と答える。お母さんは「できるの？」と聞いて諦めた

かのようにソンミンの前に置いてあった算数の本と国語の本ーくもん数学、1－2 年用国語、正しい書き方のワークブック、熊進（コムドリという韓国の教育産業）のハングル学習紙など―をきれいに集めて、テーブルの片方に積んでおく。

ソンミンは自分の部屋からパズルを持ってくる。ソンミンはパズルをテーブルに出しておいて、咳を何回かする。テキストが開かれると、そこにはソンミンが持ってきたパズルと同じ絵があった。ソンミンが歌を口ずさみながら、パズルを 2 個ぐらい合わせて、3 個目を合わせようとあれこれ試みているところにお母さんが介入した。お母さんはソンミンに、パズルは端から合わせること、パズルピースの模様より絵を見て合わせること、パズルの周辺から合わせることなどをコーチする。

1 時 56 分である。ソンミンは鼻をかんだ。2 時に来ることになっていたくもんの先生が遅くなるというので、パズル遊びとロボット挟みなどをしながら時間を過ごしてから 2 時 20 分になると、ソンミンが母に聞く。

ソンミン：　お母さん、僕何する？

お母さん：　自分がやりたいことして。

ソンミン：　（ソンミンはビデオテープが入っている棚を開けてあれこれ見る。ソンミンはビデオを見過ぎたので毎週金曜日だけ見ることに決めたそうだ。）

お母さん：　あなた、それ逆に整理するの！

ソンミン：　わかったよ、この～！（溜息を大きくしながら言う）

お母さん：　わかったよ、この～？？　あなたそんな言葉どうして言えるの？

ソンミン：　私の口から自然に（冗談を言う大人のように話す）。

お母さん：　そんなことを言うなんて？

ソンミン：　私も分からない、分からない、分からない、何も分からない！あーあ、どんなもの見たらいいかな？（ビデオ棚の前で躊躇する。）

2 時 25 分にくもんの先生が到着した。ソンミンが「先生、こんにちは」と挨拶すると、先生が「あなた、今日はなぜ挨拶をこんなにきちんとするの？」と意外であるかのような反応を見せた。お母さんは笑いながら「今日はそうしなければいけない方がいらっしゃるから…」と観察者を見る。

くもん：　早く問題を解くのだよ。さ、10 秒内に、始め！

ソンミン：　1、7、9（答えを言いながら書く）終わり！

くもん：　よくできたね！ソンミンは算数が得意。これから聞いて書く練習をしよう。

ソンミン：　なぜ聞いて書く練習をするのですか？

くもん：　学校に行くからしなくては。

ソンミン：　僕まだ行かないのよ。3 月に行くのに。

くもん：　だから今から練習をしないと！

ソンミン：　あ、やりたくない（やりたくないと言いながら書きつづける。）

くもん：　上手だね！

ソンミン：　僕これやりたくないから、速くやりましたよ。やりたくなくて。

くもん：　上手だね…また（力を入れて言う）遊ぶのね。遊ばないで！

ソンミン：　ここなぜ 4 段階…なぜ何か変わりました？

くもん：　ここ 4－A でしょう。番号が違うでしょ。一段階上がったのよ。

ソンミン：　猫がニャンニャンとなく（読み）羊がメーメーとなく。あの、この字まだやってないよ。
くもん：　イウンとヤを合わせるとヤ、ヤにまたイウンするとヤン。
ソンミン：　僕、もうこんなのやりたくない。もうお母さんに言ってやめにするよ。ここまで。もっとうまい先生にするよ、もっと、もっと、もっと！
くもん：　（小さく）あの先生が笑うよ。早くして。きれいに書かなくちゃ。
ソンミン：　（書きながら口で文字を一文字ずつ読む。）
くもん：　書きなおして。これ何なの。
ソンミン：　ここまででしょう？
くもん：　はい！
ソンミン：　三角をしてまた逆に三角する。
くもん：　よくできたよ！
ソンミン：　あ～、もうやりたくない！
くもん：　バクソンミン！　先生が来る前に全部やったからだよ。一回にたくさんすると当然やりたくなくなるでしょ！　毎日少しずつ少しずつしなくては。溜めておくからそうなるんだよ。ほらっ！（手でソンミンの脇を軽く突く）
ソンミン：　へへ（笑う）、あ！
くもん：　トラブルメーカー、早くして！
ソンミン：　これだけしていい？
くもん：　ここまでしなくちゃ。５…
ソンミン：　５枚？
くもん：　多い？5ページだけ（ページを開いて見せる）
ソンミン：　３ページ？
ソンミン：　キャベツ…（ソンミンは単語を読みながら書く）
くもん：　バクソンミン！きれいに書いたらどう？
ソンミン：　うん～、やりたくない！
くもん：　やりたくないって？
ソンミン：　先生、星を描いて下さい。
くもん：　三角に三角を逆にすると星になるよ。
ソンミン：　逆に三角？
くもん：　うん。（描いて見せる）

くもんの先生は子どもの学習動機を誘発するための方法としてステッカーを渡していた。ステッカーを集めるとプレゼントがもらえるそうだ。上の階のハギョンはもうプレゼントをもらったそうだ。ソンミンは自分があと何個集めなければいけないかを計算してみて、熱心にやろうと頑張る。

くもん：　バに何を合わせるとバンになる？
ソンミン：　（片腕をテーブルの上に伸ばして体を寄せる）バン、チャ（声を出しながら書く）
くもん：うわ！すばらしい！今回はソンインザン（“サボテン”）書いて見て。
ソンミン：　ソンインザン…書けない…（苛立ち、眠くなったような口調）
くもん：　ソに何を足すとソンになる？デジモンの時、モに何が入る？何？
ソンミン：　（ソンの字を書く）

(中略)
〈もん:コウル("鏡")、ゴウル書いて、ゴウル。
ソンミン:嫌だよ、やらない。(立ちあがる。)
〈もん:きちんとやりなさい。はや〈坐って。
ソンミン:僕、恥ずかし〈てやらない。
〈もん:見て書〈のは恥ずかし〈ないの?
ソンミン:いままでやった枚数を数え始める。9、10…10枚も、こんなにた〈さんだよ! (こう言うソンミンの発音が稔って聞こえる。疲れと眠気が歴然としている。)
〈もん:コウル(大きな声で)、コウル、ゴウル書いて。速〈!
ソンミン: (呟〈。欠伸をする。)難しいものばかり、そんなに難しいものばかりするからでしょう。(嫌がる)
〈もん:何が難しい?この前にも書いたのに。ウユのウ字に、ほら、ウル字もうま〈書〈んじゃない。こっちがずっと難しいのに。
ソンミン:今回はほんとに難しそう。
(中略)
〈もん:バクリンミン、毎日毎日やりなさい!
ソンミン:……
〈もん:分かった、分からない?分かった、分からない?!

〈もんの先生と30分間の勉強が終り、2時55分になった。〈もんの先生が帰ると、ソンミンとお母さんはとても忙し〈なった。3暗までに社会福祉館のこどもプログラムに行〈ために慌てて準備する。

3時5分に社会福祉館に到着した。ソンミンと同じプログラムに子どもを入れたお母さんたちが廊下に坐って話をしていたが、ソンミンのお母さんを見かけると、「ハングル・ジャンプ」の先生が結婚して新婚旅行に行ったので休講であることを教える。ソンミンと一緒にハングル.ジャンプを習っている幼児たちは玄関口ピーで、コンピュータゲームをしているところを見たり、携帯用ゲーム機でゲームをしたりしていた。ソンミンも首にゲーム機を掛けてきたのですぐにロビーの椅子に坐ってゲームをし始めた。1時間ぐらいゲームをしたり、走りまわったり、階段を登ったり降りたりしながら他の子どもたちと自由に遊んだ。お母さんは、ソンミンのお姉さんが学校から戻る時間になったため家に帰り、ソンミンの科学教室が終わる5時に迎えに来ることにした。

4時になると、ソンミンを先頭に幼児たちが科学教室のドアの前でドアが開〈のを待つ。ソンミンのグループより先に入ったクラスがまだ終わっていないため、先生がドアを開けて頭を出し、2分経ってから来るようにと言った。ソンミンが「2分ってどれぐらい?」と聞〈。先生は100まで数えてから来るように指示した。ソンミンは階段をゆっ〈り上りながら、いち、に、さん…と数え始める。ソンミンは29の後に30と言った。そして、31から59まで正し〈数えた。たまに渋ったりしたが、間違ってはいなかった。しかし、59の次にしばら〈困ってから70と言った。そして、71、82、86の順に数え、すぐ100と叫び、科学教室に走って行ってノックする。しばら〈して子どもたちが出てきて、再びドアが閉まる。先生は教室の整理をした後、4時10分頃にソンミンのクラスを迎え入れた。
ホワイトボードを正面にして、生徒たちの机がコの字型に並べられている。ホワイトボードの隣に先生の教卓が置いてある。その上に今日使う材料と器具があった。ソンミンとある男児が席のことでけんかに

なった。同じ席に坐りたがったのでケンカになり、ジャンケンで決めることにしたが、ソンミンが 1:2 で負けた。しかし、ソンミンはジャンケンが公平じゃないと言って、やりなおしを要求し、そのともだちが受け入れられなくて、もうちょっとで殴り合いになるところを先生が制止した。教師に引っ張られ席を譲り、他の席に移りながらもソンミンは「僕は行けません！」と断乎と言った。しかし、席に坐ってから指を吸った。ソンミンが席を譲り、その向かい側に坐ったが、腑に落ちない表情だった。

教室の中に教師一人、補助教師一人、男児 8 人がいた。みんな 5 歳だけど、そのうちの一人だけがみんなに兄ちゃんと呼ばれていた。先生はまず出席を取り、「今日は、先生とどんな実験をするでしょうか？」と言った。材料を見て、ある子どもが「あ、わかった。」と言ったが、教師はそれに反応せず、授業を続けた。教師は「先生が黒板に大きく書くから、読んでみなさい。」と言って、黒板に‘いろ’と書く。ソンミンは黒板の字には関心を示さず、隣に坐った男児が持っているお菓子箱に関心を持った。「あ、それ何？」ソンミンが聞くが、その子どもは答えず机の下に隠した。

教師は‘いろが’の横にちょっと小さい字で‘変わる’と書いた。そして声を出して読んだ。ついて読む子が一人いた。教師が教卓の下からヘアドライヤーを出した。ある子が聞いた。「先生、なぜヘアドライヤーがあるんですか？」　教師は答えない。教師はスンヨッブに兄ちゃんたちに色鉛筆を一本ずつ配るように頼んだ。そして A4 用紙を一枚ずつ配った。「色鉛筆で紙に大きな花を描いてみなさい。」子どもたちが色鉛筆の色を選ぼうと騒ぎ出した。教師の声が段々大きくなった。「一番上に自分の名前を書いて、大きな花を一つ描いてください。」スンヨッブはソンミンにも色鉛筆をあげた。ソンミンは色にこだわらず、スンヨッブがくれたものを受け取りながら「ありがとう」と言った。ソンミンは赤い色鉛筆で大きな丸を描き、ピンク色で丸のまわりに花びらを描き入れた。ソンミンは絵画用紙の裏に名前を書いた。

幼児たちが花を描く間、教師は‘塩化コバルト’という化学薬品を紹介した。〈塩化コバルト〉と黒板に書き、ウヒョックとゾンソンに字を読ませた。この時、花に色をつけようとする子どもがいたので、教師はびっくりして、「花に色をつけないで！まだ色はだめですよ。」と言う。「塩化コバルトを水に溶かして、それで色付けできるようにするよ。」という教師の話より、補助教師が配る筆にもっと興味があった。ソンミンは筆をもらいながら補助教師に言った。「僕、次回筆を持ってきますから。」この話を聞いて、教師がソンミンに言った。「今日だけ筆を使うから、次に持ってこなくていいよ。」

4 時 20 分ごろである。ソンミンは立って隣の子に近付きながら見ろと言うかのように筆を立たせて丸を作って見せる。「バクソンミン、席に坐りなさい！」とすると、ソンミンは再び自分の席に戻り坐る。しかし、教師の話には注意を傾けない。補助教師がコップを一個ずつ配ると、ソンミンはコップを口につけて舐める。補助教師はソンミンのコップにも水を入れてあげる。水には塩化コバルトを溶かしてあるから薄いピンクの透明な色であった。子どもたちは水につけた筆を立てて A4 用紙にさっさと描いた。透明なピンク色の塩化コバルト液は、すぐには色が出てこなかった。子どもたちは色が鮮明になるようにと薄い紙にずっと濡らした筆で描き、紙はびっしょり濡れて水が垂れてきた。「先生、色が出ません。」ソンミンが言った。教師は「色が薄いようだね。」と言って子どもたちのコップに塩化コバルト粉をちょっとずつ足してあげた。ある子どもが言った。「カルピスみたい。」

さっきお菓子箱を持ってきた子どもが友達の口にお菓子を一個ずつ入れてあげ始めた。「僕も頂戴」とある子どもが言った。「僕も」また他の子が言った。お菓子箱を持った子どもはある子の口にはお菓子を入れてあげ、ある子にはあげなかった。教師はお菓子箱による“権力行使”を見守っていたが、干渉しなかった。子どもたちが一人二人、お菓子を口に入れて頬張っていることを気にもせず授業を行った。見て

みると、それはキャンディの形をしたガムだったが、ソンミンにはお菓子をあげなかった。ソンミンも特にほしがってねだってはいなかった。ただその深いチェリー色の箱を好奇心にみちた目で見ているだけだった。

4 時 27 分頃である。ソンミンは熱心に色付けをする。紙が水に濡れた。ソンミンの髪の毛が汗に濡れていた。教師が「もうやめて！」と言って「何の色の花になった？」と聞く。ある男児が大きな声で「赤！」と答える。ソンミンは水がたっぷりついた作品を両手で水平にもち、気を付けながら教師の方に行った。「先生、終わりました。これどうしますか？」教師はソンミンになぜ名前を書かなかったと聞くと、「裏に書きました」とソンミンが答える。教師はソンミンの作品の両端を持ち、垂直に立てた。ソンミンの作品から水が垂れて落ちた。「水が多すぎてこのように流さないと。」と言った。ある幼児が「洗濯～」と言いながら笑った。教室の床に赤い水が落ちた。教師は紙をソンミンに返しながら窓際に乗せて干すようにと言った。ソンミンは作品を両手で持ち、窓の方に行って気をつけながら置いた。

幼児たちが窓辺に行って、窓の外の風景を眺める。教師が断乎とした声で「席に戻って！」と言うと 3 人がもどり、二人は先生を眺め、ソンミンとある幼児は教師の話に注意も配らない。教師は「正しい姿勢、いち、に、」と厳しい声で、幼児たちをコントロールしようとする。

4 時 34 分である。教師はやさしい声で今回はとてもおもしろいことをやると言う。ある幼児が「おもしろいもの作らないとひどい目にあうよ！」と言うと、教師はびっくりしたかのように「先生がひどいめに？」と聞きなおす。幼児たちは声をそろえて「はい！」と答える。補助教師がソンミンとある幼児を席に連れていこうとするが言うことを聞かない。補助教師が風船を幼児たちに一個ずつ配る。教師は風船を大きく吹いて「このように大きく吹いてみなさい。」と指示する。ある幼児が「これぐらいでいい？」と聞くと教師はうなずき、「吹いてから、また空気を抜いてください。」と言った。教師は風船を持ったまま空気を抜くことができだが、幼児たちはうまくできず風船を逃してしまった。空気が抜けながら風船はあちこち飛んでいき、幼児たちは風船を探し回った。ソンミンは机の下に落ちた風船を探すために机の下に潜った。ソンミンは風船を拾い、そのまま床に坐り込んだ。

空気の抜けた風船はしわしわで、口が広がっているので豆を入れやすかった。すくなくとも教師にとっては。しかし、幼児たちには空気が抜けた風船でも豆をその中に入れることが容易ではなかった。補助教師が個別に風船に豆を入れてやる。補助教師が風船に豆を入れてやる間、教師はもう豆を入れおわった子どもに風船を吹いて口を縛るようにと言って、模範を見せた。教師は豆の入った風船を吹いて縛ったあとそれを振った。まるで遠くから太鼓を叩くような音がした。「うわ～!」幼児たちは不思議がった。教師は風船を吹いた子どもたちの口を縛ってやり、子どもたちはそれを思いっきり振った。ある子どもは「鐘を鳴らせ」の歌をうたう。また、ある子は「ポポポポ…」と風船を振りながらその音をおもしろがっていた。

4 時 45 分である。教師は幼児たちに大きな声で提案する。「私たち、風船で拍手しよう。」先生が指を１本出すと、風船拍手を１回、２本出すと風船拍手２回、三本出すと？」「風船拍手３回！」「先生が手を振ると？」幼児たちは答えの代わりに先生を真似て持っていた風船を振る。「よくできた人にはステッカーをあげるよ。さ、準備！」科学の先生もステッカーで幼児たちをコントロールしていた。ソンミンが「先生、先生、しかし、風船はなぜ下に落ちてからまた上に昇るのですか？」と聞くと、「それは風船に弾力があるためだよ。」と教師が答えてやる。

教師は先ほど窓辺に置いた子どもたちの絵の中で一枚選んでヘアドライヤーで乾かした。4 時 50 分になっている。ドライの熱い風で紙の水気が取れるとそれまで若干赤色が滲んでいた紙の絵が青色に変わり

始めた。乾きながら色が変わるのであった。ソンミンは「本当に不思議！」と言いながら、前に出て行って先生が持っている紙の絵を触ろうとした。教師はそれをやめさせ、「バクソンミン、戻って坐りなさい！」と言った。ソンミンは元気なさそうに席に戻り、机に伏せて頭を上げ、教師を注視する。教師は幼児たちに化学作用について説明する。

教師：塩化コバルトは水を入れると赤色、乾くと青色になります。塩化コバルトを使って人たちは‘湿度計’を作ります。‘湿度計’が何かというと、‘湿度計’が何かというと、空気の中に水気がたくさんあるかないかを確認するとき、塩化コバルトを使います。

ソンミン：（隣の幼児が持っているお菓子箱を見ながら欠伸を大きくする。）

教師：　今日、先生と実験日誌を書き、ステッカーももらっていきなさい。バクソンミン、友達に色鉛筆を配ってくれませんか？

絵を描いたとき補助教師が色鉛筆を片付けたので、日誌を書くためにまた配らなくてはいけない。教師の指示を聞いたかどうかソンミンは反応がない。補助教師が色鉛筆を持ってきて友達に配るよう言って、それを手に持たせた。ソンミンは友達が要求する色をそれぞれ探して配る。

幼児：　今日は何日ですか？

教師：　今日は10月24日ですよ。

幼児：　僕日付を書いてなかった！

幼児：　‘分かった点’は何ですか？

教師：　先生が黒板に書きます。さ、題目から！（題目と日付、実験を通じて分かった点まで黒板に簡単に書いて上げる。）

幼児たち：　（ノートに書く。）

教師は日付を消して10月25日と書く。「今日は10月25日です。さっき先生が間違えました。」幼児の一人が文句を言う。「すみません。先生が間違えました。」

幼児：　‘分かった点’は何ですか？

教師：　先生が今書いているのが分かった点です。

幼児：　長くないでしょう？

スンヨップ：　色鉛筆消せますか？（ホワイトボード消しを持って聞く。）

幼児：　先生、見えません！（教師が黒板に字を書くため見えなくなり、我慢できなかった。）

教師：　スンヨップ、それは色鉛筆を消せない。

幼児：　色鉛筆、どうしても消せない。

黒板消しを取りに前に出たスンヨップが歩きまわると、他の幼児も歩きまわる。教師がその幼児に近付いて「スンヨップはあなたより小さいでしょう？」と言うと自分の席に戻る。

5時になった。教師が実験日誌を書き終えた人は色鉛筆を戻し、自分の絵を持ってくるよう指示する。幼児たちがもう家に帰るかと聞くと、教師はそうじゃないと答える。ある幼児が出ようとドアを開けると、教師が追っかけてドアを閉め、「自分の絵を持ってくれば先生がステッカーをあげるよ！」と言う。幼児

たちがステッカーをもらおうと先生の前に並ぶ。幼児たちは先生が渡してくれるステッカーをもらうと歓呼しながら、教室のドアを開けて走り去る。ソンミンもステッカーをもらって教室のドアを出て行く。

次は、ソンミンが参加している放課後のプログラムの一つ、「幼児サッカー教室」を観察した内容である。幼児サッカー教室は体育教師（男子、20代後半に見える）と幼児8人となっている。観察日は2001年10月30日（火）で、観察場所はハンガンドゥンチ市民公園である。観察時間は午後1時30分から3時15分までの1時間45分である。

1時30分である。ソンミンは幼稚園を終えた後、家でお母さんと算数、国語などを勉強してからサッカー教室へと合流する。教師が幼稚園付近に来てバンに幼児たちを乗せて、ハンガンドゥンチに行く。行く途中、車の中で幼児たちは遊んだり、殴ったり、やめさせたり、教師に告げ口したりする。ちょっとした騒ぎの中でも、幼児2人は寝込んでいる。

2時頃にハンガンドゥンチ市民公園に到着した。サッカー教室を開く所は、川の流れが見える広い空間で、芝生が植えてあり、所々にベンチがあった。教師は子どもたちを順番に車から下ろし、車のトランクから何種類かの準備物を出した。サッカーボール4個、三角の角のような形をした赤いピン（グランドに位置を表示する高さ40センチほどのプラスチック製で軽いもの）4個、縄跳び4本を出した。ホイッスルを首に掛けているが、教師はそれをほとんど使わず幼児たちを指導した。

幼児たちは車から降りると、二つのベンチに4名ずつ分けて坐った。動作が慣れているように見える。教師は幼児たちに向けて「全員立って！」と指示する。あちこち動く幼児たちに「拍手3回！」と言うと幼児たちは拍手を3回する。集中している。「両手上、指を組んで、掌をぐっと！」教師はストレッチの模範を見せながら節度よく指示し、幼児たちはとてもうまくついてやった。

頭下、手後、立って、ゾウの鼻、手を握って回し10回、いち、に、さん、よん、ご、ろく、なな、はち、きゅう、じゅう！手逆に回し、に、に、さん、よん、ご、ろく、なな、はち、きゅう、じゅう！

教師の模範動作と指示を見て、聞いて、幼児たちがついてやる。この時、ソンミンが手を握ってまわすのをやめて、他の所を見ると、「ソンミン！」と名前を呼んで注意を喚起する。ソンミンはすぐついてやる。

約4分間準備体操をしてから、身体をウォームアップするため、緑の鉄条網が見えるところまで走って行って戻るようにする。教師がスタートラインを指定してやると、幼児たちは上体を前に出して準備姿勢を取る。「遅い人はまたグラウンドを走らせるよ！」と言うと、幼児たちが緊張した表情になる。「さ、出発！」　幼児たちが走り出す。緑の鉄条網まで大体50mぐらいあるように見えるから、往復で100mを走ることになる。ソンミンが最後に戻り、先に戻った子どもから教師の前に順番に並ぶ。教師は、1位、2位、3位、4位、5位…と、順位を教えながら幼児たちの体をさっと抱き上げてやる。ソンミンは最後になったことで自尊心が傷ついたか、「やらなくていいよ、いいよ！」と言った。

「さっき坐ったようにきちんと坐りなさい。ソンミン、ボールを取って。傍にあるボールを取って。その隣に！」教師はサッカーボールを坐っている子どもに順番で4つ投げてやる。ボールを持った子どもたちが立ち、他の子どもたちはそのまま坐っている。ソンミンはボールが取れず、転がっていくのを追いかけて取って戻る。その間、ボールを持った幼児たちがスタートラインで待機していた。「その端まで行ってくるんだよ。ボールを足で蹴りながら。さ、出発！」幼児たちはボールを蹴り、ボールが転がる方へと

走っていったりする。

待っている間残っていた幼児たちは、先生に冗談を言うかのように話しかける。「先生、今日はなぜ、おとなしいんですか？」「先生、今日はかっこいい！」　観察者がいるので教師は普段よりやさしくしているようである。しかし教師は幼児たちの話に反応を見せない。

2時9分である。ソンミンは芝生の端まで走って行って戻る。ボールを逃さないようにと、ボールが転がる方向へと走り、前を向いて蹴る。ソンミンはボールを操りながら走るゲームで4人の中2番目に戻ってきた。ある幼児は、ゆっくり歩いて行って来たため時間がかなりかかった。教師はその子どものボールをもらって脇に挟み、片腕でその子を抱き、一緒にベンチに坐って話をした。幼児たちが教師の後で「いつも最後（びり）だから、○○は機嫌がよくないんです」と教える。ベンチに坐って待機していた幼児たちもボールを蹴りながら戻ってきた。

2時14分になった。教師は幼児たちに背もたれのないベンチの後に立たせる。幼児たちは指示通りにベンチの後に四人ずつ立って‘準備’の姿勢で先生を見る。毎日繰り返される訓練の一つであるようだ。「いちで、片足をベンチに乗せ、にで違う足を、さんで一方の足を下ろして、よんでもう一方を下ろす。分かった？」　教師の模範動作に注目していた子どもたちは教師が号令をかけると、すぐ指示通りにやった。拍子がちょっと合わない子もいたが、大体うまくついていった。

折り返し地点を歩いて戻った幼児が、ずっと落ち込んだ表情でじゃがんでいると、ソンミンが近付き、慰めた。「できないときもあるじゃない、一緒にやろうよ！　君、この前はよくできたんじゃない…」　この時、先生が介入した。「君もやるの？　頑張ればいいんだよ！　それとも後でやる？」考える時間をあげるから自分で選択してと言うかのようにやさしい口調だった。幼児は答えない。

教師はボールを片付け、幼児たちを再びベンチに坐らせた。走りの順位をつけ、四人の名前を呼んだ。教師は走る能力によって幼児を2つのグループに分け、ゲームをさせる。教師は赤い三角ピンを芝生に四つ刺した。それは芝生を四角に区画する表示となった。教師が大きな声で叫んだ。「ハトの群れ、出発！」ちょっと前に名前を呼ばれた四人が四角の中に入った。他の子はベンチで眺める。

「さ、赤い三角台から他の三角台へと走って！先生の前を通る時は手をこういうふうにタッチするんだ！」幼児たちはゆっくり走りだしたが、先生の掌をタッチするおもしろさでぐるぐる速く走るようだった。教師はひとりひとりが1回目にタッチする度に「いち、いち、いち、いち、そして2回目に回るときは、に、に、に、に」と数える。幼児たちは全部で5回まわり、息を切らしながらベンチの方に来てそのまま坐り込む。他の幼児たちも繰り返して行った。

2時28分である。縄跳びゲームを始める。4人ずつ2チームを組んで、1チームが縄跳びをして、もう1チームはベンチに坐りこれを観察する。教師は「縄跳び10回ずつした人は飲み物をあげる。」と言う。幼児たちは縄跳びを平均1－3回程度やった。今まで1回も飛べなかったジュンホが引っかからず飛ぶと椅子に坐っていた子たちが歓呼した。教師は次の段階へ進むため助言をする。「あまり速くやろうとしないで、ゆっくり、あげておろしながら、さ、飛んで！」　他の幼児たちにも適切な指導をする。「両足揃えてやらなくちゃ、足を開くのはだめ！」　2番目のチームの縄跳びが終り、子どもたちはみんなベンチに坐り、教師はベンチの近くに停めておいたバンの後ドアを開けて飲み物を出した。ポカリスウェットのようなスポーツドリンクで、ある幼児のお母さんが車に載せてくれたのであった。教師は一人1本ずつカンジュースを配り、しばらく休憩をとった。飲み終わった子どもはカンを近くのゴミ箱に捨てようと走っていった。

2 時 34 分である。教師はボールを一つ持って、芝生球場に歩いていった。ソンミンと他の幼児たちがその後に付いて行く。「一列、列車！」教師が指示すると、ソンミンは一番前に立つ。幼児たちに拍手をさせ、注意を集中させた後、ルールを説明する。四人は四角の外側に、そして四人は四角の中に入らせる。教師はある幼児にボールをあげて投げさせた。中の幼児がボールに当たってじっと立っていると、先生が中に入ってボールを手に取り、「ボールに当たった人は、四角の外側へ出るのよ、投げた人は入って！」と教える。「しかし、今回は練習！さ、これから本当に始まるよ！」と再び幼児にボールを投げてやる。ソンミンが投げたボールにある幼児が当たり、彼が中に入るようになると「あ！おもしろい！」と言う。

2 時 41 分にホイッスルが鳴り、ゲームが終わった。教師が「ボールに当たらなかった人、１回も当たっていない人」と言いながら幼児たちを見まわした。ボールに１回も当たらなかった人はいなかった。幼児たちはボールを投げ、当てたり、当てられたりして、ゲームを楽しんだようだ。「一列列車、さ！その端の壁をタッチしてくるのよ、さ、走っていけ！」幼児たちが走って行って戻る間に三角ピンを整理し、次の活動の準備をした。そうしながらも、子どもたちが走る姿をしばらく眺めたりする。ある幼児が途中から戻ってくるとお尻をボールで１回叩き、また走らせる。幼児はまた遅い足で目的地に向かって走る。重い足で走る途中、芝生の上に転がった。教師は走って行き、泣く子どもを慰めながらお腹を撫でてやる。目的地まで行って戻ったソンミンは教師の所に行ってその背中に乗る。他の幼児たちもお互い教師の背中や膝に乗ろうとして、押したり倒れたり、そしてまた立ち上がってはお互い捕まろうと走りまわる。

2 時 50 分になると、教師が「１番速く来た人！」と言いながら幼児たちがバンに速く乗るよう誘導する。もう一回大きな声で「１番速く来た人が１番先に乗るよ！」と言うと、幼児たちが教師の立っているバンの方に走って行く。幼児たちが車に乗り、教師は助手席に坐った幼児にシートベルトを締めさせ、出発した。

3 時 15 分に出発場所に戻った。教師は途中で２人の子どもをお母さんが待っている場所で降ろしてやった。ソンミンのお母さんはいなかった。他の幼児のお母さんが、教師にソンミンをソンミンのおばあさんの家まで送っていってあげるよう頼んだ。教師はソンミンを乗せてまた出発した。

B. 小学校１年の教師の観点

幼児及び小学校１年の児童たちの特技教育による問題点を診断し、その解決方案を模索するために、公立小学校１年の担任教師２名、私立小学校１年の担任教師２名と面談を行った。教師たちに担当学級の児童たちが入学前に特技教育をどの程度受けたのか、または現在受けているか、児童たちの性向及び学習態度はどうなのか、最後に小学校１年生の教師として幼稚園の教師に望むことは何であるかについて調べてみた。

小学校１年生児童たちの特技教育の現状は、それぞれの家庭状況によって大きな違いが見られた。担当している学級の児童の中、小学校の入学前に特技教育を受けた人は何人ぐらいに見積もるかという質問について、公立小学校の教師たちは少数だと答えたのに対して、私立小学校の教師たちはほとんどの児童が一つか二つでもなく、何種類もの特技教育を受けていると答えてくれた。公立小学校の教師たちの場合、学校が経済的に困難な地域に位置しており特技教育を受ける児童が稀であるか少数にすぎないためなのか、特技教育

による問題意識があまりなさそうに見えた。

お母さんたちがほとんど仕事に出かけるか、または家で内職をする人が多い。玄関に入ると家の中が丸見えになるような小さいアパートに住み、特技教育を受ける子どもはほとんどいない。しかし、幼稚園はみんなちゃんと通っていた。他に、ピアノを習う子どもは３０人中８人ぐらいで、美術を習う子どもは３人ぐらいだ。残りは特技教育をしていない。お母さんたちが子どもの学習などに関心を持つことは難しい。家にいるお母さんはほとんどいなくて、たとえ家にいたとしても他人の赤ちゃんの世話をしたりして、とにかく家で子どもの勉強の面倒を見てあげることは少ない。家で面倒を見てくれる親がいないため、子どもたちは学校に来たら家に帰りたがらないし、土曜日とか自由登校日にも学校に来たがっており、ほんとうに楽しい学校生活を送っている。（公立小学校の教師）

学習紙、学院、ピアノなど芸能教育と英語などを全部含めて特技教育と言えるなら、うちのクラスは２８人全員がこのなかの幾つかの教育を受けてきたと言える。入学の初期に字をほとんど習って入ってくるのだ。私立学校では親たちが教育に熱心だからかもしれない。また、小学校入学前に１学年の初期教育課程内容のほとんどを習うこともある。（私立小学校の教師）

特技教育を受ける児童たちの性向及び学習態度がどうなのかと聞いたら、教師たちはみんな口をそろえて児童たちが情緒的にも、認知的にも問題点があると答えた。何よりも彼らは教師の授業を妨げるのだ。学院で既に習ってきたから学校では復習をすることになる。しかし、要点を整理する復習ではなく、最初からやり直して改めて始める授業は児童たちの興味を引けないだけでなく、こどもはうんざりとしている。彼らは自然に他の子どもをいじめたり、遊び掛けたり、殴ったりするなど授業の雰囲気を破壊するのである。

様々な特技教育は逆効果をもたらす。特技教育を多く受ければ受けるほど授業時間にじっとしていられない。友達を怒らせたり、仲間はずしで快感を覚える子どももいる。お母さんが帰ってくる７時まで、学院を回って家に帰るのだ。学院で前もって学んだ子どもたちは退屈だからいたずらをする。勉強すること自体を嫌がっている。お母さんの熱意が高いほど、子どもはお母さんに対するストレスで情緒が不安になり、意欲がないように見える。家でもお母さんに「トイレに行ってもいいですか？」と聞いてみるそうだ。私は児童たちが学校生活では安定して、興味を持てるようにさせようと頑張っている。（私立小学校の教師）

いろいろ習い事をしている子どもの方が散漫である。美術学院に行ったり、水泳に行ったり、音楽学院に行ったりするような子どもはもっと散漫であるように見える。小学校で学ぶべき課程をすでに習って来た子どもたちは集中力が落ちる。習ってない子どもたちのほうが、先生の話に集中して熱心に勉強するし、興味をもつので成績もいいのだ。前もって分かってしまえば、その結果はよくない。うちのクラスに幼稚園に通った子どもが６－７人ぐらい入ってきたが、正規の幼稚園教育を受けてきたせいか、態度もいいし、思考力も豊かで、語彙もいいほうだ。社会性もまあまあいい。（公立小学校の教師）

正常な幼稚園教育課程を運営する幼稚園に通った幼児たちが特に学習態度や認知的能力及び社会性発達においていい評価を受けている点はとても喜ばしいことだ。この教師は公立幼稚園と私立幼稚園に通った幼児たちの性向及び態度を次のように比較しながら、特別

活動をしないで、正規の幼稚園教育課程だけを運営する公立幼稚園に通った幼児たちを褒めた。

公立幼稚園に通った子どもに比べて、私立幼稚園に通った子どもの方が特技教育をもっと多く受けている。ハングルとか…何かたくさん習ってきたのに、幼稚園教育課程を規定とおりに習ったこどもたちよりは学習の集中力や態度が落ちている。私立幼稚園の子どもたちが学んだものはもっと多いのに。（公立小学校の教師）

教師たちは特技教育を受ける児童たちの性向及び学習態度を見たとき、児童たちが全般的には過程よりも結果を重要視し、概念に対する理解よりも知識の伝授を好み、知的好奇心よりも中身のない自慢の気持ちがあるように見えるとし、認知的問題があると指摘した。

１年の初め、教室でよく聞かれる子どもの答えは、「私、分かっている。それは。」、「もう習ったのに…」、「あ、簡単すぎ！」などである。分からない子どもに衝撃を与え、授業の雰囲気を破壊し、教師もやる気がなくなるのだ。学院でどんなふうに教えているかは分からないが、答えが分かればよく分かっていることだと思っている。数学がひどいほうだ。例えば、‘１３－８＝’という問題を出すとすぐ‘５’と答える。しかし、「どうして５になるの？」と聞くと、その質問には関心がなく注意力が散漫になる。（中略）芸術課目も同じである。美術の授業の予定表が出ると、ある親はその内容を予習させるのだ。“予行練習”をしてきた子どもたちは考える必要がないので、家でやってみたものをそのまま作っておいて、それ以上関心を見せない。こんな時、教師としてはとても困るのだ。（私立小学校の教師）

国語や数学の特技教育はよくない。数学は結果よりなぜ２×９が 18 になるか、その過程を分かるのがもっと大事である。概念を指導するのに、子どもたちは全部分かっていると思って、聞き流したり、いたずらをしたり、散漫である。数学は基本原理を習わなければいけないのに、家でお母さんたちは機械的な暗記、数数えに重点を置き、それに満足する。基本原理を分からないと高学年に行って、交換、分配法則などを理解しにくいし、応用力、創造力が落ちる。また、前もって習ってきたために却って難しいのはハングルの筆順指導、字体の指導である。子どもたちに字を書くときの基本姿勢、字体、鉛筆の持ち方、などを教えるのがとても難しい。字を書くとき、椅子を引っ張ること、椅子に背中を当てること、頭をあげることなどを強調するが、習慣になっていないためかとても難しい。（公立小学校の教師）

本当の教育であれば、経済的能力のない家庭の子女のために政府が責任を持って教育しなければならない。幼稚園教育はすべての幼児に必要だと思う。特別活動をたくさん行うことは問題になる。小学校低学年の時に音楽と美術ぐらいはするのがいいと思う。学校の宿題が出来ない理由が学院の宿題のためである場合もある。小学校の児童たちが時間の許す範囲で１－２種類だけさせることはいいが、多すぎると子どもの情緒が不安定になる。しかし、現在、学院があまりにも乱立しており、親は学院を選ぶのが難しい。教育の本質よりは結果だけを見て評価するが、実際には過程が大事である。（公立小学校の教師）

教育部が告示した幼稚園教育課程では、幼稚園でハングルを教えないようにと定めている。幼稚園では幼児たちが文字に関心を持てるぐらいに指導して、ハングルは小学校に入って学ぶようになっている。しかし、小学校ではハングルを教えないし、入学後３ヶ月がすぎると、字の読み書きを前提とした教育課程が展開されているため、ハングルを分から

ないで入学した児童たちは、学校の生活に苦労をする。このため、家庭や幼稚園でハングルを教えたり、学習紙を講読して集中的にハングルを指導する例が多い。実際、小学校 1 年の児童たちを入学初めから‘字を分かる’と仮定して教育を行っているのかどうか教師たちに質問をした。すべての教師たちは、そうだと答え、字を分からないまま入ってくる児童たちは、初期の学校生活で苦労と混乱をすると話した。

ハングルは小学校に入る前に習ってこなければいけない。習ってこないと読解が出来ない。最初は難しくないが、教科書の語彙が相当難しい。7 回教育課程がちょっと難しいが、児童の 50%以上は内容を知って来るのだ。小学 1 年の児童たちは、私達の時とは違って、もうすでにハングルを習ってくるので教育課程も違うべきである。(公立小学校の教師)

ハングルを分からないままくる子どもはほとんどいない。3 月の一ヶ月間行う（私達は 1 学年）授業で子音と母音を連結する組み合せと書く順序を習うのに、うちのクラスでは全員 28 人の中 26 人がすでに習っていた。それで子音と母音を教えるよりは活動を中心に運営する。(私立小学校の教師)

子どもたちは学校に入る前に本は全部読める。読むのがたどたどしくても、ハングルを全部解読してくる。6 月に単語を聞いて書くことをさせるが、だんだん文章へとなっていく。100 点が 30 人中 4 人程度で 50 点以下が 6−7 人ぐらいだ。ハングルを習ってない場合、聞いて書くことはできない。できない子どもは親に頼んで家で教えるようにする。しかし親は食べることだけで精一杯なのでうまく教えることが出来ない。親は筆順よりも聞いて書けるかその結果を重要に思う。3 月の最後の週に子音、母音、筆順指導にはいるが、担任によっては字の指導をする。最近はコンピューターを使うので、字を書くことがだんだん少なくなっているが、まだ大事なことだと思って強調している。(公立小学校の教師)

小学校に入学してハングルを分からなかったら実際ついていけない。字を教える時間の余裕がない。レベルが上がり、字を習わないで入ってくるとついていけない。ギヨック、ニウン、ア、ヤ、オ、ヨを教える時間がない。教材ではすぐ文章に入るので字を分からない子どもはついていくのが難しい。字が分からない子どものために放課後の教育みたいなものもあるが、これは本当の学習不振児のためである。(公立小学校の教師)

読解用の本は字を分からないとできなくなっていて、4 月からもう単語の書き方をしている。それから子どもたちはハングルが書けるが、正しい筆順ができていないこと、学院の宿題をするため、学校の宿題をしてこないのが問題である。(私立小学校の教師)

ハングルの教育と関連して小学校 1 年の国語教育の問題は、親たちに家庭で私教育費を使わせるばかりか、正常な幼稚園教育を実行しにくくさせる主な原因である。ハングルの教育は小学校入学前に親が責任を持ってしなければならない。本研究で調査したところによると家庭で行われる私教育の 49%がハングル／文字書きの教育であることを見てもこれを確認することが出来る。また親たちの心配と負担はそのまま幼児教育機関に移ってくる。私立幼児教育機関ではハングル教育に関する親たちの期待と要求を無視することができないため、教育部が告示した幼稚園教育課程に定められた統合的な教育課程を運営しないで、言語教育の範囲を超えたハングル教育をしている。一人の教師が 30 人を超える、

発達レベルと能力が異なる幼児たちを前に、学習紙中心の注入式ハングル教育を行うといった、統合的な幼児教育に違反する状況が発生している。一方では、体系的なハングル教育を行うべき小学校の教師たちは入学前に文字書きを習って来た児童たちの筆順や鉛筆の持ち方、字を書くときの姿勢などに問題があるとして、これに対する責任を家庭や幼児教育機関に転嫁し、抗議的な不満を表したりもする。

すでに習って来たために難しいのは、筆順の指導、字体の指導である。学習の基本姿勢、字体、鉛筆の持ち方、基本教育をしようと頑張っているが、大変だ。学校で字を書くと、その時だけでもきれいに書こうとするが、家に帰るとまた姿勢がめちゃくちゃになってしまう。机の近くで肩を下ろして、堂々とした姿勢を取るように強調している。背中をくっつけるとか、椅子を引っ張るとか、頭をさげないとか、いろいろ学校では強調しているが、習慣にならなくて困っている。(公立小学校の教師)

最後に、教師たちが幼稚園の教師たちに望む点について調べてみた。すなわち、幼稚園を終えて、小学校1年に入ったばかりの児童たちを担当して教えながら、どんな点が不足していると思うか、助けを求めたいのは何であるかについて聞いた。小学校の教師たちは小学校の教育課程と幼児教育課程間の連繋が必要であることを強調した。このために幼小連繋の教育課程を開発し、交換授業や参観授業、教師懇談会などを通じて互いの結束感と紐帯感を育てていくことを提案した。

1 学年の先生たちと幼稚園の先生たちの間で、交換授業や参観授業などを多く行うべきであると思う。幼稚園の先生たちは1年生の教育課程をよくわからないし、1年生の先生はまた幼稚園の教育課程をよく分からない。お互いにだいぶ違うだろうと思っている。第7次教育課程を小、中、高等学校の間で連繋して改編したように、幼稚園の教育課程も一緒に連繋してくれたらいいと思う。そうなると、公教育が強化されるのだ。(公立小学校の教師)

うちのクラスに大学付属の幼稚園を出た子どもが一人いた。お母さんの話によると、幼稚園に通った時は相当誇りを持っていたという。お母ちゃん、落葉が燃えるにおいがどうのこうのと言って、情緒的に豊かであることが見えたが、小学校に入ってから文字書きをメインにしていたので、幼稚園で習ったことを忘れてしまうのではないかと思いながらも、また勉強についていけなかったらとどうしようと心配したそうだ。そんな話を聞いて、教育は分断されてはいけないのにと思った。(公立小学校の教師)

小学校1年の教師たちはまた同じ幼児を指導したか、または現在指導している教師として、幼稚園の教師たちと児童の問題について望ましい指導方案を一緒に模索できることを期待した。幼稚園で作成した生活記録簿に書かれた内容は制限され、形式的であるため、あまり助けにならないことを指摘した。

小学校で適応に問題があったり、特別な問題行動をあらわす子どもに対して、その子どもが通っていた機関の担任教師と対話することができたらいいと思った。うちのクラスのある子どもは入学初期から他の子どもに攻撃的な行動をした。親と面談して今はよくなってきたが、その当時は子どもの攻撃的な行動に対してどんなふうに指導したらいいか分からなくてとても戸惑っていた。その時、その子が通っていた幼稚園の担任教師と話し合ったら助けになるかもしれないと思った。もちろん幼稚園で送ってくる生活記録

簿があるが、ただ何行か書いてあっただけなので、子どもの攻撃的な行動を指導するのにはあまり役に立たなかった。形式的な記録に過ぎなかったし、親たちが見るのでいいほうに評価したようであった。（私立小学校の教師）

以上で公・私立小学校１年の担当教師から幼児及び小学校１年の児童たちの特技教育と関連した考え方を調べてみた。教師たちの意見を整理してみると次のようである。小学校の教師たちは家庭で行われる早期の特技教育や幼稚園で行われる特別活動を受けてきた児童たちは情緒的にまた認知的に問題点があると指摘した。特技教育が、小学校生活での成功に役立つどころか、逆効果をもたらすと主張した教師もいた。児童たちは自慢気になったり、ストレスで授業時間に集中ができなくて妨害をしたりするので自分だけではなくほかの児童たちにも被害を与えると指摘した。また、答え合わせや単純な暗記など記憶メインの学習を好む反面、概念や基本原理の理解など論理的な思考力が弱いと評価した。小学校教師たちは入学初期からハングルを分かっていることを前提に行われる小学校１年生の教育課程の問題を指摘したが、これは家庭で行われる特技教育の 49%が‘ハングル／文字書き’であることと密接な関連があり、至急解決しなければならない問題だと思われる。最後に小学校教師たちは幼稚園の教育課程と小学校１年の教育課程に連繋が必要であることを提案し、教師たちの間で幼児及び児童の発達と学習に関する意見を交換できる場が作られることを期待した。

（第２部　校閲協力：　金泰勲、鄭廣姫、日暮トモ子、一見真理子）

韓国における早期教育の現状と課題　資料と解説

科学研究費補助金基盤研究(B)(2)
「東アジア地域における『早期教育』の現状と課題
に関する国際比較研究」

中間資料集

発　　行　　平成15年3月31日

研究代表者　　一見(鐙屋)真理子
発 行 所　　国立教育政策研究所　国際研究・協力部
〒153-8681　東京都目黒区下目黒6丁目5番22号
電話　03-5721-5070

印　　刷　　株式会社光和テック　電話　03-3756-1661(代表)